
大根礼賛劇場

さくらさくらさくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大根礼賛劇場

【Nコード】

N8293K

【作者名】

さくらさくらさくら

【あらすじ】

これは、大根と王妃でご活躍中の大雪様と、さくらさくらさくらによる、願望の賜物です。

二人のこのキャラが絡んで起こる、大騒ぎをどうぞお楽しみ下さい。

尚、大雪様の許可は頂いております。

そして、扉絵と素敵な背景は、ねおばーど様のお手製です！はく

しゅーっ！……！

【魔界×天界Ⅱ被害倍増？】・・・大雪様著

【魔界×天界Ⅱ被害倍増？】

その日、魔界の魔王城には思いがけない珍客が来ていた。

それは魔族にとっては天敵とも言える存在 天界の神々である。

双方長い間戦い続けた仲であり、永遠のライバルとも言えるその珍客に魔族達は緊張感に包まれる。

現在天界は偉大なる統率者のもと繁栄と栄華を誇り最強と名高い。

勿論自分達も唯で負けるつもりはないが、前面衝突ともなれば双方に甚大なる被害を及ぼすだろう。

魔王城の上部達は半ばハラハラしながら自分の主であるアルファールンと相手の主との対談を見守った。

「貴方を見込んでお話があるんです」

先に口を開いたのは、天界が十三世界が一つ、炎水界の大国 風国の王。

魔族ですら抗いがたい白髪と紅玉のごとき瞳を持った優美な美貌の持ち主は艶麗に微笑んだ。

「私に話だと？」

一目見た瞬間意識が飛ぶような麗しい絶世の美貌を持つ麗しき美貌の魔王陛下 アルファレン・カルバーン。

その昔は魔將軍閣下として

紅の貴公子。

冷徹の魔軍師。

冷酷の代名詞。

と沢山の二つ名を持った実力者として君臨し、今は魔王としてこの魔界に君臨する気高き存在。

数多の魔族の中で、最も美しく、もっとも残酷で、最も力のある孤高 というには周囲に恵まれすぎている魔王は不機嫌そうに眉を顰めた。

その冷厳なる視線は向けられただけで死んでしまうほどに鋭くて冷たい。

しかし、凧国国王 萩波はそれをにこりと笑ってかわした。

「はい 偉大なる魔王陛下でありながら実は若干五歳の義妹にあらうことか欲情を抱き下半身を熱くする魔王陛下にお話があります」

ぶはあああつ！！

その場に居た魔王軍上層部が全力でむせた。
むせすぎて死ぬ所だった。

流石は天界でも猛者と名高い凧国国王。

言葉だけで自分達を瀕死に追いやるとは流石である　と、魔王軍上層部が思ったとか思わなかったとか。いや、たぶん全力で思っただろう。

「大丈夫ですか？」

「だ、だい、大丈夫……なわけないだろうがっ！」

そう叫んだのは、麗しくも凜々しい魔界の元皇子兼現魔王側近であるアマレッティだった。

さっ、と凧国国王の後ろにいた茨戯が申し訳なさそうに差し出したタオルで口を拭きながら国王を睨付ける。

「そりゃあ確かにアルファレン兄上はエミーに欲情ゴフっ！」

「黙れ馬鹿」

アルファレンの踵落としが炸裂しアマレッティが撃沈する。

「というか、貴様この私に対して良い度胸だな」

「そうですか？ただ事実を言ったまでですが」

「誰から聞いた？」

「内緒です。それでは早速本題に入らせて頂きますが、その流石に私でも無理なレベルに近い、五歳のいたいけな少女に性的欲求を抱く貴方に相談があるんです」

「貴様……私の事を馬鹿にしてるのか？」

「馬鹿になどしていません。寧ろ尊敬しています。そう 幾ら美しいとはいえ自分よりも遥かに幼い少女の体に下半身を熱く高ぶらせる事が出来る魔王陛下に」

こいつ殺る そうアルファレインは全力で心に決めた。
とびっきりの術を解放してやる。

「あ、これ報酬のエミール嬢のベストショット五枚組です」

「何でも相談してくれ」

そこに写っていたのは、満面の笑みを浮かべながら着換えをする愛しい妹の姿だった。

賄賂 そんな言葉がその場に居た全員に思い浮かぶ。

「で、相談というのは私の妻の事です」

「妻？」

「そうです。その妻との夜の生活についてどうすれば妻を良くしてあげられるかと」

今度吹き出したのは、風国側の上層部だった。

「ちょっと待ちなさいよアンタっ！」

「一体何を言い出すんだっ」

茨戯と宰相がそれぞれ叫ぶ。

他の者達に至っては叫ぶ事すら出来ないようだった。

「煩いですね、何ですか」

「余所様の所で一体何を言い出すのよっ！」

「これは大切な事なんです。どんなに努力しても果豎は痛がつて泣いてしまう。それをどうにかしないと私達の平穏な夜の生活はやってきません」

「だからとって人様に余所の家庭事情を持ち込むなっ」

「何を言うんですか！五歳の妹という発達のにも未熟な体付きの少女に性的欲求を抱く魔王陛下ならばきつと何か良い案がある筈ですっ」

そうでしょう？！と魔王に同意を求める萩波に風国上層部は魔王軍の上層部に謝罪する。

一方、魔王軍の上層部側も主と同じく五歳の少女の愛らしさに悩殺されているという後ろ暗いところがあるせい、その謝罪を冷や汗

をかきつつ受け入れた。

「それは……お前の性技に問題があるんじゃないか？数をこなせばいい」

「妻と結婚する前には老若男女問わず一年間に1000人以上の単位でこなしていました」

「なら問題ないな。だが……ただ数をこなせばいいだけではない」

「SMなどの変態的プレイも大丈夫です。あらゆる性の技術を学びましたから。というか、妻以外の相手だと性的不能に陥ったかと誤解するぐらいに快感を覚えないんですよ」

寧ろどれだけ奉仕されても自分の下肢は反応しない。

仕事と割り切り、相手をよがり狂わせる時は頑張るが、それも一時的な高ぶりではなかった。そう、自己暗示だ自己暗示。

「それは難しい問題だな」

「ええ。どうしたらいいでしょうか？」

どうしたら良いつて……

魔王軍は女性の様に優美で神秘的な美貌を有する萩波に口元を引きつらせた。

「ふむ……良いアドバイスをしたいが……私はエミーとはそういう関係にはなっていないし」

「即なつて下さい」

「『『『『『待てええええつ！』『』『』『』」

「魔族の王らしく愛する人を奪って快樂に叩き落して下さい、私達の夫婦生活の平和と平穩のためにも」

「おぬしのとこの夫婦生活の為にわらわのエミーを犠牲にするでないっ！」

麗しく妖艶なる龍族の女王 リアナージャが叫ぶ。

その悩ましい曲線美に形作られた悩殺もののナイスバディ 特に大きく揺れる乳房は普通の男ならば思わず飛びかかりたくなるほどだ。

だが、風国上層部に飛び込むような馬鹿はいない。

傍目は絶世の美貌に相応しい美女のリアナージャだが、その本性は冷酷にして非道。

ほいほい美貌に引き寄せられた相手の全てを貪り尽くす美しく気高き魔の女王。

それが分かっていて飛び込む馬鹿はいない。

それに、確かに美しいが自分達の王をいつも見ているせいとその美しさは認めていても虜になる事はない。

それは、魔族側も同じらしく、自分達の美貌に魅入っても決して虜にはならない。

因みに、謁見の間に勢揃いする魔王軍もそれはそれは美しい者が多かった。

「ふっ……蛇淫の女王が生ぬるいことを。そのような事では好きな人に逃げられますよ?」

「な、何っ?!」

「それこそ枷でもつけて縛り付けておかなければ奪われると言っているのです」

「枷……ってお前本当に神か?! しかも魔族に夫婦生活なんて相談するなよっ」

復活したアマレットイが叫ぶ。

「何を生ぬるいことを。私は妻のためなら悪魔とだって契約します」

神失格だこいつっ!!

魔王軍上層部は風国上層部に同情の眼差しを向けた。

「それは……問題ないのか?」

「大丈夫ですよ。基本的にうちの天帝陛下及び十二王家は皆悪魔よりも悪魔らしく、魔王よりも冷酷非道、唯我独尊な方達ですから。それこそムカツク奴はぶっ殺す、邪魔する奴も張り倒す、自分の邪魔をする者の存在価値など一片たりとも認めない。人間界の守護だとして自分達が溺愛する白き調律師こと天帝の義妹が望んでいるから頑張っているという感じですからね。寧ろアルファールン魔王陛下の方がよほど倫理と法律を重んじる素晴らしい方だと思います」

魔王の方が倫理や法律を重んじるって……

もはや魔王軍側に言葉はなかった。

「でも……困りましたね……これでは妻の苦痛を取り除けません」
「……………その、なんだ。お前の妻も幼いのか？」
「幼くはありませんよ。十七歳ですし」
「ならば私に聞かずともいいだろう。体的には成熟してる」

その時だった。

「萩波、まだお話中？」
「お兄様、もういいですか？」

室内に入ってきた二人の少女。

一人はおよそ五歳とは思えぬ愛らしさを持った金髪の超絶美少女。
一瞬にして魔王軍の心に春が訪れた。

可愛い、愛らしい、もはやその魅力は犯罪レベルだった。
と同時に彼らは気付く。

ここには自分達以外の男達（神々）が居る。

その愛らしい姿を一秒でも目にしたら速攻でかつさらわれてしまう
！！

即座にアマレッティとリアナージャが少女を隠すように立ちふさが

った。

「お、お兄様達？」

「だめじゃエミー隠れるのじゃっ！」

「そうだっ！ここには怖い奴らがいるんだっ」

特に、凧国国王という天使の皮をかぶった大悪魔が。

「怖い人ですか？」

「え？ここってエミー姫のお兄さん達が居るって聞いたけど……っ
てか謁見の間じゃ……」

「ん？おぬしは誰じゃ」

そこでもうやくリアナージャ達は愛しのエミーと一緒にいる少女に
気付いた。

何処にでも埋没出来るほどの十人並の容姿。

青みがかった黒髪と勿忘草色の瞳を持った少女は自分達に気がつく
と優しく微笑んだ。

その笑顔に、リアナージャ達は言葉を詰まらせる。

はつきりいつてエミーには勝てない。

自分達の愛しい愛する少女の足下にも及ばない。

だが、それでもこの少女からは嫌な気配どころか心地よい気に包ま
れている。

「私は……」

だが、そんな果豎の言葉を遮るようにアルファレンが叫んだ。

「エミー……と、あれは」

エミーの隣にいる少女。

醜いわけではないが、何処にでもいる普通の少女にアルファレンは目を見張る。

エミーほどではないが、あの少女もとても綺麗な魂の色をしていた。それは極上の部類に入るほどに。

あの黒髪の少女は

「私の妻です」

「嘘だろうっ！」

アルファレンは目を見張る。

妻？妻？今妻だとか抜かしたかお前はっ！！

「お前みたいな魔族すら足下にも及ばないどす黒い魂を持つお前の妻があんなに美しく綺麗な魂の色をしている筈がないっ！」

「それを言うなら、貴方のような美しく聡明で才知溢れてはいるけれど妹以外はどうでもいいを全身で表わす冷酷非道な方には言われ

たくはありません」

「お兄様、どうされたんですか？」

「萩波、なんか怖いけど何かあったの？」

それぞれの女神（笑）が首を傾げる。

「何でもない、エミーは向こうで待ってなさい」

「果堅も向こうに居て下さいね」

「ここに居ちゃダメなの？」

「すいません、大切な話なんですよ」

心底馬鹿らしい話だった　とは誰も言えなかった。

かわりに、誰もが果堅を見て「ああ、なるほど」と思った。

質素な服に身を包む風国王妃。

確かにあの体では痛がるだろう。

それほどに未成熟で子供のような体付きだった。

胸は断崖絶壁、腰も小さい。あれでは男を受け入れるのは無理である。

つてか

「お前はあんないたいけな子供に手を出すのかっ！」

「五歳の少女に性的欲求を抱く貴方には言われたくありません」

「私もお前には言われたくないっ！というかあれは絶対十七歳じゃ

ないだろう」

「十七ですよ。初めて手を出した十二歳の時よりもずっと成長します」

「十二っ?!」

アルファールンは凄まじい衝撃を受けた。

勿論、魔王軍も衝撃を受けた。

こいつ、魔族すら裸足で逃げ出すほどの鬼畜男だ!!

「くっ！お前はっ！この私でさえエミーが十六になるまで待とうと思っ
ているというのにつ」

「凡そ魔王陛下とは思えないお言葉ですね」

「お前の方が神らしくないだろうがっ」

そうして始まるとつくみあい。

術を放つなど高度なものではなく単純な殴り合い。

世界レベルで地位の高い者同士の極めて低レベルな争いだった。

「ってかエミー、何で風国王妃と一緒にいるんだ？」

「お庭で一緒になったんです」

「果豎と言います。この度は突然お邪魔してすいません」

ペコリと頭を下げる果豎にアマレッティは思う。

なんて礼儀正しい女神なんだろう　と。

間違ってもあの鬼畜国王とは違う。

「それで、一緒に大根のお話をしたんですよ。果豎様、凄く大根にお詳しくて」

「は？大根？」

「ええ、大根は素晴らしいんですっ！あのすべやかな美肌を持つ大根の魅力についてエミー姫と楽しく話合いました！」

「大根…… 虬国の名産品とか？」

「いえ、虬国の名産品は【海耀石】です」

「じゃあなんで大根が？」

「……聞きたいですか？私と愛する大根の出会いについて」

キラんと目が光る果豎にアマレッティは獣並の本能で首を横に振ろうとした。

何かが自分に警告している。　まずい、この話題はまずい。

しかし

「アマレッティお兄様、果豎様の大根話は本当に為になるんですよ！私、大根料理も沢山学びましたから今度皆様に作って差し上げますねー！」

目を輝かせながら手料理を振舞うと言うエイミール。
アマレットィは話題を拒絶する機会を失った。

「はっ！そんな事だから隠れへたれと呼ばれるんですよ」
「黙れこの公開鬼畜がっ！」

どっちもどっち……と、双方の上層部は思ったのは言うまでもない

あの日の後日談・・・さくら書く

魔界の天気は最高。

絶好の虐殺日和。

・・・まあ、のどかだった。

「・・・貴様、また来たのか・・・」

天界はよほど暇なんだな。

そんな胡乱な眼差しの魔王閣下を前に、天界の風国の王、萩波は微笑み、彼の後ろに控える側近達は、申し訳なさそうな顔をした。なんかもう、たそがれ入ってふてくされている宰相の姿が哀れだった。

「ご機嫌麗しゅうございます」

「・・・貴様の目は節穴だな」

絶好に不機嫌な声で魔王が返せば。

「嫌ですね。挨拶もできないほど、不遜なお方だとは思いませんでしたよ」

けつと吐き捨てるように、萩波が返した。

「・・・こうして顔を突き合わせているだけでも、ありがたいと思え！」

ばちいっと目線が合わさった。

良い男二人の、眼付けが開始された。

秀麗な美貌ながら、その眼力は凄まじいものがあつた。

ぎりぎりにとらみ合う二人。気のせいで無ければ、周りの気温が下降しはじめた。

氷河期並だ。ツンドラだ。

「ふ。また世迷い事を尋ねに来たのか？あいにく、私は、神人などにかまっている余裕はないぞ」

「はっ！この前はベストショット五枚で簡単に言いなりになったくせに？」

それを耳にした魔軍幹部がうんうんと頷いている。

・・・あの写真は最高だったよなあ。

と、写真をチラリ垣間見ていたアマレットが呟いた。

・・・どう隠し撮ったらあんな良い笑顔撮れるんだ？

と、横目で掠め見たレミレアが自問する。

・・・ってか、あれってさ。

・・・犯罪だよな・・・。

・・・犯罪だな・・・。

・・・間違いなく、犯罪だよ。だってさ・・・。

・・・半裸だったんだよ・・・。

うちの王様ってば、果堅絡むと理性うしなうよなあぁ・・・。

と、どこことなく遠い目をしている萩波の側近一同。

でかい溜息が哀れを誘う。

明睡に至っては、黄昏つつ、己が先見の明を恨んでいた。

萩波はできる男だ。

頭脳も、体術も、剣もすべてにおいて、努力を怠らない萩波。磨きに磨きぬかれた、計算されつくした男。

・・・なのに・・・。

果堅絡むと、途端に理性吹き飛ばしちまうからなー・・・。

だふー・・・と魂まで抜け出しそうな溜息ついて、だけど、これ以上頼りになる男はいない、のも事実。

・・・ヤナ事実だな・・・。

どんなに策略家でも、腹黒くても！

補って余りある、その誠実そうな美貌がものをいうのだ。

腹ん中で何考えているのか分からない、鉄壁の外面がモノを言いまくるんだ！

・・・まあ、果堅にも効きすぎて、距離を取られているのが哀れを誘うが・・・。

麗しくも理想的な完璧な君主を、演じれば演じるほど、果堅の心が小さく竦んでいくのを知っていた。

明睡は思う。

知っていたながら、それで良いとも思っていた。

果堅が、いてくれるなら。

それで良いと思っていたんだ・・・。

・・・まさか、十二で、萩波に喰われるなんて思ってたなかったしな！！！！！！

大事に大事に仕舞っておこうと思っていたのに・・・この外道っ！！！！

でもまあ、質問内容は、どうすれば果堅を気持ちよくしてやれるかだし。

相手を思いやる心は悪くないと思うのだ。

・・・たとえば質問する相手に問題があっても。

「ちゃんと濡らしてやっているのか？あの体では、男を受け入れるのはキツイだろう」

「失礼な。精一杯奉仕してます。ただ・・・」

「ただ？」

「もう良いかな？と思ってねじ込むと、泣いてしまっんですよ」と言い切った萩波に。

「「それはまだだっ（まだだろうがっ！）（まだじゃあっ！！！）」」

アルファールンと、アマレッティ、リアナージャの怒声が重なった。

「貴様・・・おなごの体を何と心得よる・・・」

ゆらりとリアナージャが立ち上がり迫った。気のせいか、怒りの波動でびりびりと、窓が揺れている。髪が蛇に変わっていた。

「・・・仕方ないでしょう！ 果堅は可愛いんです。我慢なんか早々できませんよ！ 早くねじ込んで、ひとつになりたいと願って止まないのです！ 泣いた顔すら、可愛いんですから！！！」

・・・それは、ダメダメだろうよ。

魔界陣営と凧国陣営（約一名をのぞく）の心がひとつになった瞬間だった・・・。

「あー……。まあ、ナニがダメか分かっただけでもめっけもんじゃねえ？」

アマレットイが呟いた。

「貴様に足りんのは自制心だな」

「先走った愛情は十分だがな」

「おなごに対するいたわりが、足りぬのう」

萩波は、さくさくと切って捨てられて、ぐうの音も出ない模様・・。

魔族に自制心とか、いたわりとか、説かれてどうするよ、萩波・・と、側近一同の心の声。

おもむろにアルファレンが話し出した。

「……。想像してはどうだ。あの果堅という娘が、貴様を受け入れて、歡喜に鳴く姿を」

ちなみに私は毎日毎晩、エミーの艶姿を想像しているぞ！

それ、披露して良い情報なのですか、閣下……。と、たそがれる、魔軍幹部。

「そうじゃの。わらわもよく想像するぞ。エミーがわらわの楔を欲しがって鳴く姿や、わらわの楔で、あんあん、鳴く姿をな！」

がしゃんと、鋭い爪と、凍った刃が繰り出された。

ぎりぎりにとらみ合い、剣と爪を戦わせる二人。

唸るように、アルファレンがリアナー ज्याに迫った。

「……。夢の中のエミーも全て私のものだっ！」

「あー。わかった、わかった！ それはこっちに置いておこうな！」

仲裁に走るアマレットィ。

しかし口には出さぬが、彼とて脳内で、エイミールにあんなことや、こんなことをしているのは、証明済み！

「まあ、あれだ！ ようは、どれだけ相手を喜ばせる事ができるかなっ！」

「愛しい娘の痛みに耐える姿も確かにいじらしくてそそのるがのう！やはり、欲しがらせて鳴くように仕込まねば、男ではないの！」

「男ではない、と・・・？」

・・・萩波、激しいショックに打ちのめされた模様。そこに畳み掛けるようにして、アルファールンが止めを刺した。

「・・・がつつき過ぎだ。馬鹿者め」

・・・いや、魔王閣下、あんたに「だけ」は言われたくないねっ！
魔軍幹部と風国側近達の心がひとつになった瞬間だった。

うふふ。この間の、大雪様の小話読んで思いついたお話です。

いやさ、閣下。萩波、あんたにだけは、「がつつしてる」って言われたくないと思うのよ・・・。

愛の矢の正しい使い方・・・大雪様著

その日、萩波はまた魔界に行こうとしたところを果豎に咎められた。

「萩波、あんまり魔界に行くとかこうに迷惑だよ」

そう言うので、取り敢えず行くのは止めた。

代わりに、使者と謁見していると、使者からこんなものを貰った

「その昔、下界で人の縁を司る神々が使っていた矢です」

それは愛の矢と呼ばれるもので、これに刺さったものは相手に好意を抱くという。

他にも色々と矢を貰った萩波はしばし考えた。

「明睡、貴方倦怠期に入っていないません？」

「人の恋愛事情に口出しするな」

笑顔だが青筋を浮かべる明睡に、萩波はちつと舌打ちする。

「俺が倦怠期に入っていたらどうするつもりだと？」

「とりあえず、試しに打ってみたいと思ひまして」

明睡が無言で萩波の胸倉を掴む。

「大丈夫ですよ。一時的にムラムラつとくるぐらいですから」

「愛の矢だろう、それは!!」

「全ての愛の基本は肉欲から来ますので。そもそも愛の営みは子孫

を育む為のものですから」

言葉を囁くだけでは子供はできませんよ　確かに正論だが、こいつが言うといラっとするのは何故だろう？

簡単だ。他人に愛の矢を使おうとするからだ。

「他人で試すな！！」

「では他の方に使います」

「だから使っなくなって言ってるだろうがぁ！！」

宰相が怒り狂ったので、とりあえず仕舞っておくことにした。

それから数日後の事である。

果豎がエイミールに贈り物をしたいと言った。

しかし、送り先は魔界なので届けても大丈夫かどうか確認が必要である。

とりあえず、アルファレン達は何をしているのか確認するべく水鏡で見る事にした。

「普通に通信しろよ」

「着拒否されるので」

その言葉に宰相が黄昏れようと、茨戯がプライバシーはどうしたのかと問いかけても総無視。

横で楽しそうに同意する朱詩の応援を背に受け、萩波は術を放った。

「さて、またエイミール姫を思って下半身を疼かせているのやら」

が、水鏡にはなんとアルファレンとエイミールが湯船に浸かっている姿が見えた。

嬉しそうに微笑むエイミールとは反対に、愛する少女の裸に身もたえしながらも必死に冷静さを保とうとする麗しき魔王様。

互いに白い裸体を密着させ、きつと魔王様の股間の一物は爆発寸前。白濁した湯だから幸いだが、それが天に向かってそそり立っているのはもはや考えるまでもない。

キャツキャツと喜ぶエイミールを抱き締めながら、必死に自分を保とうとするアルファレン。

「ああいう顔するぐらいなのにどうして一緒に入るんだか」

「アタシ、あの魔王は絶対ドMだと思うのよ、好きな人限定で」

手が出せないくせに、自ら欲望の箍が外れそうになるような場所に身を置く。

あれをドMと言わずして何というのか。

「おや？知らなかったんですか？魔王陛下は隠れヘタレだということを」

偉大なる魔界の王をヘタレと呼べるのは世界広しといえど萩波ぐらいだろう。

そんな萩波はアルファレンから公開鬼畜と呼ばれている。

「しかし、なんという事でしょうねえ」

「何がだよ」

「愛しい少女と裸になりつつ何もしないなんてあり得ない事ではな

いですか」

「裸になる度に何かあったら困るだろ。なら、お前は性欲過多の貴族の夫人に押し倒された時」

ドスつと、宰相の横に突き刺さる水の刃。

宰相は悟った。これ以上言えば確実に殺られる　と。

「裸にも関わらず、愛の営みイベントがないのは痛ましい事ですよね？」

愛の営みイベント？！

「い、いや、あのね、萩波。アタシ達、愛とか縁とか司る神じゃないしいいゝ」

「能力に国境はありません」

いやいやあるだろう！！

自分達は炎水家に仕える国の中でも主に水を司る一族だろう！！
国名が風なんだから、絶対水関係だろう！！後は風もそうだけど。

いつもは萩波並にどす黒い宰相と茨戯。

しかしそれでも微かな良心の訴えを聞き入れなんとか萩波を止めようとした。

しかし

「あんまり煩いと　恋人寝取って後宮に放り込みますよ？」

その瞬間、宰相と茨戯は堕ちた。

宰相はおのが妻を守る為に、茨戯はようやく訪れた春の象徴たるおのが恋人を守る為にアルファレーンを犠牲にする事を決めた。そうして萩波心底ありがた迷惑の行動をする。

「で、詳しくは何をする気？」

「実はこの前、愛の矢というもの貰ったんですよ」

手近なところで宰相に使おうとして全力拒否されたが。

「ちよつと！！いくら何でも愛の矢を使うのはやめなさいよ！！それって人の心を弄ぶ最悪なものよ」

「そうだぞ！あんな幼い少女に使うなんて」

「いえ、使うのは魔王閣下にですよ。ああ、この特にムラムラッとするのを使つて差し上げましょうか」

と呟いた瞬間、萩波はその矢を水鏡にエースのピッチャー顔負けの時速250？の速さで投げつける。それは水鏡を通り、アルファレーンへと突き刺さった。

「ひひひひひっ！！」

「人様になんてご迷惑をつ！！」

宰相達も十分に鬼畜で唯我独尊だが、萩波に比べればまだ常識がある。

彼らは主の暴拳に目をむき悲鳴をあげる。

その間にも、水鏡の中ではアルファレーンがエイミールに迫りその白い肌に舌を這わせる。

だが

『はっ！エイミール、すまんっ！！私はなんて事を！！』

『お、お兄様、エミールはそんな』

全力で理性を取り戻したアルファレンに宰相達は心の中で感動の涙を流した。

一方、萩波が鋭く舌打ちする。

「愛の矢がささりながらも理性を取り戻すとは素晴らしい」

いや、あれは愛とかのレベルじゃないだろう。

どう考えても欲望の矢だろう。

「けれど私は負けませんよ。これを私への挑戦と受け取り打ち勝つてくれましょう」

いや、これ以上人様への迷惑は止めてくれ。

しかし、そんな宰相達の絶叫も萩波には届かない。

これは、以前にアルファレンにがつついていると言われた恨みも入っているのかもしれない。

「ふっ……獣のようにがつつきなさい！！」

「馬鹿！！それ以上矢を使ったら目も当てられないことにっ」

「愛の営みじゃなくて野獣のように相手に襲いかかるわよ！！」

そもそも、一人に使うべく矢は一本。

一本あればそれだけで十分過ぎるほどだ。

なのに、それ以上使うとなれば相手の愛レベルもとい欲望レベルは凄まじい事になる。

下手をすればあの小さなエイミール姫の体は壊れてしまう。

「考えなおせ、萩波!!」

「まだ戻れるわよ!!」

アルファレン獣計画の阻止に尽力する宰相と茨戯。

そんな二人に萩波は花のように微笑んだ。

「万事オーケーです」

萩波は愛?の矢を百本束にしてアルファレンへとぶちこんだ。

そして

『私ものになれ即座に子を孕めえ!!』

『兄様だめええんっ!!』

水鏡に映し出されるは、野獣のようにエイミールに襲いかかるアルファレンの姿だった。

「萩波あああああっ!!」

「運命です」

いや、どう考えても人為的だろうがっ!!

「運命なら仕方ないよ、二人とも」

「朱詩、アンタも止めなさいよっ!!」

しかし、朱詩は完全に楽しむ気である。

『やああん!!』

『私の激情を受け入れろおお!!』

激しくまぐわる魔王とその妹。

妹姫の裸体に次々と咲かされる赤い華が、肌の白さとあいまって恐ろしいまでの扇情的な色香を漂わせる。

一方、まだ未成熟の体にかぶりつく魔王の色香はその数百倍に膨れあがり、妹姫を酔わせる。

息も絶え絶えに兄に嬲られるエイミール姫。

きっと彼女は何故こんな事になっているのか全く分からないだろう。魔族なのに眩しいほどに輝く美しい魂の持ち主の乱れ狂う姿に宰相と茨戯は涙する。

鬼だ

うちの陛下は悪魔だ

「これでもう、がつつくなんてアルファレンには言わせませんよ」

にこやかな笑顔がどす黒く見える。

一方、鏡に映し出される激しいまぐわりは最高潮を迎える。

そして

エイミール姫の絶叫が辺りに響き渡り、鏡は沈黙……

『きゃ、きゃあん!』

『まだ休めると思うな。私の愛はこの程度ではないぞ!』

第二ラウンドを開始した。

「魔王閣下……よっぱど溜まってたんですね」

「我慢は体によくないよ」

良いことしたな〜と呟く萩波と朱詩に、今度こそ宰相達は言葉を失ったのだった。

終わり

きちんと復讐した萩波様（笑）

好意より悪意の方が強い気がしますね……でも、萩波なりの愛情な
んですよ。

その為には愛の矢さえ活用します。

愛の矢の正しい使い方・・・大雪様著（後書き）

さくらの感想。

・・・萩波・・・萩波・・・（言葉にならない）

愛の矢の正しい使い方 2 . . . さくら書く

．．．その日、たまたま、浴室の前を通りかかった、ある意味被害者のレミレア。

浴室内から漏れ聞こえる、艶声に、脳天がち割られた。

しかもしかも、「やああん、にいさまあああ、だめえええ」である。

鼻血で死ぬそうな気が．．．した。

しかもちよっびつとだけ、お花畑も垣間見た。満開の花の中で、微笑みながら手をふっているエイミールに羽が生えていた。

．．．いや待て、オレッ！！！！

レミレアは、すぐさま踵を返すと、羽を広げ、魔城の最上階へ飛び立った。

窓の外から大声で叫ぶ。

「アマレッティ様！リアナージヤ様！ねえさんが襲われてる！！」

それも、魔王に。

白濁した液体に塗れたエイミールが、浴室から助け出され、麗しの魔王様が、兄弟に渾身の一撃を喰らっている様を、天界、凧国の水鏡の前で、ふてくされた表情で眺めている萩波。・・・と、朱詩。大きく安堵している、宰相と茨戯。じつに対照的だ。

「・・・よ・・・良かった・・・。突っ込まれる前で・・・」
と、涙ながらに崩れ落ちる、宰相・明睡。
よかったね、理性の人。

「この危険物、燃やして良いよね？いつ誰に使われるか、怖いっ
たらないわっ！（・・・特に自分の王が）」

茨戯がそう言っ、束になっている愛の矢を、まとめて燃やそう
として振り返る。

「ちえー。もう少しで大人の階段昇れるところだったのになー」
と、水鏡をまじまじと見詰める、朱詩。

単に、楽しければ何でも良いと、ありありの模様。

「・・・ふん。悪運の高さがここに出るのでしょうね！！！」

水鏡を見たまま、高笑いを上げる、萩波。

悪運？悪運なのか？ 幸運の間違いだろうっ！！！！と、萩波を涙
目で見上げる宰相。

これって、ものすごく人為的で操作的で、神という立場にあり
ながら、なんて悪魔的な行いなんだよおお！！！！

よほど、「がつつしてる」発言が気に入らなかったんだな。（あ
ったりまえでしょおおお！！！！）

・・・もうこれ以上、刺激してくれるな、魔界の王よ・・・と、
黄昏も酷くなっていく。

うちの王様の方が、どす黒くて救いようがないって思ってしまう
から・・・。

腐っても王。爛れてても王。

ここ一番つて時は、本当に頼れる凄い男なのに・・・。

「まあ、でもこれで、もう、「がつついてる」なんて言わせませんよ!!!自分こそ、幼い妹にがつがつして、襲い掛かっているじゃないませんか!!!でもこれで、もう、エイミール嬢とお風呂タイムはなくなりましたね!!!」

・・・この私ですら、果堅とお風呂に入ったのなんて、数えるほどなのに!生意気なんですよ、あの魔王!!!!自分が相手に好かれているとアピールしたいのでしょうかねっ!!!!

「・・・王・・・それぐらいにしておいたほうが・・・」

茨戯がどことなく震える声で、萩波に言った。

だが、萩波は後ろを振り返ることなく、茨戯の言葉をスルーした。
・・・振り返っておけばよかったのに・・・。

「ふふ。ちょっと、ほとぼりが冷めた頃に、またまとめて撃ち込んで上げますからね!!!」

だから、愛の矢、燃やすなんて許しませんよ、茨戯!・・・と。
後ろも振り返らず茨戯に命令する萩波。

「・・・まとめて?」

「ええ。もちろん!あなた方が止めても私は必ずやり遂げますからね!今度は、百本と言わず、二百、三百、まとめて・・・」

水鏡の前で上機嫌だった、萩波の顔色が、だんだんと悪くなっていた。

・・・いや、むしろ急降下、だ。

知らず、汗が噴出した。

「・・・百本、打ち込んだんだ・・・」

へえ。

と、低く響く声。

けして声高に叫んでいるでもなければ、糾弾しているわけでもない。

ただ、事実を確認している、だけ。

なのに、その場に居合わせた者たちの顔色が格段に悪くなっている。

筆頭は、萩波。

だらだらと汗。振り返るのが怖い。

でも。

萩波は振り返った。

茨戯が泣きそうな顔で、「だから、そこら辺で止めとけって言ったのにいつ」と、呟いていたが、視界の隅に追いやられていた。

萩波が目に見すのは、最愛にして最良の妻。

・・・果堅だった。

「あ、あのですね、果堅！」

「・・・アルファレン閣下に百本、打ち込んだから、エミーはあんな姿なのね？」

怖い。

あまねく魔物、魔王でさえも余裕で戦える、余裕で返り討ちにできる萩波が。

果堅の静かな怒りに鳥肌を立てていた。・・・全身に。

・・・と。

果堅が、ゆらりと踵を返し、愛の矢（・・・むしろ、欲望の矢）の束をひとつ、驚掴みにした。

「か・・・果堅？そそそれは、危険物だから、触らないほうが・・・」

宰相が、勇気を振り絞り進言するが、果堅は答えない。

「よっ」と。愛の矢の束を手にとった果堅。

大きく振りかぶって。

上段の構えから。

ピッチャー（果堅）投げたあああああっ！！！！！！

キャッチャー（萩波）すかさずかわそうとした！が！！！！

「萩波！私の愛がつけとれないのっ！！！！」

ああっ！

キャッチャー、動けなああああいいいっ！！！！

およそ、三百本の愛の矢が、萩波の胸に突き刺さり、消えていった・・・。

ふ。と不敵に笑って。

「あ、わたし、エミーの看病に行ってくるわね。エミーが良くなるまで、帰らないから」

にこにここと、宣言、した。

それって・・・。

この状態で禁欲しろと・・・？

悲嘆にくれた眼差しで、萩波は最後の望みとばかりに、溢れる色気で、果堅に手を差し伸べる。

愛の矢なんぞ、なくたって。

毎日、毎晩、寝ても覚めても、果堅ばかりの彼。

果堅禁断症状？

それこそ冗談じゃない。

「か、果堅！」

「がつつかないのよね？ アルファレン閣下は、ケダモノになったけど、「私の」萩波なら、・・・だいじょうぶよ！ねえ？」

伸ばされた手の先で、果堅がニコヤカに微笑んで。

「いってきます」

魔界へ向けて転移した。

・・・余談だが、悲嘆にくれる萩波の顔を、誰もまともに見ることはできなかったと言う。

・・・もつと余談だけど、欲望に身悶えしながら、萩波は、地獄のオアズケを生き抜いた。

・・・果堅の名を呼ぶその哀れさは、筆舌にしがたいものだったと言う・・・。

えー・・・。

あー・・・。

自業自得・・・？あ、怖い、怖い。

おしまい！

愛の矢の正しい使い方 2 . . . さくら書く(後書き)

. . . えー . . . 。

私が書くと、どんなに色男で、頭が良くて、鬼畜男子でも
ヘタレになることが判明いたしました!!!

萩波好きの皆様。

. . . ごめんなさい . . . 。

三度目のご訪問・・・大雪様著

『二度目のご訪問』

二度目の凧国国王達の来訪から一週間後。
今度は王妃が一人で魔王城へとやって来た。

どうして来たのかと問えば、エイミールに呼ばれたと果豎は答えた。

「果豎お姉様とお茶がしたかったです」

エイミールは目を潤ませながら三人の兄達に告げる。

三人の兄達が美形過ぎるせいで、近づく女性は兄達狙いばかり。
おかげで、近寄ってくる女性達からは敵意と殺意入り交じる視線を
向けられ、罵詈雑言、誹謗中傷される日々。

まあ、美形の兄達や魔王軍の上層部に溺愛されているのだ。
その妻の座を、愛妾の座を狙う女性達にとっては正しくエイミール
は敵であろう。

そんなエイミールにとって、果豎は初めて自分に下心なく優しくしてくれた女性だった。

「ダメですか？」

シユンとなるエイミールに兄馬鹿三人衆は即座に否定する。

「ま、まあよろう」

「そうだな、果豎は無害だし」

「そうじゃ！あの娘ならばエイミールの友として認めてもよろう
！！」

「ありがとうございます、アルファレン兄様、アマレッティ兄様、
リアナージャ兄様！！」

そうして、果豎とエイミールのお茶会は始まった。

「果豎お姉様、見て下さい！！これ、エミーが頑張って作ったんです」

「うわぁ！凄い、上手に出来てるわ」

そうしてエイミールが作った御菓子を一口頬張った果豎はにこりと笑う。

「味も完璧！あ、これ私が作った大根の煮物」

大根の煮物？！

遠くから見守っていた魔王軍の皆様が目をむく。

お茶会には相応しくないだろう、それは。

だが

この前、果豎が仕事の邪魔をしたお詫びにと送って来た漬け物は実に美味しかった。

絶妙な漬け具合、その歯ごたえに味。

一口噛んだ瞬間、魂は天の楽園へと吹っ飛ばされた。

頭の前から足のつま先まで通り抜けた衝撃の心地良さは、自分の理想とする女性と激しくまぐわい頂点を極めたのと同じぐらいである。

それが煮物

魔王軍の中にはジュルリと唾液を垂らすもの達が続出した。

「ふん、たるんでるぞ貴様ら」

「いや、そういうアルファレン兄上も」

その瞬間、アルファレンは凄まじい速さで零れそうになる唾を手で拭った。

氷の貴公子と呼ばれる麗しき魔王の唾液垂らし未遂は、ある意味衝撃なのは間違いない。

「うわあ！！凄く美味しいです、果堅お姉様！！」

「本当？嬉しい。あ、多めに作ったから、後で他の方々にもお裾分けしてね」

その言葉に、魔王軍は果堅を神と崇めた。

いや、果堅はもとから女神だが、それを差し置いても彼らにとって
は心優しき神である。

「あのね、今度はお友達も連れてきたいんだけどいいかな？」

「お友達ですか？」

「うん。あ、勿論他の皆さんにもお願いするけど」

兄達を始め多くの者達に溺愛されているエイミールに引き合わせるならば、やはり許可は必要である。

「どういう方達なんですか？」

「えっとね、私にとって凄く大切な人達なの。苦しい時、辛い時にずっと一緒に居てくれた人達や、私を目覚めさせてくれた子とか」

そこで果豎は考える。

蓮璋と蛍花はまだいい。しかし、蒼麗を呼ぶと蒼花が必ずついてくる。

自分の夫や周囲など比べものにならないほど美しく華麗にして可憐その美貌はどんなものであるかと、生物であるかぎりは一瞬にして魅了されその虜となる。

蒼花が抑えなければ、即座に彼女の思うがままに動く傀儡人形となる。

.....

「ごめん、目覚めさせてくれた子はちょっと後になると思うけど」

蒼麗を連れてくる場合には蒼花の対処方法を十分に考えなければならぬ。

その美貌も色香もそうだが、潜在能力や戦闘技術、更にはその恐ろしいほどの知謀はもはや発射された核弾頭よりも恐ろしい。

真綿にくるまれるように育てられながらも、蒼花はあまりにも世事に通じ裏世界を知り尽している。策謀に長け、相手を思いのままに掌で転がす様は正しく妖姫そのもののなのに、相手が蒼花であることが正しい事に思えてしまう。

蒼花が、いや、蒼麗の幼馴染み達が行うだけで全てが正しいと思えてしまう。

まるでそう思うように魂に刻み込まれているかのように

神である自分達でさえそうなのだ。

それが相反する世界である魔界に来たらどうなるか？

果豎は問題事を持ち込まないことに決めた。

「果豎お姉様？」

「あ、大丈夫。気にしないで」

安心させるように微笑み、エイミールの菓子をもう一口に含もうとした時だった。

突然地面を突き破り現れる緑色の大蛇。

太さは大人が10人手を伸ばして円を作ったほど。

長さは十メートルは軽く越えるだろう。

その顔はもはや凶悪で、チロチロと長い舌を出す。

果豎達が驚く間もなく、大蛇がエイミールに襲いかかる。

「「「エイミーっ！！」」」

アルファールン、アマレッティ、リアナージャの三人が叫び、他の魔王軍も青ざめる。

大蛇がエイミールを捕えるなか、果豎がエイミールの手を掴む。ともに引き摺られ、果豎の体が宙を舞う。

「くっ!!」

「お姉様っ!!」

大蛇が果豎に気づき振り落とそうとするが、果豎は意地でも離れない。

その様に、大蛇が果豎に牙を突き立てようとする。

そうして自分に向かってくる大蛇の口に果豎はキラんと目を光らせ、それを放り投げた。

大蛇の口の中に消えていくのは真っ赤な大根。

ゴクンと大蛇がそれを飲み込む。

ギヤアアアアア!!

大蛇が叫びまんどり打つ。

それでもエイミールを離さないところが凄いが、その姿はそれまで怒り狂っていたアルファールン達でさえ涙するほど無様過ぎた。

「あれ、何？」

レミレアが問えば、果豎はエイミールの手をしっかりと握りしめたまま声高に言った。

「唐辛子大根！！品種改良に改良を重ねて作ったもので、その体は情熱を表わす赤！！食べればあつと言つ間に体を熱く火照らせる素晴らしい効能を持った大根よ！！」

いや、熱く火照らせるところのレベルの話じゃねえし

魔王軍全員が思った。

どう見たって大蛇はその辛さに苦しんでいる。

と　大蛇が叫んだ。

『この……たかが大根のくせに!!』

たかが大根

その言葉は果豎に喧嘩を売ったのは言うまでもない。

「何を言うの貴方!!」

果豎の神気が膨れあがる様に、アルファーレンはほう……と息を吐く。

それはあの凧国国王達の足下にすら及ばないが、酷く清廉で美しく魔族すら魅入られるような美しさだった。

「流石は王妃という事が……」

呆然とそんな事を呟く。

だが、次の瞬間全力で前言を撤回したくなった。

というも

「いい？！たかが大根なんて言わないで！！大根はアイドルなのよ！！ってか貴方に大根だなんて呼び捨てにされたくないわっ！！」

エイミールを連れ去られそうになったうえに大根まで罵倒されたからには、何時も優しい果堅も黙ってられない。

果堅は大蛇を厳しく睨付けて叫んだ。

「これからは、世界一美しく気高く宇宙一素敵な大根様とお呼びするのよっ！！」

激しく呼びたくねえ！！

大蛇だけではなく、魔王軍全員も全力で思う。

ってか、世界一美しく気高く宇宙一素敵

いや、ここまではまだいい

しかし、様？様？大根に様？！

「どうしたの？！呼べないの？！」

無理です

魔王軍全員が心の中で断言する。

確かに大根は美味しい。その魅力に自分達も囚われつつある。
しかし大根に様？様付けしろと？

だが、そんな困惑の魔王軍に更なる衝撃が訪れる。

「私の国ではみんな笑顔でそう呼んでるわよっ！！」

ここに、明燐達が居れば即座に嘘だと叫んだだろう。
しかし残念なことに誰もいない。

そう　居なかったからこそ

魔王軍達は凄まじい衝撃を受けてしまった。

凧国では、大根に長すぎる形容詞をつけた挙句に様付けで呼んで
いる?!

魔王軍は凧国の凄さを思い知った。
自分達とは格が違う。

「そうか……これが、魔界と天界の違いか……」

アルファールンが汗を垂らしながら呟く。

そんな、天界に対して激しく失礼な感想を抱いている事を凧国が知
ればどうなるか……。

「さあ！！呼びなさいっ！！」

いや、それよりとつとエイミールを助けるよ。
そうつつこむ者もない。

しかし、やはりエイミールへの愛は人一倍飛び抜けているのか、一番早くアルファレンがその事実を思い出し、すぐさま力を放つ。

だが、大蛇はそれを避けた。
その事実には、魔王軍が息を呑む。

最強と名高い魔王の攻撃を避けるなんて……

しかも、大蛇はズル賢くエイミールを盾にするように持ち上げる。

「エイミー……」

アルファレンが叫ぶ。

「どうするっ！あれでは下手に攻撃できんぞっ！……」
「あのやるつつ……」

リアナージャとアマレッティが怒りの声を上げる。
しかし、あれではどうしようもない。

「う……あぁっ」

体を締め付ける力が増したのか、エイミールが悲鳴をあげる。

「エミーちゃんっ!!」

「果豎……お姉様だけでも……逃げて……」

エイミールといまだ手を繋いだままの果豎は、大蛇の体に足を乗っけてはいるが、かなり無理な体勢でもあった。
しかも、落ちれば確実に怪我をするほどの高さに居る。

「だからって、エミーちゃん一人置いて逃げられるわけがないでし
ようっ!!」

そう言うと、果豎は大蛇の体に隠し持っていた短刀を突き立てる。

「きゃっ!!」

硬い鱗が刃を弾いた。
衝撃に体勢を崩す。

それを見計らったかのように、大蛇が身を震わせ果豎の体が落下する。

「果豎お姉様っ!!」

魔王軍もハツとするが、すかさず大蛇がエイミールの真上に牙をつきつける。

まるで動けばエイミールを喰らうとでもいうように。

一方、果豎は転がり落ちそうになる体を立て直そうとするが上手くいかない。

こうなればエイミールの手を離すしかないと心に決める。

でないと、宙づりになった自分の全体重がエイミールにかかり余計に苦しませてしまう。

そうして断腸の思いで手を離れた果豎だったが、それを狙ったかのように大蛇の尻尾が果豎へと向かう。

尻尾は針のように鋭く尖っており、刺されば間違いなく絶命する事は簡単に想像出来た。

しかし、宙に浮いている状態では体制を立て直す事は出来ない。

果豎は衝撃に目を瞑る。

迫り来る死に走馬燈が見える。

初めて大根と出会った日

初めて大根を自分で実らせた日

大根の品種改良に明けくれ失敗するも大根に慰められた日々

愛する大根に囲まれその愛しさに酔いしれる日々

そのほつそりと逞しい白く輝く肢体に変な人に襲われないかと心配し心を細らせた日々

大根

ああ大根

私の愛しい大根達

ってか、大根以外出て来ないのかよ

走馬燈ですら最初に出てきてその殆どを占める大根だった

因みに、他のもの 例えば友人とか夫とかは出てきたのかと言うと、最後まで走馬燈を見る前に果豎は誰かに抱き抱えられてしまった。

驚いて目を明けた果豎が口を開こうとする。

が、それよりも速くに

落ちる

大蛇の首

「他は譲りましょう」

自分を抱き締める夫が冷ややかに言うが否や、果豎は夫の纏う衣服の袖によって視界を遮られる。

61

それは夫なりの気遣い。

気配を探れば、明燐や宰相達が居る事も分かった。

それに気を取られた果豎は、あっと言う間に夫の術の虜となる。耳を塞がれ感覚を閉じられる。

下で行われる虐殺を知る事がないように施された優しさ

一方、萩波から受けたアルファレンは、今までのうつぷんをはらすかのように術を解放する。

果豎が大蛇に様付けで大根を呼べと言っぐらいから、少しずつ近づいてきた幾つもの殺意。

自分達が本気になれば簡単に潰せるが、既にエイミールが囚われの身となっていた。

下手に動けば奴らはエイミールを害する。

ゆえに、彼らは動けなかった。

隙を探すが、小物のくせに驚くほど統率されたそれらはアルファレン達の間についてあつと言っ間に後ろをとった。

気付いている。

気付いているが、エイミールを思えば動けない。

だが　それも先程までの話である。

アルファレンはそこ居た者達を殺しつくした後、その惨状を見せないようにエイミールを眠らせた萩波を見上げた。

「言いたくはないが……今回は礼を言おう」

「いえ、構いませんよ。それで行くのですか？」

「ああ。せっかく譲ってくれたからな」

大蛇は奴の一部。

奴の力の一部にしか過ぎない。

本体は別に居て、安全なところから今回の事態を引き起こしたのだ。その首を落とすだけで手を引いた萩波だが、本当は即座に相手を殺しにいきたいと思っている事はアルファレンにも痛いほど分かった。

だが、それをあえて譲るとするのは、萩波が自分の気持ちを知っているから。

エイミールを捕えようとした相手を殺してやりたいと思う自分の気持ち。

「相手の情報はいりますか？大の幼女好きで自分の一族の幼女にも手を出しまくり、更には人間界でも幼女を探しては手を出しまくった馬鹿の」

「いや、いい」

アルファールンは冷酷に微笑む。

「私はこの世界の王だ。どこに隠れようとも探し出してみせよう」

その言葉に、魔王軍が頷く。

望むところだ　と。

「それは宜しい。ああ、ですが潰すならばその馬鹿とそれに協力した者達だけにして下さいね。他の方達は慎ましく暮らしているだけですから」

仕組んだ者だけ始末しろ

そう告げる萩波にリアナージャとアマレッティが頷く。

「当たり前じゃ」

「本人が償うべき罪だからな」

そして血の祭典は始まった。

数日後

邪魔されてしまったお茶会が再び行われる。

今度は萩波達も居たが、アルファレン達は何も言わなかった。

「で、なんであの時駆けつけたんだ？」

アマレッティが萩波に聞けば、彼はにっこりと言った。

「果豎がこちらに窺うと聞いてましたので、ずっと水鏡で見守っていたんですよ」

果豎のプライバシー欠片もなしっ！！

アルファレン達は果豎をちらりと見て心の中で涙した。

「お前……それ、盗撮っていうんじゃない」

「やはり夫としては妻の安全を守るのが使命ですからねえ」

妻のためなら何をしてもいいのか

魔族にそう思われる凧国国王はもはや魔族すらも越えたかもしれない
倫理の点で。

「ってか、周りも止めるよ!!」

アマレッティの言い分は最もだった。

しかし

「でも心配ですもの」

「今回も面倒事に巻き込まれたしな」

「果豎はトラブルメイカーだからね」

「対策を講じる事は必要よね」

明燐、宰相、朱詩、茨戯の言い分にアマレッティは泣きなくなった。

「あんたら……」

「やれやれ、果豎もとんだ者達に好かれておるわ」

「「「「エイミール姫の方がより悲惨だけど」」」」

「「「何を言うつー!!（何を言つのじゃー!!）」」」

「エミールの何処が悲惨なんだっー!!」

「そうじゃー!!エミールは幸せじゃっ」

「お前等にエミールの何が分かるっ」

「貴方方に愛されたせいで、同性の友達が持てないところですわ」

明燐の指摘がアルファレン達の胸に突き刺さる。

「そ、それは……」

「べ、別に同性の友など……」

「果豎がいるし大丈夫だろ」

「ええ、大丈夫でしょう。でも、今回のように巻き込まれるのは辞退したいですわ」

相手はエイミールを狙い、それに果豎が巻き込まれた形となった。果豎の性格だ。死んだってエイミールを見捨てたりはしないだろう。

が、今回はそのせいで危うく殺されかけた。

「それについては謝罪しよう」

「おや？素直ですね」

「下手にお前等にへそを曲げられて王妃を来させないと言われたくないからな」

「ふむ……愛しい妹に果豎が近づいてもいいと？」

その言葉にアルファレンは溜息をつく。

自分以上にエイミールが懐く相手など本当は消してしまいたい。
この世に生まれてきた事を後悔するほどに苦しめて抹殺したい。

だが、それをしてエイミールに泣かれるのはもつと嫌だ。

果豎はエイミールにとって初めて出来た同性の友達。

そして危機には、果豎は迷いなくエイミールの手を握り守ろうとしてくれた。

最終的に離す事になったが、それもエイミールの事を考えての事だとアルファレンは知っている。

あの時、果豎が手を離さなければ、その重みにエイミールは更に苦しんだ。

自分が怪我をするのも構わず手を離そうとした果豎にアルファレンは、いや魔王軍は敬意を表する。

「まあ、構いませんよ。果豎も友達が出来て嬉しいようですし」

「私としてはお前達の方が反対しそうに思えたがな」

「凄く憎らしいのは確かですよ。でも、もう束縛しないと決めましたから」

そうして果豎を見る眼差しに、アルファレンは静かに萩波を見つめた。

今から数百年以上も昔、凧国で起きた事件の事は聞き及んでいる。それゆえに凧国王妃が長い間国を離れていたことも。

そして先日、ようやく再会出来たことも。

アルファレンは思う。

数百年もの間ずっと愛する妻と離れていた凧国国王。けれどそれでも狂わず彼は自分の仕事をこなした。

果たして自分ならばそれが可能だろうか。

そこまで考え、アルファレンは愛しい少女の存在が自分から失われる恐怖に叫びたくなった。

絶えられるはずがない

それこそ全てを破壊尽くしてしまうだろう

愛しい少女を求め、魔界だけではなく全ての世界を

「お前は強いな」

「ふふ、強くなっただですよ」

強くなっただからこそ

生き続けたからこそ自分は再び妻を取り戻すことが出来た

優美でたおやかな美しさの中に潜む強靱でしなやかな強さ

アルファレンは言う。

「今度酒でも酌み交わすか」

「いいですね。とびっきりのを持っていきましょ」

少しだけ、互いの心うちが分かったような気がする。

そうして彼らは愛しい少女へと目を向けた。

終わり

三度目の来訪。ちょっと？だけ仲良くなつた魔王様と萩波（すいません、勝手に仲良くさせてしまつて（汗））。
四度目の来訪になったら二人はどうなるんだろうか

四度目の・・・。さくら書く(前書き)

・・・ただ今であります。

さてお気づきの方もいらっしやるはず。

こんな手の込んだ、目次と背景は、ねおばーど様の提供です!!!
・・・さて、さくら、帰ってから溜まりにたまっていた、欲求を解消するべく、ネット小説にどっぷりつかり、読み漁りました!!!!
ンで、例によって大雪様のところにお邪魔して、自由をかけた鬼ごっこ。を読む。・・・。

「きやはああああんっ!!!」ってなりましたよ。ンで速攻書いて送りつけた次第です・・・。

四度目の……。さくら書く

魔界の深窓の姫君。

秘された存在のエイミールに、初めて出来たオトモダチ。

彼女の心は弾んでいた。

明日が待ち遠しかった。

なぜならば。

明日は、果堅おねさまと、初めての……。***（きやつ！）。

可憐な少女の桃色の頬が、恥じらいに染まった。

「……。エミール……」

アルファアレンがことなく、やるせない声を発した。

側にいて欲しい。どこにも行かないで欲しい。

目に入る場所にいつもいて、その可憐な姿を目で追っていたい。

……。のに。

愛しの妹は、農ギヤル姿。

「……。エミール……」

生命の源、太陽！植物必須の栄養源！！！！

だけど、美容の大敵紫外線……。

でも！大丈夫さ！

果堅妃、推薦のこの農ギヤル服に、この日よけ帽子！照り返し対

策もばつちり！

白皙の美貌も、金色の波打つ髪も、でかい帽子の日よけの影。すんなり伸びた、白魚の手も、華奢な足腰も農着に包まれ、チラリと見えるのが赤い唇だけ。という、アルファレンにとっては拷問のような装い。

そんな彼の嘆きに満ちた眼差しの前に、エミーとおそろいの農ギヤル服に身を包んだ少女がひとり・・・。

「エミーの珠の素肌を守るためよ！」

天界、凧国の賢妃、果堅。

農着が似合いすぎる。

それもそのはず。

これぞ、凧国国王自ら、果堅妃のために考案した、伝説の・・・一着（呪われそうだ）。

颯爽と農地に立つその姿は躍動感に満ち溢れている。（おおい）

果堅妃が肩に担いだ、きらりと陽光に輝く鍬！

あまりの煌きに、魔城で働く侍女たちがあの鍬はきつと宝石で出来ているに違いないと、頷きあっていた代物だ。（おおーい）

あまりの手入れのよさに、空飛ぶ魔族が眩しさに落ちてくる始末。
（おおーい）

「エミー！準備は良い？」

「はいっ！おねえさま！」

びしいつと直立したエミーに最早深窓の姫の面影はない。

「人間を食料としなくとも、大根食べれば、同じくらいの酩酊感に囚われる、魅惑の大根栽培するわよおおー！！！」

どうやら、果堅は、またもや・・・大根の品種改良に成功したらしい。

「青々と茂った麗しの緑。その緑が太陽をその身に浴びて光合成を繰り返し、やがて、蓄えられていく欲望！！あ、いけないわ。大根に欲望感じては！！でもでも、いけないのは、大根なの！余りにも魅惑的なその肢体。縋りついて頼ずりしたくなる、その逞しさ。この身を投げ出して、魅惑の歓喜に囚われて我を忘れてしまうのよ！！！」

大根！あなたの存在は最早、罪！

・・・だんだんヒートアップしていく、果堅妃。

どこから出したのか、葉も青々としたむっちりボディの白い大根抱きしめて、頬擦りしている。

それを見て、どことなく、遠い目でリアナージャが呟いた。
なんじやろうか、このヤルセナサ・・・。

「・・・のう、アマレッティ。あの妃、もしやすると大根相手なら絶頂を覚えるんじゃないのか・・・？」

「・・・奇遇だね。リア兄上。俺も今そんなこと考えていた」

沈黙が二人の間を通り抜ける。

「・・・のう・・・」

「・・・なあ・・・」

それから二人顔をあわせて。

「「初めて風国国王が可哀想に思えた（ぞ）（のう・・・）」
ため息付きつつ呟いた。

魔族ですら、はだして逃げ出すあの黒さも、愛しい妃につれなくされたからなのか・・・？

「最悪の初夜がトラウマになっているのだろう。自業自得だ」

二人の傍らに立つ魔王が呟く。

目線はもちろんエイミールに釘付け。

農ギヤル服だろうが何だろうが、中身がエミーならモウマンタイ（無問題）。

農業に従事するその清々しい姿勢！煌く汗すら、いとおしいぞ、エミー！（戻ってこいよ、魔王閣下）

「・・・他にも泣いて嫌がる事とかしてそうだなあ・・・以前も言っていたじゃないか。大事なものは枷に繋いで閉じ込めておかなければ、盗られてしまうと・・・」

やってそうだなー、あの鬼畜王・・・。

やや黄昏で、アマレッティが呟いた。

アマレッティの呟きに、リアナージャが頷いた。

「ま、一理あると思うがの。大事なものは仕舞っておくものじゃ。それが二つとない秘宝なら尚の事。隠さねばなるまいよ。誰の目にも止まらぬように。眼を引いて攫われでもしたら、大事じゃ！」

わらわなら。

城の奥深くに、仕舞い込んで誰の目にも触れさせん。

そうして捕えて、わらわしか見ないようにじつくりと仕込むがのう・・・。

俺なら。

居城の奥部屋に閉じ込めて、金の鎖で繋いでやるなあ・・・。
優しく縛って、俺しか見なくなるまで、何度でも身体に教え込んでやるのに。

その二人の言葉に、ふ、と笑った孤高の魔王。アルファールン。
「・・・私なら。大事なものなら懷に入れて、誰にも触れさせん・
・」

たとえ、魔軍の要といえる、お前達が相手でも。
宝とは戦って、勝ち取るものだ。そうだろう？

そうして三人。不遜に笑いあった。

鬼畜王のことは言えない三人だったことが判明した！！！（逃げ
ろー、エミー！）

心の奥底にある、希求して止まない事象。

最愛の者を得る事は、最大の弱点を抱える事と同じ。

愛しさの余り、誰の目にも触れさせたくないと思うのだ。他の誰
にも目を向けさせたくないのだ。

心合わさるその時は幸せ。望む通りに愛してやろう。

けれども、ひとたび、我が側を離れようと愛しい者が動いたなら・
・？

足を折り。

目を潰し。

声すら封じてしまうだろう。

そうして、恍惚のままに。

その身を喰らい尽くすだろう。

喰ってしまえば、もう離れていかない。鼓動も、吐息も全て。余
すことなくひとつになれる・・・。

だが。

アマレットィは、求める者の心を理解した。だから、彼らの側にいる。

リアナージャは、求める者の心を理解した。だから、矛を収めてここにいる。

エイミールが求める者は、過去も今もこれから。

彼、だけ。

「・・・悔しいが、エミーのためだ（間違ってもあんたのためじゃねえぞ！）」

「泣き顔は見とつないからの・・・（じゃが、お主から攫う気は満々じゃ！）」

アルファレーンの側で、輝く微笑を見せてくれているならば。

この飢えすらも、乗り越えられると思うのだ。

愛しくてたまらない、エイミールの笑顔のために。

彼らは、側で見守る事を決めたのだから。

「この大根さんが育ったら、もう人を攫ってこなくても良くなるんですね？」

えいこらしよつと鍬をふるって、畝を作るふたり。

手際の異様に良い果堅と、おっかなびつくりのエミー。

種をまいて土をかける。

水を運んで、丁寧にかけてやった。

整然とした、みごとな畑。

今はまだ、茶色の地面ただけけど、いつか芽が出て、大きくなる。

果堅お姉さまが、手にしている立派な大根みたいな作物が取れたら良いなあ。

そしてそれを食べて、みんなが、飢えを感じなくなってくれたら良いなあ。

・・・人間に食欲を感じる魔族は確かにいるけれど、そんなに数はいないのだ。

彼らが人界に侵攻して、生きている人間を攫って食べなくても良くなったら、良いのになあ、とは、ずっとエミーが思っていたこと。

少しでも、忌避されるところを直して行けば。

そのうち人だって、魔族はそんなに悪いものじゃないって分かってくれるはず。

・・・オトモダチが増えたら楽しいなあ。

人間の子供は、学校、というところに行って、ベンキョウするんだって。

オトモダチを作ることベンキョウの一種なんだよ、と、果堅お姉さまが言っていた。

お姉さま以外のオトモダチ。

・・・それは考えるだけで、とてもわくわくする。

それに、そうして魔族と人間の交流が始まれば。

魔族の皆にも、人間のお友達ができるかもしれない・・・。

だって、にいさまたちと、果堅おねえさまの旦那様、仲いいものねえ？（・・・エミー・・・）

何より、オトモダチを、食料と見る者は、魔族でもないだろう。

それになにより。

果堅おねえさまの作る大根料理って、絶品！なのだ。

「にいさまたちが、先を争って食卓に付いたんです・・・」
「へ？」

「あの、あの、この間持つてきていただいた、果堅お姉さまお手製の大根の煮物・・・」

「あ、この前の？」

「はい。いつもより先を争っているのが分かりました！わたし・・・果堅おねえさまの作る大根料理を習いたいです！」

そのためには！

大根をより良く知らなきゃいけないと思ったんです。

そのエミーの言葉に。

果堅の眼がきらん！と輝いた。（あ、地雷を踏んだね）

「そうよ！そうなの！！溢れんばかりの愛情を大根に注ぎ、なおかつ、その溢れる色気に胸を焦がすようにならなくちゃいけないのよ！！エミー！！大根の麗しさに頬を染め、熱い吐息を吐き出せてこそ、乙女！！大根こそ、我がアイドル！大根こそ、命！さ、エミー、一緒に！」

「「「まてええええええつ！！！！」」」

慌てて突っ込んだ、魔王と、魔軍双壁の三人組。

大根に負けてたまるかああ！！エミーは私の（俺の）（わらの）ものだー！！！！

しかし、きよんとする二人の少女に、どう突っ込んでいいのか思案する、魔王閣下だった。

「・・・王妃」

ヘンな事を大事なエミーに吹き込まないでくれ。・・・と、言い

たかった。

だが、だが……。

きらきらと見上げる瞳は勿忘草色。その魂の神々しさはさすが神と頷ける。

そして、いつにも増して眩い、翠の無垢な眼差し。……かわいい

い……。 (無論、顔面は1mmたりと動いてない)

魔王閣下は固まった。(おい)

それはもう脂汗がだらだらだ。

いらん事を言ったら、泣くかも知れない。

それどころか、この無垢な眼差しを曇らせる事になるのかも……
と思ったら。

……固まるしかなかった……。 (やーい、ヘタレー)

「あーあ……。俺。ちょっと行って、萩波、呼んで来るわ……」

「何、あの過保護、どうせそこで覗いておるわ!」

やれやれと瞳交わす二人。アルファレンの情けなさに助け舟を出す気になっただけ。

ふたり、頷きあつて息を吸い込んだ。

「……果堅妃が、大根とベットイン!!!!」

「果堅!!!! 私というものが在りながらっ!!!!」

……。

来たよ……。しかも……。

……。されたことあるん(だな)(じゃな)、萩波……。

(え。果堅の添い寝当番って、大根よねー?)

一瞬で現れた、神気溢れる美貌の君。凧国国王、萩波。

眼光鋭く果堅を見る。

見つめる先であわあわしている、少女。

それを一瞥し。

孤高の魔王閣下は、新たな称号を凧国国王に与えた。

「不憫な奴・・・」

その後。

どこからともなく取り出した、魔界随一の美酒を掲げたアルファ
ーレンと萩波が、黙って飲み始めた。

寡黙な二人に言葉はない。

次々とあけられる杯。

顔色も変わらず、飲み続ける二人。

そこに、天界随一の美酒、銘は「果堅」を抱えた明睡が駆けつけ
て。（他はお留守番）

アマレットイ、リアナージヤも混ざり、この五人で、夜がふけ、
魔界の赤い太陽が昇るまで。

・・・一晩中飲み明かした。

その間、果堅妃はエミーの隣で幸せな夜を迎えていた。・・・が。

浴びるように飲んでゐる風国王と、魔王閣下の姿は、その後、
長く魔界の幻覚と呼ばれたそうだ。

・・・がんばれ、不憫。

四度目の・・・。さくら書く(後書き)

・・・いつか、萩波の黒く重い執着が、天上界で実る事を祈って止まないさくらでした・・・。

果堅とチヒロが出会ったら・・・さくら書く

【果堅とチヒロが出会ったら。】

こんな、夢を見た。

一回見たら大根に頬摺りしたくなる夢だった。凄く愛を感じた。
・
・大根に。

青空の下、見渡す限りの緑の草原。・・・でも大根葉。
風に揺れるみどり。誘っているようだ。・・・でも大根葉。

きつとあのみずみずしい葉の根元には、白く輝く優美な肢体が埋
っている！と確信できた。・・・大根なだけに。
その魅力に抗えずにふらふらと近寄ったら・・・。

捕獲された。

「捕まえたー！・・・大根泥っ・・・あら？」

真ん丸い目を更に丸くして、青みがかった黒い髪、勿忘草色の瞳
の少女が、捕り物網を手に、硬直していた。

大根泥棒かと思ったのにーとか何とか呟きつつ、網もつ手をもじ
もじさせている。

「あ、えと。は・・・はじめまして・・・？」
・・・はもった。

いいのか、それで。と、チヒロはちょっとだけ自分に突っ込みたくなった。

網越しの邂逅・・・いいのか、本当に。・・・うん？

「へー。チヒロちゃんは、夢で迷子になったのかー」

少女の名前は果堅。天界十三世界のひとつ、炎水界の大国風国の出身なんだって。

自己紹介しつつ、現状確認。

「ここ見覚えあります！うん。夢で見たあの時は、光る人がいたんですよー」

今日は、光る人じゃなくて、果堅ちゃんだけど。

「へえ。光なら、高位の魂だね。もう天界行き間違いなし！」

ああ、そうだ狭間の世界だ。

「ここ、狭間の世界ですよ？前は、光っているだけでこんな見事な畑なんかなかった・・・」

その台詞に果堅ちゃんが、きらん！と目を輝かせた！

「・・・見事な畑って・・・見事な畑って言った？言ったわよね！？やはり、大根は万国共通の、友好野菜よね！意気投合もしやすい万能野菜のホープ！」

万能野菜は納得！

「あ、おでん美味しいですよー」

につこり笑って、夢にまで見たおでんを思い出す。ことこと煮込

んだ、魅惑のスープ。

ああ、食べたい・・・。

「じっくりたっぷり、含ませたおつゆが良いのよね！そそるわ！
・・・なんだか息が荒いよ、果堅ちゃん。頬が赤い。

それよりも、なんだろ、その、恋するオトメ的な、跪いて両手を
組んで祈る格好は？

なにに祈り捧げてるの？

大根？大根に祈りささげちゃうの？

あ、でも。祈りたい気持ちも分かるよ・・・。もうかれこれ二年
は大根食べてない。それどころか、激辛以外の胃に優しい食材も皆
無だし。

夢にまで見たおでん。

鰹だしに、魅惑の醤油。がんもに、さつま揚げに、竹輪にこんに
やく。玉子・・・そしてメインは分厚く切った、大根よ！

「・・・おでんに飽きたら（飽きないけどね！確信できる。泣き
ながら完食するよ、間違いなく！）家のお母さんは、じっくりおつ
ゆのしみこんだ大根を、ごま油で焼くんですよー。もう、良い色が
つくまで！こうばしい香りと、しみこんだおつゆが、じわあ〜って
良い味出すんです・・・」

大根ステーキ。おかあさあん。

いかん。よだれが出てきた。

こそつと、口元を拭っていたら、隣で果堅ちゃんも口元を拭って
いた。

えへへって笑いあった。

夢での逢瀬。繰り返す。出会う日もあれば出会わない日もあった。

私の日常と果堅ちゃんの日常は違う世界。なのに、結構、気があった。

この世界には大根がないんだよって言ったら、この世の終わりとばかりに嘆かれた。慰めるのに苦労した。

現実世界に持っていけるか分からないよ、って断ったけど、果堅ちゃんが私に握らせてくれたのは、大根の種。

「私の神生かけて改良に改良を重ねた、どんな僻地でも、荒地でも、必ず芽が出る、優良品種！魅惑の肢体は白く輝かんばかりのナイスバディ！一口口に含めば、至高の世界へ誘ってくれる事、請け合い！夢に見るその魅惑のボディに、いつしか子宮が疼き、熱く蕩けるようになるわよ！！！」

・・・果堅ちゃん、いくらわたしでも大根に子宮は疼かないよ・・・
・食欲は湧くけど。

そんな、ある日の夢から覚めて、掌に握りしめてた種に気付いて、驚いた。

土の国の技術さんを総動員して、必ず芽を出させて見せる、必ず収穫してみせる、と意気込んで作った、土の国の大根畑。

畳一畳分の小さな畑。

植えた種は6粒。

芽が出て、嬉しさの余り泣き出した。

「結婚してるの」

果堅が、話してくれたことは。

戦災孤児だった果堅を保護してくれた人は、とてもとても優秀で、周りにいる人たちも有能で。

平凡（かわいいいよ？）な自分が彼らの側に、なぜいるのか、と陰口叩かれた事。

保護してくれた人が同情で（???）妻にしてくれたこと。強く美しく有能なその人は、功績を認められて一国の王になった事。

「・・・私を娶っていたから、そのまま私が王妃になってしまったの」

果堅は悲しそうだった。

同情で妻になんかしないよ？大丈夫、その人果堅のこと好きだよ！って言うたら。

「・・・だつてもう、寵妃いるし。私より綺麗で可愛くて守つてあげたいからって、友達もみんな」

・・・寵妃のところへ行っちゃった。

軽い言葉で、重い事をさりげなく言い切るなんて、凄すぎるよ、果堅・・・！

そのあとはどうにかして元気付けようと頑張ったんだけど、あんまりうまくいかなかった。

大根に縋りついて頬擦りしている果堅を、複雑な思いで見ている。大根は白い。潔いくらいに白い。

果堅のだんなさまは、雪のように真っ白な綺麗な髪をしているんだって。

「雪」と言おうか「大根」と言おうか、迷ってたよね？果堅の大好きな大根話は、ものすごく濃くて、深い愛情を覚えるの。果堅の

話を聞けば聞くほど。

・・・「萩波」と言う人を思い浮かべる。

果堅。萩波さんが好きなんだねえ・・・。

・・・つかさ。好きな人を大根に置き換えるその精神力。どうかしようよ。

頬擦りはさー、是非、本人にしたほうが良いと思うよ・・・。

でもね。話を聞いてたら、だんだん怪しい話になってきた。

「初めて？は・・・初めて！？」

おろおろした。だってさ、は・・・初めてなのに、私の始めては、その・・・。

「さ・・・三人に美味しく頂かれましたあっ！」

ごめんなさいーって頭下げる。節操なしな身体がいけないの。断れなかったと言うか・・・と、焦って言い訳していたら。凄く可哀想な目で見られた。

「・・・初めてで三人なんて、壊れなかった？大怪我したでしょ？・・・私だって十二歳なのにさ、あんな大きくて硬いもの捻じ込まれたんだもんね。痛くて、裂けたもの・・・」

「え・・・。さ・・・裂け・・・いや待て、わたし！・・・じゅっ・・・十二いいっ！！十二歳だったの？！！！」

「うん。あんな異物突っ込まれて！しかも、痛くて痛くて、止めて言っているのに、止めてくれなくて。しかも、しかも・・・出し入れするんだよ！信じられない！」

握りこぶしも勇ましく、言い募るは、最悪の・・・初夜。

・・・。。

「……それは、ひどい。スプラッタービーなんか、目じやないね。あの痛みを、十二歳で？
ひどすぎる。
ってか。」

十二歳に捻じ込むなんて、どこの鬼畜だああああっ！！！！！！

ああ、なんだか。むぎゅっと果堅を抱きしめた。
苦労したんだね。

そんなロリコンで、ロリコンで、ロリコンで、少女趣味の変態に
言い寄られて！処女まで奪われて！

なんか、腹が立ってきた。
腹が立ってきたぞおおっ！！！！

決めた。

「……しばく……」

「は？」

「しばいてくる！ちょっと風国行って、その萩波って人、しばいてくるっ！！！！」

「ちいちゃ……」

がばつと立ち上がって、はたと気付いた。

「あ。でも、どうやってら風国行けるの？」

神様の国なんだもんね……。凡人にや、無理でしょ……。
よし。では、改めて。

「今度連れて来て！一回しばき倒すからっ！」

目を丸くしている果堅に無理やり約束させて、夢が覚めたら、今度は。

腕を捲り上げた。いよーしっ！

せつせと、紙を折るチヒロをナマヌルイ目で見つめたオウランが、よせば良いのに、声をかけた。

「・・・あー・・・。チヒロ。何、作っているんだ？」

「ハリセン！」

簡潔に答えたチヒロの前に、どう受ければ良いのか苦悶するオウランの姿があったという・・・。

・・・・・・思考停止中・・・・・・

なんで、ハリセンなんだ。とか。

誰に、使ったつもりなんだ。とか。

いろんな考えがぐるぐるしたオウランだった

愛と正義のヒーロー　：さくら書く（前書き）

お久しぶりです、さてさて、大雪様の許可も頂きましたのでお送りいたします。

オモテ読者様には、なんじゃこれ、誰？ってかんじでしょうか。ただ今裏で萌え中の、辣腕執事×天然農ギャルお嬢様です。えちいなことに至るまでは結構普通の二人なので、オモテでも良いでしょう、と。

そして、「愛と正義のヒーロー、大根・ウーマン！」・・・このせりふは是非とも、某コマーシャル、大　うーまんのノリとポーズで、脳内製作お願いいたします。

愛と正義のヒーロー　：さくら書く

・・・ある日、柗は積もりに積もっていた言葉をぶつける事にした。

彼の魅惑のお嬢様に。

「お嬢様・・・今日という今日は白黒つけて頂きます」
「なあに？」

雪那の華のような笑顔に、一瞬、柗原　亮がひるんだ。
しかしだ！

柗は意を決して指を指した。びしっと。

「あれです！　あれは一体なんですか！」

「大根の妖精さんです」
きつぱりと雪那は言い切った。そりやもう完膚無きほどにきつぱりと。

雪那の畑では、緑のマントを羽織った、青みがかった黒髪と勿忘草色の瞳の少女が、ちょこまか走り回っていた。

「発芽の時期になるとどこからとも無くやって来て、愛と正義と肥料を撒いて行ってくれるの。なんて農家思いの妖精さん・・・」
頬に手を当てうつとりと畑を眺める雪那嬢。
ダメだ。

お嬢様ダメだ。

どっか遠い所に行ってしまった、彼の愛しのお嬢様を取り戻すべく、柗は雪那を抱きしめようとした。

「あ。雪那ちゃん！」
「果堅ちゃん、こんにちはー」

榊は盛大にこけた。

美形のずっこけた姿はなかなか見られない代物だ。

それが、栄華を誇る榊原の影の統帥と呼ばれる亮なら、なおの事。

「・・・お嬢様、お知り合いなので・・・？」

苦虫噛んでもここまで苦い顔はすまい。

「果堅ちゃんって言う名前なの。でもあの格好をしているときは、愛と正義の大根ウーマンで、大根の妖精さんなの」

「大根・・・うーまん・・・」

ねー、っとお互いに小首を傾げつつ確認しあう二人の少女。榊は気が遠くなりそうだった。

少し丈の短めの白いワンピースドレスに緑の太目のベルトを付け、むき出しの太腿を緑のロングブーツに包み込んだ小柄な少女。艶やかな髪を背中に流し、煌く瞳は生命に溢れている。

小さい顔、小さい手足、なのに、大地にドンと根を張るたくましさ！

（なるほど、トモダチか）

榊にとって未来の嫁（決定）である雪那の友人関係は把握しておいて損は無い。

だから、にこやかに裏の無い笑顔を心がけ、子供に接してみたものの・・・。

「・・・雪那ちゃん、困った事されてない？」

榊の笑顔をじーっと見た後に、果堅と呼ばれた少女は雪那に近寄り、そう聞いたのだ。

（・・・ほう。人の表ではなく裏をも見れるという逸材か）

十六になったばかりの雪那を案じて助言を買って出た少女に、榊は目を見張った。

人は見かけによらないと言うが、初対面の笑顔をうさんくさいものと感じられたのは雪那に続き、二人目だ。

この子供、侮れない。

侮れないのだが・・・なんだろう、この脱力感を呼ぶその格好は・・・。

その格好は如何なものかと思うのだ。

胸の大きな「大根」の文字とか、さりげなく翻るマントに、大根マークが刺繍されてる事とか。

・・・ってか、誰が縫ったんだ。いや、間違いなくこの子を作ったんだろうけど、完成度、異様に高くないか・・・？

某パンマンでこの衣装使ったら、しっくりなじむ事請け合い。某パンマンですら霞むくらいの強烈さだ。

それを見たよい子の皆さんが、大うけする事も請合っちゃおう。それほどの力作。

すばらしい衣装だった。

「お嬢様を心配してくださってありがとうございます。ですが、ご心配なきよう。この榊、命に代えてもお嬢様をお守りいたしますから」

この娘は、お嬢様のお友達！

ならば最上級の礼をもつて接するのが執事の役目！

榊原の亮が、誠心誠意を込めて接待して見せます！たとえば、某パンマンの着ぐるみ着てたって、魅惑の笑顔で勤めましょう！

慎ましかな笑顔を心がけ、微笑んだ男をじっと見ていた少女は「・・・ん。まあ、雪那ちゃんが良いなら良いか・・・」

そう言つてため息をついた。

達観したような物の見方は老成した人のもの。

榊原 亮は眉を寄せた。

「果堅さま、あなたは一体・・・？」

底が見えない少女だった。

覗き込んでも深すぎて底がまったく見えない。かと言って、深遠の淵に立つような危うさも無く、何処か風のように。

温かい風のような少女だった。

他者をいたわる風を持つ、稀有な少女。

だが。

榊の問いかけに雪那が言い切った。

「大根ウーマンで、大根の妖精さんよね？」

そして渦中の果堅も。

「愛と正義の味方、大根・ウーマン！（某大　ウーマンのポーズ望む）・・・ちなみに大根は永遠のヒーローで、創世記の神様よ！

大根があつたから、この世界は存在するの！」

「・・・いや、そんな話はありません」

榊は痛む頭を我慢して呟いたが、誰も聞いてくれない。

そしてそして、・・・榊は聞き捨てならない言葉を耳にする。

「なんてこと！私の夫みたいに、あなたも大根のすばらしいパワーを信じないというのね！」

・・・。。。。

何と言った。この子供。

・・・今、何と言った？

「・・・おっと・・・？　ってちよつと待ったあつっ！！！！・・・いや、いや、聞き間違いだろう、俺！　はは、は、落ち着け俺！」

榊原の亮のあせた顔は早々拝めるもんじゃない。魔界の某魔王閣下並みのレア物だ。

だからだら流れる汗。

驚愕の顔のまま渦中の大根ウーマンを見つめる榊。・・・ヘンな

図だ。

「榊、果堅ちゃんは結婚してますよ？」

そんな榊の心も知らず、あっさりと雪那が呟いた衝撃の事実に、再度、榊は固まった。

「はい。結婚して、浮気されて、逃げ回ってましたけど、夫に捕まって監禁されてました。ちなみに助けてくれたのは大根マンです！」

もつと悲惨な境遇をそう言い切った果堅は強かった。

「……………助けてくれたはずの大根マンは？」

「最近あつてません！」

（……………夫に肅清されたな！）

端的な言葉の裏に隠された真実を、覗いてしまった榊だった。

頭抱えて唸る。

「……………助けてくれた大根マンさんが帰ってくるまで、この私が大根ウーマンとして、困ってる農家さんを助けてあげようかなって・

・

「果堅ちゃん！」

「雪那ちゃん！」

少女二人が固い抱擁を酌み交わしている間、榊原の亮さんは、遠い目で何処か遠くを見つめていた。

果堅と雪那が某パンマンのテーマソングを歌いながら畑を整えていく。その側で、なまあたたかい目で眺める榊の姿があったとか。残された榊の前を風が一つ、巻き起こり、小柄な少女の後を追っていく。

風に乗って響いた声は。

……………果堅。

……………果堅。見つけたら今度こそ逃がさない。

との声に、亮が反応した。

きつと今も何処かで少女の夫が、少女を探しているのだろう。

黒髪を右手でざつとかきあげると、榊原 亮は空中に毒づいた。

「……………あほなこと言ってる前に、きりきり仕事して迎えに来い！そうでなかったら、そのうち恋人は大根マンとか言い出すぞ！」

「あら、榊、果堅の口癖よく知ってますね？」

「・・・ま、さか、本当に大根が恋人・・・？」

魅惑の愛しいお嬢様の一言に、秀麗な榊が固まった。

がちょーんっで、よろよろってな感じた。（どんなだ）

「はい。果堅ちゃんはその言うてますけど？寝るときも一緒なんですって」

榊原 亮のお嬢様は可愛らしく麗しく、美しい。

その笑顔を見て、はじめて頭が痛くなつた榊原の亮さんだった。

・・・とりあえず、家のお嬢様は野菜と同衾する趣味が無くてよかった、と榊が思った事は内緒である。

おしまい！

愛と正義のひーろー : さくら書く(後書き)

あー。楽しかった。さて許可を下さった大雪様に感謝いたします。
また悪い虫が疼きましたら、お送りいたします・・・。

・・・さ、変態の本編書かなきゃー。

べ、別に、魔王様が恵美の想像上の魔王像、聞かされて落ち込んで
いるわけじゃないんだ！

恵美が望むなら、いめちえんしょうかなんて考えてないからあ！

閣下あああつ！！！！

脳内で蹲ってのの字描くのやめてよおおおお。

愛と正義のヒーロー 2 ……さくら書く

……人生、ノリと勢いって大事だと思うのよ。うん。

「愛と正義の大根！ うーまん！」

華麗に滑るように例の決めポーズを取った、ある意味モロばれな、自称正義の味方。

そのつややかな髪の流れと、にっこり笑顔の白い歯の煌き。

マスクを脱ぎさり片手に抱えると、すちゃっとマイクを手にとった。

それを、遠巻きに見ている一般人。

中でも。

感極まってふるふるしている美貌の少女。七宮の雪那。……腕を組んで祈りのポーズで見るときではないような気がする。

大きな黒い瞳をきらっきらさせて見つめる、橘の恵美。……その顔には大きく書かれた尊敬の文字が見えた気がする。帰って来い。そして、月色の瞳に、やってみたい、とでか書きさせた、大月の千尋の姿があった。……いいのか、それで。

そんな三人のそばで、どう突っ込もうかと頭を抱える、理性の人。橘の理恵の姿。

「……と、言うわけで、大根の大根における大根のための正義の味方を、募集しまーす！」

何が「……と、言うわけ」なのか分からんが、大根ウーマンもとい、果堅が宣言した。

マイクを持つ手に力がこもっているのがよく分かった。

・・・てか、小指が立ってるよ、果堅・・・。

「っっはいつ！っっ」

すかさず三人の少女が拳手をした。なんか、アレだ。ノリは限定品残り一個だ、どうだい嬢ちゃんってな感じだ。

「ちょ、まってえええっ！！何、大根のための正義の味方って！」

八百屋買収か？ はたまた農家攻略か？

それとも、おでん？ おでん作るのか？ そもそも大根に正義であるのか！？

理恵がすかさず待ったをかけるが、誰も聞いちゃいねえ。

「果堅ちゃん、私ね、お米が大好きなの！ 大根のふくよかな味わいを抱きしめられるのはお米しかないわ！ ご飯ぶらばーなのよ、ご飯があれば生きていける！」

「じゃ、ライスパンマンね」

「ーっーそっち！？」

いいの？ 本当に好いの、雪那！ しかもなんか色がぶってるんですけど！ ・・・と、理恵がすかさず突っ込んだ。・・・しかし、雪那のいい笑顔に撃沈した。

「あ、じゃあ、私は何が良いかな？ 大根をがっちり支えて良い味を引き出せる食材って・・・」

恵美が小首をかしげて考え込む。・・・戻って来い！ 違う世界に引き込まれちゃいけない！と、理恵が恵美を確保するより前に。

「おでんって、意外とトマト合うのよね・・・」

ぼつりと千尋が言った。湯剥きしたトマトを出汁で煮ると、おいしいのだ！

「じゃ、トマトレッド、ちいちゃんね！」

さわやかな笑顔で果堅が言い切った。

「わあい！」

千尋がいい笑顔で飛び上がる。

「――某パンマンまるで関係なしっ！」

飛び上がって喜ぶ千尋に、すかさず突っ込む理恵。しかし誰も聞いていないのは間違いなし。

「はい！ 私は、卵はくだんが大好きです！」

そこで恵美がびしっと手を上げて答えた。

とてもいい生徒の見本だ。手を上げる角度もすばらしい。

突っ込もうとした理恵だったが・・・。

「・・・つるりとした肌の麗しさ。中身の濃厚さ加減、だしを含んで蕩けるあたり、恵美のためにある食材よねっ！」

すかさず恵美のフォローに向かってしまう馬鹿シスコンだった。

「理恵ちゃんも卵はくだん大好きだもんね！」

さわやかな笑顔を向ける恵美に、理恵は骨抜き状態で微笑んだ。

「「突っ込みはないのっ！？」」

そんな理恵に、突っ込んでみた果堅、雪那、千尋だった。・・・

が。

理恵はいい笑顔で返すばかり。妹良ければすべて良いのだろう・・・。

「えー・・・と・・・じゃあ、恵美はたまごパンマンで」

「わあ！」

「三者三様結局白い・・・」

どこか疲れたように呟いた理恵、影が薄い。そして、果堅が止めを刺した。

「・・・と、言うわけで、理恵ちゃんは今こんぶブラックで」

なぜ、昆布ー！ー！ー！

「では、正義の味方会議を始めます」

議長の席に座った果堅が、伊達めがねをくいと、指で持ち上げた。結構似合う……。

「なぜめがね……。しかもなんで、誰も突っ込まないの」

一人さびしく理恵が突っ込むも、わくわくしているのを隠しきれない雪那、恵美、千尋。

「おでんの主役は？」

「大根！」「たまご！」「がんも！」「こんにゃくは外せない」「締めのご飯」

「……そもそも、おでんに締めのご飯は無いわ、雪那……。ふっとシニカルに笑った果堅が、やれやれとばかりに首を振った。

「おでんイズミラクル！ おでんの具材って大根を食べるための出汁でしかないと思わなくて？ 大根を称えるための群衆のようなモノよ！」

如何に大根に具材それぞれの味を染み込ませるかで、味が決まるといつても過言ではないわ！

「大根、ああ、大根。煮てよし、焼いてよし、生もいける、しかも、おろしたら最高なんて……。魅惑の食材よね……。世界中の人々に大根のあふれる愛をもたらすには、どうしたらいいかしら？」

……。議題ってそれかよ。

「やっぱり、魅惑のブロマイド？ ああ、DVDって手があるわね。あふれる色気を振りまくアイドル（大根）の、あんなポーズや

こんなポーズ。ああ、いいわ。魅惑の腰つき、滑らかな足のライン・
・・！」

・・・果堅が目くるめく大根の世界に行ってしまったので、残された四人で大根談義を始めた。

「今年の作付け大根の苗を増やしたの。果堅ちゃんのおかげで良い苗が手に入ったのよねー」

「雪那が手がけると、すばらしく美味しくなるものねー」

「私も手伝ったよ」

「わたしもー」

恵美と千尋がにこやかに笑う。

それを幸せそうに見つめる理恵だが・・・なんか眼がやばい。美少女観察が大好きなのが丸分かり。

「あのね、今バイトに行ってる幼稚園の子供たちに食育かねて寸劇見せてあげたいんだけど」

恵美がそう切り出した。

「朝、パン一枚とかおにぎりだけって子供が結構いるのよね・・・」

その言葉に三人がふんふんと頷きあった。

「朝って忙しいからねー・・・。ご飯作るお母さんも大変なのよね」

「そうだね。お母さんの代わりに何品か作ろうと思ってても大変で」

「しかも毎朝だもん」

「その点おでんは万能っっ！」

「・・・果堅、ちゃん・・・」

戻ってきたのか！

「前日ことごと煮込んで翌朝のおでん！ お出汁の良くしみた大根！ がんも！ こんにやく！ 魅惑のたまご！ はんぺんは白と黒、諸説あるけど私は黒が良い！ 朝ごはんのお供に！」

「は・・・はんぺんは白だよ！」

すかさず千尋が突っ込んだ。が。

「黒はんぺん！ ここは譲れない！ そして牛筋に、鰹節！」

果堅が反論する。

小魚ミンチの黒いはんぺんは庶民の味方なの！

しかも良い出汁が出る上に、美容にも頭脳にも良いと、良いところ尽くめのよ！

「うう、反論できなあい・・・」

プルプルする千尋の肩をそっと抱き、理恵は呟いた。

「・・・大根絡みで果堅に張り合っちゃダメだよ、ちいちゃん・

」

「リーえーちゃああん」

がしつと抱き合う二人。

えぐえぐしている千尋を慰めつつ、理恵の頭にはお花が咲いていた。美少女の涙！ 悶える！

抱きしめたこの体、しなやかさがたまらん！・・・でも、やはり、恵美一番。

恵美の抱き心地の良さったら、言葉に言い表せないくらいなのよ
ー！

柔らかさといい、弾力と言い、くすぐれば華がほころぶように身悶えて・・・ああ。

と、どっか違う世界に片足入り込んだ理恵の耳に、果堅の悲鳴が！

「果堅！？」

渦中の果堅は、黒のボンテージの美女にふん縛られていた・・・。
その右手に拘束の鞭。締め上げ絶妙。

高笑いする美女。その姿はまさしく女王様！

「あ、あれ・・・明燐さん？」

清楚な中に禁断の華の匂いを隠し持つ、絶世の美女。・・・でも、
理恵の瞳には恵美の次。

その美女の傍らで、芋虫状態になった果堅を幸せそうに見つめる、
清楚な美貌の少女。指をわきわきさせながら、迫る相手は・・・果
堅。

「「「「え」「」「」」」」

あの果堅が引いていた。

「ナキ顔も、なきゴエモ、ヤッパリソソル・・・」

じゅる。

気のせいではなかったら、確かによだれをすすり上げる音を耳に
した。気のせいで無かったら！！！激しく気のせいだと思いたいん
だ、誰か気のせいだって言ってええっ！！！！

「・・・今のこの子・・・？」

なぜに獲物を品定めするまなざしで、果堅を見て、よだれをたら
すのだ！ 獲物？獲物なの？

ものすごく大好物を前にした、肉食獣の魂の煌きに感じるのは気
のせいだよね！

で、で、でも吐息が限りなくピンクだ。

まなざしも、指先も、なめずる舌のほのかな赤さも。

悶える腰つきは、どこか違う対象物件おっしゅもに施行すべき、最終兵器だ

ろう！ 年端も行かない少女に向けるべきまなざしではない！

とんでもなく、淫靡だった。

それはまさしく、淫華。

滴るような淫猥の微笑みを向け、玉英は微笑んだ。

「オニイサマダケ、ズルイ……。ワタシモ、かじゅト、イイコトシタイ」

「エミいいいっ！！！！聞いちゃダメエエっ！！！！」

理恵が慌てて愛しい妹の耳をふさいだ。

「あ、じゃあ……。真っ白でウサギさんみたいに可愛いから、こんなにやくホワイトで」

「ホヘ？」

雪那……。恐ろしい子！

理恵が固まり、千尋が大きなはてなマークを製造し、恵美が理恵に確保された中。

ニコニコ笑う雪那と、ぐるぐる巻きの果堅を抱きしめて微笑む玉英の姿があつた。

????????????

……。えーと……。

大雪さん・・・果堅が絡むと、どこまでも白っぽい美少女戦隊になるようだよ・・・。

次回！

美少女戦隊に忍び寄る、黒い罠！

萩波は愛しの果堅を奪えるのか！ 閣下は恵美を理恵から奪えるのか！ ポケをかます美少女達に、正論は効かないぞ！

果堅奪還を目指す、鬼畜王に対抗するポケレンジャーの活躍や如何に！

・・・いや、ない。ない。

愛と正義のひーろー！ 3・・・さくら書く

「愛と正義のひーろー！ 大根！うーまん！」

白いワンピースに身を包んだ少女が、緑のロングブーツに包まれた足を大の字に開き、地を踏みしめると、流れるようにポーズを取った。

「もしもし、果堅さん。なぜにポーズを決めるのですか・・・？」

「オヤクソク！」

「はあ、さようで・・・」

理恵が突っ込みを入れるも、いい笑顔で乗り切った果堅が、さわやかスマイルを魅せた。

きらり輝く、萩波にだけ渾身の一撃を食らわせる魅惑のスレンダーボディ。まっ平らな胸を飾るのは、職人技としか思えない大根のマーク。細い腕と細い足を包むのは、繊細なできればえのドレススーツだった。

・・・それを傍で見上げる真っ白一色、けれども内面真っ黒のあの意味商標に偽りありの玉英さん。

泣いて逃げる果堅を捕獲して作らせた（作ると約束するまで責めあげたらしい）、「果堅お手製の愛する玉英の体にぴったり合った魅惑の愛情スーツ」（こう言わないと玉英スネル）に身を包んでいる。

「このテザワリ、このハウセイ、かじゅノアイジヨウガコモツテル・・・」

今日もよだれを垂らしつつ、見上げる先は・・・果堅。

「あのミジユクなカラダをイカニシテかいはつスルカガわたしのシメイ」

囁く声は悲しいかな、側にいた理恵にしか届かなかった。・・・果堅に聞こえなかったのはこれ幸い！

「使命違う！」

すかさず突っ込むも、玉英さんたら、繊細な白魚のような手をわきわきさせて、淫靡な想像を・・・想像だからね！ かき立てる。理恵は思わず腰をくねらせた。

「オニサマのミジクモノ。ワタシナラかじゅヲ気持ちヨクデキル。デモ、ナカセタクナルきもち、ワカル・・・」

その指、果堅の何処に突っ込むおつもりですか、その舌先、何処に落とすつもりですか、玉英さん・・・。

その質問は投げかける前に、玉英の淫靡な微笑の前に消えうせた。

「かじゅナイタカオイチバン」

「この子、なんかちがうう！」

理恵は玉英には逆らわないようにしようと、心に誓った。

「愛と正義のひーろー！ トマトレッドちひろ！」

真っ赤なワンピースに身を包んだ美少女が、果堅をまねしてポーズを決めた。流れるような一連の動き。きつとタベも夜なべで練習していたんだろう・・・。

「オウランに頼んでビデオだってまわしてポーズのチェックしたのよ」

その後オウランに、こんなポーズが良いとか、あんなポーズがいかいとか言われて、気が付いたら、おいしく頂かれてたけど。いや、うによごによ。

真っ赤に染まった可愛い千尋を、理恵は見下ろした。

「ちいちゃん・・・もどってこーい」

しかもオウラン君ったら、油断も隙も無いね！
何されたのか分かるわ。ちいちゃん。

その、首筋の赤い点々で・・・みんな大人の階段上ってるのね・・・。

「愛と正義のひーろー！ らいすばんまん！ え、と。名前続け

の方が良いかしら？ 榊」

一生懸命みんなを真似するも、いかんせん、勢いが足りない。優雅なのだが、切れが無い。

しかも少し動いたびに、スカートの裾が翻って・・・雪那は困ってしまうのだ。

「雪那、それ裾短すぎる。誰の趣味？」

などと言わずもかな。な事を呟いた理恵だった。

犯人はこいつだ。間違いなく。

「お嬢様、そのスレンダーながらも、溢れる色気！ この榊、今ほどお側にお使いしていて本望だと思ったことはございません！」

・・・榊さん。

麗しの美貌がかすむほど、興奮しまくってますよ。なんか目線がやばいです！

「ゆ・・・雪那ー！！！逃げてーっ！ 超、逃げてーっ！」

捕まったらひん剥かれて、嘗め回されそうな勢いだ。

「ああ、いけない。お嬢様、わたくしとしたことが、小道具のひとつを忘れてしまいました・・・ささ、ご一緒に取りに参りましょう？」

小道具？ 某パンマンに小道具なんてあったっけ？

某パンマン号なんて、小道具じゃなくて大道具よね？

「赤い縄が無いといけませんよ。丁寧にかわいらしく拘束して差し上げますから・・・」

「ひいひいっ！！！！雪那あああっ！逃げてー！」

なんか違う小道具だったよ！ ってかそれ小道具じゃないから！絶対なんか違うものの小道具だからあ！

雪那の腰をさり気ない手つきで抱き寄せると、エスコートしながら館へ向かう榊の後姿に、理恵が待ったをかけた。

が・・・。

につこり微笑んだ榊の微笑みの前に、あえなく石化してしまい、

阻止が適わなかった。雪那と言えば、柵に魅入られたように、柵の眼差しに囚われている。だめでありや。

多分十八禁の世界に突入するのは間違いないようだ。

と、そこへ。

「理恵ちゃん、理恵ちゃん、似合う？」

癒やしの存在、恵美が更衣室から飛び出してきて、くるりと一回ターンした。

「ごっふうっ!!」

理恵はクリティカルヒットでダメージを食らった。

クリームイエローの淡いワンピースドレス。裾はAラインで自然な広がり。ロングブーツもクリームイエロー。太ももの真珠の艶めきが垣間見える、絶対領域。背中に流したマントの色も淡いクリームイエロー・・・限りなく白に近い配色だ。

そしてつややかな長い黒髪は、頭の両脇でツインテール・・・ご丁寧にカール済み。誰がこれを仕掛けたんだ！理恵はプルプルしながら、恵美の姿を凝視した。眼を離したらもつたいたい！網膜に焼き付けて、脳みその皺一本一本にまで刻み付けてやる！

仕掛けた人に一言言ってやりたい！

「――あんだ、神だ！」

空に向かって一声。

「理恵ちゃん？」

恵美が小首をかしげて理恵を見上げた。

その小動物の動き！

「た・・・たまん・・・」

理恵は本日何回目かの恵美の仕草で絶頂を味わった。

そして。

感激にプルプルしている恵美と果堅（引っ付いている玉英は無視の方向で）と、チヒロと、黒いつややかな皮製のワンピーススーツ

に身をつつんだ理恵。

彼女達の前にはきわどいボンデージスーツに身をつつんだ明燐の姿が。

「ご丁寧に皮のバラ鞭持参。・・・何も言うまい。

「だめだめ！ 切れがないわ！ そこはもつと、小悪魔的に！」

「某パンマンモノに、小悪魔的いるの！？」

涙目の理恵に、恵美と果堅が頷いた。真っ白に燃え尽きた風情の理恵の姿が哀れた。

そして、軍隊の鬼を垣間見せる彼女、明燐。

「そこはこう！」

腰を回してシナを作り、下僕を見下すように視線は上から！ 理恵殿違う！ チヒロ殿、もつと魅惑的に！ 胸は張り、でも張り出しすぎず、絶妙のラインを心がける！ 果堅・・・様は、玉英さまの言うとおりに！ 「ふぎやあああつ！」

そして・・・

「「右足を腰から差出し、魅惑的に微笑む！」」

恵美と明燐の声が重なった。

「そうそう、恵美殿、よくご存知ですね！」

華のように明燐が微笑んだ。それにはにこんだ微笑を向けて恵美が笑う。

「ええ。むかし、誰かにそう教わったような・・・誰だったかな
）・・・」

霧の向こうに隠された何かを、思うような眼差しで、恵美は遠くを見た。

「魅惑の太ももで男を撲滅できるようになるまで、特訓しますからね！ さ、理恵殿、もう一回！」

ぱしんつと鞭が走った。

胸をあえがせ、いい笑顔の明燐が、仄かに染まった顔を上げた。

ものすごく淫靡だ。ベッドの上なら似つかわしい表情なのだが。
「良く出来ましてよ！ 紛れもないS性を持った女王様の出来上がりだわ！」

「女王さまちがいますうつ！！！！」
理恵の涙声が木霊した。

「えーと、明燐さん、女王様製造じゃなくて、私達の目指すところは、某パンマン。愛と正義のヒーローなんですが・・・」

恵美が至極まっとうな言葉を口にした。

その言葉の意味するところを理解した明燐は、引きつった笑顔を恵美に見せると。

「大差ありませんわ！」

・・・開き直った・・・。

「・・・ヒーローモノニハ、アクヤクがヒツヨウヨね・・・めいりん。オニイサマニレンラクヲ」

その眩きを、玉英の腕の中で喘いで（！？）いた果堅が拾った。

慌てて脱兎のごとく駆け出す、半裸の果堅を、明燐の鞭が再度拘束する。

「いやーああああ、萩波こわいいいいっ！」

「うふ。ウフフフ。セイギノヒーロー、かじゅヲタスケテ、カンシャシテモライマシヨ」

カンシャのお礼は、ベットで返してくれればいいから。ね？ 果堅・・・。

果堅の明日はどっちだ！

あ、でもこのままだと、美少女戦隊バーサス王様・魔王様って言うより、萩波と玉英の一騎打ちのような気が……。します……。ああ、今日もアルファレンは出れなかった……。間違いない。玉英最強。兄ちゃんががんばれー。

愛と正義のひーろー！ 4・・・さくら書く

ある日、凧国の王城に小包が届いた。

「確かに明燐の筆跡です」

宰相明睡が請け負ったその小包、重くはない。さつそく宰相が箱を開けて中を確かめた。

「・・・玉英さまからの手紙同封されてますよ、王」

開いて一番最初に目に付いたのは、内包された手紙。

血文字のように真つ赤な墨で赤々と書かれたそれ。

「・・・不幸の手紙・・・？」

いやいや、まさか。

ぺらりと開き、ざつと眼を通し、ふつと笑った萩波はおもむろにぐしゃつと手紙を握りつぶした。

「しゅっ萩波？」

「・・・ふふふ。不幸の手紙並みに不吉な手紙でしたよ。おーのーれー、玉英！」

果堅を見つけたなら連絡よこせば良いものを！

わたしの果堅「で」遊んでいるなんて・・・！

「明睡。出立の準備を！ 果堅を迎えにいきますよ！」

・・・幸い、うるさい奴らは黙らせたから（肅清）、咎め立てする勇気のある奴はいないでしょう。

さあ。

「王妃を迎えに行きますか」

萩波・・・につこり笑顔がとんでもなく真つ黒い何かに見えて仕方がないよ！

「しかし・・・なんだ、この同封された服・・・」

黒い滑らかな生地で仕立てられた服は、手触りといい、縫製とい

い、職人技とうなることの出来る代物だった。

「ん？ 萩波、ここに・・・」

明睡が何かに気づき、布地に顔を寄せた。

下手な女よりよほど麗しい顔が小さく歪む。

黒地に黒で刺繍された、模様と見まがうすばらしい刺繍。だが、その瞳は、模様と見せかけて描きこまれた、間違いようもない単語を読み取っていた。

間違ってるはずはない。

はずはないのだが、良いのかこれ、仮にも大国の王に向かってこの単語・・・。

明睡は見えないふりをしようか、悩んだ。

そして萩波と言えば。

同封されていた手紙を、しゅしゅ読み進むうちに、この黒服は果堅が手縫いで仕上げたものと知ったのだ。

「果堅・・・！」

感激に染まった艶麗な顔。花開いた大輪の華より尚麗しいその風貌に、慣れているはずの明睡でさえ、道を誤りそうになる。

「明睡。この衣装、果堅が、わたしのために、夜通し一針一針縫ってくれたものだそうですよ・・・」

「・・・それは・・・（怨念込めてないよな？果堅！）」

「ぜひこれを着て某所へ来て欲しいと・・・デートですよね！」

明睡、これは紛れもなくデートのお誘いですよね！

紅潮した頬、どんな男も道を誤るだろう、その色気は悲しいかな、果堅にだけ、効き目が無い。

「・・・忘れてないだろうけど、そこには玉英さまもいるんでは・・・」

「ああ、果堅・・・」

うつとりと衣装に顔をうずめて微笑む姿に、華が恥じらうように、そっと閉じた。

そんでもってその当日。

「・・・着るのか、それ本当に着るのか！」

よく見る。目えかつぽじってよく見ろっ！

「その刺繍「鬼畜」って描いてあるんだぞ！」

流れるようなすばらしい流線型の刺繍で、ものすごい完成度だ！
ところどころ涙のしみらしきものが目に入る。嫌がる果堅に、玉
英が無理やり刺繍させたに違いない・・・と思いたい。

もしかして、よぎる過去に泣いていたのかもしれないが。

ってか、それ着たお前を見ると、一国の王の威厳が・・・。

「決め台詞は自分で考えろ、ですか。では・・・今夜は寝かせない？ ふっ、いつものことですね。・・・では・・・」

「・・・とりあえず、全力で逃げろ、果堅！」

明睡が空に向かって叫んだ。

「にいさま、これ・・・」

そつと頬を染めた恵美が、恥ずかしげに瞳をそらしながら、布を
差し出した。

滑らかな深い翠の衣装だ。

所々にあしらわれた刺繍は金糸で、派手な色合いの衣装だったが、
なるほどと唸らせる意匠のものだった。

「・・・恵美？」

「あの、これを着て、あの一緒に・・・」

「・・・これを？」

「えと、にいさまとお揃いにしようと思って、頑張って作ったの！」

「・・・つくった・・・？」

はい。と頷く恵美の前に、魔王は暫し恵美と服を見つめた。
だ、だからこれを着て、一緒に・・・。

麗しの魔王は微笑を口端に乗せた。

「着よう」

腕のカフスを止めている姿は、恵美でなくても胸をざわめかせる。
翠の服に身を包んだ魔王様は、青銀の髪をひと払いすると、恵美を振り返った。

洗練された佇まい。静謐な眼差しが恵美の瞳を縫いとめる。
目が離せない。

その人が音もなく歩を進め、恵美の正面に立ち、腰に腕を回し、
抱き寄せるのだ。

目が離せるはずも無い。

吸い寄せられるように身を預け、指先に誘われるまま顎を上げ、
唇に訪れを待った。

唇に優しいそれが舞い降りて、恵美は幸福に胸を震わせた。

たっぷりと甘い唾液を堪能し、息も絶え絶えになった恵美を見お
ろし、魔王は眼を細め笑った。

ささやく。

「・・・どうした？ そんな顔をしていると、止まらなく、なる
ぞ・・・」

「あ、ん。にい、さま・・・」

喘ぐように呼吸する赤い唇に、魔王はまた、唇を落とした。

・・・予定の時間までまだ間がある。

もう少し、可愛い吐息を聞いていよう。

おもむろに、魔王は恵美の身体をソファに押し倒した。

「榊。これを受け取ってもらえませんか？」

雪那が頬を軽く染め上げて、榊原 亮を見上げた。腕には畳まれた服と思しき物体が。

深い青の衣装だった。

所々に施された銀糸が、着るものを選ぶ代物だ。

しかし榊が纏えば、それはこの世のだれよりも鮮やかに着こなすだろう。

・・・たえそこに鬼畜と書かれていようとも。

愛しのお嬢様が差し出したものならば、あまんじて着てみせよう。洗練された振る舞いで、他の者の口を封じて差し上げよう。

きつちりと着付けて、首の周り、袖の力フスまで神経を通して、榊は雪那を振り返り見た。

「・・・いかがですか、お嬢様」

どこへなりと、お連れください。・・・お供いたします。

榊が艶然と微笑んだ。

「オウラン、オウラン。あのね・・・」

「・・・また、何を一生懸命作っているのかと思っただら・・・。

ナンダコレハ」

「えとね、玉英ちゃんデザインの、鬼畜戦隊ごれんじゃー。何かね、オウラン鬼畜レッドなんだって。はい」

心を込めて縫いました。

ひと針ひと針、怨念込めて。

「・・・きゃああ、睨んじゃダメだってば！　だって玉英ちゃんがそう言えて・・・」

「レッド・・・レッドね。では、お前は？」

「えへ！　お揃いなんだよ？　私ね、トマトレッドなんだ！」

「トマトレッドね。・・・ふうん」

・・・では、俺が食べてもいいんだな・・・？

赤いトマト。食べごろだな？

そう囁いて、チヒロが持っていた服を奪うと、着付ける代わりに、チヒロの衣装を剥ぎ取った。

「・・・！！！！みゃああっ！！」

「・・・とりあえず、一回喰ってから、付き合ってやる」

「オ・・・オウランツ！」

「・・・諦める」

どうやらチヒロは散々に喘がされて、ぼろぼろの状態で皆と落ち合うことになりそうだ。

まじまじと刺繍された言葉を見詰め、理恵は物思いに沈み込んだ。

「玉英さんは、大好きな人につて言ってたけど、どうしたってこれ、「好きな人」にあげるべき服じゃないよね・・・」

一緒に縫ったけど、教えられたとおりに作ってたけど、どうしたって「好きな人」に始めてあげるプレゼントじゃないでしょう。

「・・・だって、これ、どう見たって「鬼畜」って刺繍されてるもん・・・」

好きな人。と考えて、一番初めに浮かんだひとの面影を、理恵は必死で追い出した。

レミレア。

「ち……ちちちがつ！ 違うつ！ 断じてすすすす……好き。じゃない……！」

これはあれだ。キリエの記憶と混在した結果陥った錯覚って奴に違いないわけだから、わけだ！

……支離滅裂なのは分かっているけど、これはダメだ。だってどうしたって、レミレアが！

「……鬼畜のはず無いじゃない……」

そうだ。レミレアが一番似つかわしくない言葉だとさえ思う。

魔族の癖に純粹で、魔族の癖に、熱血の変な奴。

魔族の癖に明るくて、魔族の癖に優しく、だれより、好きだ、と思える人だ。……や、魔族だけどさ。

「……鬼畜……鬼畜ね……」

その言葉にふさわしい人物には心当たりがある。お隣の修兄ちゃんだ。

まあ、ただの鬼畜じゃないけどさ。やさしさ持った鬼畜。なんだそれ……？

でも、本当にただの鬼畜だったら、あっさり潰すのに良心も痛まないのに……。

はあ、とため息ついていたら。

「なー理恵ー。ねえさんが、理恵の所に行けば良い物が貰えるって言ってたけど、なに、なに？」

窓からひよいと顔を出した、夜の貴公子の声に、理恵は文字通り飛び上がった。

びよんと跳び上がった理恵の手に握られた、服を目ざとく見つけたレミレアは、それと似た物を、恵美が持っていたことを思い出し

ていた。

「・・・ああ。これか？姉さんも、魔王様に渡すんだーってここにこしてたぞ」

に・・・にここにこ！？　良いのか、恵美いつ！！

理恵は妹の正気を疑った。だって翠の服を嬉々として縫っていた妹は、丁寧な果堅の、泣きながら指導していた刺繍までも、完璧にやり遂げたのだ。きつと翠地に、金で鬼畜と描き出されているに違いないのだ・・・。

でも、また違う光景も目に浮かぶ。

どんなものを差し出しても、あの魔王は恵美がそれを作ったと言う事実だけで、全て認めることだろう。

「・・・いまごろ、きつと魔王様は喜んで袖を通しているわね・・・」

「そうそう！　で、俺のこれ？」

「あ、こ、これは、違うの。レミレアには、にあわな・・・」

レミレアの目には淡い黄色の衣装は、ひまわりみたいで好ましかった。

さつと理恵の腕から奪うと、まじまじと見つめた後、にっと笑う。

「・・・うつ。な、なに、よ」

「ここ・・・血滲んでる」

レミレアは淡い黄色の衣装の縫い目の一部を指差した。確かに赤いしみが転々としていた。

「あ・・・」

「血、滲んでもがんばって作ってくれたんだな？・・・ありがとう」

それから、理恵を見たまふつと出し抜けに微笑んで、理恵の所在無げに伸ばされたままの腕を取った。

理恵の左右の掌を掌の中で返して、まじまじと見つめる。

それから血の滲んだ指をぱくんと銜えた。

理恵の身体が跳ね上がる。

「レッ・・・れみ、れ、あ」

「・・・んー？ 痛かったろ？ これ、手縫いだから、姉さんが、皆も怪我してたって言ってた。姉さんの傷はきつと魔王様が治しているからいいけど、お前の傷が心配でさー・・・。変なところ頑固だから、痛いも言わなかったんだろー？ 姉さんが心配しててさ。もしたら、リア様が癒やしの鱗くれたんだー。・・・効くといいな」

んべつと舌を差し出すと、舌の先に三角の鱗が張り付いていた。レミレアが笑う。

「こうして体温で温めて、患部を舐めれば、治るんだって・・・。お。治った治った。さっすがー」

リア様伊達に年を取ってねえよなー？

などと不穏な言葉を呟いたレミレアの前で、指先に残る暖かな疼きに、理恵の胸は高鳴って仕方がなかった。

・・・それを、得意の探索の目を使ってリアナージャが逐一盗み見していた。身悶える。

「青いのおっ！ あそこまでお膳立てしてやったのに、なーぜーに、押し倒さんのじゃあああっ！！！！」

・・・と、叫んでいた。

・・・そして。

「ひどい・・・」

俺には愛のこもったコスチュームプレゼントしてくれないの？

・・・と理恵と恵美を見て、嘆く修の姿があった。

それを柱の影からちらり見ていた明燐が、音もなく近寄って行って、そつと修に手渡した代物。

「理恵の処女の血に濡れ（不器用な理恵ちゃんが指刺し、指切り、血塗れにした、ボツ衣装）黒光りする、鬼畜シルバーの衣装ですが・・・」

「もらったっ！」

俺のだ！誰にもやんねーぞ！

修は空に向かって叫んでいた。

「うフ。悪役がセイゾロイ・・・」
暗躍する清楚な美女達。

「鬼畜ブラック、萩波。鬼畜レッド、オウラン。鬼畜グリーン、アルファアーレン様、鬼畜イエロー。レミア君。鬼畜ブルーが紳さんで、鬼畜シルバーが、小埜 修殿ですか・・・」

「むー！むぐぐぐうううー！」

玉英の胸に抱かれて衣を乱す果堅の姿・・・哀れ。

「ああ、はいはい。果堅はそのまま転がっててくださいねー」
と、どっちが悪役かわからない発言をする明燐だった。

悪役は揃った！

「でも早速食べられてるばいんですけど、良いのですかそれで？」

「デモ約束ノ日ハ近イ・・・」

「えー・・・どこに集合するんでしたっけー・・・？」

「むーがー！（助けてー！大根まーんっ！！！！）」

「・・・果堅、助けを呼ぶ相手が違いますわ・・・」

「ウフ。カジユ、イイコト、シマしょ・・・？オニイサマヨリ、
きもち良くシテアゲる」

「むうつがあああああっ！！！！」

愛と正義のヒーロー！ 4・・・さくら書く（後書き）

果堅の明日はどっちだー！

愛と正義のヒーロー！ 5・・・さくら書く

・・・某国の首都にはただいま建設途中の巨大なタワーがある。

建設中でありながら、すでに世界中の似たような電波塔のすべてを抜いて世界一の高さになっている、そこ。

建設関係者でなければ近寄れない、そこ。

近寄ったら危険ではすまない、そこ。

・・・なのに、その天辺のクレーン部に吊るされている少女が一人・・・。

哀れ果堅は、攫われたヒロインよろしく縄でグルグルにされてこれ見よがしに吊るされていた。足元には何もない。ひるる、と風が鳴いているだけ。

脳裏をよぎるは散々な王妃時代。

萩波に近づきたい姦しい貴族の姫に、背中を押され大階段から落ちたこともあった。雪の降る中、大木に吊るされたこともあった。

夜討ち朝駆けは当たり前だったあの頃。

毒殺、撲殺、刺殺、絞め殺し、撃ち殺し、ありとあらゆる手段でもって命を狙われた。

今思えば、それらすべてから守ってくれた、萩波と仲間たちはとても有能で、そのぶん冷酷だった。

果堅に嫌味を言ったら三倍返し。
かすり傷なら十倍返し。

傷を残したら一族郎党皆殺し。

追放なんて生ぬるいばかりに、殺しつくしていた。

清廉な神気が、まがまがしさを帯び、禍津神になるのも時間の問題
マカツカミ
のように思えた。

このままここにいては、彼らを墮としてしまうと、心震わせたあの頃。

「ああ、なつかしいなー・・・」

・・・いや、懐かしんでどうする。だが今じゃ、そんな心配は皆無だ。

彼らは変わらず溢れる神気で世界を照らし続けてくれている。

ぶらーん。

縄でグルグルにされた身体を揺らして、ブランコみたいだと果堅は笑った。

ぶらーん。

こんな目に合わされていても、果堅にとって玉英は、大事な萩波の妹。

愛しかった。

信頼では言葉が足りない。

親愛では心が通いすぎた。

こつした「お遊び」にだって、義姉としてお付き合いしても良いかな、と思うほどに玉英が可愛かった。

ぶらーん。

・・・義妹の方はそれ以上を激しく切望していたが・・・。

「うフ。ウフふ。ツルサレテイルかじゅモ、カワイイ・・・!」

もにゅ。もぞもぞ。もにゅにゅ。

「ひいいやあああああっ!」

後ろから抱き付かれ、前に伸ばされた両手で、無い胸を散々揉み込まれ、果堅はアブナイ橋を渡りそうになった。

乱された衣の中に繊細な手がするりと入り込んで、そここを刺激していく。腰が砕けそうだ。

とろんとした淫靡な美貌の義妹が艶やかに彩られた唇を近づけてきて、重なる唇。蹂躪する舌先。

豊満な胸を惜しげもなく果堅の身体に押し付けてくる。やわらかい絶妙の弾力。男だったら天国だろう。むしろ縛られて弄ばれても、至上の極楽に違いない。

・・・だが、悲しいかな。

相手は、果堅。

（むゝむむむゝ！！　むね、がああああつっ）

・・・玉英のテクはすさまじかった！

「や、あ、ああんっ！　ちよ、玉、えいつ。ここ足場無いの、危ないわっ！」

「うふ。かじゅ、シンパイ、シテるの・・・？　うれしー」

・・・どうやら足場は確保されているようだ。

鉄筋が建築業者の職人技で組まれていた。・・・いつ、組んだんだ・・・？

「モウスグ、アクヤク、そろろ・・・」

だから、それまで。

「イイコト、シマシヨ・・・？」

大輪の華が微笑んだ。

「た・・・助けてええええっ！！！」

しゅ、と最後の生命線、紐パン（玉英選）の紐を解かれ、かろうじて隠されたそこに、玉英の白魚のような指が伸びた。

「かじゅ、ダレニねがう・・・？」

なに！？

何を願うって？

「・・・タスケ、だれ？」

そ、それはやはり！

ひらめいた真っ白いすべすべな肌。

ふさふさの緑の面影。

魅惑のそれ！　しかし、それを口にする前に。

「・・・ダイコン、ツブス」

玉英の赤い瞳がきらんと輝き、およそ美少女とは思えないドスの効

いた低い声が響いた。

果堅は愛しい大根を守るため（違）愛しい夫を人身御供に差し出した。

「萩波！ 萩波ですっ！ 萩波に激しく助けてもらいたいですっ！」

「ウフ。うふフ。そう、オニイサマ・・・」

じゃあ・・・ロリコンの公開鬼畜を全力でつぶして愛しい果堅を独り占めにしなくちゃね。

・・・玉英は恋敵をロックオンした。

「・・・大丈夫か・・・？」

アルファールンは大きく喘いでいた恵美を抱き起こした。

かろうじて身に纏ったままの衣装は、危ういところまで暴かれている。

はだけられた背中、そこに残るあざに唇を押し当て、アルファールンは手際よく恵美の衣を直してやった。

可愛い身体を衣に隠し、長い黒髪を手に取った。

さらり、とブラシで櫛梳る。

昔、こうしてエイミールの髪を梳かしたものだ。しなやかな髪は今は黒く、けれどもあの頃と同じように、指に馴染んで、あの頃のように幸せな気持ちにしてくれる。

「・・・にいさま、本当に上手・・・」

「・・・ふ、造作もない」

ふんわりカールだってお手の物だ。見事なツインテールのできばえに、アルファールンも満足そうな顔をした。

すべての世話を一人ですていたのだ。ほかの誰の手も掛けたくはな

かった。

上達するのは当たり前。

髪型。服。靴。可愛い小物に、お菓子に、音楽に、本に、花。すべて最高を選び抜いた。

肌に優しい石鹸、シャンプー。リンス、トリートメント。クリームにもこだわって風呂上りには塗りこめてやった。

何でもそろえたが唯一与えなかったもの。

「果堅妃は、良くしてくれるのか」

・・・年代の、友人だ。

質問に恵美は目を丸くして、それから花のように微笑んだ。

「はい！ とても、良くして頂いてるんです。にいさま」

「理恵は当たり前だが、あの雪那という娘に、チヒロと言ったか？・

・仲が良いのだな」

「友達ですから！ 学校にはもつとたくさん友達がいますよ、にいさま」

恵美の微笑みに胸が温かくなっていく。

それでは、この妹は、決して不幸だったわけではないのだ。両親の不幸は確かにあったが、それはこの娘を、すくませる物ではなかったのだ。

だが、それも一人だったら、わからなかった。

「・・・理恵がいてくれて良かったな」

思わずつぶやいた言葉。

それに恵美が目丸くして、嬉しそうにうなずいた。

「理恵ちゃんがいてくれたから、私はこうして笑っていられるんです」

大切な人だと、お前が言う。それに、正直妬けもする。

心から、キリエに感謝する日がこようとは、思ってもいなかった。

だが、今ならお前がキリエと共に転生してくれて良かったと、そう思うのだ。

私の手の届かないここで、お前は悲しみに飲まれても、前を向いて

いてくれた。

二人、手を取り合って進んでくれた。
お前を支えてくれていた。

「・・・その存在に、敬意を」

魔王は、しばし目を伏せた。

「あ。にいさま、大変、時間に遅れます」

みんなもう揃ってるかもしれませんよ。

「・・・大丈夫だ」

あわてて立ち上がるうとした恵美をすかさず抱き上げて、青銀の魔王は微笑んだ。

「楽しみですねー、にいさま。私あのタワー、間近で見るの初めてなんです！」

「・・・そうか」

嬉しそうに頬を染める恵美を見て、アルファレンは微笑んだ。

お前が喜ぶことならば、どんな茶番だとして演じてやろう。

・・・あのタワーの動力部に技術を提供したと、レイ・テッドが言っていたな。

魔界から持ち込んだ魔鉱石は、この世界を揺るがす、レアアースも真つ青な代物だった。

しかも、魔王はじめ魔軍幹部の純粋な魔力が源で、空気を汚すこともなければ、動力変換のために汚染物質を生み出すこともなかった。何一つ壊すことのない動力源。

しかも、補充する者たちは、皆々、規格外の魔力量保持者だ。むしろ無尽蔵のエネルギー体。

山を切り崩すことも、海を埋め立て危険物質を処理することもない。夢のような物質。

ためにひとつある機関に提供したら、それこそ世界中から血相変えて科学者、各国技術者が魔王の元にやってきた。

・・・その中に、いた。

新規タワーの施工者はこの国だった。

技術立国しているこの国は、資源に乏しく他国に依存する有様だ。

高純度のエネルギーはさぞ魅力だったろう。

だが、示される金額は国家予算もかくやという額であるに違いない。そう思い込んでいただろう、青い顔の首脳。

だが、アルファアレンは商談にあっさりと首を縦に振った。

あわてる首脳に一点だけ、注文して。

「・・・良いだろう。必要な分廻してやろう。そうだな、この国を拠点にしても良い。・・・この学校ひとつ、わたしにくれたなら」そして示されたのは、どこにでもある普通の学校だった。進学率が高いがそれだけで、別に特筆するものは何もない学校。

「・・・私の婚約者がここに通っている。いつもそばにいたいのだ。私が望むのはそれだけだ」

五月蠅い教育委員会とやらを黙らせる。教師も前面変更だ。私のあの子のそばに男教師がいると思うだけで虫唾が走る。何、教師のあてはある。

「・・・ああ、それから・・・」

この国の婚姻は女性は十六からだったな？・・・ふ、実にいい国だ。淫行条例？ 青少年保護法？ ほう、だが愛し合う二人には無縁の法律だな？

同意？ 当たり前だ。私たちは愛し合っているからな。

かくがくうなずく首脳を見て、アルファアレンはうつそりと、微笑んだ。

竣工した暁には、恵美を連れて最上階でデートと言うのもありかもしれない。

眼下にきらめく光を見ながら、お前を抱くのも心地良いだろう。

その時はもちろん、貸切だな。

あの時の首脳に揺さぶりかけるか。魔鉱石をちらつかせれば、言うがまだな・・・。

魔王閣下はデートスポットのチェックに余念がない。

示された日時。

そこに立つ者たちは、精錬とした眼差しで空を見上げた。

「・・・ええと・・・あれ、まさか」

チヒロが眉をひそめてつぶやいた。

傍らのオウランが片方の眉をぴく、と上げた。

「・・・わああー。たのしそう」

雪那がボケたことをつぶやいて、榊が「お嬢様・・・」とため息吐きつつ首を振った。

「雪那、あれ楽しそうじゃないから！」

理恵が冷静に突っ込む。

「俺、飛んでこようか？」

この暗さならいけないだろう？ とレミレアがたずねる。

「ご心配傷み入ります。けれども、結構。果堅はきつと私を待っておりますから」

につこりと微笑んだ萩波。その凄烈な美貌と、黒一色の某パンマンの衣装。

鬼畜って描かれてなかったら、それはそれは、夢のようなワンシーンだっただろう。

なんたつて、囚われのお姫様を助けに行く王子様だ。

乙女の夢間違いなし。

・・・ただし、相手が悪かった。

「・・・待っているのは、大根ではないのか？」

アルファールンが冷静に突っ込んだ。

びしっ。

世界が終わる音を、聞いたかもしれない・・・。

次回！

高笑いする玉英！

その腕の中には快樂にとろけきつた、愛しい妻の姿が！
あなたなら、どうする。

愛と正義のヒーロー！ 5・・・さくら書く（後書き）

・・・あ、あれ？玉英悪役になってる・・・？

愛と正義のヒーロー！6・・・さくら書く

その瞬間、世界の破滅の音が鳴り響いたのを、始原の天使は耳にした。

「アズラエル・・・」

「・・・なんだ」

頭ふりふり、修は半身の名を呼んだ。頭が痛い。

傲岸不遜な半身は、顔色ひとつ変えやしない。

・・・何ってふてぶてしい奴だ。

「・・・本当のことを言われちゃ、凧国国王と言えども傷付くだろう？」

・・・何気に修も、失礼だった。

「・・・とりあえず、貴様ら、死んでくるか？」

凧国国王が真顔で冷笑しながら、真剣をすらりと抜き去った。

三人が切った張ったをやっている間、遠めに浮かぶ果堅を見上げていた美少女たち。

「ここはやっぱり、美少女戦隊の出番だと思っの！」

わくわくした顔でチヒロが恵美と雪那を振り返った。

「明燐さんと玉英さんに歯向かうってこと？」

あの女王様ズに？

理恵の脳裏を、厳しいお色気レッスン講座「女王様への道！」が過ぎった。

あの俊敏の鞭使いに歯向かうって・・・？ あん・・・？ 理恵の背中を冷や汗が伝う。

「それは、無謀も良いとこ無謀じゃないかと・・・」

理恵はとつと尻尾を巻いた。

無理。かなり無理。

高笑いする明燐。暗躍する玉英。とてもじゃないが、太刀打ちできない。

「えー、でも、きっと果堅ちゃんと明燐さんたち、私たちの熟練度を試しているんじゃないかなー？」

チヒロが小首を傾げて見せた。

それに恵美がこくこくと頷く。心なしか、頬がばら色だ。

「え、恵美・・・？」

「特訓の成果を見せるときよね！」

「明燐さん、きつと、私たちの訓練の成果を見たいんじゃないかな？」

・・・いえ、訓練って、お色気攻撃しか習ってませんけど。

むしろお色気攻撃以外、教わっていませんけど！

理恵が待ったを掛けるも、チヒロと恵美は呼吸もばっちり叫んでいた。

「何てったって、ワタシたち、愛と正義のヒーローですから！」

「

ねー。

と小首かしげて頷きあう美少女は可愛い。そりゃもう眼福物の愛らしさだ。

・・・ただし発言はものすごく残念だ。

チヒロの傍らで宙を見上げて大きくため息を吐いたオウランの姿がやるせなかった。

「オウランさん、あなたも止めなさいよ！」

「無理だ。あんなったら、チヒロはとまらない」

「じゃ、レミレア！」

「無理」

「そんなあ・・・」

恵美とチヒロの気合の籠った発言に、誰も静止をかけられなかった。

チヒロを止めるべきオウランは傍観に回り（チヒロ良ければすべてよし）、レミレアは恵美を止める気なんぞさらさら無い。むしろ楽しそうだなー、とわくわくした目線を送っている。

なんか、大型犬の尻尾が見える。遊んで遊んで、と振られているのが見えるようだ。

「・・・レミレア・・・」

そして・・・恵美を止めるべき保護者は、今も、萩波と戦っていた。

魔王様！ と理恵が振り向いても、アルファレンは萩波であそん・・・いえいえ上げほげほ。

「じゃ、じゃあ、雪那！」

最後の良心とばかりに、理恵が声をかけたは、七宮家の野菜姫。

雪那は彼方の果堅を見て、何事かを考えてから理恵を見た。

「・・・ちいちゃんと恵美ちゃんを止めることは出来ないと思うわ、理恵ちゃん。私たちも行きましょう？ それに、あの縄の使い方には、明燐さんに一言申し上げたいと思うの。ね、柵」

雪那が小首を傾げて傍らの柵を伺った。

「そうですね、お嬢様。明燐殿は類まれな鞭使いですが、縄の扱

いには少々甘さがあります」

榊が顔色ひとつ変えずに話している。

それにうんうんと頷いて。

「やっぱり。あれじゃ跡がついちゃうわ。良かったわ、榊、私でも明燐さんに教えてあげられることがありそうで」

「も・・・もしもーし？」

何を明燐に伝授する気なの、雪那さんっ！

目を白黒させる理恵の背後で、始原の天使と天界の王の戦いは熾烈を極めた。

目にも留まらぬ剣戟。

その合間を縫って耳元で行われた消耗戦。・・・主に萩波の気力をそぐため、天使と堕天使は結託した。

・・・いつもそれぐらい意気投合していればいいのに・・・。

「・・・ふ。図星を指されたからって、八つ当たりとは・・・」

・・・青いな。

蒼銀の髪的美丈夫が鼻でふ、と笑った。

「ああ、青い」

短く刈られた黒髪の、精錬な美貌の主も意地悪く微笑む。

その二人の眼差しにむつとしたように眉を潜めて萩波がかえす。

「訂正なさい。果堅が待ち望んでいるのは、私です」

だが、その言葉にも、ふっと笑った二人。

「大根だろう？（だよな？）」「」

「・・・くっ・・・」

「この間、ウサギに大根の着ぐるみ着せて、うつとり見つめて、でろでろになつてたぞー」

真っ赤に蕩けたあんな顔、まさに恋する乙女だったなあ・・・と、思い返す修。

ちなみにその子ウサギは、真っ白な雪のような毛皮に真っ赤な紅玉のような瞳を持つ美獣だった。

果堅が誰かに見立てていたことを知っているが、修は口にしなかった。（・・・教えてやろうよ・・・）

「学校の校庭に農地を確保させてほしいと、理事長室まで直談判に来たぞ」

・・・とは、アルファレン。

「果堅が農地を耕すのはいつものことです」
つんと明後日を向いた萩波だったが、アルファレンは追求をやめなかった。

「・・・しっかり握った両手には、「実録、アイドル大根のすべて！ あなたもこの種を植えれば大根とラブラブに！」・・・とあったが・・・？」

目を細めて、どうだとばかりに流し見る。

・・・まあ、その本の影に「実録、大根武者のすべて！」と言う本もあったがな・・・。

この世界では大根を毎日食べ続けられ、いざと言うとき大根の精霊が、主を助けに来てくれるのだそうだ。

この世界に来てから、恵美の授業時間、暇をもてあましていたときに読んだ本にはそんなことが書かれていた。（魔王様、徒然草読破）

何の気なしに果堅妃に差し出した本。

「信じ抜けば、大根の精霊さんが・・・！！！」

あの時の果堅妃の真剣さ。

一体誰に、大根を毎日食べさせるつもりだったのか。

・・・まあ、あの王妃と、こいつを見ていればおのずと分かるもの。

お互いを思いやるばかりに、空回りする彼ら。

魔王は二人のすれ違いっぷりを齒痒く思っていた。

だが、ここで明確な助け舟を向かわせないのが、彼なりのひねくれた友愛。

雨降って地固まるを実践し実現させた魔王閣下は、彼ら二人の絆を信じているのだ・・・。

「・・・理事長室で延々二時間、いかに大根が麗しいかを懇々と諭されたぞ」
おかげで恵美との逢瀬が短くなった。

あの日は理事長室に恵美を呼んでいたのに・・・。

「・・・キスしか出来なかった」

あんなこともこんなこともする気満々だったのに。

学校の一室と言うのがスリルと羞恥をもたらす最高のスパイスなのに。

・・・八つ当たりってこれ。な事を言い募って、萩波を煽るアルファレンだった。

「・・・お前、まさか校舎で恵美に不埒な行いを！俺も混ぜろと言っておいただろー！」

叫ぶ修。

「・・・誰が混ぜるか」

憤るアルファレン。

「――大根になど負けません！！！」

萩波はタワーに向かって駆け出した。

「ことごとく負けていると思うのは私だけか・・・？」

「俺こないだ、果堅の、大根心の恋人宣言聞いたんだけど？」

「今行きますからね。果堅っ！！！」

萩波の背中を満足げに見、修は、傍らの半身を流し見た。

「・・・アズラエル、煽らなくても良いだろうに」

「あれぐらい言っておかねば奴は動かん・・・しがらみ、制約、その身に受けたモノは、私よりも業が深い」

「何度生まれ変わっても、愛するものはたった一人なのに、な」
「分かんない輩が多すぎる・・・」

「神と言えども、ままならん」

昇華した我らは幸せなのかもしれん。

「愛する者のそばに、姿かたちが変わろうとも、その魂の元に、こうして在れるのだから」

我らは、紛れもなく、幸せなのだ。

その呟きに修、スルーシは頷いた。

「・・・ああ、そうだな。俺たちは幸せだ。またあの子に会えた」

「・・・だが、恵美は譲らん」

「ふん。必ず、振り向かせて見せる」

そんなことを言い合って、さあ、愛しい娘を腕に抱こつときびすを返した。

愛と正義のひろー！ 7・・・さくら書く

明睡は目の前で繰り広げられる悪夢に、そつと目頭をおさえた。
認めたくない。

絶対、認めたくなかった。

悪夢に違いない。きっとそうだ。

「現実逃避してんじゃないわよ」

げしつと足蹴にされて、容赦なく現実に引きずり戻される。

激しく抵抗したものの、引きずり倒され足蹴にされれば目も覚めるってもんだ。明睡は茨戯をにらんだ。

「・・・とりあえず、足どけろ」

「あら〜？ そんなこと言っているのかしらあ〜？」

にやあ〜と笑う絶世の美女。振るい付きたくなるほどの美貌だ。

だが、その薔薇に隠された棘は鋭くも、むごい。

・・・だいたい誰がこの美女を見て、男だと思っただ。盟友を見上げて、こちららも優美な美貌の主は思う。

「・・・まったく、鞭が似合う奴ならここににいるのに、何だって

俺のお姫様は・・・」

おとなしく守られてくれないのか・・・！

明燐には鞭より花だろう？ おひめさま 薔薇と砂糖細工に可憐なレース、リボンだろう！

・・・まあ、確かにカラフルなそれも似合うが、漆黑や真紅が異様に似合うのは否めないが！

むしろどこの十二歳？と言えちゃうくらいの、妖艶な身体つきだけどさ！

嬉々として鞭を振るうお姫様を見て、こついうのもありだな、とちらつと思つた事もあるけどさ！

「あらあ、あなたのお姫様だって、守りたいものがあるからじゃないの！」

ほら、ほら、オニイサマ？ あなたのいもうとぎみはもつと過激な行動に出てますわよ？

ほら、と示された方向を嫌々ながら見てみれば、愛しい妹が可愛い果堅を……。

いや！

幻覚だ！ 俺の可愛いお姫様はあんなことしない！

あんな、あんな……。

誰に教えてもらったんだ、明燐！

「……………亀甲縛りだなんてっつ！

「……………とりあえず、戻ってこい！ 明燐！」

がしつと水鏡を驚掴み、がたがた言わせる明睡に、茨戯がため息を吐いた。

「……………うん。とりあえず、あんたもね……………」

やれやれと言いたげな茨戯の言葉を受け流し、明睡は水鏡に向かって叫んだ。

「明燐っ！」

何が悔しいって、あんなに生き生きと楽しそうに「果堅」を縛り上げてる妹だ。

「誰だ、俺の可愛いお姫様に、あんな破廉恥な仕置き方法を教えたんだ奴はああっ……！」

幻覚と分かっていたけど、その瞬間、明睡の頬に血の涙が見えた気がした茨戯だった。

「……………元より誰より純粹で、誰より女王様だったわよ、あんなのお姫様は……………」

そりゃーもう、十二歳とは思えないくらいの鞭捌きだったし、女王様振りだったわよ？

ひれ伏して足蹴にされたい奴、続出。

「違あああう！ 明燐はいつまでも可愛い俺の（俺だけの）お姫様なんだ！」

「……………それ、涼雪が聞いたらなんて言うのかしらあ……………」

・・・茨戯が眩き、ぶちきれた明睡と茨戯が喧嘩を始め、茨戯が止めるのも聞かずに明睡が現世にやって来るまで、あと少し。

神界の風国の王の間で、水鏡の前にそんなひと悶着があつたなんてもちろん知らない、果堅率いる美少女戦隊・・・と、女王様二人ふりすあるふいあ

果堅お手製のこんにやくホワイトの衣装を身に着けた玉英と、鞭の女王・明燐サマの前で、同じく真っ白い衣装に身を包んだ雪那が、赤い縄を手に、彼女たちと顔を付き合せていた。

真剣な面持ちの雪那が、優しい顔で柔らかい声で、諭すように紡ぐ言葉の羅列・・・。

「この縄では肌を痛めてしまうわ。縛るにはこれ！ 桷が選び抜いた究極の荒縄です！ それにこの縛り方では愛が足りませんよ？ きつく締めすぎで痛いだけです」
にーっこり。

天使の微笑は、悪魔のいざないだった。女王様ズに縄を勧めてどうする雪那。

「この縛り方じゃ解いたときに痕が残ってしまいます。私は桷がしてくれたことなら全て受け入れますけど、まだまだ、果堅ちゃん、そこまでに至ってないでしょう？」

にこにこ、ほんわり。

和む笑顔だ。・・・持つてるものが赤い縄じゃなかったら、ね。木陰でお茶をしている良家の子女の内緒話なみに和やかで可愛らしい。・・・でも紡ぐ言葉は残念だ。

「・・・くっ・・・！ スグ、ホシガラせてミセル！」

玉英さんたら、なんだか悔しそうに見える。

常の彼女の無感動無表情を知る人なら、驚愕ものだ。

「ええ。でも、信頼関係って大事なんですよ？」

「シンライカンケイ・・・？」

きよとん、と紅玉のような瞳を見開いて、玉英が小首を傾げた。
そんな玉英に雪那は頷いて見せた。

「相手に身も心もゆだねて恍惚のまま支配されることが、喜びとなり、やがて、相手に囚われたいとまで願うようになるのよ？」

そこに信頼がなければ、それはただの拷問ですよ？ 苦痛だけが増大されて、恐怖が支配するだけ。

「・・・ゴウモン。キョウフ」

玉英がなお一層遠い眼差しになった。

はるかな過去を思い返す。地獄の方がまだましだと何度思ったことだろう。

抜け出したくて、抜け出せなくて、絶望して、けれど死ぬことから出来なかった。

差し伸べられた、手。

離したくなかった。

「私たち」を繋ぎ止めてくれる、たった一人。

「玉英ちゃんは、そんな悲しい関係を望んではいけないでしょう？」

果堅ちゃんと、めくるめく禁断の世界へ飛び込むのでしょうか？

そこに愛を感じるもの！

(・・・えーっと・・・雪那さんったら・・・)

「・・・アイ」

「そうです。愛と信頼が、縄であり鎖なんです」

榊が戸惑う私に、身をもって教えてくれたんです。

ね、と振り返り微笑む雪那に、榊は微笑んで頷いた。

「言い換えれば、愛と信頼があれば、縄など不要。でもそこに信頼を見出したいから、私はあえてお嬢様を縛るのです」

「ええ、榊」

につこりと微笑みあつて手を取り合つた二人の姿は、まるで絵画のようだ。

・・・二人の手の中に赤い荒縄が無かつたらね！

「・・・オシエテ、ししょー！」

玉英は、雪那の手をとり懇願した。しかも、なんだか雪那さんが師匠に昇格しているぞ？

その玉英のそばで、そつと目頭を押さえる明燐の姿があつた。明燐にとつては（・・・立つた！　ク　ラが立つた！）並みの衝撃だった。誰の声も耳に届かず、自分の殻に入り込んだままの玉英が。自己を守るためとはいえ、周囲から意識を切り離さなければ、すでに自死していたであろう彼女が。

初めて、兄と果堅以外を認めて自分から話をしている！

明燐は感激に震えた。

暖かい眼差しで、あやとり（・・・）をする少女二人を見つめていた。

「あ、ここをこうして、くぐらせて・・・」

「・・・コウ？」

美少女二人顔をつき合わせて、赤い縄を撫で繰り回し、あーでもない、こーでもない我真剣そのものだ。

「うう・・・ん。いつも榊に縛ってもらつてるから・・・よくわかんない・・・。こう、だったかな？　どうかしら、榊？」

「ええ。そこで、上から下に通して輪の中にくぐり入れるのです。・・・なかなか、お上手です。お嬢様」

首を傾げて榊に教授を頼みつつ「果堅」に縄を纏わせる雪那と、真剣な目線の玉英と明燐の二人。

「・・・コウ？」

「こうでしょうか？　榊さん」

「ええ。お二人ともお上手ですよ。縛る対象に対する、深い愛を感じます」

「ウフ」

「まあ、ほほ」

照れたように微笑む二人。

温かく見守る姿勢の、榊。

和やかだ。縄のレスンじゃなかったら、ものすごく和むのに！

「あ！そしてこうでしたね、榊！」

「そうです。さすが、私のお嬢様！」

赤い縄を嬉々として引いた雪那。

榊の目が輝いた。

連携はばっちりだった。

「ソシテ、こウ・・・メにギュツと」

呟きながら、玉英が赤い縄を引いた。

「むきゅううううううっ！！！」（誰）

「玉英ちゃん、上手！ 果堅ちゃん、どうかしら？ さっきより締まっているのに、痛くないでしょう？」

「むきゅう・・・あ、たしかに」

ニコニコ顔の雪那に、素で答えてしまった、絶賛亀甲縛り体感中の果堅（彼女でした）だった。

萩波が見たら、きつと泣く。

晴れやかな笑顔で雪那がそこに居るはずの榊を振り返った。

「・・・どうですか、榊！ 雪那、上手に出来ましたよね？・・・あれ？ 榊、榊ー？」

心細い声が某タワーの最上階に響いたが、答える声はなかった。
・・・答えるべき人は、約一名と絶賛交戦中だった。

いつの間にか現れた明睡が、怒りに震えながら剣を振り下ろしていた。

「・・・貴様が、元凶かあつつ！」

「・・・いきなり、斬り付けるとは、物騒な方ですね」

「あんな破廉恥なモノ、俺のお姫様に教え込むんじゃない！」

「失敬な！ あれほど愛が深まるものは無いですよ。それに私が縛るのはお嬢様だけです」

明睡の渾身の剣撃を、ひよいひよいと紙一重でかわす榊の姿があった。

「くつ！ この、ちょこまかと・・・！」

「私とお嬢様は赤い縄で繋がっているんです」

もちろん夜になれば別のところでも繋がりますが。

「そんな絆、叩き斬るっ！」

「私とお嬢様の赤い縄は、鋼鉄並みの強度ですよ」

何人たりとて引き剥がすことは出来ませんねー。

「きや、さ、榊！」

おろおろする雪那と。

「あれ？ お兄様？」

きよとんとする明燐。

「・・・チヒロ、あれは止めでいいのか？」

「わ、わわ。止めて、オウラン、止めて！」

腕を組んだまま無然と戦いを見つめるオウランと、おろおろするチヒロの姿があった。

「やれやれ・・・」

首を振りふり、しばし剣戟を見やってから。

オウランがしゃんつと剣をいなした。

ぎりぎりと、明睡の剣を押さえつけ、剣呑な眼差しで切り込んだ。二人の間に火花が散る。

「頭を冷やせ。相手は丸腰だろう」

「こんな鬼畜、生かしておいても害なだけだ！」

吐き捨てるように言い放った明睡に、オウランはふん、と鼻を鳴らした。

「・・・貴様の上司は公開鬼畜らしいぞ」

「大きなお世話だ！」

むしろ、萩波は別格だ！

鬼畜の中の鬼畜！　むしろキングオブ鬼畜なんだから！　鬼畜もあそこまで突き詰めればいつそ天晴れ！

「・・・お前、それ、褒めてるのか・・・？」

「無論！俺は王を尊敬している！命だつて捧げて少しも惜しくないぞ！」

その答えにオウランはすこし頭が痛くなった。

・・・葬るべきはどっちだろう・・・？

究極のロリコンか、救いようの無いシスコンか。

シスコン・・・ああ、もう一人厄介なのがいたな・・・と、オウランは思った。

妹の魂を追いかけて、現世まで魔族引き連れてやってきた、非常識な奴が。

「害、か。だが・・・あの技術、技量は一考察の価値がある」

とりあえず・・・榊と言ったか？　奴が俺に教授し終わってから、煮るなり焼くなり好きにしろ。

「貴様・・・！」

「何。そいつの言うとおり、俺が使う相手もたった一人だ」

「・・・もしもーし。誰に使うツモリデスカー？」

チヒロが棒読みで呟いた。激しく逃げなきやいけない気がする・・・。
。何だろう、この悪寒。

こつちを振り返り、につこりと笑ったオウランの口元が、いじわるく上がったのをチヒロは見た。

「・・・オ・・・オウラン？」

「愛が深まるそうだ。・・・楽しみだな？チヒロ・・・」

ぺろりと赤い舌先が唇をなぞるのを見て、チヒロは遠い目をしてしまった。

とりあえず、榊の命は守られたようだ。

・・・ちなみに。

「ウフ。ウフフ。かじゅ・・・カワイイ」

「んーんんんー」

絶賛亀甲縛り体験中の果堅は、いまだに玉英の腕の中。

玉英プレゼンツの濃厚な口付けと、淫靡な指使いで腰が砕けていた。

・・・あれ？

萩波、間に合わなかった・・・？
いえいえ。

はるか階下から、駆け上る足音が聞こえて来た。

だんっ！ と地面を踏みしめる音と共に、萩波が現れた・・・が。

前屈みでその場にくず折れた萩波の姿を、明睡でさえ予想できなかった。

「しゅ・・・王っ！」

血相変えた明睡が見たものは。

己が主が掲げた右手。

その親指は紛れもなく、びしつと天を指していた。

「玉英・・・よくやった・・・！」

・・・萩波。

・・・称えて、どうする。

愛と正義のひろー！ 8・・・さくら書く

「ここにいたのね、朱詩！」

茨戯は鼻歌歌いながらそぞろ歩いている朱詩を見つけた。

「明睡が血迷っちゃって、現世に降りちゃったのよおっ！ ちょっ
と行って引つ張ってきてくれない？ できれば王も！」

きつと周りに多大な迷惑かけてるに違いないんだから！

まくし立てるように言葉を並べ立てた茨戯の美々しい顔を見て、
きよとんとした朱詩だった。

・・・が。

「やだよ、面倒くさい。俺、これから厨房に行くんだから」

茨戯は朱詩の持つている袋に目を留めた。そういえば、そろそろ
昼時だ。

「・・・あんだ、また・・・」

「なに？ 茨戯ったら、人の恋路、邪魔する気？」

にしゃあゝと笑う。

その人を食ったような顔に、さしもの茨戯もぐつと息を詰まらせ
た。

「そんなことしないで、正々堂々告白しなさいよ！」

「いつかね」

「朱詩！」

なんでこうもネジくれて臍が三十回転位した拳句、元の状態に戻
ってんのかしらっ！

「~~~~それは私が厨房に届けておくから、あんたはさっさと現
世に降りなさい！」

「~~~~ちえ・・・じゃ、ちゃんと食べさせてよ？ 入れなかつ

たって分かったら、次からこの倍量いれるからね！」

「小梅を、大梅にする気が、貴様！」

「だってそうでもしないと、他の男に持っていかれちゃうもん。

小梅はちっちゃくて可愛いし、健気だし、かと思えば上層部にだって言いたいことはちゃんと言える貴重な人材なんだよ？ 笑った顔なんか見せられた日には、なに？ 小梅のくせに俺のこと誘ってんの？ って勘違いするくらい、可愛いのに」

任務で何日もここを離れる俺の身にもなってよね？

それでなくてもこの顔と体のせいで、男として見てもらってるか分からないってのにさ。

仕事に明け暮れてる間に、好いた女を奪われてました！ なんて失態は起こしたくないんだよ。

「・・・小梅の良さを知っているのは、俺だけでいいんだ」

あいつの可愛さも、あいつの笑顔も、泣き声も、怒鳴り声も、視線も興味もすべて、意識する全てが俺の事だけで、埋まっていたらいい。

「小梅の目に映る、男なんか、いなくなれば良いのに」

小梅に目をつけた奴は全部俺に夢中にさせてやるけどね。

「だって、俺は小梅に触れられないのに、他の奴らが触れるなんて、不公平だろう？」

「朱詩」

茨戯の心配そうな顔を間近で見つめて、朱詩は笑った。

「・・・ま、茨戯だってさ、葵花が他の男のものになったら・・・」

「

その瞬間繰りだされた拳をひよいと交わして朱詩は笑った。

「・・・ほら、わかってるじゃないか・・・」

魂が求めている、たった一人に振り回されて、いる事を。

「いいさ。葵花に免じて降りてやるよ。首根っこひっ捕まえて、引きずって来れば良いんだろ」

だから、小梅、よろしくね？

そう言い捨てて厩国を出て来た。明睡と萩波を見つけたら、連れ帰るつもりで、サ。

「・・・うーん・・・」

なのに、なんだろう、この、力の抜けまくった争いは。

・・・明睡は人間の男を切り捨てようと追い掛け回してるし。

「くっ、この、おとなしく刀の錆になれえっ！」

「嫌です。そんなの御免こうむります。なにせ、私にはお嬢様を幸せな花嫁にするという使命がありますからね！」

緊縛の花嫁なんて、最高でしょう？

「くっ！ この、腐れ外道！」

「嫌ですねー。シスコンには言われたくないですよ！」

・・・萩波は絶賛亀甲縛り中の果堅にノックダウンされて下半身がえらいことになってるし、引き止める明燐と熾烈な戦い繰り広げてる。

「そこをどきなさい！ 明燐！」

「どきませんわ！ どいたら最後、果堅に襲い掛かるおつもりでしょう？」

「妻がこんなおいしい状況で、文字通り吊るされてるのに、頂か

ない夫がいると思いますか？」

「・・・そこは自制するべきでしょう！」

・・・玉英サマはいつもより多めにどっか行っちゃってるし・・・。

「ウフ。ウフフ。ししよー、コノママコウスレバ・・・」

「あら、かわいい」

にこにこほんわり。

春の日向ぼつこのような表情で、白い衣装に身を包んだ少女が二人。なんだこの二人。

だけど施すは緊縛。しかも何気に玉英さんたら・・・。

「だ、だめっ！ 紐パンさっき解かれてるの！ こ、これ以上広げられたら・・・！」

「~~~~カワイイッ！」

羞恥に身悶えして叫ぶ果堅に、玉英が抱きついたので、せーふ。

・・・ところで、玉英サマ。

「ししよー、ってだれ？」

朱詩の問いに答える人はいなかった。

でもまあ、いいや。

朱詩は状況を目いっぱい楽しむことに決めた。

楽しいことは好きだ。

こんなに生き生きと駆け回っているなんて。

「小梅も、連れて来れば良かったかな・・・？」

ついでに、あの縄業使って小梅こそ縛ってみたい。

大体この場にいる男たち、自分の女以外は興味ないみたいだし。

ある意味、ものすごく安全で、安心して小梅「で」遊べたみたいだなあ・・・。

手の中には、ここに来る前さんざん店員を脅して値切らせた、高性能ビデオカメラがある。

「ふふふ。家電芸人飼いならしておいて良かった・・・」

朱詩は自分の魅力を活用し、最高級のカメラを手に入れていた。

「珍しいよね」。天界の神人と、魔族と、天使が一堂に会している。それに、神と同等に渡り合える力を持った忠人なんて、さ・・・」

明睡の技は、伊達ではない。

命がけで戦って、命がけでもぎ取ってきたものなのだ。

それをあかも容易く交わされちゃ・・・。

「立つ瀬ないよね、明睡？ でも・・・ほっといてもいいよね？」
命にかかわる邪気は無い。

王にも果堅にも、明燐にも、玉英にも、だ。妹命のいつちゃった
感じの明睡は置いておくけど。

むしろ本気で相手を消しにかかっているみたいだけど、別にいつもの事なのでいい。

「みんな、楽しんでるじゃないか」

茨戯が見たらキレるかもね。ものすごく心配してたのにな。

ま、いざとなったら、毒でも何でも仕込んでやるから、せいぜい
奮起しておくれ。

朱詩の思考回路はどこまでも物騒で、無邪気なまでに残酷だ。

「明睡は放っておいて・・・果堅の姿を残そうっと！」

あんな見事な緊縛術。

もろもろの色事に長けた自分ですら惚れ惚れするほどの、緊縛術
に、朱詩は惚れこんだ。

「うーん、縄に愛がこもってる・・・」

あんなふうに縛られたら、身も心も縛り上げられて相手の言いなりになっちゃうだろう。

過去自分に縄を打った奴らの中に一人でもあんなふうにくを縛り上げた奴がいたのなら、今頃自分はそいつの物になっていただろう。

恐怖を煽るために縛りつけてきた奴らには、到底分からないことだろうがね。

実際。

果堅の表情は艶かしさを湛え、いつも元気な大根王妃が、今じゃすっかり淫美だ。

あの果堅がだよ！

あの果堅すら、とりこにした（してないしてない）縄術。

小梅で試したら・・・。

「あ。やべ」

・・・少し、疼いてしまった。

「ふうん。このボクを惑わせるなんて、なんて緊縛技だ・・・これはずひともビデオに収めとかなきゃ・・・」

朱詩による、縄術解説のための、資料集め（ビデオ撮影）が始まった。

誰のための記録なのか知ったら。小梅はきつと家出する。

「・・・ほう。では、ここを？」

「はいそうです」

「これはこつちかな？」

「あ、そうです」

青銀の魔王の問いかけにふんわりと微笑んだ雪那は、次いで尋ね

たオウランにも丁寧に応じていた。

「皆さんとてもお上手ですね！」

彼らの手元を見て取って、雪那は頬を染め、微笑んだ。

秀麗な美貌を誇る男たちが、自分の友人を手際よく縛り上げていくのを見つめて、雪那は感嘆のため息をついた。

・・・愛に満ち溢れている！

「ああ・・・。恵美ちゃんも、ちいちゃんも、愛されてるねえ・・・」

ため息を吐くように零れた言葉に、男性陣が反応した。

「無論」

私は恵美を全身全霊で愛している。

「あたりまえだ」

チヒロはかけがえの無い人だからな。

「わあ、熱愛・・・」

雪那は感極まったように身を震わせた。

・・・が。

「雪那ああああっ！！！！それなんか根本的に間違ってるからっ！！」

理恵が修に回し蹴りを食らわしながら叫んだ。

「そもそも、縄が無くても愛は語れるわ！」

重心を戻し、流れるように回転しながらひじをみぞおちに食い込ませる。

「おぐうつつ！愛がイタいつ！」

「やかましわ、ロリコン！」

じゃんぴんぐに―どろつぷ、炸裂。

足蹴にされるたび、ゾンビのように立ち上がる修は、むしろ乙女

の敵にしか見えない。

手の中の縄が無くたって、認定外道だ。

「理恵たんっ！ こわがらないで！ 痛くないように縛ってあげるから！ 貧乳が寄せ上げて盛り上がるように綺麗に縛って、あげるからっ！」

「いらんわー！」

渾身の回し蹴りが決まって、修がゆっくりと倒れていく。

だがその表情は至福。

「・・・理恵たん・・・ふふ・・・白地にピンクの花柄レース・・・
・そこも可愛く縛ってあげるのに・・・」

スカートの中を脳に焼き付けて、変態が目を閉じた。

目を覚ます前に股間の滾ってるものを、つぶしておくのが一番かもしれない。と理恵は思った。

・・・ちなみにその頃のレミアはというと・・・。

荒縄で縛り上げられてる、恵美を見たたん、鼻血噴出し再起不能になっていた。

「・・・使えぬの・・・」

「・・・なにこの、純情君・・・」

「レミア・・・」

・・・魔王執務室では居残り組のリアナージャが鏡を前に、目を細めて呟いた。

アマレットイが頭を抱えて呻き、レイ・テッドが天井を見上げた。

「うぬう・・・ちいとばかり過保護に育てすぎたか？」

「あれで夜の眷属・・・育て方間違ったか？」

「あの程度のお色気・・・と、言いたいところですが、夜の眷属だからではないでしょうか、お方様がた」

もし、もしですぞ。

目の前で嬢様の縄ドレス姿を披露されたら・・・。

「吹くな」

「吹く」

竜族の長と獣族の長は即答した。

・・・恵美の艶姿なら仕方がない。

女神というだけではなく、夜の眷属でもあるのだから。

「理恵殿が逃げて正解でしたなあ・・・」

理恵殿まで縛られていたら、今頃レミレアの理性は跡形もないでしょう。

「そうじゃなあ」

「そーだな」

淫魔族の力を發揮して、意のままに操っているはずだ。

「・・・ま。アルファレンが居るから、たいしたことは出来ぬがなあ・・・」

「はは。まったく」

そのうわさの魔王様はといえば。

「に、にい、さ・・・ああ・・・」

恵美の瞳が戸惑いに揺れる。

その瞳に優しく微笑んでも、アルファレンの手は止まらない。やさしく丁寧に、拘束していく。

それでも身をよじる娘に、時折耳元で何かをささやけば。

真っ赤になった恵美が瞳を揺らし、やがて目を閉じた。

「・・・いい子だ。恵美・・・」

満足そうに微笑んで、青銀の魔王は娘を戒める縄を引いた。

「あんっ」

思わず飛び出した喘ぎに、瞬間、目を見開いた娘が、恥らうように目を伏せる。

愛しい娘を胸に抱きながら、魔王は優美に口元で弧を描いた。

・・・実にこの状況を楽しんでいた。

そこで、もう一人の当事者。

「ちよっ・・・、ちよつと待って、お、おうらん！」

じたばたと往生際悪く暴れるチヒロだったが両手をとられ、後ろ手に拘束されてしまった。

決してきつい戒めではない。

何しろ拘束しているのはオウランだ。

細心の注意で怪我しないように、傷が残らないように心を配りながら行っていることはすぐ分かる。

・・・なら、しなきゃいいじゃんっ！

涙目になりながらそんなことを考えていたら、明睡との戦いの合間に榊が。

「あ、オウラン殿。目隠しもなかなかのアイテムですよ？ 涙目を凝視すると心が揺れちゃう方には最適です」

「そ・・・そんな情報いらないよおっ！！！」

チヒロが涙目で叫んだのを間近で見てしまったオウランが、ぐつと心臓わしづかみ！ になったのは仕方がない。

「・・・く。このままじゃ、理性が吹っ飛びそうだ」

いや確実に、飛ぶ。

それほどに縄のドレスが似合っていた。

なんだこれ、絶妙じゃないか！

「え、オウラン、大丈夫？」

なのに、お前は心配そうな顔で、小首を傾げるもんだから……。

「……今日はここまでだ。これ以上は俺が持たん」

「……はい？」

さつさと縄をほどかれて、チヒロはオウランにいつものように抱き上げられた。

……いつものように、俵抱きだ。足が地面に届かない。

玉英と戯れている雪那に向かってオウランが話しかけた。

「雪那殿。この縄、頂いてもよろしいか？」

材質といい、より方といい、絶妙だ。縛っても肌に擦れひとつ残さない。すばらしい。

「あ、はい。どうぞー」

赤いので良いですか？ ピンクのもありますよ？

……などとずれた事を呟く雪那に。

「感謝する。次に訪れる時は土の精霊を伴おう。貴方の農地に祝福を与えてもらうために」

「わあ」

オウランが瞳を輝かせて、礼をとった。チヒロもオウランの肩の上で必死だ。

このまま帰ったら、まずいことになりそうだ。

と、言うか、なる。

絶対、なる！

「オ……オウラン、おろし、て」

「では、また」

それに答えて雪那が優美に礼をとった。

金色の渦に消えていく二人を見つめる雪那の後ろでは、明睡と榊の熾烈な戦いが、続いていた……。

あ。

明燐と萩波の戦い？

やっぱりね、腐っても（げーふげーふ）王。

「ア、オニイさま、ズルイイ！」

「さ、果堅、このままタワーデートしましょうね！」

明燐に手刀を入れて気絶させた後、見事な手際で玉英を縛り上げ……。

「朱詩！」

「え、俺？」

ぽすつと玉英と明燐を手渡された。

「じゃっ！ わたし、急ぎますから！」

果堅と転移する間も、萩波は無駄に色気を振りまいていた。

残された魔王様も恵美を抱き上げ、転移する前に一言。

「よほど、果堅妃にアテられたようだな。果堅妃も、罪な娘よ」

まあ、あの縄姿では、仕方がない、か……。

さて、恵美。

「夜は、長い」

今宵は私の腕の中で、花開くが良い。
孤高の魔王はうつそりと、微笑んだ。

愛と正義のひーろー！ 8・・・さくら書く（後書き）

・・・そんで手渡ったビデオが、これだった、とか・・・。
ひーろー物が怪しい緊縛物になってしまいました・・・。

愛と正義のヒーロー！ 勝手に後日談・・・大雪様著（前書き）

今回贈るお話は、愛と正義のヒーローの後日談？ 果豎は出て来ません。蒼麗と蒼花が出てきます。

愛と正義のヒーロー！ 勝手に後日談・・・大雪様著

双子の妹が一本のビデオを持ってきた。

「お姉様、これ凄く楽しいって噂よ」

「大根マン……って、何？」

「愛と勇気だけが友達のパン擬人化ストーリーに似た話じゃありません？」

愛と勇気だけが友達の主人公

その主人公は、優しい笑顔でどんな手段を用いても自分の顔を食べさせるその自虐的趣味から、世界のDMの名を勝ち取っている

「……いや、なんか心温まる素晴らしいストーリーじゃなかったっけ？」

「お姉様ってばお茶目さん！ パンを戦闘用に擬人化させた生物兵器のお話に決まってるじゃありませんか」

何故だろう？

妹の笑顔を見ると、違うと否定出来ない

「生物兵器……」

「それも顔が命の生物兵器ですね。何せ雨で顔が汚れただけでアウトですから」

「……で、この大根マンも同じなの？」

やはり顔が濡れたら駄目なのだろうか？

あれ？こう考えると、やっぱり顔が命なんだろうか？

「何でも大根マンはそれとは違うものらしいですわ」

「ふん」

面白そうと、ビデオデッキに妹の借りてきたビデオを入れて再生ボタンを押す。

舞台は変わって、ここは七宮家。

その縁側で、雪那は榊の入れてくれたお茶を飲んでいた。

「そういえば榊」

「何でしょう？」

「果堅ちゃんと一緒に演じた大根マンのビデオってどうしたの？」

「ああ、あれは勿論私の大切な宝物として金庫に入れております」

何せ、お嬢様の素晴らしい縄ドレス姿をあちこちにちりばめ、散々快楽に酔わせまくった姿が映し出されているビデオ。

数本はアルファレーンやオウランに奪い取られたが、残りはきちんと確保している。

ビデオには、アルファレーンやオウランがそれぞれ愛する少女と、あんな事や、こんな事をしている姿も映っている。

しかし自分が見たいのはお嬢様の艶姿。

紅い縄に包まれ激しく乱れる姿以外目に入らない。

おっと！お嬢様の縄姿を思い出していたら下半身が

「お嬢様」

「なあに？ 柵」

「縁側で乱れるのも一興ですね」

「柵」

頬を赤らめる雪那に、柵がずっと赤縄を取り出す。

さあ、その白い裸体を美しく縛り愛らしく鳴かせるのだ。

「さゝかゝき」

まるで地獄の底の悪鬼の如き声音に、柵は雪那を庇いながら振り返る。

そして、ぱとりと赤縄を取り落とした。

「こ、これは、蒼花様、突然どうなされました」

戸惑ったのも一瞬。

すぐに完璧な執事モードで出迎えるが

「なんつゝもん作ってるのよこの馬鹿ああ！」

そうして繰り出された拳に柵が吹っ飛ぶ。

「柵いいいい！」

「この馬鹿執事！ よくも私のお姉様にこんなビデオを見せたわね！」

「っ……い、一体何を」

神に殴られても五秒で復活。

既に人間の限界を超えた榊は、蒼花が突き出すように差し出したビデオに目を向けた。

それは、蒼花に渡したビデオだった。

「大根マンのビデオではないですか」

それは編集に編集を重ねて作り上げた、正真正銘の普通の戦隊物。十八禁的なシーンは全て取り払い、子供が見ても大丈夫なものに作り上げた。

「これのどこがよー!」

そう叫ぶと、蒼花は部屋の奥にあるビデオデッキめがけて走り出す。

そして優雅とすら思える動きでビデオを投入し、再生ボタンを押した。

途端に流れ出す、雪那の甘い声。

赤縄に彩られた白い裸体が乱れ狂う様は、扇情的かつ背德的だった。

一人の男に狂わされていく美少女の艶姿は、正しく極楽浄土の天女を思わせた。

「さ、榊っ!」

「っ!これは編集前の!」

そう それは編集前の大切な大切なお嬢様のビデオ。
何故蒼花が持っているのだ。

しかも、それにはやはり編集前で最初から最後まで撮った、アルファレンやオウランが愛する少女にあんな事やこんな事をする映像も入っている。

「蒼花様、それは危険です、すぐに私に下さい！」

どうやら、間違えて蒼花に渡してしまっただけらしい。

「この馬鹿執事！ こんなものを私に渡すなんて信じられないわ！ あんたのせいでお姉様が倒れちゃったじゃないのよ！」

「そ、蒼麗ちゃんに私のおんな姿が……って、どうしましょう……見られた筈なのに、体が熱くなつて……榊、私なんてはしたない」

「お嬢様、そんな事はありませんよ！ ああ、流石は私のお嬢様！ 人に見られて高ぶるといふ第二段階にいつの間にか進まれているんですね！ 大丈夫、この榊が優しくお嬢様を導いて差し上げます」

こいつら殺す

蒼花は本気で思った。

幾ら唯我独尊な蒼花であっても、ある程度の礼儀や常識は弁えている。

間違つても、姉に十八禁指定ビデオ、しかも縄や鞭を使うようなマニアックなビデオなんぞ見せない。

姉は大人への階段を一步上らされてしまった。

「この馬鹿執事いいいい！」

「蒼花様、そうやって人は大人になっていくものです」

開き直った榊に怖い物はなかった。

寧ろ早く蒼花に帰ってもらい、すぐさま愛するお嬢様を快樂の世界へと導きたかった。

「ふふ……この私を怒らせた事を後悔するがいいわ！」
「何を！」

蒼花は怒っていた。

本気で怒っていた。

勿論、報復するのはこの執事だけではない。

某魔王と某異世界の王と、某国の公開鬼畜王とその妹にもきつちりと報復する。

まあ、公開鬼畜王の妹は、しばらく果豎と引き離せばそれですむだろう。

蒼花の中で華麗なる報復計画が組み立てられた。

「つて事で、えいつ！」

「きゃっ！」

雪那が光に包まれる。

慌てたのは榊だった。

「お嬢様！」

「ふんっ！地獄の一週間を過ごすが良いわ！」

そう叫ぶと、あっという間に姿を消した蒼花。

しかし榊は気にせず雪那を抱きしめる。

既に光は消え、見たところなんともない。

「お嬢様、大丈夫ですか?!」

「え、ええ」

「怪我はしていないようですね……」

良かった

しかし、柗はこの後に待ち受けている地獄に気づかなかった。
無事にビデオテープを回収し、何の傷もついていない事を確かめると、すかさず赤縄を取り出した。

「お嬢様……」

「柗……」

そつと頬に触れ、その体を優しく縛ろうとした時だった。

「うっ!」

「お嬢様?」

「き、気持ち悪い!」

そう言うと、雪那は柗を突き飛ばしてトイレへと走る。

慌てて柗が追いかければ、雪那が嘔吐しているのが分かった。

しばらくして出て来た雪那に柗が触れるが、その途端またトイレに逆戻りする。

まさか

その時、はらりと柗めがけて一枚の紙が舞い降りてくる。

『馬鹿執事へ』

お姉様にとんでもないものを見せた報いとして、一週間雪那に触れられない術をかけました。触れる事は出来るけど、触れたら雪那が吐き気をもよおすようにしました。お嬢様命の貴方なら、苦しむ雪那を見てそれ以上触れられないはずよね？ 本当はボコボコにしたけれど、お姉様が泣いて止めるからやめておくわ。一週間地獄の苦しみを味わえばいいのよ。じゃあね。 蒼花より』

「くっ！蒼花あああああ！」

叫びも虚しく、本当に一週間雪那に触れられなかった榊は、真っ白に燃え尽きていたという。

榊の中で、蒼花は怒らせてはいけない人物のトップに躍り出ることとなったのだった（合掌）

終わり

『家事は凶器?』・・・大雪様著（前書き）

こんばんわ、さくらさくらさくら様

大雪です。オリキャラが二人出てきます。

因みに、本編はこの二人の方が出張るかも

（笑）

というか、主人公？

すいません、こねくりまわしすぎて（滝汗）

オリキャラの名前の読み方

境木 希子

灰

『家事は凶器?』・・・大雪様著

いつも仲良し双子の姉妹　　恵美と理恵

彼女達は目の前の少女の所行に同時に溜息をついた

「「もつと早く止めるべきだったね」」

寧ろ今日の前で起きた事は夢だと思いたい

「むう～～」

昔から　　というか、数日前からしか記憶がない現在記憶喪失の身だが、ここまで出来ないとは思わなかった。

洗濯機から溢れ床中が泡だらけとなった光景に、それをやらかした当の本人である境木　希子は、言いようのない悔しさを覚えた。

「ここに書かれてるとおりにしたのに」

「「してないしてない」」

恵美と理恵は見ていた。

確かに最初は洗剤の箱に書かれていたとおりにしていたが、途中から面倒くさくなって洗剤を一箱分入れた事を。

「恵美」

「理恵ちゃん」

二人は溜息をついた。

今になって灰の言っていたことが嫌というほど分かった。

「あゝっ！何してるんですか！」

「灰さん」

そこに現れたのは、希子の同行者である灰だった。

地味な容姿の希子に、分厚い眼鏡をかけ首筋で長い黒髪を一本に縛っただけの青年 灰。

二人とも、平凡と地味が服を着て歩いているような人達だった。

但し、家庭的でおっとりとした灰は家事洗濯の達人。

一方、希子はその逆で家事洗濯がある意味凶器となる達人だった。

「だから希子は手を出さないで下さいって……言っただけどね？！」

「自分の服ぐらい洗えるわ」

「その結果、着れる服がなくなっただじゃないですか」

洗剤一箱分入れて洗った希子の服は当然の如く、大量の洗剤がこびりついていた。

しかも完全に固まってしまった為、今温水で溶かしている最中だ。

「大丈夫、三日ぐらいなら変えなくても平気」

「女の子としてアウト発言ですよそれはっ！」

「そうよ、それはまずいわ」

「せめて下着だけでも変えなきゃ」

理恵と恵理も灰を応援するように希子を窘めた。

「でも、ないもんはないし」

「なら、買いましょうよ。幸いなことにこの客船には服屋が色々ありますし」

それもその筈。

お嬢様命の榊がお嬢様の船旅の為に用意した（勿論、他の一般客も大勢乗っている）この船は、全てにおいて超一流。
店も多く、ここで手に入らないものはないとさえ言われるほどだった。

「ここのはやだ」

「どうしてですか」

「全部勝負下着だし」

しかも、殆どのサイズは某影の総帥が愛するお嬢様のサイズだし

「所詮貧乳は立ち入り禁止なのよ」

「希子……」

「希子ちゃん……」

真つ平らではないが、真つ平らに近い胸元をペタペタと叩く希子に理恵と恵美はかける言葉が見つからなかった。

「希子の被害妄想ですよ。たとえ九割九分九厘はそのサイズしかなくても、残りには希子のささやかすぎる、寧ろ正確なサイズを測る

のも躊躇われるような胸にもあうサイズはあると思うよ」

鬼だこの人っ！

いつもはホケホケばやばやとしたおっとりな灰だが、時折毒舌になる事を知っていた理恵と恵美にもその発言はあまりにもイタかった。

「……そもそも買っお金ないし」

しかし、そこで灰の胸ぐらを掴まない希子は大人だった。

まだ十七歳だというのに、その大人の対応に双子の姉妹は心の中で涙ながらに拍手した。

一方、見た目も大人の実年齢27歳の灰はさらりと言った。

「探せば安いのだってあると思います」

「ここの安いは安くないの。灰、この船は豪華客船。私達は普通の庶民。そもそもこの船に乗れたのだって、たまたま福引きがあっただけだもん」

そう、たまたま買い物をした時に貰った福引き券で当たっただけ。他の人達のようにお金に余裕があったわけではない。

「私は大根の苗の方が欲しかったのに」

何が哀しくて『豪華客船世界一周の旅』なんぞあててしまわなければならぬのか。

「仕方ないじゃないですか。他の景品と交換出来なかったんですから」

灰とて交渉はしたが、向こうは突然の幸運にパニックになっているだけだと思っただけ、最後には強引に景品を押しつけてきた。

まさか顔面に叩き返すわけにもいきまい

「まあ……まさか僕も希子が記憶喪失になるとは思わなかったですけど」

「だよな〜」

そう　それは今から三日前の事だ。

階段から落ちた雪那を自分が助けたいが、その代わりに自分が階段の下まで落ちたらしい。

幸いなことに無傷だったが、頭を打ったのか記憶だけが飛んでいた。とりあえず覚えていたのは、自分の名前と、この同行者である灰の名前だけだった。

「もう一度頭を打てば治るかも」

「恵美、それだともう一度階段から落ちちゃっていつてるようなものよ」

かなり酷いことを言っている二人。

しかし、その裏で二人がとても心配しているのは分かっていた。何せ、自分が記憶喪失になった時、この二人も居たのだから。

それに、あの少女達も

その時、カチャリと音を立てて部屋の扉が開いた。

扉の影からひよこりと頭を出したのは、黒髪の髪に勿忘草色の瞳をした少女。

「果豎」

「希子ちゃん、お話は終わりましたか？」

まるで小動物のような仕草に、理恵と恵美が胸きゅんしたのを見逃さなかった。

その腕に大根のぬいぐるみを抱きトコトコとやってくる姿。

絶世の美少女級レベルの理恵と恵美、そして雪那にはその華麗さ、美しさ、可憐さでは敵わずとも、可愛さでは決してひけをとらないだろう。

但し、それがあの公開鬼畜と呼ばれる人に目をつけられる原因となつたと、某魔王と某影の総帥こと柊は言うのだが。

つて、二人だつて十分に鬼畜だと思うが。

「果豎さん、萩波さんはどうしたんですか？」

「お部屋で他の人達とお仕事してます。あと、蒼麗ちゃんはお部屋でご飯作ってます」

貧乏性である蒼麗は、節約の為に自炊をしている。

というのも、この豪華客船には各部屋にキッチンがついているのだ。但し、コンロはなくオール電化のIHクッキングヒーターだ。

「今日はおでんなんです」

にこにこ言う果豎だが、たぶん入ってる具材は大半が大根だろう。

果豎の大根好きはこの三日で希子も嫌というほど分らされていた。そして、蒼麗が果豎のおねだりにまける事も。

「じゃあ、私も何か手伝いを」

瞬間、灰がガシツと希子の頭を掴む。

「マジでヤメテ下さい。台所から火が噴き出します」

「コンロないし、クッキングヒーターだし」

「この前電子レンジを発火させたのは誰ですか」

「希子、早まるのは良くないわ」

「そうだよ、希子ちゃん！まだまだ人生楽しまなきゃっ」

「大丈夫、人間やれば何とかなるから」

ならないしっ！

しかし、そんな彼女達の叫びも虚しく希子は彼らの隙を見ては家事洗濯を行ったという。

そしてその運命の日も

ガァァンっ！

「あ、すいません……ってこれ何？」

吹っ飛んだ鍋の蓋。

それが、いつの間にか部屋にいた見知らぬ男の顔面にヒットする。しかも、その男の腕には気絶した恵美。

「……………ま、恵美にあたらなかったからいいか」

実はとっても良くないが、実はその男が『常夜人』であり、『蜜華』の一人である恵美が攫われかけていたと知ったのは、その五秒後に訪れる某魔王様達によってだった。

終わり？

『家事は凶器?』・・・大雪様著（後書き）

知らない言葉が色々と出てきましたが、ここで明かすとネタバレになってしまうので……。

意味不明なものではありますが、暇つぶしにでも読んで頂ければ幸いです

以上大雪様のコメント抜粋。

うふふふ、ちなみに続くんですよー！さくらうれしくて踊ってます！

『料理は兵器』・・・大雪様著（前書き）

先日の某パンマンの感想を！！

果堅　その姿を見てみたいいいいい！！

という位に、大根マンの衣装を着た果堅の描写に思わずパソコンの前でもんどりうってしまいました！！

でも私にはそれを絵にするだけの力がないという……誰か描いて下さいと叫びたいぐらいです！！・・・以上大雪様コメント抜粋。

・・・んで、大雪様の許可をいただけたと言うことなので！

先日の某パンマン衣装を着た果堅のイラスト激しく求む！

さくらも絵師様、激しく望みます・・・。

『料理は兵器』・・・大雪様著

「がはあっ！」

極限まで見開かれる瞳

口から流れ出る大量の唾液

喉をかきむしり、うめき声が漏れる

そしてそのまま彼は倒れ動かなくなった

魔界の偉大なる魔王暗殺

「いや、生きてます」

泡吹いてるけど

と、蒼麗が美貌の冷酷魔王たるアルファレンの口に解毒剤を流し込む姿はどう考えても色々とおかしい。

そんな彼の手から、半分残ったクッキー？がこぼれ落ちた。

それは床へ落ちると、ジュツと音を立てて溶けていった。

その時点でどう考えても食べ物ではない

「凄いですね……この毒性、しかも無味無臭。裏市場に出回れば多くの方達を暗殺できます」

そう言つて蒼麗から太鼓判を押されたクッキーだが、今のが最後ではない。

まだ机の上に沢山山盛りとなっている。

「今回は上手くいったと思つたのに」

「希子、だから作るのはやめろつて言つたよね？」

その殺人クッキーの創作者である希子に灰は強い目眩を覚えた。

「つてか、何を入れたのよ希子さん」

理恵の質問に希子がうーんと考えながら材料を一つずつ呟いていく。

「小麦粉と砂糖と塩と」

うん、そこまではいいだろう。

「刺激的な味にする為にハバネロ千個」

もはや人間の食べ物ではない！

いや、それどころか全種族にとっての食べ物ではないだろう。

恵美に良いところを見せようとした魔王様の鋼鉄の胃袋を打ち碎いたのだから。

さすがは希子

彼女の家事洗濯は下手な伝説の剣よりもほど破壊力がある。

たぶん、勇者一行なんぞより、希子一人で乗り込めばあつという間に魔王城は壊滅するだろう。

「とにかく廃棄です」

そう言つて、灰はそれを火にくべていく。

「く……海に投げ捨ててしまえ」

蒼麗特性の解毒剤にてようやく意識を取り戻したアルファレン。いつもとは違い、その憔悴しきった面差しにアマレッティとリアナージャが心から心配する。

「海はダメですよ」

灰が魔王様に反論した。

「なんだと？」

「よく考えて下さい。海の生物が死滅するじゃないですかっ！」

希子以外の全員に衝撃が走った。

「しかも希子の料理の毒性は半永久性なんです！たとえ食べたのが一部の生物でも、それをまた食べた別の生物が死に、それをまたという風にどんどん積み重なっていく！そして食物連鎖の頂点に

立つ生物はその毒性によって魔物よりも恐ろしい化け物へと変化する筈ですっ！」

それはもはや人間界のどんな兵器よりも恐ろしい物質。

「なんて事だ……」

がくりと頂垂れるアルファレン。

しかしその横顔は頂垂れていても酷く麗しい。

「ちょっと刺激的な味をプラスしただけです。他には……手が滑って洗剤いれましたけど」

手が滑って？！

「でも、良い匂いの洗剤だから風味付けにいいかなって」

因みにその洗剤は

塩素系漂白剤

「それだけじゃないだろ。他にも絶対に色々と入れた筈だ。オーブンに入れた時に暴れまくった挙げ句、思い切りクッキーと目があったしまったんですからね」

止めるよその時点ですっ！

しかもクッキーと目があった？！

「灰、疲れてるんだね。クッキーが暴れるわけないじゃん」

確かにそこは希子の言うとおりだろう。

クッキーと目が合うなんてそんな馬鹿な事

リアナージャは触るのも嫌だったので、クッキーの山に視線だけを向けた。

やる気のない死んだ魚のような目がリアナージャの視線とかみあう。

「……………」

「うわっ！リアナージャ様どうしたの？！」

突然しがみつかれたばかりか、ぶるぶると震えるリアナージャに果豎はクッキーの山に目を向ける。

「何もないみたいですけど……………」

「あれじゃないですか？心の綺麗な人だけにしか見えないパターンの」

なら魔族であるリアナージャには当然見えない筈だ

なんていう突っ込みは、果豎と蒼麗には通用しなかった。

「上手く出来たと思ったんですよ。だから、船員の方達にも配つて」

「逃げる船員どもっ！」

それまで固まっていた榊が愛するお嬢様を抱きしめたまま、携帯電話に向かって叫ぶ。

なんて事をしてくれたんだ

んな事したら誰がこの船の舵を取るんだ

というか船が沈むっ！

「大丈夫ですよ、海は私の支配が及びますから」

寧ろ支配下である凧国国王たる萩波がにこりと笑った。

「そもそも、料理は新しいものを生み出す技の一つと言われてるし」

それを通り越して新しい兵器を作り出した

「というか、魔王様は弱すぎます」

「なんだと?!」

希子に弱者呼ばわりされたアルファーレンを中心に怒気が渦巻く。
しかしそれをものともせず希子は言った。

「世界最強の魔王でありながら、たかだか人間が作ったクッキーを消化できないなんて事がある筈がありません！本物の魔王なら美味しく食べてにつこり笑えます！出来ないなんて、エセ魔王だからですっ」

エセ魔王

偉大なる世界最強にして最恐たる美貌の魔王をエセ呼ばわりした希

子に、アルファレンが衝撃を受ける。

「凄いわ」

「世界の魔王陛下にあんな事が言えるなんて凄すぎます」

理恵と恵美がごくりと唾を飲む。

もはや希子は全人類を超越した新人類と言ってもいいだろう。

「くっ！私はエセなどではないっ！本物の魔王だっ」

昔は特に王の地位になど拘っていなかったアルファレンが、この時初めて魔王の地位に拘った瞬間だった。

「あ、まって！」

心優しい恵美が止めようとするも、それよりも早くに机の上に載っていたクッキー皿を奪い取り中身を猛スピードで食べきる魔王様。その食べ方は高速ではあったが、思わず見入ってしまうほどの品と美しさがあった。

「アルファレン兄貴……」

「勇者じゃ……お主こそまことの勇者じゃ」

互いに涙を流しながらアマレッティとリアナージャがアルファレンを称える。

というか、魔王なのに勇者と称えられている時点でナニカが違うのだが。

「ふっ……」

最後の一枚を口の中に放り込み咀嚼する。

食べきった

これで自分は

その後、アルファレンが意識を取り戻したのは医務室のベッドの上。

しかも一週間経過した後の事だったという

境木 希子

魔王すらもICU送りにする彼女の家事洗濯はもはや人類の最終兵器かもしれない

終わり

『料理は兵器』・・・大雪様著（後書き）

希子さんのクッキーは、黒光りして飛ぶやつに対する最終手段ではなからうかと・・・。魔界の魔王様を再起不能に出来るのだから、Gの付く憎いヤツに効果大では・・・。
ああ、楽しかった！大雪様、ありがとうございます！。

『玉蹴り』・・・大雪様著

希子は家事がダメだ

洗濯も料理も掃除も一切合切全部ダメ

しかし、そんな希子にも特技がある

玉蹴り

「ふむ……運動が好きという事か」

「いや、希子の玉蹴りは」

灰が頷くアルファレンに真実を教えようとした時だった。

向こうから悲鳴があがる。

「っ？！恵美っ」

遠くで、金持ちの馬鹿息子達に囲まれた恵美と理恵が居た。無理矢理つれて行くとする男達の顔は欲望に染まり、いかにもこれからいかがわしい所につれて行きますと全身で物語っていた。

私の宝を

アルファレンはここが海上である事も忘れ、力を解放しようとした

その時だ

ゴス

金持ちの馬鹿息子の一人が床に崩れ落ちる。

ゴスゴスゴス

ドスウっ！

他の馬鹿息子達も次々と倒れていく　股間を手で押さえながら

そうして最後の一人になる

「くっ！それ以上近づくなっ」

「恵美っ！」

「きゃあっ」

男が恵美を盾に相手に怒鳴り散らす。

だが、それは何の意味ももたらさなかった。

「ぐはあっ！」

股間をガードされたら別の場所

恵美よりも身長の高かった事が災いしたその男は、見事に顔面に蹴りを入れられ後ろに吹っ飛んだ。

そしてトドメの

ゴスウ

「ぐはあ！」

股間蹴り

これで当分は使い物にならないだろう

「……………」

黙りこくるアルファレン

もしかして、いやもしかなくとも希子の特技って

「希子の玉蹴りは相変わらず凄いですね」

やっぱり

見事に金持ちの息子達の股間を蹴りまくった希子は、茫然とする恵美と理恵をよそにこちらにすたすたと歩いてきた。たぶん、彼女にとってはとりあえず目の前に不快なものがあつたから蹴り倒して道を作っただけという感覚だろう。

だが……

いまだ床に倒れもんどりうつ男達に、アルファレンは不憫さを覚えて。

「希子って、たとえどんな体勢、どんな状況からでも華麗に玉蹴りをするんですよ」

ぼんやりとしてたら蹴られますよ

眼鏡をかけた顔で微笑む灰にアルファレンはまるで化け物でも見るようなうんざりした様子で言った。

「よく一緒に居られるな」

「慣れてくると可愛いですよ？それに長い付き合いですから」

という事は、慣れる前は蹴られていたという事か

「それはどうですかね」

これでも要領はいいんですよ

そう言う灰の笑みに、アルファレンは薄ら寒いものを感じた。

希子

境木 希子

家事の破壊神たる彼女は、男達の大事な一物も時には破壊する

但し、それは男達が欲望のままにふるまった時だけだが

因みに、その後アルファレンや榊も愛する少女に欲望のまま特攻しかけて見事にその強烈な一撃の洗礼を受けることとなる

そして

「なんでお前だけ攻撃されないんだ」

「いえ、されましたよ。かわしました」

「かわした?!」

驚くアルファールンと榊に萩波はにこりと笑った。

「一応、それでも神なので」

さすがは神

魔王と影の総帥は腐っても神なのだと改めて認識したのだった

しかし 実は萩波が希子の攻撃をかわせたのには理由がある

それは、己が狂っていた時に逃げ出す妻が最終手段として股間蹴りを行った事

その時には見事にその一撃に倒れた事

その記憶から、その攻撃に対して敏感となっていたがゆえに、その素晴らしい学習能力によってほぼ無意識に攻撃を避け切れただけだった

つまり、偉大なる神として一度は必ずその餌食となっているのだった
(合掌)

終わり

『玉蹴り』・・・大雪様著（後書き）

悶絶。

それ以外に何の感想があるだろうか・・・。

『傍観者』・・・大雪様著（前書き）

こんばんわ、そしてお久しぶりです
大雪です。

えっと　またまた小話ですが、書き上がりましたのでお贈りしたいと思います！

今回は、灰が主役みたいな話になってしまって、送ろつかどうしようかと迷ったのですが……宜しければ読んで頂ければ幸いです

ではでは、下からどうぞ

『傍観者』・・・大雪様著

分厚い眼鏡にぼさぼさの髪

身に纏う服はくたくたのよれよれ

髭こそ生えてないしオッサンとも言わないが、その一目見て地味としか言いようのない姿なのに

よくよく見ればすらりとした指先が、手がまるで魔法のように美味しい料理を作り出す

トントンと聞こえる包丁の音が実に心地良い

「もう少しで出来ますよ」

その言葉に、わ〜いと喜ぶのは恵美と雪那の二人だった。

部屋に備え付けではなく、客船の厨房で料理を作るのは料理人ではなく客である灰その人。

普通ならば自分達の聖域に勝手に入り込まれるなんてプライドが許さないだろうが、穏やかで人好きのする雰囲気を漂わす灰に、いつの間にか料理人達もその行動を楽しそうに見守っていた。

「お前、凄く手際がいいな」

「ありがとうございます〜」

料理長も感心するほど、灰の手際は素晴らしかった。

同時に三つも四つも料理を作りながら、巧みな包丁さばきと火加減で次々と完成させていく。

美味しい匂いが厨房に充満する

勿論見た目も美しく、かといって食べるのも躊躇われるような冷たい美しさではなく、思わず手を伸ばしたくなるような美しさだった。

「さてと、あとはメインだけですな」

「美味しそうです」

「早く食べたいです！」

雪那と恵美がきゃっきゃっと期待に満ちた眼差しを向ける。
が、そこに突如混じった殺気じみた眼差しに二人は固まった。

「恵美ちゃん」

「雪那ちゃん……」

二人は同時に振り向いた。

「……私にはさせないくせに」

地獄の底から這い上がるような声で呟く希子に、雪那と恵美は互いに抱きしめあった。

「希子ちゃんが怒ってる」

「角生えてる」

「希子にさせたら船が沈みます」

希子には料理をさせてはならない。

というか、家事一切をさせてはならない。

させたが最後、海の藻屑になると思え。

それが、この船の船員達の合い言葉。

上のお達しもそうだが、希子の凄まじい家事による破壊の惨状を目の当たりにしてしまった船員達はその合い言葉を心に深く刻み込んでいた。

希子の姿を目にした料理人達から次々と悲鳴があがる。

いわく、魔王が降臨されたと

因みに、きちんとした本業の魔王は別にきちんと船に乗っているが、彼らはそんな事は知らない。

それよりも、目の前にいる『料理は兵器』が合い言葉の魔王の存在に慌てふためいた。

できならば近くの港で降ろしたかった。

けれど、次の港まではあと一週間かかる。

だがそれ以前に何の落ち度もない？客を強引に降ろすなど

すればこの船の名に傷がつく。

というか、どうして彼と一緒にいるのにここまで出来ないんだろう

希子の同行者である灰の家事は完璧だった

その料理の腕前は一流の料理人達すらも唸らせ

掃除はプロの掃除婦達すらも恥じ入るほどの完璧さを誇り

洗濯に至っては、どんなシミも彼の腕にかかれば簡単に落ちていた

家事の魔術師

船員達は彼をそう呼ぶ

そして思う

その一割でも希子にあればと

だが、それ以上にどうしてその素晴らしい腕前でもって希子の家事能力を人並みまで引き上げてくれなかったのかと

「もうすぐ料理が出来ますから、食堂で待ってて下さい」

「私も手伝う」

「やめて下さい。核弾頭でも作成する気ですか」

因みに、一昨日人目を盗んで作り上げたケーキは榊が食べる寸前に爆発した。異変を察知したアルファレンがそのケーキを海へと投げ捨て、海面に消えると同時に大爆発を起こしたのだ。

灰曰く、海の水と化学反応を起こしたのだと言う

化学反応

その昔、料理と錬金術は同じだと言った人がいるらしいが、その人の言葉は正しかったが、いくら錬金術と同じとはいえ、毎回害のあるものを作成する者はなかなかいないだろう

「どうやったらケーキが爆発するんですか」

「あ、あれはっ！ちよっと調子にのってそこらにあるものを入れちゃっただけよっ！」

「というか、調理場にあるものだけでどうして爆発が起こせるんですか」

「奇跡？」

いやだそんな奇跡

その奇跡のせいで危うく榊は吹っ飛びかけた

「とにかく、黙って待ってて下さい。そもそも今回僕が料理する事になった原因はその爆発ケーキのせいですからね」

爆発ケーキのせいである意味料理に対してトラウマとなった榊はその後殆ど食事がとれなくなった。

それに困ったのは料理人達だ。

勿論、雪那達も何とかして食事をしてもらおうとあの手この手を使ったが、榊のトラウマは酷く大きかったらしく、愛するお嬢様の料理すらも殆ど食べられない始末。

あまりの事に悲しむ雪那に、今回の件で申し訳なさを感じていた灰が腕を振るう事にしたのである。

「私もお詫びするわ」

「気持ちだけで十分です」

寧ろ手を出すなと暗に言う灰に希子は不満そうに頬を膨らませた。

「すみません、希子を外に連れ出して下さい」

「はい」

このままここに居させると何をするか分らないとばかりに、灰の御願いに雪那と恵美が希子を引っ張り出したのだった。

それからどれほど時間が経った頃だろうか

キンと、何かが張り巡らせた糸にひっかかる

空気が微かに揺れ、微弱だが邪気が漂ってくる

「蜜華の匂いに誘われましたか」

そろそろ夕食の時刻。

料理人達もそれぞれの持ち場に帰り一人きり鍋の番をしていた灰は、眼鏡の下に隠れた瞳で外へと通じる扉を見つめる。

「あれ？灰さん何処に行くんだい？」

背後から料理人の孝史の声がかかる。

「希子の様子を見に行こうと思います」

「希子ちゃんの　　はは、また何かやらかしたのかい？」

「いえ、まだ何もしてませんよ」

そう　まだ、ね

背後でガチャンと閉まった扉に寄りかかり灰は、ずれた眼鏡を指で直しながらクツクツと笑った。

すると、それまでとは百八十度がらりと印象が変わる。

もし、この姿を見る者がいればその壮絶なまでの色香に思わず船から転落していたかもしれない。

「おやおや、これは不味いな」

自分の変化に影響された海面に、灰は少しずつ緩んでいた

それをギリリと引き締める。

すると、あれほど垂れ流されていた匂い立つようなそれはあつという間に霧散した。

「さてと　さつさと希子の所に行きましょうね」

足下にまとわりつく邪気は、颯爽と歩く灰によって蹴散らされていた。

ほどなく、灰の予想通り希子達はそこにいた。

船のデッキ　プールやジャグジーもあるそこは、普段なら大勢の者達で賑わっている。

しかし、今はその異変に気づいているのか、希子、雪那、恵美の三人だけである。

いや　それもあと少しの事が

灰はちらりとデッキから船の側面を見た。

すると、デッキに向って這いずるいくつもの黒い手が見える。

それらが狙う蜜華は、自分達の危機に気づいているのだろうか

「気づいてないですね」

黒い手はデッキに上がろうとしては、何か見えない壁に阻まれる。

それを激しく叩くも、数回も叩けばその見えない壁が手をはじき飛ばし、いくつもの黒い手が海上へと消えていく。

その障壁の美しさに灰はくすくすと笑う。

「あれで無意識なんですから……」

希子が作り出す障壁は、蜜華達を狙う全ての者達をはじき飛ばす

それは、記憶を失ってもなお希子の中に残る昔の記憶が

それとも

「なんかバンバン音がするわね」

自分の所行に全く気づかない希子は、辺りをキョロキョロと伺う。

だが、どうやら何も見えないらしくしきりに首をひねる。

一方、雪那と恵美は青ざめた顔をしていた。

見れば、いつの間にか二人の足を掴む数本の赤い手。

どうやら、黒い手とはまた別のものらしい。

だが

グシャッ

「わわわっ」

船の揺れでバランスを崩した希子がそれを容赦なく踏みつける。
悲鳴をあげて消える赤い手。

それが何度か繰り返される

さすがは希子

無意識だが最強だ

「恵美、理恵、雪那」

そして チヒロ

今世紀揃った四つの蜜華

一人は異世界にいるが、それでもほどなくこちらに飛ばされてくる
だろう

蜜華

それを手に入れた者はあらゆる願いが叶えられる

しかし、蜜華が四つ揃ったならば

世界は闇に閉ざされるだろう

その昔、光の世紀が始まると共に逃げ出した者達

太陽ではなく、月の世紀を

朝ではなく夜が世界を支配する事を望んでいた彼らは今も

深い深い闇の底でそれを望んでいる

たとえ……原初の神たる月夜がそれを望まずとも

終わりの女神の姿が脳裏に浮かぶ

滅那

今は蒼麗という名の彼女

そして彼女の眷属達の姿も

果てを司る果豎

彼女もまた、主君と共に葬られるのだろうか

遙か昔の四人の蜜華は、欲深き存在によって奪われた

では、今の蜜華達は？

「さてさて、どうなるやら」

蜜華を巡る運命の輪は誰にも止められない

哀しくも残酷なる運命の舞台となる客船は、彼女達をあの場合へと誘うだろう

『四鎖島』

懐かしく、それでいて

灰はくすりと笑うと、希子達へと足を進める。

終わりを司る女神

果てを司る女神

彼女達はこの続く悪夢に終止符を打てるのか

そして

『私はいつ終われるのかしら』

今もなお悪夢に囚われるあの子を救う事が出来るのか

終
わ
り

『傍観者』・・・大雪様著（後書き）

後書き

ちよつとネタバレしてしまいましたね。

果豎が司るものは『果て』。

なので、終わりを司る蒼麗Ⅱ滅那の眷属なんですよ。

因みに、果豎の前世は滅那と共に下界に居ましたが、連れ攫われた滅那を探して上の世界に迷い込んだのが運の尽き。

萩波の前世に捕獲され、物珍しさから愛玩動物として散々弄ばれた拳げ句　孕まされ、妃にされました（苦笑）

やってること一緒だよ、萩波！！まあ、結局は悲劇的な結末を迎えるのですが。滅那を殺した者達に果豎の前世も殺されてるので。

【幼児化王妃の危機】・・・大雪様著作（前書き）

（大雪様のメッセージより抜粋）

遅くなりましたが、明けましておめでとうございますvv

私の方でも新しい内容のコラボ小説が書けたので、送らせて頂きたいと思いますvv

前にお話させて頂いた続き物とは別のお話で、テーマは【幼児化】。すなわち、幼児化した果豎に巻き込まれる皆様のお話です。

といっても、冒頭部分だけしかまだ書いていませんが、一応プロローグ部分を送らせて頂こうかと思えますvv

では、お話は下の方からどうぞ

【幼児化王妃の危機】・・・大雪様著作

果豎が幼児化した

「な、な、な」

そんな奇声を発する明燐を他所に、果豎は恵美と理恵の双子の姉妹を始め、チヒロと雪那に可愛がられていた。

そこに、玉英が特攻隊長宜しく駆け込み、総勢五名にちやほやされる大根王妃。

「ごめんなさい……」

気まずげに謝るのは蒼麗だった。

というのも、今回の果豎に起きた事態を引き起こしたのは蒼麗と蒼花である。

それは今から一時間前のこと。

恵美と理恵に頼まれて美容液を調合していた蒼麗に、何時ものように纏わり付いていた蒼花。

姉の意識を向ける為には手段を問わない妹は、当然の如く姉の邪魔をした。

そうして見事に妹に意識が向いてしまった蒼花は持っていたビーカーを落とし、その下で入れる予定の薬品を搜していた果豎にかかったからさあ大変。

果豎が持っていた薬品を入れれば美容液になる筈のそれは、果豎

にかかった時点ではただの若返り薬。

そう　果豎は見事に若返ってしまった。

二歳児に

ふっくらとした頬

幼い顔立ち

短く小さな手足に体

「あう……どうちよう」

極めつけは舌っ足らずな話し方

人の不幸は蜜の味とばかりに爆笑する蒼花は別として、蒼麗は絶叫し、その叫びを聞きつけた恵美と理恵、雪那とチヒロが駆けつけ今に至る。

蒼麗は明燐に詫びた。

長期の休みという事で、果豎を風国に連れて行くこととして十分ほど前に来て事情を聞かされたばかりの明燐は、小さくなった果豎にただただ体を震わせる。

だが

「なんて可愛いんでしょうっ!」

グッジョブ蒼麗様!!

グッと親指を立て、蒼麗の両手を握りしめた明燐はそのまま果豎の元に向いその小さな体を抱き上げた。

「うきやつ！」

「メイリンずるい！」

それまで果豎に頼ずりしていた玉英が不満を口にするが、明燐は気にせず抱きしめた。

ジタバタと果豎が暴れるのも気にしない。

なんてかわいいのだろう！

ああ、可愛い

可愛すぎる

可愛くて

明燐は幼児趣味者が犯罪に走る衝動的心理を、少しだけ理解出来た気がした。

「私たち、もともどりゅの？」

「絶対に元に戻します！」

ふにゅうと自分に泣きつく果豎に蒼麗は声高に宣言しつつ、少し、いやかなりの割合で果豎の貞操の危機を感じていた。

というのも

サイドからもつてきた髪を、白い大きなリボンで結んだお嬢様へアーは明燐が。

纏う白い服は茨戯によって作成された代物。

しかし、急遽作り上げられたにも関わらず、シンプルなデザイン
のそれは、ウエストラインのリボンがエレガント感を漂わせ、ウエ
ストの薔薇の大輪コサージュがひときわ華やかに咲き誇り、長めの
スカート丈がふわりと花のように広がる素晴らしいものだった。

しかも、果豎にそれはそれはよく似合っていた。
身内の鼻屑目を抜いても、だ。

ここに幼児に性欲を抱く方がいれば即座に誘拐されるのは間違
ない。

というか 既に危機は迫っていた。

カツンと床を打つ音が聞こえ、蒼麗は果豎を抱きしめた。

「蒼麗様、そろそろ果豎を離して頂きたいのですが」

そう言うのは、先ほど着替えさせられた果豎を目にした瞬間空
き部屋に連れ込みかけた変質者 ではなく、果豎の夫の萩波。

幼い果豎の愛らしい顔を見た瞬間、彼の中から理性や常識とい
う類のものはなくなり捨てられたらしい。

必死に宰相達が止めなければ、確実に幼児への性犯罪者として通
報されていただろう。

因みに、その際に大半は萩波に半殺しにされ、無事なのは宰相と茨戯と朱詩、そして明燐の彼氏である蓮璋ぐら이었다。

流石は腐っても風国の王という事か。

というかそんな王にどうして忠誠を誓うのか。

普通そこまで半殺しにされれば謀反を起こされても仕方がないというのに

「萩波だから仕方がないんだ」

「萩波だしね」

「寧ろ愛らしすぎる果豎がいけないんだ」

と、果豎に責任転換。

しかしそこは果豎を溺愛する上層部の皆様。

悪意からではなく善意溢れる責任転換であり、彼らもまた果豎の愛らしさに酔っていた。

果豎が怯えて泣くほどに。

寧ろ、自分達を半殺しにしてまで果豎を求める気持ちがあるとばかりに頷き

もし自分達の恋人が同じようになったら、やっぱり同じく止めようとする者達を半殺しにする事間違いないと改めて悟り、彼らは無事だった宰相達に後の対処を押しつけ　ではなく、託して帰って行った。

というか、風国上層部の身で、そんな危険な悟りを開いたまま帰らないで欲しかった

しかし、厄介なのは彼だけではなかった。

背後に現れる幾つもの気配

と、そのうちの 하나가動いた

「蒼麗公主っ！ 御願いだ！ 若返り薬を俺に作ってくれ！ そして恵美と理恵にそれを飲ませて小さくなった理恵達とゴブホォっ！」

理恵に無言のボディーブローを喰らう原始の天使こと修はあっけなく床に倒れた。

夜の貴公子たるレミアにつんつんと木の棒でつつかれる姿がなんと哀愁漂っている。

第二弾はアルファレン以下魔王軍の皆様だった

「若返り薬を所望する」

「恵美の愛らしい姿をわらわ達に見せてくれっ！」

「嬢様の幼児化……ぐふっ！」

大量の鼻血を出して崩れ落ちるレイ・テッド。

前から危ない人だと思っていたが、やはり人間顔ではないという事か（人間ではなく魔族です）

そこに、雪那命の榊が加わり、オウランも参戦すればもう事態の収拾が難しかった。

しかしそこは蒼麗

今までも、たぶんこれからもきつと幾つもの死地を潜り抜けるだ

ろう彼女は、常人ではなしえないだろう偉業を達成する。

すなわち

「作りませんっいたら作りません！そんな事より果豎さんを元にも戻すのを手伝って下さい！！」

最強にして最恐魔王と彼が率いる魔王軍を始め、人間界の影の支配者にして影の総帥、異世界の大国の王、そして天界の大国の王に対して怒声を浴びせるという

後に彼らは言う

その時の蒼麗は地獄の悪鬼さえ裸足で逃げ出すほど恐かったと

続く

【幼児化王妃の危機】・・・大雪様著作（後書き）

幼児化果堅。舌足らずなしゃべり。萌え。

かわいい。かわいすぎるよ！

萩波が血迷うのも分かります。

【幼児化王妃の危機？】・・・大雪様著

自分の不手際から二歳児になってしまった果豎。

本来ならすぐにでも元に戻る為の薬品作りをしなければならぬが、不幸にも必要な材料は切れておりストックもなし。

ならばすぐにでも材料集めに出かけたいが

「そうれい〜」

泣きながら自分に抱きついてくる果豎はいまだに小さいまま。

これが時間が経てば元に戻る類の若返り薬ならまだしも、果豎が被ったのは対となる薬以外では元に戻らないものだった。

このままでは果豎は永遠に子供のまま

それはとんでもなく恐ろしい事だが、小さな果豎はそれはそれは愛らしく

「果豎さんおいで〜」

「こつちに美味しいお菓子があるよ〜」

「美味しい料理も沢山あるからね!」

「さあおいで〜」

恵美と理恵、雪那とチヒロが可愛らしく果豎の気を引くのはまだ良い。

しかし、だ。

「果豎、こつちに来て下さい。果豎の大好きな大根が沢山ありますからね」

誰よりも麗しく艶やかな笑みを浮かべながら、捕獲用の網を隠し持つ凧国国王はとんでもなく危ない。

しかも、その妹に至ってはこちらに投げ縄まで行ってくる始末。

賢君ですよ？！

凧国の偉大なる国王様ですよ？！

蒼麗は凧国国王の妻に対する執着の深さに恐れおののいた

妻が小さくなるのが問題なし

彼にとって果豎がどんな姿になろうと果豎であって、寧ろ姿形は関係ないのだ

それだけならば感動的ですむが、問題は萩波が幼児化した果豎すらも許容範囲という事だ。

何を？

そんなのは言うまでもない。

魔界の某魔王様なんて当時五歳児だった実妹に欲情し夜も眠れぬほどだったらしい。

しかも待つと言いながら好きあれば少しずつ手を出していたとか。

果豎を一人きりに出来ない

したが最後喰われる

蒼麗は本気で果豎を萩波達が手を出せない世界に送ろうかと考えた。

「確か、近頃は動物の世界に沢山落人さんが落ちてるらしいし」

いや、いつそのこと大根の世界にでも送り込むか 帰ってこなくなるけど

そうして色々と考えた蒼麗だったが、とりあえず自分が側から離れないようにしようという事で決着がついた。

「それで、必要な材料とはどんなものなのですか？」

薬学にも精通しているレイ・テッドの言葉に、蒼麗はメモ用紙を取り出した。

「えつと、聖なる薬草に神木の朝露、龍の秘薬、精霊の涙、天使の蜜、七色の果実、青色のハーブ、魔法の果実、仙豆、魔物の酒、呪華花、晶石の破片ですね」

「天使の蜜だったら、修殿に頼めば宜しいかと」

必要なものを書き留めていた明燐がにこやかに言う。

「明燐さん！ 危険ですっ！ あの修兄ちゃんに頼み事なんてしようものならどんな目にあわされるかっ！」

必死に止める理恵に明燐は同性すらも堕とす妖艶な笑みを向けた。

「実際にやるのは理恵殿ですわ」

「はい？」

「さあ、これとこれを持って下さいな」

そうして理恵に手渡したのはロープと鞭。

「これで修殿をまずは縛って下さい。縛り方はこれに載ってますから」

それは【日本古来の拷問縛り全集】

「それでこの吊るし縛りというものを行って下さい。後は鞭でしばいてこの蠟燭で あら嫌ですわ！ 私ときたら大切な蠟燭を渡し忘れてしまつて……あら？ 理恵殿、どうしたのです？」

ガタガタと怯える理恵は既に蓮璋の後ろに隠れていた。

その姿ににこやかに微笑みながらズンズンと歩いてくる明燐。

「明燐……無理強いはやめた方がいい」

「何を言うのです蓮璋！ こんな事では立派な女王様にはなれませんわっ！」

「女王様になんてなりたくないですっ！」

いつの間にか、きわどすぎるデザインの黒皮ボンテージスーツまで手にしている明燐に理恵は叫ぶ。

まさかあれを着せられる？着せられてしまうのか？！

かろうじて胸と股は隠されているが、その股の部分は食い込み激しいＴバック。

胸だって本当に隠す気があるのかと疑いたくなるような布の少なさ。

お腹と背中丸出しで、太もも殆ど隠すものがない。

嫌です

絶対に嫌です

それが似合う人に着せて下さい！！

因みに、今ここで一番それが似合うとすれば明燐の他には居ないだろう。

あのたわなに実った白い胸は、きつと零れんばかりに胸を覆う黒皮からはみ出し、その白く眩しい太股はもはや見る者全てを悩殺する事だろう。

「蓮璋」

「明燐……」

蓮璋は笑顔で脅してくる明燐に溜息をつくと、背後に居た理恵をトンっと手で後ろへと押す。

へ？と思った次の瞬間、理恵はレミレアの腕の中に居た。

「レミレア?!」

「理恵、逃げるぞっ！」
「お待ちなさいっ！」

魔界のメドウーサも顔負けの明燐から、レミレアは理恵を腕に抱きかかえて飛び立つ。

「逃がしませんわっ！」
「明燐」

レミレアに向けて炎の鞭を放とうとした明燐の前に蓮璋が立ちふさがる。

そして彼女を抱き留め、術を強制的に消去する。

「蓮璋！」

「無理強いは駄目です」

「何を言うの！ 理恵殿ならば立派な女王様になれるというのにつ！」

そう、誰よりも気高く麗しい女王様に、下僕達を華麗に鞭打ちし見下せる女王様になれるというのにそれを邪魔するというのか？！

「します。理恵さんは女王様ではなくお姫様になってもらいたいの
で」

「下僕を見下すお姫様ですの？」
「違いますって……そうだな……共に戦うけれど、時には愛する王子に守られてもらうお姫様の方を希望しますよ。勿論、明燐にもそうなってもらいたいのですがね」

そう言うと、自分の頬に軽く口づけする蓮璋に明燐はようやく年相応の少女らしい反応を見せた。

すなわち、顔を真っ赤にしてうろたえるという可愛らしいものだった。

「レミレア、どうして……」

「蓮璋さんから連絡が来たんだ。理恵がピンチだから早く来てくれるって」

それは、小さな水人形。

レミレアの前に現れたかと思うと、理恵の危機的状況を伝えてきた。

そうしてすぐに駆けつければ、理恵が泣いていて、明燐が恐くて、蓮璋が必死に理恵を守りながら自分にサインを送っていた。

すぐに此处から離れなさい

気配を隠して近づいて、理恵を攫って逃げた

勿論、それだけではすぐにあの侍女長に掴まってしまつから、蓮璋が足止めをしてくれて、ようやく此处まで逃げてこれた。

「レミレア……ありがとう」

もし彼が助けられなければ、自分はそのきわどすぎる衣装を着せられていただろう。

というか、もしもう少し遅ければ、あれを着た自分をレミレアが見てしまって

「理恵、どうした?！」

その場に座り込んだ理恵にレミレアは慌てる。

「どこか痛いのか?! それとももう既に明燐さんに何かされてっ」
「されてません何もされてません何処もされてませんから気にしないでっ!」

「気にするなって心配なんだよっ!」

明燐さんはあれでいて侮れない人だと、仲の良い蓮璋から教えられているレミレアは本気で理恵を心配した。

もし理恵が嫌がることを既にされていたとすれば、いくら明燐でも自分は

あれ?

レミレアはキョトンとした。

自分は何を言おうとしたのだろうか?

なんだか、もやもやとしたものが自分の中にある。
けれど、その気持ちが何かは分からなかった。

とりあえず、今度この事について蓮璋に相談しに行こう。
思いの外蓮璋と気があい仲良くしているレミレアにとって、蓮璋はある意味兄代わりでもある。

因みに、将来の義理の兄達ももちろん慕っているが、一番自分に優しくしてくれるのは蓮璋だったりする。

『弟妹達の代りではないけど、なんだかレミレアが弟みたいに思えるからね』

愚かな前領主によって家族を皆殺しにされた蓮璋にとつても、レミレアが弟代わりとなっているのは、魔王軍側にとつても周知の事実だが、知らぬは本人ばかり。

「理恵……本当に大丈夫か？」

「え、ええ」

しかし、安心しきつたのかその場に座り込んだまま。
レミレアは理恵を抱き上げた。

「っ！」

「明燐さんが追って来ないとも限らないし、安全な場所まで行こう」
「あ、うん」

そうしてレミレアによって連れられていった理恵だったが、連れられた先が彼の私室という事でまた大騒ぎした事は彼らだけの秘密となったりする。

「それで、材料集めはどのようにすればいいのだ？」

アルファアーレンの質問に蒼麗は考え込んだ。

「とりあえず……それぞれの材料は魔界、人間界、天界、あとチヒロさんの居る世界にあるのでそちらを順番に回るという事で」

「手分けをした方が早いと思いますが」

榊の言葉はもつともだった。

「いいですけど……採取方法が厄介なんですよ、それぞれの材料の」

「厄介……とは？」

「それが取れる場所が……妙な怪奇現象が起きる場所に変異してしまってるんですよ　特に人間界が一番厄介なんですが」

人間界にあるのは、神木の朝露、呪華花、晶石の破片の三つ。

先は長そうだった。

続く

【幼児化王妃の危機？】・・・大雪様著（後書き）

・・・なんか、もうこのまま理恵とレミレア、カップルでいいよね
？by、さくら

【幼児化王妃の危機・3】・・・大雪様著

とりあえず、最初の材料集めは人間界で行われる事となった。

「では私の家に来て下さい！」

是非にと滞在を薦められたのは、雪那の家だった。

滞在メンバーは神組からは蒼麗と蒼花の双子姉妹に果堅、そして萩波と玉英となった。

因みに、チヒロは彼らの世界の順番が来るまでに滞在場所を整えておくとして異世界に戻ったオウランによって強制連行されたので此処にはいない。

が、恵美と理恵の二人はちゃっかり雪那の家にお泊まりする事が決定していた。

丁度人間界は夏休みに入ったばかり。時間は幾らでもあるらしい。

そうなると当然の如く魔王軍と修も滞在する事となり、屋敷は異様な人口密度に悩まされた。

しかも、魔王軍が先に滞在する事を宣言した事により、夙国宰相が迷惑をかけられないとして滞在を諦めたのは公然の秘密となっている。

が、そのせいで明燐と朱詩の機嫌が悪く兄である宰相や茨戯、蓮璋が宥めるのに苦労したのは言うまでもない。

そんな彼らの苦勞を知りつつ半ば強引に妻の保護者？として滞在を決めた萩波は、屋敷の敷地に入るや否や感嘆の溜息をもらす。

「ふむ……さすがは七宮家。敷地内に邪気が殆どありませんね」

水も風も木々も土も、全てが強い力を持っている。

神々に気づいた精霊達が姿を現わせば、彼らは中でも最も強く最も美しい『天界の華』に頭を垂れていく。

彼女は自分達の皇たる精霊皇夫妻の縁者。

いわば、もう一人の主と言っても過言ではない。

そんな精霊達を蒼花は冷たく一瞥すれば、次々と悩殺されていく精霊達がバタバタと倒れていく。

「あれ？なんだか風が止った気が」

「花が一斉に閉じたんだけど……」

自然を司る精霊達が気絶したと言うことは、当然彼らが司るものにも影響が出るという事。

同じく自然を司る神々が慌てて精霊達の分を補った事で影響は最小限に抑えられるも、その場にいた者達は蒼花の存在に改めて恐ろしさを感じた。

「あの『天界の華』に護衛がつくのは当然という事か」

「確かに一人でうるちよろされたら困るな」

リアナージャとアマレッティが冷や汗を流しながら呟く。

が、そもそも護衛がついている理由は彼女を花嫁として攫おうとする馬鹿達から守る為であり、他への影響に關してはどうでも良かったりするが、それについては蒼麗は何も言わない事にした。

それよりも今はする事がある。

「にしても……たどり着いて早々のくつろぎっぷりには頭が下がりますよ」

七宮家執事の榊が皮肉げに呟けば、まるで己こそがこの屋敷の主のような風格と威厳を漂わせたアルファレンが鼻で笑う。

「ふん……狸が」

自分こそ、執事と言いながら世界の大財閥を支配する影の総帥ではないか。

だが、それを皮肉たっぷりに指摘してやれば、彼は冷笑を浮かべながらそれを受け流す。

人間にしておくにはもったいない人材と言えよう。

「そういえば、蒼麗さんは何処にいったのかしら？」

恵美が首を傾げれば、雪那が微笑みながら答える。

「蒼麗さんならあちらですよ」

そうして雪那が指さした方向には

「この度は突然の団体での滞在を許して頂き、まことにありがとうございます」

そう言って頭を下げつつ、これはお土産を兼ねた御礼ですと、菓子折を七宮家当主に差し出している。

しかもその際の礼儀作法も完璧。

なんて恐ろしい十二歳っ！！

「また滞在にあたりまして、必要な光熱費と食費を用意致しましたのでこちらをお納め下さい」

そつと茶封筒を差し出せば、その厚みに彼女が他のメンバー達に分まで計算している事を悟る。

「蒼麗さん……」

「本当に十二歳？」

恵美と理恵がそれぞれに呟けば、蒼花が流石はお姉様と尊敬の眼差しで見つめる。

「さすがは十二王家の常識神ですね」

「しゅうはくるちいっ！」

幼い果豎を膝抱っこしたのもつかの間。

全力で抱きしめる萩波に果豎がぺちぺちとその頬を叩く。

勿論、全力と言っても抱き潰さないところが愛のなせる技なのだが、端から見ればウザイと表現して差し支えないほどの構いっぷりに果豎の疲労も色濃い。

しかも、夫の妹からも構われ、既に疲労困憊過労死寸前である。

「オニイさま、だいきん」

「分かってますよ」

蒼麗が立て替えてくれた分はきちんと返す。

「私としては、神としてのお返しを考えていたのですがね」

とりあえず、七宮家が今後しばらくの間水に困らないとか、水害に遭わないとか、そんなところ。

直轄は海だが、その他に河川や雨などの水にも多大な影響力を持つている風国国王の地位に居る者としては、それ位はわけではない。

一方、七宮家当主と雪那の兄も最初こそ突然の団体に驚いていたが、愛する娘の頼みに加えてこの少女の余りの礼儀正しさに逆に慌てた。

「いや、それは受け取れませんな」

「え？」

「雪那からは貴女方はお客様と紹介されてますからな。お客様はもてなさなければ」

「でもっ！」

お金はいらない、支払うの攻防はその後二時間は続いたが、ようやく戻って来た蒼麗はお金の代りに別の御礼を行うという約束を取り付けていた。

「雪那さんの野菜栽培のお手伝いをする事になりました」

果豎と一緒に

たぶん、果豎は大根ばかりにかかりきりになると思うが

「そなたは野菜作りは出来るのか？」

リアナージャの疑問も最もだった。

蒼麗は現在家出中。学費は奨学金でまかなっているが、生活費はアルバイトで稼ぐ身。とはいえ、実家は天界でも天帝夫妻に次ぐ十二王家の筆頭星家の姫である。

農作業をしていたとは思えないのだが

「大丈夫です、お米も野菜も全部育てたことありますから」
「ほう？」

「しかもお姉様は海や川で魚も仕留めてるし、山では獣も仕留めていらっしやるのよっ！」

蒼花の言葉に目をむく魔王軍。

「それに、山で茸や山菜採りもお手の物だし、出来ない事は何もないわっ！」

「いや、それ言い過ぎだし」

「そなた……姫よな？」

「まあ、一応は」

姫が茸取り？

しかしその疑問に蒼麗が頭を？きながら答える。

「まあ……師匠の教育方針でして……」

蒼麗が家出した際に一番最初に逃げ込み続けた相手 師匠。
大戦ではその力を惜しみなく披露するも、大戦終結後はさっさと山奥に隠れ住んでしまった。

勿論生活は自給自足。

その弟子となった蒼麗も当然それを強いられた。
自給自足に必要な知識はもとより、実地で叩き込まれた幾つもの
サバイバル技術。

時には山に、時には海に、時には無人島に一人で、または他の弟子と共に投げ込まれて生活させられた。

おかげで大抵の事は出来るようになった。

ただし、それが学校の勉強に繋がるかと言えばそうではなく、蒼麗の落ちこぼれはこれっぽっちも変わらなかったのだが。

「それは凄いというのか何というのか……」

流石の櫛も冷や汗を？ いている。

「食べるものが不足すれば蛇でも蛙でも虫でも捕って食べてましたからね」

既に少女の食べるものではない。

「死ぬかと思つた事も何度もあるし」

毒茸の恐ろしさは身をもって体験させられたからこそ、今では全ての茸を見分けられるようになったし、山菜や薬草も同様に間違う事はなかった。

「海図の見方も山での地図の見方も叩き込まれて……」

しかも何処のトリアスロンだと聞きたくなるような事も……

「一日で山を何往復も上り下りさせられたり、獣道や道無き道も走り回されたり」

おかげで、人間界の山の殆どは制覇させられる始末。たとえその山がどのような怪異に悩まされていようと関係なかったし、途中で遭難者を見つければ救助までさせられた。

しかしだからこそ

「今も連れ戻されずにすんでいるんですけどね 家に」

一度でも家を頼れば家に戻される。

けれど、師匠が鍛えてくれたからこそ今まで何度も降りかかった災難やトラブルに対して蒼麗は家を頼らずに解決する事が出来ていた。

家を出た後に培った経験と技術、そして得た仲間達、友人達の助けは借りても……

「苦労したのじゃな……」

「皆さんに比べたらまだまだですよ」

そう言って笑う蒼麗だったが、その横顔は苦労したものだけが得るような老成したものが浮かぶ。

しかし何故蒼麗はそこまでして苦労する道を選ぶのか？

本来であれば何不自由ない姫としての生活が送れたというのに

だが、リアナージャがその疑問を口にすることは最後までなかった。

神木の朝露、呪華花、晶石の破片

人間界にあるとされる、若返り薬の対となる薬の原材料だ。

「どれもこれも今では中々手に入らないものばかりですね、お姉様」

「手にハイラナイ？」

蒼花の言葉に玉英が首を傾げる。

「そうよ。神木の朝露が取れる樹自体が減ってるし、呪華花のあった場所は怪奇現象が起きてるし、晶石の破片は穢れてて本来の力を失っている」

「ふん」

興味なさげに呟くと、すぐに義姉である果豎を抱きしめる。
完全に玉英のお気に入りのお人形になっている。

「だが、逆に言えばその原因をどうにかすればいいという事だろう」
アルファールレンが口を挟むが、その腕の中には恵美の姿がある。
しかも息も絶え絶えというとても悩ましい姿で。
因みに何故愛する少女のそんな姿を晒しているかと言うと、途中ででさっさと部屋を退出しようとするも蒼花に止められたからだ。

『私のお姉様が悩んでいるのに一人だけ休もつて言うの？』

お前のせいだろうお前の

原因は姉の邪魔をした蒼花なのに、その原因にガンをつけられたアルファールンは当然の如く怒りを覚えるが、下手に逆らえば自分が負けるのは目に見えていた。

見た目は嫋やかで儂げな美少女だが、中身は何処までも獰猛な猛獣である蒼花に好きこのんで逆らう者はこの場には居ない。

蒼麗を除いては

「とりあえず、最初は神木の朝露から始めますか」
「長期戦になるな」

アルファールンが溜息をつくとき、蒼麗が苦笑する。

「そうですね……でも、神木の朝露さえ手に入れば晶石の破片はすぐに手に入りますから」
「どういう事だ？」

「晶石の破片自体は榊さんの家にあるんですよ。それを分けてもらうだけなので」

ただし、榊の家がそれを手に入れた時点では既に穢れてしまっており、ただ分けてもらっただけでは材料としては使えない。

「日の光や月の光を浴びせてもいいんですけど、それだと五十年は軽くなるんです。でも、神木の朝露を使用すれば、三日ぐらいで

浄化出来るんですよ」

「そうか……」

「それに一番厄介なのは人間界なんで、他のところはそう時間がかからないと思います」

「どうして人間界が厄介なの？」

雪那がキョトンとした様子で首を傾げる。

「簡単な事ですよ」

萩波が玉英が果豎を奪い返しながら答える。

「人間界では、神々である私達の行動は制限されてしまっんです」

「え？」

「人間達は自分達と違う存在を忌避しますからね」

畏怖か忌避か

人間達の多くは自分達と違う存在を受け入れない

「中世では魔女狩りもありましたからね」

「あ……」

「それに加えて、私達神の力はこの未熟な世界では強すぎるんですよ」

人間界にも多くの神々がいる。

しかし、その神々として多くの制約の中で行動している。

それは全て、この世界の均衡を崩さないため。

強すぎる力は世界の安定を崩し、時には崩壊に導くからだ。

「だから、神々である私達が人間界に赴く際には制御装置をつけます」

能力に応じて制御装置の種類と数は変わるが、大抵は制御装置をつける事でその力を封じ込めるのだ。

といっても、封じ込めてもなお、その能力は強い霊能力者を凌駕するのだが。

「まあ、そこら辺は魔界の方々も似たようなものだと思いますが」

そうしてアルファレン達を見れば、彼等にも身につけた制御装置の姿が見え隠れしていた。

「そうなんですか……神様も魔王様達も大変ですね」

「いえ、もう慣れてますからね」

「でも、ここの結界は強化しておかないとね」

「蒼花公主？」

面白くなさそうな様子だが、はつきりと言い切る蒼花に萩波だけではなく他の者達も視線を向ける。

「いくら力を押さえつけていても、それぞれの世界の实力者達がこれだけ揃ってるのよ？しかも、魔界は上層部の中でも上の方が大半来ている」

「それが？」

首を傾げるアマレットに蒼花はハンッと馬鹿にした様に笑う。

「良くないものに目をつけられやすいって事よ。人間界は天界や他の世界に比べて一番不安定な世界。それだけ良くないものが漂って

いる。そういう者達は狡猾に狙ってるわ。力を、そして無垢な魂を、自分達の糧となるものを。まあ、だからといって此処にその馬鹿達に取り込まれるような愚か者はいないと思うけれど」

「ならば問題はないんじゃないの？」

レミレアの言葉に蒼花は溜息をつく。

「あんた、それでも魔界の上層部？」

「なっ?!」

「蒼花」

「お姉様、だって」

姉に窘められた蒼花がすねたように頬を膨らませるが、それ以上の反論はしなかった。

「私達は大丈夫です　　っていうか、力無しの私はそうでもないんですけど」

「どういう事？」

「問題は恵美さんと理恵さん、そして雪那さんです」

三人の名前が出た瞬間、彼女達に近い者達の纏う空気が冷える。

「なるほど……」

アルファールレンが納得したと言うように頷いた。

「その良くないものは、先ほども言ったとおり、穢れない無垢の魂を好みます。しかも、その上見目麗しく巫女としての資格も有する事が出来るばかりか、魔王様や神に近い榊さん、原始の天使さんまでを魅了する事が出来る存在となれば、その良くないものにとって

は最高の餌となります」

勿論、異世界の王を魅了したチヒロもだが、彼女は今此処に居ないのが幸い。

「しかもその存在は一人ではなく、三人も揃っている。よりいつそう目をつけられるのは間違いありません」

それどころか既に来ている。

「まあ、結界は張り巡らせてありますから大丈夫とは思いますが」

萩波の水の結界が更に強さを増せば、隙間なく結界に張付いていた良くないもの達が消滅していく。

その断末魔は本来であれば結界で阻まれているにも関わらず、恵美達の耳元に届きその身を竦ませた。

アルファールンが恵美を抱きしめ、榊が雪那を抱き寄せる。

「恵美に手出しはさせないわ」

理恵が強い口調で言うが、指の震えは止らない。

何故だろう？

蒼麗の話を聞いた途端、また聞こえてきた断末魔が耳に入った瞬間、ゾクリと背筋を走った悪寒。

まるでこの先悪い事が待っている様な　酷く嫌な予感がしてならない。

ギュッと拳を握りしめた理恵だったが、その手に温かいものが触

れる。

「レミレア？」

「大丈夫だよ……俺、いや、俺達を守るから」

震える理恵の手を握りしめる。

すると、理恵が驚いたように自分を見詰めるが、すぐに顔を紅くして俯いてしまった。

その顔があまりに可愛くて思わず手を伸ばしてハツとする。

ってかちよつと待て！

抱きしめるのは不味いだろう

緊急時でもないし

というか、年頃の少女にベタベタと過剰なスキンシップを取るのは駄目だと、レイ・テッドから厳しく説教されている。

そうだ

抱きしめたりとかは恋人同士でするものだ

そんな事を考えるのは夜の貴公子であり、今は彼を残せばもはや誰も居ない夜の眷属の最後の生き残り。

因みに夜の眷族とは、吸血族、夢魔族、淫魔族の総称だ。

つまり、相手をその美貌で魅了し交わり精気を根こそぎ奪い取る

事が本業。

十八禁どころかそれ以上の事までお手の物にも関わらず、レミレアは理恵に対して清く正しく接するという何処までもその血に相反する行動を取っていた。

リアナージャが色々指導しても押倒すどころかキスさえもまだ。停滞どころか周囲からは後退を心配される始末。

しかし、時が流れ季節が変わるように

そしてその流れを誰にも止められないように

レミレアの中でもまた、それは着実に移ろい変わりゆき歩を進めていく

つか、御願いだからそんな目でみないで欲しいなあ……

俯いたままかと思えば、恐る恐る自分を見上げてくる理恵の様子にレミレアは内心慌てていた。

その赤く染まった頬が、うるんだ瞳が、何かを言おうとするも言葉にならない紅い唇全てが自分を誘っているようで

いや誘うって何だよ

別に理恵は誘ってなんかいない

にも関わらず、自分の体が反応する

こんな事今まで一度もなかったのに

その眼差しが、仕草が、自分から理性を奪い取り純粹なる獣へと変えようとしているかのようだった

その内なる獣をレミレアは必死で押さえ込む

こんな事を思っては駄目だ

『煩惱を抱いたら？お経とか唱えたらどうか？』

と、蓮璋の助言に従いお経を唱える（どこで習った?!）が、一向に下半身に集まる熱は散っていかない。

集まる熱により活性化した細胞が、流れゆく血流がレミレアの男を形作っていく。

「レミレア……」

濡れた紅唇が艶めかしく動き自分の名を呼んだ瞬間、獣が檻を破る。

ウバイタイ

オレノモノニシタイ

「レミレア?!」

ソウ

オレノモノニ

スベテヲウバイツクシタイ

「レミ……レア？」

ウバイタイ

ウバイタイ

オレノモノニシタイ

空気がざわつくのも気にせず、見据えるのはただ一人の少女。

その眩しすぎる輝きを持ったかけがえのない愛しい

「正気に戻れ」

ボカリと蒼花に頭を殴られた弾みで、レミレアは我に返る。
が、我に返らなければ良かったと思った。

「……………」
「……………」

腕の中に閉じ込めるように抱きしめた理恵と見つめ合う形となっている今の自分の状況を理解した瞬間、レミレアはパニックに陥った。

「うわっ！」

思わず理恵から距離を取る。

が、その瞬間腕からなくなった温かな感触に言いようもない喪失感を覚えた。

まるで、自分の半身がもぎ取られたかのような痛みが襲う。

なんだこれは

この痛みはなんだろう？

失った重みを

失った温かさを求めて腕が彷徨う

体がそれを求めて取り戻そうとする

奪って

抱きしめて

その唇に口づけて

そして

馬鹿な

やめろ

そんな事をするなっ！！

自分の体なのに、まるで別の生き物のように動こうとする

「くそっ！」

小さく舌打ちをし自分を律するように大きく呼吸をする。

こんな事では嫌われてしまう

そもそも抱きしめたりキスしたりするのは恋人や夫婦がするものだ

自分と理恵みたいな関係で出来る筈がない

そう、抱きしめるのもキスするのも理恵に愛されたものが

「っ！」

ズキンと胸が痛む。

なんだこれは？

しかも気づけば胸にはもやもやとしたものが溢れている。

それは、この前感じたものと同じ……いや、それ以上に強い。

もやもや

よく分からない

けれど酷く不快だった

なんだか腹が立ってくる

何に？

（別に腹を立てる事なんてないじゃないか……）

寧ろ腹が立つのは、理恵に対してヘンなことをしようとした自分にだ

（そうだよ……抱きしめたりキスしたりするのは恋人がしなきゃならないんだ）

理恵にそういう事が出来るのは、いつか彼女の恋人になる男だけ

そう……恋人になる別の男だけが

もやもやとしたものが更に強くなる

胸の痛みが増す

はつきりレミレアは思った。

面白くない

もやもやとしたものの中の一つが分かった。

そう　面白くないのだ

理恵に恋人が出来る

恋人となれば常に理恵の側に居るだろう

別の男が、常に

そう考えると酷く面白くなかった

自分の居場所を取られたような気がしてならない

って、なんだこれ

理恵は自分のものではないというのに

けれど、まるで自分の居場所を取られたような気がする事にレミアは混乱した。

（い、一体俺はどうしたんだっ！！）

そうしてあたふたと慌てふためくレミアに「青いのう」と呟くリアナージャは、可愛い未来の義理の弟の為に媚薬を注文しようかと考えるも、それを調合する能力の持つ蒼麗はそれどころではなさそうだった。

「えっと、今のところ近場で一番神木の朝露が取れそうな樹が残っていると思われる場所は　と、あ、ここですね」

地図に赤ペンで丸をつける。

「ここは……常葉地区ですか」

それは、雪那達の住まう場所から車で五時間かかる場所。風光明媚な田舎だが、神社仏閣が多く観光地として名を馳せている。

「確かここには七宮家の別荘がありましたね……お嬢様？」

共に地図を見ていた雪那だったが、その視線が全く動かない事に榊が心配そうに声をかける。しかし、雪那から返事はない。

「お嬢様、お嬢様っ」

「ふえ?!」

ハッと我に返った雪那が榊を見る。

「ど、どうしたの？」

「どうしたではありません。お嬢様こそ一体どうなされたのですか？」

「え? いや、別に何でもありません」

「お嬢様？」

この榊に隠し事をするのか？

しかし、雪那を見てすぐにその荒ぶる思いは消えた。

困ったような、何処か哀しそうなその表情は酷く困惑している様子だったからだ。

「ごめんなさい、榊……」

「お嬢様」

「ちよつと昔の事を思い出していたの」

「昔の？」

「ええ。昔、此处にはよく遊びに行っていたから」

そう、まだ小学校に上がる前からよく遊びに行っていた。

毎年のように

けれど、何時の頃からか行かなくなった場所

どうして行かなくなったのだろうか？

それどころか、常葉という名前すら思い出すことはなかった……
つい先ほどまで。

なのにその名を聞いた瞬間、少しずつ思い出す。

毎年のように遊びに行ったその場所を

ああ……どうして思い出せなかったのだろうか？

そこは母も父と良く遊びに行っていた場所で、七宮家自体にとっても縁の深い場所でもあった。

そう……なのにどうして……

私は忘れてしまっていたのだろうか？

続く

【幼児化王妃の危機？】・・・大雪様著

「私は果豎の夫ですから当然同行します」

「ワタしも義妹ダカラ行く」

そう訴える萩波と玉英の気持ちは理解出来た。

「私の家の別荘のお客様ですからね」

「お嬢様の行くとこ何処でもこの榊は参ります」

滞在先は七宮家の別荘になるから、当然雪那と榊が同行するのも当然だ。

けれど

「恵美も行きます」

「果豎の事が心配だし、それに恵美が行くなら私も行くわ」

「可愛い恵美が行くのならわらわも行くこつ」

と、リアナージャが

「俺も行くぞ！」

と、アマレッティが

「嬢様が行くところならば何処でもっ」

と、レイ・テッドが

「面白そうだから理恵達について行くのかな（レミレア、一番は理恵なのね…）」

と、レミレアが

「ふ、言うまでもない」

と、アルファレンが

そして

「この俺を忘れるなっ！ 恵美と理恵を守るのはこの俺だ！」

そうしてアルファレンとバトルになる原始の天使こと修。

まあ、これだけならばまだ良かったが

「こんな大人数でお邪魔するのは無理です」

「オトナシクしてる男ドモ」

玉英、お気に入り以外にはかなり手厳しかった。

しかも、その台詞だと恵美と理恵はいいんですか。

「この女……」

「お前、いくら美人だからって大人をナメルなどわあああつ！」

アルファレンと修がガンをつければ、その途端に出現した水龍が彼等を襲う。

「クタバレ汚らワシイゲスが」

「天使みたいな顔してるくせになんて事を」

ある意味、その穢れのない儚く清楚な美貌は修よりも天使らしいというのに、その薔薇の唇から出てくるのは毒舌のみ。

しかもたどたどしい幼い口調のくせに、他人をけなす語彙が豊富ってどういう事だ。

「幼女にテヲダスろりこんなんで消滅シロ」

「貴様……」

アルファールンが放つ業火の炎

玉英が放つ津波

それぞれが激突する

「あはははははは、凄いですね」

「ふぎやあああつ！」

にこやかに笑う萩波と恐怖に悲鳴をあげる果豎。

他の魔王軍は、リアナージャとレイ・テッドを除いて偉大なる魔王様を止めようとするが、魔王様の気は収まらなかった。

「お前達……雪那樣のご実家で……」

魔王軍が慌てて張り巡らせた結界で家の破壊こそないが、大暴れする彼等に榊の額に青筋が浮かぶ。

そのうち、誰がついて行くついて行かないでも揉め始め、收拾自

体が困難になる。

「俺が行くっ！」

「邪魔ですから此処に残って下さい」

「恵美が行くならわらわ達も当然ついていくまでじゃっ」

「ジャマ」

「ふはははっ！ 原始の天使たる俺に勝てるかあっ！」

蒼麗は思った。

こいつら全員置いていこうか と

そもそも、怒りのあまり手伝えと言ったが、無理して手伝わせないでもいいし

というか、危険かもしれない場所も多いから、寧ろそんな場所にわざわざ近づけさせない方が良さ

最終的にはその心根の優しさが勝つ蒼麗だったが……

「置いていきましようお姉様！ そして私と愛の逃避行を」
「しないって」

とりあえず、一番のラスボスを軽くない事から始めた。

結局、別荘に行くのは神側は全員。

人間側からは雪那と榊、恵美と理恵。

魔族側からは、アルファールンとリアナージャ、アマレットィにレイ・テッド、そしてレミアアが共に行く事になった。

それに加えて、神に人間に魔族と来れば次は天使だろう！と訳の分からない持論を持ち出し、修も共に行く事になった。

残された魔王達の側近達が涙ながらに別れを惜しみつつ

「緊急時があればあそこに飛び込めるようにしておきますから」

と、萩波が七宮家の池と別荘家にある池に道を繋ぐと知り滂沱の涙を流す。

流石は主命の皆様達。

しかし、彼等が呼ばれるという事は主が確実に暴走している時なので、あまりありがたくないのでは？と思うのは蒼麗だけかもしれない。

「常葉地区まではこの小型バスで向います」

そうして一台の小型バスと、荷物運び用のワゴン車が榊により手配された。

「本来であれば時間短縮の為にジェット機を飛ばすのですが」
「最悪の騒音被害だわ」

ハッと笑う蒼花と榊が鋭い視線をぶつけあい睨み合う。
が、蒼花の言うことも最もだった。

常葉地区は山々に囲まれた坂の多い街であり、まず着陸地点がな

かった。

「父の話では常葉地区のお店は大型スーパーとコンビニが一件ずつありますが、どちらも夜十時までの営業で、他のお店に関しては夕方には閉まってしまいうそうなんです」

だから、できる限り必要な荷物は持つていかなければならない。

「とりあえず、食料もできる限り持つて行きましょう。後は寝具やら寝泊まりするのに必要なものを詰め込まなければ」

滞在は長くても一週間を予定している為、ある程度の荷物量になる事は予想された。

そうして荷造りが済んだのは夜の八時を過ぎた頃だった。

「ふむ……なんだかワゴン車は必要ありませんでしたね」

荷物のは大半はバスの方のトラックに入ってしまった為、ワゴン車はかなりガランとしていた。

十二人乗りタイプのゆったり型だから余計にそう思えるのだろうか。

「でもワゴン車は動きやすいから足として使えますよ」

まさか所用やちょっとした移動に小型バスは使えない。

「ですね。ワゴン車も持つて行きましょう」

「で、全員がバスに乗るんですか？」

「おや？違う方が良いですか？」

榊の言葉に、蒼麗はそうではないが……と呟くもふとその後の事を想像する。

皆一緒に載った小型バス。

最初は楽しい時間が過ぎるも、途中で何時ものようにアルファレンと萩波が対立し出して。

「引き離しましょう」

「誰と誰を」

少し、いやかなり予想は出来ていたが、改めて聞かずにいけない榊だった。

その後、三十分をかけて小型バスとワゴン車それぞれに乗るメンバーが決定した。

小型バスはアルファレン、アマレッティ、リアナージャ、レイ・テッド、レミレア、恵美、理恵、榊、雪那、修の十人が。

ワゴン車には、蒼麗と蒼花、萩波、玉英、果豎　そして

「れんちよう、いばりやぎ〜！」

「あの、急遽呼ばれたんですけど……はは」

「ってか、明燐切れてたんだけど……」

人数が多いのでと帰らされた蓮璋と茨戯が助っ人として、ワゴン車組に急遽招集された。

「すみません突然お呼び立てして」

「いや、大丈夫ですけど」

「アタシより明燐呼んだ方が良かったと思うんだけどね」

「玉英さんと一緒にすると収拾がつかないので駄目です」

「まあ、そうよね……けど」

茨戯はすつと眼を細めた。

「で、アタシ達を呼んだ理由は何？」

「人手が足りないの」

「人手が足りない？」

「暴走した萩波先生とアルファレンさんを止める際の」

グツと拳を握りしめる蒼麗に、二人は全力で納得してしまった。

確かに

「まあ、半分は七宮家の別荘をただで借りる条件として屋敷のお掃除があるんで、その人手が欲しかったという事なんですけど」

「アンタ……アタシ達を掃除要員に使うとは凄い度胸ね」

蒼麗の方が身分は上だが、実力や経験で言えば蓮璋と茨戯の方が上だ。

「使えるものは何でも使うというのが師匠の教えなんで」

「蒼麗公主……」

「というか、一刻も早く果堅さんを元に戻すには手段を選んでいられないんですよ」

「それは納得」

「それに いえ、やっぱりいいです」

何かを言おうとするも、口を閉ざした蒼麗に彼等は首を傾げる。

「何かあるの？」

「いえ……私の思い過ごしだと思うので……」

だが、後にこの時言っておかなかった事を後悔するのだが、それはまだ先の話である。

「で、半分は掃除要員、半分は王達を止める為……超忙しくなる事間違い無しね」

「すいません……でも、リアナージャ様は面白がって寧ろ応援に回りそうだし、アマレッティ様とレミア様は頑張って止めてくれるかもしれないですけど、レイ・テッドさんと修さんは恵美さんと理恵さんが無事ならそれでいいといった感じで、榊さんに至ってはそもそも雪那さん以外に興味なし、かといって恵美さんや理恵さん、雪那さんに止めるのを手伝ってもらうわけには行かないですから」

二人しか使えないじゃん

と、心優しい二人は言わなかった。

「あと、玉英さんも絶対に観戦する側だし、蒼花は基本的に自分の興味のない事には絶対に関わらない上にそういう時に率先して動いてくれるタイプでもないし」

果豎は止めようとしてくれるだろうが、今の幼い体では無理だ。

「勿論私も止めますけど、そもそもが力無しなので」

出来る事に限りがあると言う蒼麗に、二人は心の中で涙した。

魔王閣下、王……冷静に分析されすぎてるよ！！

「つまり、それがアタシ達を呼んだ理由なのね」

「はい」

「まあ、そうね。でなければ、ただでさえ人外の者が多く揃っている此処に更に二人も追加して良くないもの達の目に止りやすくなるような状況を作り出さないでしょうし」

「すいません」

それは分かっていたけれど、自分だけでは止められない。

「それに、聖女達も分散するどころか三人揃って行くようだし……確かに、向こうに行く方の戦力を上げた方がいいでしょう」

「そうなんですよね」

蒼麗がちらりと恵美達を見る。

ただそこに居るだけで、既に沢山の良くないもの達が集まってきた。

それらを視線で消滅させていくアルファレンと修に心の中で拍手を送りながら、茨戯達に視線を移す。

「という事で同行御願いします」

「分かりました　って、果豎、ちょっと離してくれるかな？」

「いや」

キャツキャツと自分の足に纏わり付く果豎を優しく説得するが速攻拒否。

しかし、自分を射殺しそうな萩波と玉英の視線に、蓮璋は半ば強引に果豎を引きはがす。

「いやあゝゝ！」

「果豎、こちらに來なさい」

再び萩波の腕の中に収まった果豎がジタバタと暴れるが、普段でさえ敵わないのに小さい今の体では余計に齒が立たなかった。

「……とりあえず、ドライバーも必要って事ね」

「はい」

ワゴン車メンバー内で唯一免許を持っている萩波だが、何処までも使えなかった。

魔族達と七宮家の当主と息子に見送られた後、小型バスの先導でワゴン車も発車した。

ドライバーは蓮璋。

途中で茨戯が交代要員として変わる事になっているが、五時間程度であれば

その必要はなさそうだった。

「五時間で着けばいいけどね」

「蒼花？」

「何があるか分からないもの」

蒼花の不吉な言葉はこの後実現する事となる。
それは峠道に入ってから間もない頃だった。

「くりゃいね」

「カジュ恐いの？」

窓に顔をくつつけながら外を見ていた果豎がぶるりと体を震わせれば、同じ毛布にくるまった玉英が義姉の頭をなでる。

「くう……なんて羨ましい」

「萩波先生……」

歯ぎしり萩波をとりあえず置いておき、蒼麗は果豎に近づいた。

「確かに外は暗いね」

「まっくらやみ、かじゅきりゃい」

そうか……普通はそうだよな

蒼麗はうんうんと頷いた。

師匠の元では夜の山に放り出される事数知れず。
慣れてくれば夜の山をかけずり回ってきた蒼麗にとっては特にど
うって事もないが、普通は恐いのだ。

「神なのに小心者ね」

「蒼花……」

「ふにゅっ」

「蒼花公主、私の妻を苛めないで下さい」

まあ、確かに神である自分達が何を怖がるのだと言う蒼花の言い
分ももつともだが、それでも恐いものは恐いのだ。

そう言う意味では、果豎は人間に近い思考の持ち主だと言える。

「恵美さん達は大丈夫かな？」

「問題ないでしょう。寧ろ怖がる暇もないぐらい鳴いているでしょうから」

さらりと問題発言をする萩波に、運転席に居る蓮璋と助手席に座る茨戯が心の中で涙した。

「子供の前で……」

「はは、さすがは陛下ですね」

「アンタ、それでいいの？」

と、呆れた様子の茨戯が口を閉ざす。

「茨戯様？　っ」

蓮璋も何かに気づいた様子で、前方を見据える。

「どうしたんですか？」

蒼麗も異変に気づき前の二人に声をかける。

その時、急に辺りが霧に包まれていく。

まるで二台の車を取り込むように白さが増し、前方の小型バスのテールランプが見えなくなるまでに時間はかからなかった。

蓮璋が前のバスに停まるようにクラクションを鳴らす、そのか
いもなく、小型バスの姿は消えていった。蓮璋がブレーキを踏み、
ワゴン車を停める。

「取り込まれたわ……」

「いや、取り込まれたって！」

妹の言葉に蒼麗が焦る。

「あ、でもアルファレン様達がいるし」

しかし、この嫌な予感は何だろうか？

「……探しに行くかな」

「お待ち下さい！この状態で外に出れば迷ってしまいますっ」

慌てて止めようとする蓮璋だったが、既にそこには蒼麗は居なかった。

開け放たれた扉が虚しさを漂わす。

「しかも、蒼花公主様もいらっしやらないわ！」

「そうれい」

「はいはい、果豎はここで留守番してましようね」

「い、いいの？追いかけて……」

茨戯が聞けば、萩波は果豎を抱きしめながら笑う。

「大丈夫でしょう、あの姫君達ならば。寧ろ私達が行った方が邪魔になります。それに今の私は本気で役に立ちませんからね」

「は？何を……」

その時、茨戯の目に映ったそれ。

果豎の髪が揺れ、露わになった首筋に見えたものに、顔色を無くす。

「それ……」

「ふふ、また浮き出てきた様ですね」

「う？」

「果豎は気にしないでいいんですよ」

そうして、にこにここと笑う萩波に茨戯は心の中で叫んだ。

（ちよっ！こんな悠長にしている場合じゃないでしょうがああああ
っ！）

薄いが、根強い呪の印は着実に果豎の魂に刻み込まれていたのだ
った。

息苦しさに雪那は喘いでいた。

「はぁ……はぁ……」

「お嬢様、もう少しの辛抱です」

そう言いながらアクセルを踏み込むも、いつまで経っても景色は
変わらない。

どれほど長い時間そうしていただろう。

白い霧の中を進む小型バス。

今の状況に陥ってから長い時間が過ぎた様な気がするが、バスを
始め持っている時計は全て止り正確な時間は分らない。

怪奇現象

バス内に居る全ての者達にその単語が浮かんた。

とはいえ、此処に居る者達の多くはその剛胆で強靱な精神力により、怯えてパニックになる者は居ない。

しかし、それも雪那に異変が起きるまでだった。

白い霧の中を進み出してしばらく、雪那の呼吸がおかしくなった。過呼吸にも似たそれに、恵美と理恵が急いで紙袋を使用するも変化はなく、ひたすら苦しそうに呼吸を繰り返す。

急遽座席を倒して横にしたものの、容態は悪くなる一方である。

「雪那ちゃん……」

「何とかならないの？」

「何とかと言つてもものう……」

傷であれば癒すが、雪那の様子はそれとは違い原因すらも分からない。

ただ分かるのは、一刻も早くこの場所から遠ざけなければという事だけだった。

だからこそ、柵はアクセルを踏み続ける。

愛する女性を救うために。

「どうしよう……」

恵美は雪那の手を握りしめる。冷たい手はまるで死人のようだった。

その手を必死にこすりながら、恵美は心の中で助けを求める。

誰か……

恵美の中に蒼麗達の顔が浮かぶ。
もしかしたら彼等が。

けれど、その思いはあけつなく砕かれた。
後ろに居た筈のワゴン車が見えないのだ。
停まって確認しようにも、レイ・テッドの激しい制止がかかる。

「この状態で外に出るのは危険です!」
「でも」

このままでは雪那が

バン

「え?」

何かが窓硝子に当たる音が聞こえた。
かと思えば、突然の急ブレーキ。
恵美の体が前方に転がる。

「恵美っ!」
「あぶないっ」

理恵が恵美の手を掴もうとするも、レミレアによって止められる。
突然のことに、驚く間もなく恵美の体が通路を滑り前へと進んでいく。

そのまま、フロント硝子に突っ込もうとした時だった。

「大丈夫か?」
「にいさま……」

力強い手が自分を抱き留めたかと思えば、アルファレンの腕の中に収まっていた。

「怪我は？」

「だ、大丈夫です」

「一体何があ　　きゃああああっ！」

理恵の悲鳴に恵美が顔を上げる。

「理恵ちゃんどうし　　」

窓を見た恵美は絶句した。

血に濡れた男の紅い眼が自分を射貫く。

「ひっ！」

男の視線から庇うようにアルファレンが恵美を抱きしめる。

「ちっ……消える」

アルファレンの瞳が紅く光れば、窓に張付いていた男が悲鳴を上げる。

そのまま、麗しい魔王の予想通りに男は消滅する筈だった。

が

「なん……だと？」

「にいさまっ！」

アルファレーンの力を受けた血まみれの男は更にその姿を変え、窓硝子を叩き始めた。

「アルファレーン力を使うのやめろっ！」

「兄上？」

「こやつら、我らの力を吸い取っておるっ」

こやつら リアナージャが称したとおり、それは一体ではなかった。

バタバタと白い霧から現れる異形の者達。

外見こそ人だが、明らかに悪意を持つそれらは腕がなかったり足がなかったり顔がなかったり、更には血まみれになっていたりと凄まじい姿をしている。

「我らの力を吸い取るだど？」

「その通りじゃ！我らの魔の力を奴らは吸い取りおのが力とする！それ以上やれば相手にただで力を渡すようなものじゃ！」

「じゃあ俺の力なら大丈夫だな！」

そうして原始の天使である修が力を解放しようとした時だった。

「ならば、吸い取っていられぬほどの力を叩き込めばいい」

アルファレーンが再度力を放つ。

だが、それよりも早くに窓硝子が割れた。

「きゃああああっ！」

次々に割れていく窓硝子。

侵入してきたそれらが、恵美達に向って襲い掛かる。

「恵美っ！」

「理恵っ！」

「お嬢様！！」

狙いが少女達だと気づいた時には、それらは恵美達に掴み掛かっていた。

そのうちの一体が、雪那を抱き上げる。

「お嬢様を離せ！」

しかし車内では向こうの方に分がある。

恵美と理恵はアルファレン達が素早く奪取したが、雪那を抱いたそれはいち早く外に逃げようとする。

榊の手をすり抜け、窓へと走るそれが振り返る。

勝ち誇ったように笑うその様に、榊の中で何かが切れる。

俺のお嬢様を

榊に宿る霊力が一気に膨れあがる。

続く

【幼児化王妃の危機?】・・・大雪様著（前書き）

さて今回も大雪様です。

先日のウサギ話ありがとうございました。さくらもピーターラビット大好きです！そして大根着ぐるみを着たうさぎさんも大好きです！

いつもお忙しい中、どうもありがとうございます!!

【幼児化王妃の危機？】・・・大雪様著

周囲を覆い尽くす魔の霧の中。

全ての感覚を遮断されているにも関わらず、それは感じ取れた。

「これ……榊さん？」

強大な霊力が出現したかと思うと、一気にそれが爆発したのを感じた。

続いて、魔の霧によって歪められていた空間が、更に歪んでいく。

「やばい……」

このままでは、歪みに飲み込まれる。

すぐに彼等の元に向おうとした蒼麗だったが、ふと置いてきた果豎達の事が頭によぎる。

そうだ……このままでは果豎達もこの歪みに巻き込まれる……！！

そう思い振り返るが、足を踏み出すことは出来なかった。

どちらかに行けばどちらかを見捨てる事になる。

「大丈夫よお姉様」

「蒼花？！」

白い霧の中から声が聞こえたかと思えば、車に置いてきた筈の双子の妹が姿を現わす。

「萩波達は大丈夫でしょう。子供にすら欲情する変態だろうと、あの凧国国王は天界でも名のある実力者。その側近達もそれぞれに死地を潜り抜けてきている猛者達よ。放っておいてもなんとかするでしょう」

「でも……」

「それより、問題はバスの方よ。行くわよお姉様」

「え？きやつ！」

蒼花に腕を引っ張られた蒼麗は、引き摺られるようにして走らせる。

そんな二人を追いかけるように白い霧が濃度を増す。

「ちっ……どこまでも邪魔をする気ね」

小賢しい奴らだ

さて、どうしてくれよう

姫様

忌々しげに笑った時、白い霧に混じり声が聞こえてくる。

姫様

再度呼ばれて、蒼花は溜息混じりに答えた。

何よ

私達が行きましようか？

何処に……とは聞かなかった。
ただ、蒼花は面倒くさげに答える。

別に良いわ。私に売られたケンカは私が自分で買い取るから。
それよりさつさと此処から退きなさい。

蒼花は自分の護衛役達を促す。
何時も側に居る彼等。

例え側に姿が見えなくても、必ず数人は潜んでいる。
最強と名高い、幼馴染み達で結成された蒼花の盾であり剣。
己を全ての災いから守り、何事にも煩わされず恙なく暮らせるよ
うにと全力を尽くすことが使命。

しかし、蒼花といえただけ守られているだけではない

姫様

退け

再度命じると、彼等の気配が霧の中から消えるのを感じた。
今頃は安全地帯で待機している事だろう。

自分とて、出来るならばさつさと姉を連れて安全地帯に飛びたか
ったが、この状態では姉は死に物狂いで抵抗するだろう。

「本当に面倒な事」

「え？」

「気にしなくていいですわ、お姉様」

姉に微笑みながら、蒼花は手を振り魔の霧をなぎ払う。
霧が晴れ、姿を現わす小型バスに、蒼麗が叫ぶ。

「バスがつ！」

バスを覆い尽くすそれに蒼花が舌打ちする。

「あの馬鹿っ！」

既にあの状態では手遅れだ

「雪那さんっ！」

「お姉様っ！」

蒼麗が蒼花の手を振り払い走る先には、バスの前に立ち尽くす血まみれの男の腕に抱く雪那の姿があった。

「雪那さんを離さない！」

蒼麗の叫びに反応したそれが、高く飛び上がり蒼麗の背後に降り立つ。

「待って！」

今からではもう追いつけない。
勝ち誇ったように笑うそれは、そのまま仲間達と共に雪那を連れて走り去ろうとした。

「止まれゲス」

思わず聞き惚れる美声に足を止めたのが運の尽き。

白くほっそりとした腕が目の前に差し出された次の瞬間には、首をギリギリと絞められていた。

キィィィッ！

他の仲間達が慌てて駆け寄るが、恐ろしいまで完全無欠な造形美を持つ目の前の美少女の一睨みによって、骨すら残さず灰になる。

「もとはこの山の遭難者みただけど、今はただの化け物か」

ソウナンシャ？

分からない。自分が何者かも分からない。

ただ、眠っている自分達に声が聞こえた。

奪え

奪い取れ

今からここに来るバスに乗る女達を奪い取れ　と

息苦しさなど何年ぶりに感じただろう。

ただ苦しくて、死の恐怖を感じて無我夢中で暴れる。

おかしい

死の恐怖を感じるなんて

だって自分はもうずっと以前にこの山で死

バキンと音がなったのを最後に、意識は消えた。

「蒼花！大丈夫？！」

姉が自分を心配してくれる

それだけで蒼花は天にも昇るような気持ちになる。

「やっぱりお姉様は最高だわ！！」

蒼花のシスコン度が更にアップした。

「にしても、さっさと意識を取り戻してくれないかしら」

意識を失ったままの雪那を抱き上げたまま、蒼花は小型バスを見る。

「蒼花！雪那さんは？！」

「怪我一つありませんわ」

「そっか！じゃあバスの方を」

「もう無理です」

「へ？」

蒼花はにっこりと笑うと、姉の手を掴む。

「蒼花？」

「空間が崩れます。飛ばされますからしっかりと掴まっ
ていて下さいな」

奴らも面倒な事をしてくれた。

よりにもよって、あの類い希なる霊力を持つ人間の男を暴走させてくれるなど。

そもそもきちんとした修行もしていないというのに、あれほど感情を高ぶらせれば暴走して当然だ。

一度神有一族に叩き込んで修行をさせるべきかもしれない

霊能力者や占者など、その手の者達ではその名を知らぬ者が居ないかの一族

小型バスから溢れる黒い光が魔の霧を切り裂き周囲を覆い尽くす。音もなく崩壊していく地面に、蒼花達の体が投げ出される。

「行き着く先は地獄か、それとも」

左腕に雪那を抱きかかえ、右手で姉の手を掴んだまま蒼花はこの狂った空間を切り裂くために力を解放した。

来ては駄目だよ

はやく此処から逃げて

ほら忘れてしまっんだ

思い出してはいけないよ

何もかも忘れて

逃げ延びるんだ

かゝごめ かごめ

誰？

気づいた時、蒼麗は暗闇の中に立っていた。

何もない何処までも続く暗闇に、常人であれば気が触れる事は間違いない。

しかし、蒼麗はその暗闇に恐怖する事はなかった。

彼女の意識は、遠くから聞こえてくるその歌に向けられていたからだ。

かゝごめ かごめ

聞こえてくる子供達の歌声

歩いて歩いて

蒼麗はその子達を見つけた

数人の子供達が歌う中、一人の小さな少女が中心でかがんでいる。それを見ながら、蒼麗はただぼんやりと歌を聞き入っていた。

籠の中の鳥は

いついつ出やる

夜明けの晩に

鶴と亀と滑った

うしろの正面

その時、蒼麗の背筋にゾツとした悪寒がかけめぐる。

駄目

その先を歌ってはいけない

止めようとした蒼麗が、中心に居る少女に手を伸ばす。
すると、まるで声が聞こえたように少女が顔を上げた。

それは

「雪那さん」

茫然と呟いた蒼麗の耳に、最後の歌詞が入る。

だあああああれ〜！！

ミツケタ

コノコドモダ

「お姉様!!」

「はい?!」

妹の声に反射的に返事をした途端、目の前の光景が消える。幼い雪那も何もかも消え、妹のドアップが映り込んでくる。

「蒼花？」

「そうですね、お姉様」

「私……あれ……」

じゃあ、さっきのは夢？

「また何か見ましたの？」

「う……いや、なんていうか説明が難しいんだけど……」

そうして起き上がった蒼麗は、ふと周りの光景に眉をひそめた。

「ここは？」

見覚えのない場所だった。

周りは木々で囲まれており、周囲に道らしきものはない。

「……山？森？」

「さあ？どちらでしょうね」

「ってか……ここは現実世界？」

先ほどまで自分達を覆っていた霧が作り出した世界では、到底感じられない生気を感じる。

しかも、今は昼間なのか木々の間から太陽の光が差し込んでいる。

「少なくとも、霧の中ではないですわね」

「そっか……」

その言葉だけで、蒼麗は自分達が現実世界に戻った事を理解する。

「とりあえず一安心……って、そ、そういえば雪那さんは?!」

「そこにいますわ」

蒼花が指さす方向に雪那は居た。

緑の絨毯の様な草の上に寝かされている。

「雪那さん!」

蒼麗が慌てて駆け寄り脈を取る。

どうやらただ眠っているようだった。

「どこか休ませられる場所を捜さないと……」

「人里があると良いのですがね」

「そうだね……あ、他のみんなもいるの?」

「此処にはいませんわ。たぶん、それぞれ別の場所に飛ばされたのではないかしら」

「そんな……」

彼等を思い、蒼麗は眉をひそめる。

「まあ、生きてはいるでしょうね」

「怪我してないかな」

「あの程度でくたばるのならそれまでという事ですわ」

「蒼花……」

手厳しい妹の言葉に蒼麗はガクリと頂垂れる。

自分への優しさを、少しでも周囲に分けて欲しいと思うのは贅沢だろうか。

「えっと、とにかく人里を捜さない」と

そう言つと、蒼麗は雪那を背中に背負う。

「お姉様がそんな事しなくていいですわ!」

「大丈夫だよ。雪那さん軽いし」

アルバイトでは山小屋に荷物を運ぶ歩荷も毎年行い、百キロ近い荷物を運び上げていたのだ。

華奢な体つきの雪那を背負って歩くぐらいわけではない。

「それに、落ちこぼれだけど私も神だよ?」

そもそも神の身体能力は人間と比べて格段に高い。

崖から飛び降りても怪我一つないぐらいだ。

それに馬鹿みたいに順応力が高く、低地から突然高地に行っても低酸素脳症すら起こらない。

しかし、蒼花は蒼麗をまるで人間の少女の中でも一際か弱い存在のように扱う。

「お姉様が背負うぐらいなら私が背負います！」

「蒼花に背負わせたら私が殺されるから」

誰に？

勿論、蒼花の信望者達である

何せ、蒼花は『天界の華』と呼ばれる絶世の美姫

聡明で文武に優れ、あらゆる才に恵まれた賢姫

その上、天界中の羨望と憧れの的であり、天界上層部にとって庇護し守るべき存在である

その妹に肉体労働？

冗談ではない

天帝夫妻、他の十二王家からも溺愛されその寵愛を一身に受ける双子の妹は守られ傳かれる存在

間違っても肉体労働なんてさせられない

「お姉様ってば！私、お姉様に命じられればこの場で全裸にでもなれますのに」

「……………」

その瞬間、もの凄い速さで逃げ出した蒼麗に、物陰から二人を見守っていた蒼花の護衛役達が涙したとかなんとか。

だが、蒼麗の見事な逃げっぷりも蒼花の健脚には敵わない。
というか、深窓の姫君のくせにどうしてそんなに足が速いのかと
いう疑問を始め、問い質したい疑問は多々あるが、蒼麗は見事に捕
まった。

「お姉様、捕まえましたわ！」

「ひいひいっ！」

「ふふ、雪那の命が惜しければ私から離れないで下さいな」

そんな悪役極まりない台詞を吐く妹に、蒼麗は逃げられるものな
ら逃げたかった。

しかし、この妹の事だ。やると言えばやる。

下手に逃げれば雪那の首が落ちる、マジで！！

そんな事になれば、榊の暴走はもはやノンストップ暴走列車。
というか、もう一人の魔王の出来上がりである。

いや、もしかしたら冥界に殴り込み、雪那を取り戻そうとするか
もしれない。

まるで蛸のようにひつつき自分に甘えてくる妹に蒼麗は泣いた
心の中で。

「けど、本当に他のみんなは何処にいるんだろう」

「人間界の何処かにはいるでしょうね」

あの空間の歪みから逃げ切れた場合ではあるが

しかし、その可能性は低い

（萩波達は……無事に逃げ延びたみたいだけど、魔王達は駄目だったみたいね）

蒼花はそつと姉に気づかれないうちに小さく溜息をついた。

だが、それも当然だ

魔王達はあまりにも距離が近すぎたのだ

あの小型バスに居た者達は直撃だった

何せ、姉がバスに駆けつけた際にはもはや気配は何も残っていなかった

最初の暴走で飛ばしてしまったのだろう

飛んだのではなく、飛ばした

魔界の実力者達と言えど、突然の暴走には対処しきれなかったに違いない

（悪くて狭間を漂っているか……）

まあ、一人にさえならなければ何とかなるだろうが

なんて事を考えていると、よりにもよって双子の姉が元凶たるあの男を褒め称える。

「にしても、榊さんは凄いいね。人間なのにあの霊力は中々いないよ」

「お姉様ってば……あのノンストップ暴走列車の何処を見てそう思うんですの?」

蒼花……

因みに、蒼花の中では萩波は公開ロリコン鬼畜、アルファレンは青少年保護法違反、修は歩く延髄下半身直結男となっている。

他にもまだまだあるらしいが、説明すると長くなるからここまでにしておく。

「鬼だ」

「言っときますけど、どれほど強い力を持っても制御出来ずに暴走させた挙げ句に他の者達を巻き込むなんて、凄くもなんともありませんことよ、お姉様」

妹の言うことは正論だった

「そ、そうだね、確かに」

けれど、神とは違い人間の場合、いくら力があるからといってもそういう方面を学ぶ場は限られている。

しかも、死ぬまで力が開花しない、気づかない人もいるぐらいだし……。

「あ、けどやっぱりあの空間の歪みは榊さんが原因だったんだね」「勿論ですわ、お姉様。どうせ雪那を攫われそうになって暴走したのでしょうけど。それが面倒な事に空間を歪める力に作用して暴走させたというところでしょうね」

「や、やっぱり凄い」

というか、よほど榊の方が神らしいと思うのは自分だけではないはずだ。

「あ、道に出ましたわお姉様」

蒼花の言葉に蒼麗が顔を上げれば、いつの間にか木々が消え、前方に塗装された道路が見えた。更に、遠くに建物の姿が見える。

「あそこなら場所を聞けるね」

「ラブホテルは此処にはありませんけど」

「現在地だって！」

続く

【幼児化王妃の危機？】・・・大雪様著（後書き）

蒼花サマ最強。

大雪様、付いて行きます・・・！

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著（前書き）

こんばんわ、さくらさくらさくら様
大雪です。

続きを書き上げましたので、またまたお送り致しますvv

今回は雪那が結構大変なことになってます（汗）

建物は警察署だった。

広い駐車場にはパトカーの他に、一般の車が数台停まっている。
『常葉警察署』と書かれた文字が建物入り口の上に見えた。

「つて事は、ここは常葉地区の中?」

「みたいですわね」

なんと、既に目的地に居たらしい。

「ラッキー! じゃあ七宮家の別荘も近くにあるつて事だよね!」

なら、そこまで行けば雪那を休ませられる。

「でも、雪那の別荘の場所が分かりませんが」

「それは警察署で聞けばいいよ。ついでに地図も貰えるか聞いてみよう」

「婦警さんごつこのアイテムも欲しいですわ、お姉様」
「……………」

蒼麗は妹を無視して入り口へと向った。

しかし、扉を押そうとした時、ふとその手を止めた。

「お姉様?」

「なんか…………暗すぎない?」

中は昼間にも関わらず薄暗かった。

「経費削減の為に照明を消しているだけでは？」

経費削減……不況の波はここまで押し寄せているという事か。

「気にしすぎだよな」

「もし何かあっても私が守ってあげますわ、お姉様」

妹の言葉に蒼麗がクスクスと笑う。

「それ逆だよ、蒼花。普通は姉が妹を守るものだよ」

そうしてゆっくりと扉を開けた。

オイデ

誰？

オイデ

誰なんですか？

サア

エラバレタコヨ

ひんやりとした空気にぶるりと体を震わし、雪那は起きた。
ぼんやりとした頭で、ゆっくりと体を起こすと硬い感触が手に触れる。

「ここは……」

そこは何処かの休憩所だった。
暗い中、壁際に設置された自動販売機の光が唯一の光源というように、辺りを照らしている。

自分が横たわっていたのは長椅子だった。

他にも、幾つかの椅子とテーブルが置いてあるのが見えた。

また、近頃禁煙で撤去されている筈の灰皿が幾つもあり、自動販売機の横には新聞や雑誌が置いてあった。

「私……確かバスに乗っていて……」

それで、突然バスが霧に覆われて……それで……

雪那の中に少しずつ記憶が蘇っていく。

そつだ……バスが化け物に襲われて、私……

意識を失う前に、櫛の声を聞いた気がする

凄く焦っていて、恐怖に彩られた声

いつも余裕な榊の滅多に見ない表情に、すぐさま彼の側に駆け寄って慰めたかった。

まるで捨てられた子供のような彼を抱きしめたかった。

けれど……それは敵わなかったらしい

「榊……」

榊は何処にいるのだろうか？

どうして彼は側に居てくれないのだろうか？

その時だった。

カツンと音が聞こえ、雪那は顔を上げる。
背の高い人影が、廊下の奥に見えた。

「榊……なの？」

その言葉に反応するように、足音が遠のいていく。

「ま、待って！」

長椅子から立ち上がり、人影の見た廊下に向って走り出した。
それが、恐怖の幕開けとも知らずに。

「誰も居ないし……」
「ですね」

署内は暗いだけでなく、全くの無人だった。
最初は誰か居ないかと声をかけ続けるも反応がなく、最終手段として部屋を一つずつ回ったが誰一人として見つけることが出来なかった。

「ストライキかしら」

「いや、警察がやったらまずいでしょ」

警察でなくてもまずいだろう

「街全体でのお祭りとか行事とかあるんだろうか？」

常葉地区こと常葉町は、周囲を山々で囲まれた閑静な田舎だが、同時に美しい観光地でもあった。

また特徴として、幾つもの社寺が存在しているのがウリらしい。
何でも、遙か昔は強い力を持った聖地の一つだったという言い伝えもあるそうだ。

もしかしたら、そのお祭りで人手をそちらにまわしているのかもしれない

しかし

「それでも、居残り組は居るよね」

でも、誰も居ない

「うん……」

「お姉様、喉が渴きました」

「あ、じゃあ休憩所に戻ろうか。雪那さんも心配だし」

休憩所に置いてきた雪那も、もしかしたら目を覚ましている頃かもしれない。

一応書き置きは残してきたが、心配は尽きない。

勿論、最初は蒼花を雪那の側に残していくつもりだったが、激しく拒絶されてしまい、代わりに自分の神獣を置いてきた。

「來、ちゃんと見てってくれるかな？」

まだ幼い神獣である來は、子供らしく気まぐれなところがある。雪那を放って遊びに出かけないとも限らない。

「わたし、コケ・コーラが飲みたいですわ！」

「はいはい」

蒼麗は肩から下げていたポシエットから財布を取り出す。

あの霧の中で蒼麗が持ち出してきた唯一の荷物が、いつも持っているポシエットだった。

一応、最低限のものが入っているポシエットを、小型バスを探しに行く際にも無意識に持ってきていた。

因みに、他の荷物はワゴン車、小型バスに乗ったまま行方不明だ。

きっとそれらも現実世界の何処かに放り出されているだろう。

「これだけでも持ってこれて良かった」

「いつも思ってますけど、何が入ってますの？」

「うん？え」と、携帯にLEDライトの懐中電灯と、後は巾着袋に入っている換えの電池、ライターとマッチ箱が幾つかと」

どれも防水加工ばつちりの代物だ。

「アーミーナイフに救急セット」

「救急セット？」

「うん。包帯や絆創膏とかの普通の救急セットの他に、神力の回復飴や回復札とか入ってる奴だけと」

うんって……どう考えても姉のポシェットに入る筈がない。

「あ、これ錬金術で作った袋だからね。制限はあるけど、大きなものでも入るよ。一番大きなもので、大型段ボール箱ぐらいの大きさかな」

またとんでもないものを作ったな……

「あとは携帯の充電器だね。蒼花は？」

「私ですか？」

蒼花も蒼麗とは違うが、ウェストポーチを持っていた。

「私は、LEDライトの懐中電灯と携帯、携帯の充電器、ゴールドカード数枚に、聖水を幾つかですわ」

「聖水？」

「ええ。この前学校の実習で作ったのがそのまま入ってたみたいです」

「そうなんだ。って、ゴールドカードって……」

こんな田舎町で使用出来るのだろうか？

いや、地図を見ればホテルとかあったし、そこなら使えるだろう。
しかしお店やスーパーではたぶん無理だ。

「ま、まあ私がいくらか持つてきてるし」

そうこうするうちに、休憩所にたどり着く。

大喜びで自動販売機に走る蒼花に蒼麗は苦笑した。

「どれにしようかな」

自動販売機は三つ。品揃えも豊富らしく、妹の迷う声が聞こえる。
それを背後に聞きながら、蒼麗は雪那が眠っている長椅子に視線を向けた。

「……あれ？」

雪那の姿がない。

「あゝ、起きちゃったかな」

しかし、周囲にもその姿はない。

もしかしてトイレだろうか？

「蒼花、ちょっとトイレ見てくるから」

「私も行きますわ」

「え？いや、蒼花は飲み物買って欲しかったんだけど」

だが、姉について行くと聞かない妹に、蒼麗は諦めながら休憩所の隣にあるトイレのドアを開けた。

人気はなかった。

「何処に行ったのかな……」

「お姉様を捜しに行ったのでは？」

「そうかな？」

休憩所に戻ってみるが、やはり雪那は居ない。
戻って来た様子もない。

「何処にいったのかな？」

キヤアアアアアアアアア

「っ?!」

「今のは雪那かしら? って、お姉様?!」

妹の手を掴むと、そのまま声の聞こえた方に走り出す。

何かに驚いたというよりは、命の危機が迫っているかのような叫びだった。

廊下を走り抜け、曲がり角を滑るように曲がりきる。

左右に分かれた道の他に、前方に階段が見えた。

「どっち?!」

すると、再び叫び声が聞こえる。

「階段っ！」

階段を駆け上がった蒼麗が二階の廊下に出た時だった。
遠くに雪那の姿が見えた。

「雪那さんっ！」

「いやあああああっ！」

雪那が悲鳴をあげて叫びながら必死に両手を振る。

まるで何かから身を守ろうとするように

「いやあああああっ！」

暗闇の中で雪那は叫んだ。

自分に襲い掛かるそれを必死に振り払っていた。

そんな雪那を、警察官の服に身を包んだそれがケラケラと嘲笑う。

雪那がその人に追いついたのは、人影を追いかけてからほどなく
の頃だった。

階段を駆け上り、暗い廊下の向こうに佇むその人に柵と叫びながら
駆け寄った。

しかし、すぐに服が違ふ事に気づいた。

その人物は、警官服を着ていたからだ。

ぼんやりとしたオレンジ色の照明が灯っていなければ、例え近づいたとしても気づかなかつただろう。

最初に見た時に気づかなかつたのも、一階の方が暗く明かりが殆どなかったせいだ。

無礼を詫びた雪那は、とりあえず此処が何処なのかを聞こうと顔をあげた瞬間、凍り付いた。

目が……鼻が……いや、顔そのものがなかつたのだ。

以前は警察官として、困っている人達を安心させるように微笑んでいただろうその顔は、一個のグロテスクな肉塊へと変貌を遂げていた。

雪那が悲鳴をあげた瞬間、それは襲い掛かってきた。

警棒を振り上げ、近くの照明を壊しながら雪那を追い詰める。照明が一つ消えることに周囲が闇に包まれた。

榊、榊、榊！！

雪那は必死に榊を呼んだ

そんな雪那の顔を、警察官がのぞき込む。

………ダ

え？

エラバレタコ

「何を……」

エラバレタコ

エラバレタコ

サア　ワレラトモニコイ

その化け物が雪那の腕を掴む。
ぬちゃりとした感触に、雪那が絶叫する。

「雪那さん！」

ガツと強く肩を掴まれ、振り向かされた雪那が息をのむ。

「……蒼麗……ちゃん？」

そこには、ワゴン車に乗っていた筈の蒼麗が立っていた。

「あ……」

雪那が瞳を閉じたかと思うと、その体が崩れる。

「きゃっ！雪那さん?!」

「完全に気絶しましたわ」

「ど、どうしよう……」

「また休ませるしかありませんわね」

「う、うん…… ってきゃあっ！」

突然背中に衝撃を受けたかと思えば、ジジジという鳴声が聞こえた。

「来?!」

それは、蒼麗の神獣 来だった。

姿は人間界に居る齧齒類のチンチラにそっくりの来は、その大きな足で蒼麗の背中を蹴って頭の上にいる。

「降りて」

『嫌』

そう書いたプラカードを蒼麗に見せる。

何時もの事ながら、何処にそんな大きなプラカードを隠しているのか。

「ってか、雪那さんの側に付いててって言ったのに何処に行ってたの?!」

『側に居たよ』

「は?」

居たって……

が、首を傾げる蒼麗を来は無視し、新たなプラカードを見せる。

『此処おかしい』

「は？」

『雪那やばい、雪那まずい』

「いや、だからどういう事？」

「とりあえず、此処から出た方が良いみたいですわね」

「でも、この状態の雪那さんを動かすのは危険じゃない？」

雪那の顔色は先ほどよりもずっと悪い。

体中に冷や汗をかいている。

何かよほど恐ろしい事があつたのだろう

それは先ほどの様子からも容易に予想された

けれど蒼麗は首を傾げた

自分達が駆けつけた時、雪那は一人で悲鳴をあげていた

もしかしたら、自分達が駆けつける前に誰か居たのかも知れない

しかし、周囲の気配を探っても何の気配も感じられなかった

とすれば、一体何を見たのだろうか？

「移動するかどうかはお姉様に任せますわ」

蒼花の言葉に、蒼麗は來を見た。

相変わらず、ここから離れた方が良いというプラカードを出し続ける來に、蒼麗は決断した。

「わかった。此処から出よう」

蒼麗の言葉に、蒼花と來が頷いた。

雪那を再び背負い、蒼麗が歩き出した後、蒼花と來がその後をついていく。

階段を下りて休憩所を通った時だった。

パサリと、雑誌置き場から新聞が落ちる。
それを戻そうとした蒼麗を蒼花が止めた。

「私が戻しておきますわ」

「そう？」

「ええ。それに飲み物も買いたかったし」

そう言つと、蒼花は心配する姉を先に行かせた。
一人残った蒼花は新聞を手にとった。
すると、姉と共に行つた筈の來が蒼花の頭の上ののっかる。

「貴方も気づいてるんでしょう？」

「まあね」

「ふふ……雪那は見事に囚われてしまったみたい」

そう言つと、蒼花は新聞を開く。

そこに書かれている日付は

「十年前　雪那は七歳という事か」

その新聞を戻し、他の新聞も見るが全て十年前の日付だった。

「雑誌と違って、新聞は毎日変えるものなのね」

呟いた瞬間、蒼花の持っていた新聞が紅い点が現れる。

それはみるみる内に、新聞全体に広がり真っ赤に染まった。

ぐっしりと紅く濡れたそれは、まるで血に染まったようだった。

ふと、周囲を見ると景色が変わっている。

あちこちが赤錆に包まれ、床には血だまりが出来ていた。

「小賢しい」

厳しく言い捨てると、再び景色が変わる。

そこには、もう赤錆も血もないただの休憩所。

手に持っている新聞にも異変は見られない。

「ふん……お前達如きがこの私を取り込めるものか」

奴らにとって計算違いは、自分達がここに来てしまったことだ

「まあ、でも……あの魔王達にとっては不利みただけだね」

過去には歴代の魔王すらも召還し、おのが駒とした奴らにとって、魔族は格好の駒たる存在。

「捕らえて利用する手段はごまんとあるという事か……」

歴代最強と名高い魔王アルファレン

彼を始め、此処に向っていた魔族は魔王と同じく歴代の中でも最も優秀で最も強い力を持つ

しかし 今回だけは彼等にとって不利な条件が揃いすぎた

「聖地……か」

人だけでなく、数多の魔物も賛とされ歪んだ場所には最も相応しくない名を呟き、蒼花は静かに新聞を戻したのだった。

続く

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著（前書き）

今回もありがとうございます！

警察署を出発してから三十分。

塗装された道路に沿って歩き続けた蒼麗達は、これといった問題も起きずに常葉町の町中に入った。

近代的な町並みが広がっており、幾つもの大きな建物が見えた。

道路脇に停まった車はあるが、走っている車は一台もない。

ただ虚しく横断歩道や道路の信号が変わるだけだった。

また、歩道には人影はなく、かといって建物からも人気が感じられない。

一体どうしたのか？

ここに住む人達はどうしてしまったのか？

幾つもの疑問を抱えながら、蒼麗は雪那を背負いなおすと、蒼花と共に七宮家の別荘に向って歩き出した。

暗闇の中何度も絶叫した。

榊

榊

榊

愛しい人の名を呼び叫んで走り続けた。

助けて

助けて

けれど、榊は来てくれない

どうして？

泣きながらうつずくまる雪那は、ふと自分をなでる優しい手に気づいた。

「あ……」

目覚めた雪那が起き上がると、蒼麗のホツとした顔が見えた。

「良かった……目が覚めたんだね」

「あ……蒼麗……ちゃん」

呟いた途端、ぶわつと涙が零れた。

そんな自分を蒼麗が優しく抱きしめてくれる。

「大丈夫？」

その言葉に、雪那の中であの暗闇での出来事が蘇る。
思わず悲鳴をあげた自分に、蒼麗が優しく背中をなでてくれた。

「気を失う前の事を思い出したみたいですネ」

「私……私……」

「とりあえず、何があったのか聞かせてくれますか？」

蒼麗の言葉に、雪那はようやく安心したように微笑んだ。

三十分後

自分の身に起きた事を話した雪那は、蒼麗の言葉に愕然とした。

「いや、暗いって……確かに薄暗かったですけど、地図とか本とか読めるぐらいの暗さでしたよ」

そんな馬鹿なと雪那は思う。

一階に居た時は、自動販売機ぐらいしか光はなく、他はようやく人影が見えるぐらいの暗さだった。

「二階は最初から明かりなんてついてなかったし……照明も壊れてなかったですよ」

「嘘……」

「それに、警察官どころか人一人居なかったですし」

そんな事ない……！

だって自分は警察官に襲われて、警棒で殴りかかられて……

その時の事を思い出し、恐怖に震える雪那に蒼麗は再び背中をなでる。

「大丈夫ですよ。もし仮にその警察官がもう一度襲って来たら私が追ひ払いますから」

「蒼麗ちゃん……」

ふわりと微笑む蒼麗に、雪那はようやく笑うことが出来た。

「あの……今更なんですけど、ここは……」

「あ、ここですか？雪那さん家の別荘です」

「え?!」

「あれ？違いました？七宮と表札に書いてあったんで入っちゃったんですけど」

因みに、雪那が持っていた鍵もピッタリとあったので、ここだと思ひ込んだのだが、もしかしたら違ふのだろうか？

「……いえ、ここです」

「雪那さん？」

突然頭を抱えだした雪那に蒼麗が慌てて声をかける。

「どうしたんですか？」

「……いえ……大丈夫」

本当に大丈夫？

雪那の中でもう一人の自分が問いかける。

蒼麗から此処が目的の別荘だと聞かされるまで、自分は此処に全く見覚えがなかった。

なのに、ここが別荘だと聞かされた後、まるで洪水のように一気

に押し寄せてきた昔の記憶。

その記憶の中では、確かに幼い自分が家族と一緒にここに滞在していた。

まだ母が元気だった頃の大切な記憶。

自分が産まれた時から、毎年のように来ていた

筈なのに

「ああ、でもおかしい事と言えば、町全体がおかしいんですよ」

「え？何かあったんですか？」

「実は……」

今度は蒼麗が今までのことについて説明した。

「そんな……」

「何か知りませんか？」

「わからないです……」

知っているかと聞かれても全く分からない。

それどころか、自分の身に起きた事だけでも理解出来ないのだ。

黙ってしまった雪那に、蒼麗は話題を変える。

「そういえば、電気も水もガスも普通に使えたんですけど、雪那さんが連絡してくれたんですね」

長年使っていなかった別荘。

管理人も居ない此処は、月一での掃除を頼んでいる以外には人の出入りはなく、当然電気類は止めている。

「あ……そう……だっけ」

頭が痛い

そう言われればそんな事をしたような……

『わかりました、使え』

ああ、確かに電話をかけた……

「ただ問題は、生活に必要なものがなにもないんです」

着替えも食料品も日用雑貨も何もない。

かろうじて、テレビに冷蔵庫に洗濯機に暖房器具、そしてガスコンロなどがあるが、それだけだ。

「で、買い出しに行くんですけど……雪那さんも行きますか？」

「もちろんです！」

一人で居たくないという恐怖から思いのほか強い声が出るが、蒼麗はクスクスと笑っただけだった。

「じゃあ妹にも伝えてきますから、ちょっと待ってて下さい」

「あ」

思わず掴んだ蒼麗の腕。

その腕を放したら、もう二度と会えないような気がしたのだ。

「……一緒にいきますか？」

蒼麗の言葉に、雪那はコクコクと頷いた。

「お姉様とお買い物」

「蒼花、そこまでひつつかれると歩けないし」

三人で来たのは、郊外型のショッピングセンターだった。
別荘からそう離れていない場所にあり、交通の便も良さそうだった。

沢山の車が停まっているのが見える。

しかし

「ここにも人気がないね」

車は沢山ある。

しかし、人気はなく、店も電気がついていないのか薄暗かった。

「今日はお店のお休みの日でもないのに」

雪那がギュッと蒼麗の手を握りしめる。

「どうしたんですか？」

「な、何か居た気がして……」

蒼麗が辺りを伺うように周囲に視線を向けるが、何の気配も感じられなかった。

「何も居ないですけど」

「そ、そうかな……」

雪那は震えながら呟く。

別荘を出てからずっと感じていた。

冷たく重たい空気を。

しんと静まりかえった町

動物の声も虫の鳴声も聞こえない、まるで遙か昔に滅びたような
雰囲気を感じさせる

死の町

それが、この町に対する雪那のイメージだった

本当にこんな町に自分は毎年来ていたのか？

いや、それ以前にこの町の人達はどうしたのか？

どうして誰も居ないのか？

滅んだわけでもない

だって、ここに来ると話した時に父も兄も何も言わなかった

ただ気をつけて行きなさいと優しく言ってくれた

もしこの町がこんな風になっていると知っていれば絶対に止めた

だろう

それに、常葉町が既に廃村になっているなんていう話も聞いてない

「そう……聞いてない」

聞いてない

どころか、廃村になったとしてもだ

まるでつい先ほどまで生活していたようなこの町並みは一体どうだ？

車だってこんなにある筈がない

何時ものように買い出しに来た、そんな感じで沢山停まっている車

動いている信号機

そう……まるで突然人だけが居なくなったような……そんな感じである

町の人達は何処に行ってしまったのだろうか？

雪那は自分の中で膨れあがる死の町というイメージに震えが止らなかつた。

「ひっ！」

自分達の足下のすぐ側から、黒い何かがにゅうと出てくるのが

見えた。

あれは……何?!

と、その時

蒼麗がその黒い何かをぐにやりと踏みつぶす。

「蒼麗さん?!」

「ど、どうしたんですか?」

黒い何かは蒼麗に踏みつぶされると、悲鳴をあげながら霧散する。しかし、蒼麗にはその声が聞こえていないようだった。いや、黒いもの自体が見えていないらしい。

「あ……えっと」

「買うものが沢山あるので早くと思ったんですけど……大丈夫ですか?」

「う、うん」

「じゃあ買い出ししちやいますか。荷物運びもありますからちやっちゃとやっちゃいましょう」

そうして後ろを振り返った蒼麗は、大型トラックを見上げた。

荷物運びの足として、蒼花がどこから持ってきたものだった。

因みにこれを運転したのも蒼花である。

年齢については、もはやつつこまない方が良さだろう。

「とりあえず、最初は雑貨品から買いますか」

滞在に必要な買い出しが始まった。

雪那さんが側から離れない。

（うーん、こんなところを榊さんに見られたら怒られるな）

蒼麗は苦笑しながら目当ての品物をカゴの中へと入れていく。

確かにこの町は色々とおかしい。

町に誰も居ない。

それも、ついさっきまで普通に暮らしていて突然消えてしまったように居ないのだ。

もし何かあって遙か昔に放置された町であれば、既に無くなって
る筈のものが多々あるのもおかしい

そう ライフライン

（水も電気もガスも全部生きてる）

水道をひねれば水が出て、電化製品は全て使用可能となっている。
ガスコンロだってきちんと火がつく。

ただ、そこに暮らしているはずの人だけが居ないのだ

（うーん……よく考えれば考えるほど、普通だったら恐くなるな）

ある日突然消えてしまった町の人達。

それも、ついさっきまで生活していたような形跡を残したまま、無人となった町。

（うん、ホラーだ）

それを良くある事と考え怖がらない自分は、既に普通ではないのかもしれない。

「師匠の教育の賜だな」

「師匠……」

「ええ、師匠です」

母が懇意にしていた人。

そして自分が家出をした後、唯一娘の意思をくみ取り庇ってくれた母。

その母と師匠の御陰で、自分は今もこうして自由を満喫出来ている。

って違うし！

この外にいられる間に自分はやらなければならない事があるのだ

（青輝ちゃんとの婚約解消！）

それを目標に自分は頑張って来たのだ。
何が何でも、許嫁との婚約は解消する。

（偽りの婚姻が結ばれてはならない）

そう……自分を通して愛しい人を見ても、いつかはそれが偽物だ

と気づく。

たとえ顔だけは一緒でも、いつかは違うと分かっってしまう。

愛した人と似ても似つかない相手なのだと

そうなる前に解消しなければ

（うん、こんな風に女の子らしくなくなっていく事も当然必要だよ
ね）

姫らしくない姫

女の子らしくない婚約者

しかも力無しで落ちこぼれ

地味で野暮ったく色気の「い」の字もなく、更には寸胴なこの体
型なら誰もが相応しくないとと思うだろう

よし、軌道修正はなし

蒼麗の中で改めて決意が下される。

（あ、でも普通は怖いんだよね）

雪那が怖がっている

そう、普通は怖い

だから慰めなければ

蒼麗はこの状況に対する普通の女の子的思考について思案した。

それを離れた場所から見守っていた蒼花は、不満げに頬を膨らませる。

「お姉様つてば甘すぎますわ」

その顔には嫉妬がありありと浮かんでいる。

そう　雪那は姉にくつつきすぎだ、妹でもなくせに。

『仕方ないよ』

「お前もお姉様の神獣ならば、主を奪い返すぐらいの気概をみせなさい」

『無理』

そう言うつと、蒼花の頭の上でくつろいでいた來は更にだらけきつた。

姿を消す術をかけて雪那から見えない事もあり、更に調子に乗っているらしい。

姉の神獣でなければ丸焦げにしてやるのに。

「少し離れて」

苛立たしげに命じれば、目の前にプラカードが出される。

『妹の側から離れないで』

「は？」

『蒼麗の言葉。だから駄目』

「私がお前如きを守られると？」

嘲笑しながらも、心は喜びに躍っている。
姉が自分を心配して來を側につけてくれている。
それだけで幸せだった。

『この先どうする？』

「さあね」

『雪那、此処から逃がす？』

「無理よ、もう」

來がプラカードを出すのを止めたのを見計らい、蒼花は溜息をつく。

「ここに来ようと来なかつと」

そう

「元々のあの子の死ぬ運命は変わらない」

でも

「此処が全ての始まりの場所であるならば、もしかしたら」

ここに来ないという選択肢はあつた

だが、その先に待ち受けていたのは死だ

一方、ここに来るという選択肢の先に待ち受けているのも死である
しかも、一度ここに入ればもう二度と外には出られない

『どうして?』

「外に出れたら死ぬからよ。そう……狭間から現実世界に……この町に降り立った瞬間、呪が形成されたわ」

どうあっても、雪那を殺すように

雪那が死ぬように強引に道筋を書き換えた呪は、今も完成へと向けて走り続けている

「雪那が死ねば、真っ先に影響を受けるのは果豎」

雪那が死んで間髪入れずに果豎は死ぬ

そして、果豎という堤防を失った恵美と理恵も死ぬ

一番呪いの影響が少なかったチヒロにもその余波は及ぶだろう

どうやら呪は、異世界に逃げてもどうにもならないものらしいから

それに、護衛役の一人の調査では、今まではチヒロに向う分まで果豎が受けていたから大丈夫だったという

それがなくなれば当然……

「チヒロが最も酷い死に方をするわね」

一気に余波を受けた者の末路はさぞや無残なものとなる筈だ

雪那、恵美、理恵、チヒロ

四人の聖女が消えれば、聖女の伴侶は狂うだろう

いや、その前に凧国国王が狂うか

『蒼花は物知り』

「物知り？私はただ見ただけよ」

最初は予想しなかったものが果豎にかけられていた事だった。

それが呪だと気づいた時、どうせ凧国国王に懸想する誰かがかけたものだった。

ただ、もう呪はほぼ完成しそうで、完成すれば確実に死んで、そうすると面倒だから手が滑ったと称して薬品をかけてやったのだ。

そうして何気なく細い細い糸をたぐり寄せて、予想しなかった事態に気づいた。

結果的に、果豎が突破口となり、隠されていたものが見えた。

この自分でさえ見ようとしなければ気づかなかった複雑で酷く残酷な呪。

酷く根深く、酷く恨みの積もったそれ。

まあ、それもこの場所だから……

「でも、私はただそれを知っただけの存在にしか過ぎない」

その待ち受ける運命を変えるには、強い意志が必要だ

「私は見届ける者。それを変えるものではないわ」

『では、どうしてここにいるの？』

「お姉様が居るから」

何時だって自分が動くのは姉に関してである

そして、自分を動かすのも姉だけである

自分の意思も何もかも放り投げてでも姉のために戦う

「たとえ今は見てくれなくても」

いつかは姉のために

「ふふ……私も狂ってるわね」

それでも、それは自分が望んだ道だった。

買い出しが終り別荘に戻った頃には、完全に夜も更けていた。

「今からでもご飯食べますか」

全ての荷物を運び終えた後、蒼麗の提案に雪那と蒼花は頷いた。

「食べたいです」

「賛成」

七宮家の別荘は、純和風 立派な日本家屋の造りをしていた。
しかも敷地自体がかなり広い上に、家屋自体が広く大きかった。
何せ、部屋は二十近くあるのだ。

しかも敷地内には、倉庫が三つもあり、あれほどあった荷物の殆どを収納してもまだ余裕がある。

また、七宮家の別荘の敷地は高い塀で囲まれており、入り口はお寺のような立派な門まで設置されていた。

「あれ？蒼花さんは？」

台所で料理を手伝っていた雪那が気づけば、先ほどまで居た筈の蒼花の姿がなかった。

「あ、何か用があるみたいだつて出て行つたよ」

「……私がいるからですか？」

「へ？」

「だって……私が蒼麗ちゃんと一緒に居ると、イライラしてるみたいだから……」

天然と友人達に突っ込まれる雪那だが、そんな彼女でも蒼花の態度には気づいていた。

はつきりと邪魔だという態度を隠しもしない。

あまりにも堂々としていて、それが余計に雪那を萎縮させる。

「いや、そんな事ないですよ」

「でも……」

「本当に嫌いならあの子、口も聞かないですから」

「それって……無視って事ですか？」

「うーん……まあ、そうですね。視界にも入れないし、とにかく無いものとして扱うんです。好き嫌いがはっきりしてるのも原因だと思いますが」

でも

「雪那さんの事、気に入ってると思いますよ」

でなければ、わざわざあんな事はしないだろう。

この別荘を最初に訪れた際、蒼花は今ののように姿を消した。

蒼麗は蒼花が行った事の内容を知っていた。

「嫌われてないかな？」

「当たり前です」

蒼麗の微笑みに、ようやく雪那はホッとした笑顔を見せたのだった。

寧ろ、あの子に嫌われて当然なのは私の方だ

「さて さつさとご飯を食べて今日は休みましょう」

蒼麗の言葉に雪那が頷く。

確かに今日はかなり疲れた。

けれど 眠れるだろうか？

また目覚めた時、見知らぬ場所に居るのではないか？

不安に震えた雪那だったが、ふとあるものを思い出す。

「あ、そうだ！」

「雪那さん？」

「あの、御願いがあってんですけど……！」

「何ですか？」

「これで私を　して欲しいんです」

雪那が取り出したそれ。

その使用方法と御願いを聞かされた蒼麗は、笑顔のまま凍り付いたという。

「さてと」

たらふく食べてたらふく飲んで。

先に眠った姉と雪那の眠る部屋の扉を閉めた蒼花は、一人廊下を通り屋敷の外へと出る。

そのまま、敷地内にある庭に向い、大きな池の前に佇んだ。

水面には蓮の花が浮かんでいるだけでなく、夜空に浮かぶ満月を映し込む。

「時は満ちた　」

チャンスは一度きり

「やはり、お前が来るのね　」

狭間と現実の分厚い層の中を潜り抜けながら

本来であれば神の寵愛を受けた者であるにも関わらず

忌むべきものとして押し出されてくるそれ

けれど……それでもこちらに落ちてくることは出来ない

「このまま見捨てれば、あれは一生時空の囚われ人」

最後の最後で超えられない薄い薄い膜を破るべく、蒼花は持っていたナイフを天に向けて放つ

キィンと何かを絶つ音と共に、空から降ってくる

バシャアアアアンっ！

目の前の池に見事落ちてきたそれに、蒼花はくすくすと笑った。中庭には防音結界を張つてあるから幾ら騒いでも姉達には聞こえないし、中で何が起きているのかも分からない。

けれど、これほど見事なまでに落下してくるとは……

「翼はどうしたのよ翼は」

「う、煩い！飛ぶ暇もなかったんだっ」

天使のくせして池に落下した相手に蒼花はお腹を抱えて爆笑した。

「その様子ではだいぶ苦労したみたいね スルーシ」

「ふん！あんたは悠々自適だったみたいだな 公主」

霧の中で行方知れずになっていた修の皮肉たっぷりな返答に、蒼花が冷たい笑みを浮かべた。

続く

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著（後書き）

・・・何、差し出したの？ 雪那・・・あれかな？ あれ
なのかな？

女王様が降臨なされた

後に、苦勞の、いや、原始の天使の一人が言っていた言葉である。

身につけている服装はカジュアルだが上品で女の子らしい

しかし、そんな清楚な服装が包み込む肢体は、悩ましい蠱惑的な
曲線美が描く究極の肢体

だが

「手を出したら殺される、手を出したら殺される」

例えどれほど年齢にそぐわない女性美溢れた極上の豊満な肢体だろうと、指一本触れようとしたが最後、自分は消されるだろう。

修は抗いがたい誘惑を必死にはねのける。

というか、制御装置で全身から溢れる色香と魅力を押さえつけてもこれなのだ。

外せば一体自分はどうなってしまうのか？

「玉英姫なんて目じゃないな」

「あら？後で風王に殺されるわよ？」

妻を巡って妹と争う風王。

しかし、あれでいて妹の事も大変な可愛がりようらしく、侮辱したり手を出せば確実に殺られるだろう。

「煩いな……ってか、助けるならもっと早くして欲しかったんだけどな」

「あら、一番体に負担のかからない方法で助けてあげたって言うのに」

蒼花の言葉に修が顔をしかめる。

確かに、それはそうだろうが……。

「狭間への移動、出来ないとは言わせないぞ」

空間転移は本来、神々でもそれを補助する道具がなければ単独では行えない高度な術。

それこそ、門などの補助装置なくして実施する場合、一般的な神では術を発動させる事すら出来ない、または発動させられても力がすっからかんになってぶっ倒れてしまい、移動自体が出来なくなる。

それを容易に行う事が出来るのは、天界でも限られた者達のみ。

「確か、天帝一族と十二王家は全員出来る筈だったな」

つまり、蒼花も可能だという事だ。

「出来るわよ。でも、出来たからどうだって言うのよ。目標物が探せなければやるだけ無駄。言っておくけど、狭間の世界で何の印もつけていない目標物を探すというのは、砂漠の中での砂金探しぐら

「い難しい事なんだけど」

確かに蒼花の言うとおりである。

狭間の世界は広く、常にあちこちがねじくれている。

力ないもの、意思の弱いものが迷い込めば永遠の迷い人になるか取り込まれて消えてしまうかのどちらかである。

蒼花であればそのどちらにもなりはしないだろうが、果たして捜す対象までがそうとは限らない。

流石に修も反論する事は出来なかった。

すると、蒼花が邪魔だから後ろに下がっていると修の首根っこを掴み池から引き上げる。

ああ、これが恵美や理恵だったら……

きつと優しく抱きしめてまずは再会を喜んでくれて、そのままくんずぼぐれつ

ゴスっ

「あらごめんなさい。頭に蚊が止ってたわ」

「わざとだろうっ!」

踵落としを喰らった修が抗議するが、蒼花は聞かない。

それどころか、しっしつと野良犬でも払うように追い払われる。

「ああ、そこにあるのは使って良いから」

「は？」

池の縁に設置されている大石に背中を預けた修は、蒼花の言葉に

背後を振り返る。

側面はでこぼこだが、上は磨かれたように真っ平らの石の上に置かれたものに目を丸くする。

「これは……」

そこには、竹皮に包まれたお握りと水筒、そして着替えの服とバスタオルが置いてあった。

「お姉様に感謝する事ね」

姉は分かっていたのだろう

眠る前に、必要なら持っていきなさいと自分に手渡したそれ。

他の者の為に容易された事に嫉妬を覚えるが、姉の好意を無視する事も出来ない。

修は石の陰で服を着替えると、竹皮に包まれたお握りを頬張る。
一口食べて、自分がどれだけ空腹だったかに気づいた。

見れば、おかずとして卵焼きと唐揚げ、漬け物も入っている。
水筒は二本あり、一つは味噌汁が、一つにはお茶が入っていた。

「蒼麗は優しいな」

「当たり前ですわ！ 私のお姉様なんですものっ」

そう言っただけ誇った様に笑う蒼花に呆れながら、修は思う。
まあ、誇りに思うその気持ちから分らないでもないが……。

「さてと、時間も無いしさっさと始めないとね」

「何をするつもりだ？」

「交信」

今日は満月

月の力が最大限になっており、術の助けには十分になる

そして

蒼花は澄み切った池の水面を見詰めた

ここの水は他とは違い力を失っていない

「交信って誰と？ 何のために？」

「物資補給と人手の補充よ。まあ、後者は出来て一人だと思うけど」

それに、向こうも動ける者達は多くない筈だし

蒼花は修のしている前で術を組む。

池の周りに設置した結界石が、蒼花の術に反応し場を形成していく。

流石は『天界の華』

練り上げられていく術の美しさに修は魅入られた。

そうして 術が完成する。

「さてと」

光が消え、先ほどと同じ静寂が辺りに戻ると、蒼花は宙を見詰め

たまま口を開いた。

「繋がったわよ」

『流石ですね、蒼花公主様』

「この声！ 萩波か?!」

その声は、修の耳にもしっかりと届いた。

「やっぱり映像は無理か」

『声だけでも収穫ものですよ。私は幾らやっても無理でしたが』

どこからともなく響いてくる萩波の声が苦笑した響きを持った。

「交信って……」

「強制的に結界に穴を開けて声だけ通るようにしたのよ」

蒼花の言葉に、萩波が応える。

『常葉地区 常盤町の周りを覆う霧の結界は、あらゆる者を拒むだけでなく、中との連絡も断っていますからね』

「なんだと?? っていうか、ここって常葉地区なのか?!」

「何処だと思ってたのよ」

『どうやら修とは合流したばかりと見ても宜しいですか?』

「たった今、狭間から引きずり出してきたからね」

そう言うと、蒼花はとりあえず今までの経緯を説明する。

『そうですか……で、修は今まで一人で?』

「あ、ああ。気づいたら白い霧の中を一人で歩いていた。他のみなを捜したが何処にも居なくてな……」

ようやくお腹も満たして一息ついたが、その疲労は濃かった。

その後、改めて最初から小型バスが霧に包まれてからの事を説明すると、萩波が溜息をつくのが聞こえた。

『他の方達は音信不通ですか……』

「ああ……恵美と理恵も……くそっ！　今こうしている間にもどれだけ不安がつてるか！」

出来る事ならば今すぐ彼女達を探しに行きたい

しかし、あの狭間に再び戻ったとしても自分に出来る事は殆ど無い

それどころか、再び迷い人として彷徨うのがおちだ

とすれば、蒼花に協力を頼まなければならないのだが

「あの子達は大丈夫でしょう」

『ですね。誰かかれか側に居るでしょう』

「な、なんでそんな事が分かるんだ」

なんでも何も……

恵美の場合はあの魔王が

理恵の場合もあの夜の眷族が

意地でも手放さないだろう

万が一離れても、必ず誰かが側にいるに違いない

「ちくしょう！どうして俺だけ一人になっちまったんだっ」

日頃の行い？

詰めが甘い？

が、とりあえずそれを言えば煩そうだから萩波は口をつぐんだ。

のだが

「日頃の行いの悪さと詰め of 甘さじゃない？」

「んなっ?!」

あんまり意味がなかった。

『けれど、蒼花公主様が雪那さんを保護できて良かったですよ』

「保護したのはお姉様よ」

『そうですね』

「けど、良く助けられたな」

修が疑問を口にする。

自分達では恵美と理恵を守るのだけで精一杯だった。

榊が暴走したから

彼の霊力が一気に膨れあがった為、そちらに気を取られてしまったのだ。

しかし止める暇もなく飛ばされてしまったが。

「それは勿論お姉様だからよ。ふふ、お姉様に狙われたが最後、何処までも追いかけるわね」

「は？」

「だから、あの時雪那を連れ去られたとしても、お姉様は地の果てまで追いかけるって事」

意味が分からない

しかし、蒼花も萩波もクスクスと笑い続けるだけだった。

「それで、そっちの状況を説明して頂戴」

『私達も全員無事です。空間が歪んだ後、私達が降り立ったのは常葉地区のすぐ外でした』

「という事は、そんなに離れてない所に居たって事か。けど、それならどうして合流しなかったんだ？」

「入れないからよ」

「え？」

『仰るとおりです』

無事に霧の結界から抜け出したものの、たどり着いたのは常葉地区の外。

そこから中に入ろうとしても、気づけば同じ場所にたどり着くのだ。

『ただ、此処から別の場所に向う事は可能です』

常葉地区以外の場所に行くことは可能だという。

勿論、七宮家にも恵美達の家にも行ける。天界にも戻れる。

しかし、常葉地区に入ろうとすれば、まるで狸に化かされたよう

にたどり着けない。

『常葉地区への数少ない道は全て霧に包まれております』

それだけではない。道無き道を進んでも同じなのだ。

常葉地区自体が霧によって覆い尽くされ、遮断されているらしい。

「だいたい予想通りね。まあ外に出られたとしても、出る気はないけれど」

「は？　なんでだ？　この町はおかしいんだろう？　なら、今は外に出る方が優先なんじゃないのか？」

蒼花から町に誰も居ない事を聞いた。

また、警察署での雪那の様子も聞いた。

ならば、すぐにでも此処から離れるべきではないか？

「離れたら雪那は死ぬわ」

蒼花は、來に話した事を再度伝えた。

「し、死ぬ？」

「呪いでね。まあ今考えてみると、雪那は此処に呼ばれたわね、確実に」

『でしようね』

「ど、どという事だよ！」

「どうもこうもないわよ」

蒼花が言い捨てると、修がムツとした表情で言い返す。

「ってか、呼ばれたとかって、その呪いにか？　じゃああんたは分かってたのに放置したって事か？！」

詳しくは分からないが、呪いなんていうとんでもないのに呼ばれた。

そしてそれに応じて来てしまったとなれば、雪那にとってどれだけ危ない状況なのかは修ですら予想が出来た。

「仕方ないじゃない。それが一番良い方法だったんだから。とはいえ、まさか外に出られなくなるとは思わなかったわよ、私もね」

「思わないって、あんたはこの状況を知っていたんじゃないのか？」

「私が？知るわけじゃないじゃない。知ってるのは昔のことだけよ」

ここが聖地だったこと

血なまぐさい儀式や伝承が多くあったこと

そして、雪那が此処で過去に何かの事件に巻き込まれたことぐら
いだ

それらから、蒼花はつなぎ合わせたただけだ

たぶん、こんな感じだろう　と

ただ、それだけだ

「本当にそれだけなのか？」

「くどいわね」

「ってか、なんであんたはそこまで知ってるんだ？」

「気づいたからよ」

首を傾げる修に蒼花は溜息をついた。

「仕方ないわね。説明するわ」

『私も、もう一度聞きたく存じます』

「そうね。貴方にも一部しか伝えてなかったものね」

果豎が呪われている事と、その呪いがどこから来たものか

それだけしか伝えていなかった

「そもそもの始まりは、果豎よ」

「果豎ちゃん？」

修がキョトンとした眼差しで蒼花を見る。

「そう。私が果豎に薬をかけたたっていう話は、もう説明するまでもないと思うけど」

「ああ」

「その薬をかけたのも、その呪い回避の為だったって言ったらどうする？」

ギョツとする修に蒼花が楽しげに笑った。

「嘘だろ？ 何で」

「必要だったからよ。そうね……あの日、お姉様と一緒に果豎が美容液作りをしているところに私が来たのよ」

それは、何気ないごく普通の訪問になる筈だった。

「果豎の様子が……正確には、果豎の纏う神気がおかしかったのよ。普通なら全く気づかないでしょうけどね」

気づいた理由はごく単純だ。

「果豎にかけられていた呪いが完成する寸前だったから。そう……果豎を呪い殺そうとして、それまで影を潜めていた呪いが一気に膨れあがる。その最中で私がかぎ取ったのよ」

突然果豎の体からわき出た黒いものが、その体を覆い尽くそうとした。

黒い手が、その無垢な魂を食らいつくそうとした。

それを見た瞬間、勝手に手が動いていた。

『蒼花公主様はこれまでに数多くの経験を積みまれています。だからこそ可能だったのでしょう』

反射的に対処方法を判断し、果豎に向けて姉が持っていた美容液の作りかけをかけたのだ。

「な、なんで?!」

「果豎を消す為よ」

消す?!

「正確には、呪いの対象となっていた果豎を消す為。あの呪いは、果豎の姿形で判断していたらしいから」

「え?」

「よく呪いで対象者の写真とか使うのあるでしょう？　あと、年齢とか名前とか色々書くのが」

「あ、ああ」

「果豎の場合は違うけど、それでも視覚的な判断をする奴だったらしく、果豎の姿を変えた瞬間、呪いが止ったのよ」

止ったというよりは、呪い殺す対象が消えて混乱している様子だった。

「って、そんな事が可能なのか？」

「可能なのではなく、可能だったのよ。ほら、呪いを肩代わりさせる為に、身代わりの依り代を容易するとかってあるでしょう？」

確かに、ある

「勿論、あの時はそれを作っている暇なんてないから、果豎の方を変化させたの」

一種の目眩ましだった

しかし、思いの外その呪いは果豎の外見だけで判断していたらしく、姿が変わった瞬間、あっけなく止った

ただし、止っただけで解呪は出来ていないが

「解くことは出来ないのか？」

「無理ね。あの子自体が自分から呪いを受け入れている以上は不可能だわ」

「自分から……？」

「無意識に、ね。無意識に、あの子は雪那を助けようとしたのよ」

「雪那ちゃんを?!」

ここで雪那の名が出てくる事に、修は心底驚いているようだった。

「そう。雪那が果豎が呪われる原因を作った張本人」

「それって、雪那ちゃんが果豎ちゃんを呪った」

「違うわよ。もともと雪那が一番最初に呪われていたのよ。それが、周囲に伝染しただけ」

蒼花の言うことはこうだった。

果豎の呪いが誰からもたらされたものかを探るうちに、それが雪那からのものだを知ったという。

「しかも、雪那の呪いはつい最近のものではなく、十年は経過しているものよ」

その十年の中で、呪いは雪那の魂に複雑にからみついたという。

「下手に解呪しようものなら、雪那ごと殺してしまうぐらいにね」
「なっ?!」

「助ける方法は、呪っている相手が呪うことを止めるか、相手を殺すか」

その二つに一つしかない

「しかも困ったことに、その呪いが何時何処でかけられたものかが中々分からなかったのよ」

ただ、雪那の記憶をのぞき見た時、呪いがかけられたであろう年

齡の記憶に常葉町という名前が垣間見れた。

「だから、材料集めに常葉地区を選択させるようにお姉様を誘導したわ」

そうしたら見事なまでに成功したという。

「その後、こちらでも常葉地区の状況を調べさせる為に手の者を放ったけれど、中に入る事自体不可能だった」

しかし、それでも常葉地区に向うにつれて、雪那の中に潜む呪いが少しずつ活性化しているのが分かった。

いや、活性化とは違う。呪いをかけた持ち主の歓喜の声のようだった。

雪那が入れば、常葉地区に入れると確信した。
と同時に、常葉地区へと雪那が呼ばれている事に気づいた。

「そこで、雪那に呪いをかけた相手がそこに居ると思ったのよ」

加えて、雪那が十年前を最後に常葉地区に行っていない事から、そこで呪いを受けたのだと予測をつけた。

「けど、結局そこにたどり着く前にこうなっちゃったけど」

霧に囚われ化け物に襲われた。

そしてその化け物も、その呪いをかけた相手が放ったものではないかと蒼花は告げた。

「確かに……雪那を狙ってたし……けど、恵美と理恵も攫われかけ

た」

「その二人も呪われてるもの」

「なんだと?!」

「言っただでしょう? 呪いは伝染してるって」

強力すぎる呪いは、周囲に伝染する事がある。

「一番近くにいたんでしょ……。見事なまでに呪われてるわ。

ああ、チヒ口もね」

「そんな……何とかならないのか?!」

「雪那の呪いがとければ大丈夫よ。但し、雪那が死ねば他の者達も死ぬわ」

「っ?!」

恵美と理恵が死ぬというのか?

あの二人が

俺の大切な女神達がっ!!

「どうすれば呪いは解けるんだ?!」

「解き方はさっきも言ったとおり。ただし、呪われた場所は此処だと分かっても、相手が分からないし、呪われた時の状況も分からないければ下手に手が出せないのよ」

「ならすぐにでも」

「魔が一番活性化する夜に出るの? 馬鹿じゃない? いくらあんたでも返り討ちにあうわよ?」

既にこの町は異常状態になっているというのに

「っ……なら、どうすればいい？」

「まずこの町に何が起きたのかを探る事ね。同時に、雪那が呪いを受けた時の事を探る」

でもね

「ここに来てから、雪那の呪いは不安定になっているの」

「どういう事だ？」

「呪いがいつ加速しても不思議ではないということ。それに、呪いをかけた側が知らないけど、既に雪那にちよっかいをかけてきたわ」

私にもね

「警察署での出来事か？」

「そう。しかもかなり強力な呪いとも言える力ね」

対象者の心の不安を具現化し、恐怖の世界に陥れる忌むべき力

「使い方によっては、酷く残酷な事が出来るわ」

「……………で、どうして此処から出られないんだ？それを聞いたら、余計に此処から出してやらないと」

「そうね。ここに居る方がよほどちよっかいをかけられるわ。でも、駄目。此処から出たら死ぬから」

「どうしてっ」

「ねえ、どうして私とお姉様が此処に来れたと思う？」

蒼花の質問に修が呼ばれたからだるとぶっきらぼうに答えた。

「そう。呼ばれた。雪那が呼ばれて、その雪那と一緒に居たから私達も共に此処に落ちてきた。ふふ、向こうもまさか私達まで来ると

は思っていなかったでしょうね。抵抗が凄かったもの」

しかし、抵抗すればするほど雪那を引き寄せられないと気づいたのか、ほどなく力は引き寄せるものだけに変わった。

だからその力を利用し、共にこの霧の結界に囲まれた場所へと落ちてきてやったのだ。

「そこまでして引き寄せた相手を外になんて出すわけないでしょう？ 普通」

「それは」

「愛しいものを側から離さないようにする為に足枷をはめるように、向こうも枷をはめたのよ」

呪いという枷を

雪那の中にあつた呪いは一気に変化し、この地に楔を打った。

「楔が打たれた瞬間、雪那の呪いは止つたわ」

「止つた？」

「そうよ。不思議よね？ 外にいる時はあんなに進んでいたのに。まるで、この場所に呼び寄せて留めるのが目的だったみたい」

誰だって、自分に死の呪いがかけられていれば必死に解こうとする。

そしてその呪いが解けるならば、危険な場所にだって来ざるを得ないだろう。

そう……正しくそれを狙っていたかのようにだった

「ただし、呪いが止つたといっても、この場所自体が強力な呪いの

場みたくなっているから、それに影響して不安定になってしまっているのよ」

「そんな……」

「しかも、呪いは確かに止ったけど、止めるという事は、この場所に来た雪那を死なせないためという事にならないかしら？ 逆に言えば、この場所に居なければ死んでも良い。その証拠に、此処を出ればせき止められていた呪いは一気に爆発するようになってるわ」

それは、修でも簡単に見られるだろう。

「だから、出られないの」

「来ないと言う方法は……なかったみたいだな」

蒼花の顔を見れば分かる。

あの時点で既に呪いはかなり進んでいたのだと。と言うことは、それほど日を置かずに雪那は死んでいただろう。

「そうね。それに、ここに雪那がいる事で呪いが止っているという事は、恵美や理恵、果堅、チヒロにとっては好都合よ。呪いの大本から彼女達に流れ込む呪いも止っているのだから」

「っ？！ そ、そうかっ」

そうだ、蒼花の言うとおりだ。

「けど……なんで、呪いを止めたんだ？ 雪那ちゃんが無事なのは良いけど」

「さあね？ ただ、向こうの目的は雪那を殺すのが目的ではなく、此処につれてくる事。それはさっきも言ったとおり。此処に連れてきて外に出られなくする。つまり、雪那が向こうにとって必要という事よ。それも生きたままの雪那がね」

「……これは聞くだけだが、雪那ちゃんじゃなければ外には出られるのか？」

「普通の人間なら無理よ。但し、私達であれば出られるわ。どうやら、向こうも私達に此処に居て欲しくないだろうし」

常に感じていた嫌悪と憎悪の視線。

まるでお前達がいるせいで欲しいものが手に入らないと言わんばかりのそれに、蒼花は笑いが止らなかった。

「ただし、出たが最後、二度と入る事は出来ないわ」

つまり、それは自動的に雪那が向こうの手に落ちるという事だ。

「まあ、お姉様だけは別だけどね」

「は？」

「お姉様だけは出入り自由だと思うから」

「なんでだよ！」

『あの方は終わりを司る女神ですからね。終わりに関する事は基本的にあの方のお家芸。まだご本人が自由に使えはしませんが』

そう、全ての終わりを司る姉ならば出来る

終わりの一つである『破壊』を使えば良いだけだからだ

「でも、自分の意思で出来ないのよね」

無意識には出来るが、自分の意思するには数多の制約がある。しかもどれも時間がかかるし、それぞれがやっかいなものばかり。

「簡単に終らせるとまずいからだろうけど」

「でも、ならどうすればいいんだ？ 萩波達は入る事が出来ない。かといって、俺たちが出れば入れない。雪那ちゃんは今処から出られない」

「だから、ここでも何が起きたかを探るって言うてるしょうが。とりあえず、昔の事も調べるけど、同時にこの町の異変を調べなければ呪いをかけた相手にだって行き着かない」

たぶん、それがこの町全体を覆う結界も作り出していると思われる。

「何故この町に人が居ないのか？ そして、どうしてその事を外の人間が知らないのか？」

「知らない……そういえば、そうだな。雪那ちゃんのお父さん達が知らないのもおかしい」

普通に観光名所だから楽しんでおいでと笑顔で送ってくれた彼等を思い出し、修も首を傾げる。

「外のことは風国王達に任せるわ」

『御意。それと……霧の結界で気になった事があります』
「何？」

『この結界ですが、少しずつですが、拡大しているようです』

「拡大？ ああ、範囲を広げているのね」

『計算では、このままでは一週間で隣町が飲み込まれます』

「貴方の事だから対処はしているでしょう？」

『術者を本国から呼び寄せています』

「そう。じゃあ、後で書状を送るからそれをうちの家に届けて」

萩波が困惑したように「はあ……」と返事をする。

「幼馴染みの誰かに代わりを頼むわ」

『は?!』

「だから、あんたの所から連れてきたら、虬国が手薄になるでしょう? それに比べて、十二王家の子供達はまだ領地なんて持つてないから手が空いているのよ」

そうね……青輝なんていいわね

別の件で出かけているあれを呼び寄せれば良い

「あとはこちらの用件だけど、人手と物資が欲しいわ」

『人手、ですか?』

「いやちよつと待て! 確かさつき外からは入れないって」

「一人ぐらいなら何とか出来るわよ。それにあんただけだと足りないのよ」

「何が」

「人手が。あんたも十分に使えるけどね」

使えるけどね

その言葉に、修は目を丸くする。

『良かったですね、修。蒼花公主様は貴方の事を高く買っているようですよ』

「良かった……のか?」

なんだか素直に喜べない修だった。

『それでは、物資から先に御願ひ致します』

「物資は食料と日用雑貨類」

「それ買ったって言わなかったか？　しかも大量に」

「買ったわよ。普通に暮らして十日分。けど、それで果たして足りるか分からないし。後は嗜好品もね。他には書物とかの趣味活動の道具」

『分かりました』

「あとは……結界石と宝玉の類」

『種類は？』

「問わない。ただし、回復系を多くして」

『御意』

「保管場所あるのか？」

「ここ、地下室も広いし開いてる部屋もあるからそこにおけばいいわ」

「凄いな……」

「で、次は人手だけど、誰か結界に詳しい相手が欲しいんだけど」

『それは……結界を破る為ですか？』

「いえ、張る為よ」

蒼花はちらりと屋敷を囲む塀を見た。

目隠しの結界にて見えなくしているが、少し周波数をあわせればすぐに見える。

結界に張付くようにしてこちらに入ろうとしている者達の姿が。

「雪那を虎視眈々と狙っていて、常に側にくっついてるのよ。屋敷にも入ろうとしてるし」

大丈夫だと思うが、結界を優先させる人材が居た方がより安全だと思われる。

『でしたら朱詩を向わせましょう』

「ああ、あの結界博士ね。十分だわ」

そうしてその他、幾つかの事を決めた後、蒼花は溜息をついた。

「これで最後ね、しばらくは通信が出来なくなるわ」

『次回は?』

「そうね……一週間後、ね。まあ、護衛役に手紙を届けさせればこちらからは情報を流せるけど」

しかし、それにも限りがある。

『三日後、物資と人手を送る際に私の方からも手紙を送れますが……それも多くは無理ですね』

「ああ、そういえば果豎はどうしてるの?」

『今は、常葉町の隣のホテルで眠っております』

その言葉に忌ま忌ましさを感じられた。

「ここに近づけない方が良いわよ」

『そうですね……』

向こうの目的は雪那だが、同じく呪われている果豎にもどんな影響があるか分からない。

「で、何か言いたそうね、修」

「いや……ただ、呪いは伝染してるって聞いたけど、呪われているのは果豎ちゃんと恵美と理恵、チヒロちゃんだけなんだろう?」

「そうよ」

「なんで?」

「は?」

「伝染するなら、他の奴らだって伝染するだろ」

「普通はね」

「なんで伝染しないんだ？」

「知らないわよ。ただ、恵美と理恵、チヒロは雪那と同じぐらい無垢な魂と美しさを持つから、その線で伝染したんじゃない？」

「果堅ちゃんは？」

「あの子のは、無意識に呪われていた雪那の呪いを自分に受け流しただけよ」

ただ

「その三人にしか伝染してないって事は、伝染させる対処を向こうが選んでいるのかもね。つまり高度な呪いよ。もっとレベルの低いものならば誰彼構わず伝染するものだから。という事は、向こうは恵美達も狙っていたのかもしれないわね」

ただ、中でも雪那が一番狙っていたのだろう。

もしかしたら、恵美達はスピア的な存在だったのかもしれない。

「だから、恵美達も下手をすれば此処に落ちたかもしれないわね」

いや、小型バスから連れ攫われそうになっていたと言うことは、既に狙われていたという事だ。

「……恵美達は何処にいるんだろう」

「さあね？ 狭間にいる可能性が高いけれど、もしかしたら既にこの町の何処かにいるかもしれない。また、居なくても狭間から戻った瞬間、此処に落ちるかもしれない」

自分達が此処に落ちてきたように

「にしても、榊の奴……雪那ちゃんがピンチなのにあいつは何をし
てるんだよ——！」

「榊……で、思い出した」

『はい？』

「命令。榊を真っ先に見つけなさい」
「は？」

他の誰を見つけるよりも先に榊を見つける

その命令に修も萩波も茫然とした。

「じゃないとお姉様が穢れちゃうのよっ！」

「な、何が、ってか何があっただんだ？」

「……買いだした荷物を収納して料理を作っていた時の事よ」

自分がちよつと席を外して戻って来ると、姉が凍り付き雪那が慌
ててゆさぶっていた。

『一体何が……』

「何が？」

蒼花は、ふふふふふと笑いながら、そこで起きた事の記憶を二
人にも流してやった。

『あの、これで私を縛って下さい！』

そう言って雪那が渡したのは、紅い縄の束だった。

『は？へ？』

『私、いつも夜は柵に紅い縄で縛ってもらって……特に不安な時には、もうぎゅっと強く縛ってもらってそれだけで不安が吹き飛ぶんです！』

『は、はあ』

『今凄く不安なんです！ 寝て起きたらまた別の場所にいるんじゃないかって！ それに独りぼっちになってるんじゃないかって！ だから、そんな事を考えないぐらいに強く私をこの赤縄で拘束して下さい！』

出来れば、亀甲縛りがいいです！！

『きつこう……』

『柵が一番良くしてくれる縛り方なんです。そうして、いつもつけて何も分からなくなるぐらいに愛してくれて きゃっ！』

頬を赤らめて照れる雪那だが、問題はそこではないだろう。

『だから、どうか私を激しく縛って下さい！一日でも縛られない日があると、もう、もう私駄目で……って、蒼麗ちゃん？！』

そこで修と萩波に送られた記憶は終わった。

「本当に……どうして柵が居ないのかと激しく怨んだわ」

固まった姉を思い、蒼花がしくしくと両手で顔を覆う。

「本当に……スルーシの犠牲で榊が戻って来たらどれだけ良かったか!!」

『心中お察しします』

「ちよい待て！　なんで俺の犠牲の上に成り立ってんの？！　しかも何勝手に人を犠牲にしようとしてんの？！」

「一応天使だし」

『ですよ〜』

「なら神でもいいだろっ！」

「こういう時は天使って相場が決まってるのよ」

「嘘だろ！　生け贄とかは処女だろう普通！」

「性転換してみる？」

『では、修ではなく修子しゅうこと呼びますか』

「ふざけんなあああっ！」

そんな言い合いが明け方まで続いたらしい……

続く

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著（後書き）

蒼麗さま、逃げてえええっ！　うちの天然ボケは常識ごとごとく柵に仕込まれているから、一筋縄（文字通り！）じゃ行かないわよお
おお！

・・・雪那・・・雪那ったら・・・。

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著（前書き）

・・・大雪様からの頂き物です。ありがたいことに今回もメッセー
ジつきでした。

「今後も雪那のアイテム『赤縄』を活躍させていきたいと思います」

・・・流石だ。大雪さん、さくら付いて行きます！（マテ）

被害者は蒼麗って（苦笑）事は決定なんですね？

うふ。ふふふ。それで蒼花サマに修兄ちゃんが足蹴にされるのです
ね！・・・。

蒼花との通信を終えた後、萩波は一人滞在地である隣町のホテルへと向う。

そこは、神が経営しているホテルだった。
最上階のスイートルームの扉を開けると、心地良い美声が聞こえてきた。

「お帰りなさいませ」

明燐が出迎えと共に手をさしのべ、そこに外套をかける。
彼女は優雅な足取りで奥に消えた。

「あら? 通信上手く行えたの?」

ソファーに座る茨戯と蓮璋がこちらに問うように視線を向けると、萩波は静かに頷いた。

ふと、此処に居ないはずの二つの気配を感じる。

「明睡、朱詩、貴方がたも来たんですね」

すると、奥から名を呼ばれた二人の姿が現れた。

「果豎が倒れたって聞いたので」

「他の上層部から無事か確認して来いって言われたんだ」
「無事ですよ、当たり前でしょう?」

しかし、危なかったのも事実だった。

常葉地区に何とか入れないかと探っていた時に起きたあれを思い出すと、今でも苛立ちが募る。

「果豎、待ちなさい!!」

明燐の慌てた声が聞こえたかと思うと、パタパタと走る音が聞こえる。

ほどなく姿を現わした愛する妻が小さな体でぶつかってきた。

「むぎゃっ」

「おやおや」

倒れそうになった体をサッと支えると、その小さな体を抱き上げた。

「お出迎えにはいささか勢いが良すぎましたね」
「しゅうは、そうれいは?」

夫よりも友人の心配か……

だが、相手が蒼麗ならば仕方ない

「先ほど通信をしてきました。無事なようですよ。常葉地区にいるそうです」

「ほんちよう?」

舌が上手く回らないらしく、幼い舌つ足らずな口調のまま首を傾げる。

そこで萩波は気づいた。

「泣いていたのですか？」

「こわいゆめ、みた」

「怖い夢ですか？」

コクコクと頷いた果豎は、不安そうな顔をした。

「せつなちゃん、くわれる」

「え？」

「くろいのに、とりこまれりゅ」

「果豎……」

雪那に何かあれば果豎も無事では済まない

いや、それどころか待ち受けているのは死だ

それを最初に知った時、ふざけるなと怒鳴りたかった

何故果豎が死ななければならぬ？

何故？

何故？！

ようやく取り戻した腕の中の愛しい存在

それをまた失う？

許し難かった

だから絶対に雪那は死なせられない

「果豎、大丈夫ですよ。私達が動きますから」

「だいじょうぶ？」

「ええ」

「かじゅもてつだう」

「それハダメ」

見れば、玉英と明燐もすぐ側に立っていた。

彼女達に視線で合図すると、果豎を明燐へと手渡す。

「しゅうは？」

「果豎はまだ本調子ではないのですから、もう少し休んでいて下さいね」

そう言うのと、明燐は果豎を連れて再び寝室へと向った。

ほどなく泣き出す声に玉英も向うが、しばらくは泣き止まないだろう。

「それで、どうすると？」

明睡の言葉に、萩波は蒼花と話し合った事を伝えた。

「じゃあ僕が行くんだね」

「ええ。頼みますよ」

「おっけ」

「アタシ達は、外での情報収集って事ね」

「ええ。忙しくなりますよ。あと、十二王家から一人、こちらに来られるそうです」

は？

あんぐりと口を開ける配下達に、萩波が苦笑する。

「本当に蒼花公主様は……幼馴染みとはいえ、十二王家のご子息達を顎で使うところはあっぱれですね」

「……いやいや、それ、一大事じゃない」

十二王家は遙か雲の上の存在。

例え死ぬほど努力したって、どんなにのし上がったって絶対に超えられない壁に隔たれた先にいる存在だ。

その神力の強大さは原初神に匹敵するうえ、天界では天帝一族に次ぐ名誉と名声、権力と身分、地位を持つ。

正しく、神々にとっての神が天帝一族と十二王家である。

後は、特殊五家と呼ばれる五つの一族も同様の存在であるが、こちらは十二王家に比べると滅多に表舞台に出てこない秘された一族であり、その存在自体が疑われている。

その為、表の十二王家、裏の特殊五家と呼ばれる

その十二王家の一人が来る

当主や夫人でなくとも、その子息一人が来るだけでも普通は一大事だった

「普通はそうですね」

「普通って……まあ、気持ちに分かるけど」

茨戯は、自分達に身近なあの少女達を思い出す

十二王家の中でも筆頭の星家の姫たる二人の少女

母は天帝の義妹でもあり、少女の一人は次期天帝たる皇太子の許嫁でもある

にも関わらず、その姉の方がごく普通に庶民生活を営み、それを追いかけて妹がいつもちょっかいをかけてくる

そう……あの二人も確かに雲の上の存在だ

「とにかく、滞在の準備をせねば」

「そうね」

そうして、萩波達は三日後に来る予定の十二王家の子息の為に奔走したのだった。

本来であれば、チチチと鳥の鳴声が聞こえる筈だ。

本来であれば、朝日が差し込んでくる筈だ。

しかし

「動物いないのか」

雨戸をあければ、昨日とは打って変わって曇天の空が見えた。

しかも、庭に出てみれば白い霧が立ちこめており、蒼麗の体にま

とわりつくように動く。

「寒っ」

早朝という事も手伝い、蒼麗は肌寒さを感じて先ほどまで寝ていた部屋へと戻った。

「もう少し寝てたいな」

そう言って、雪那の隣に敷いた布団に潜り込もうとした時である。

「……………」

「はぁ……………はぁ……………はぁ……………」

自分が先ほどまで寝ていた布団の中でもぞもぞ動く黒いもの。しかもそれは移動し、雪那の布団の中へと潜り込んでいく。

「はぁ……………はぁ……………はぁ……………くうおおおおおおおおお！！」

「ん……………ああ……………あんっ」

「くっ……………やっぱり美少女はいいな……………この肌触り、この弾力、マジ鼻血もの」

そこで、自分に向けられる視線に気づいた。

「……………」

「……………」

蒼麗からのイタイ人でも見るような視線。

その視線が言っている

変態だ、この人

「ち、違うぞ！！俺はただ、外に出た事で布団が冷えるから戻ってくるまでの間暖めておこうと思って！！いや、まあ確かに雪那ちゃんの美肌に思わず吸い付いてツッコみたくなるぐらい欲情したけど、けれどお触りだけで我慢して」

だが、それ以上は言えなかった。

ゴスつと確実に顔にめり込んだ見事すぎる踵落としによって。

「ド変態殺すぞ」

「蒼花？！」

「お姉様大丈夫ですか？！嫌な予感がして来てみましたのっ！！」

先ほどの悪鬼のような表情は一瞬にして消え去り、聖女のような健気さで姉を心配する妹はどこから見ても完璧だった。

「あれ、修さんだよね？ どうしてここに……まさか、狭間から落ちてきたのかな？！」

「嫌ですわお姉様！どこの世界に女性の寢床に落ちる馬鹿がおりますの？あのアルファレンでさえ、恵美以外の女性の布団の中に落ちるようなヘマはしません事よ？あれは疲れが見せた幻覚ですわ」

「そ、そう？」

あまりにも驚きすぎたせいか、いつもならツッコむ妹の台詞に蒼麗は戸惑いながらも納得してしまった。

「さあ、朝ご飯にしましょう。あ、修ですが、今朝方合流しました

ので食事後にお話でも聞きましょうか」

「え？ やっぱり修さんいるの？」

「ここではなく別の部屋ですわ。疲れていたようですから今は眠っていますわ。さあさあ」

そうして姉にまだ眠っている雪那を強引に起こして共に外に出した後、蒼花は静かに部屋の扉を閉めた。

「ぐおおおおっ」

いまだ姉の布団でもだえる修に、蒼花はにこりと笑った。

「部屋にいないと思えば、よりにもよって私のお姉様の布団につ！
！」

「お、男なら美少女がいれば特攻するのが本能だっ！！ 普通、雪那ちゃんみたいな美少女がいれば誰だって命を賭けて忍び込むだろ！！」

「なら最初から雪那の布団に入り込めばいいでしょうが！！ このボケ天使、マジ死ねっ！！」

雪那の布団に潜り込んだ事はどうでも良いらしい

蒼花にとっては、姉の布団に潜り込んだ事の方が重要だった

「自分で慰めてろボケっ！！」

「ぐはっ！！」

そうして修は強制睡眠させられ、起きたのはお昼に近い頃だった。

「で、お姉様はこれからどうしますの？」

修と改めて再会し、今までの出来事を話し合いながら終えた昼食。片付けをしていた蒼麗は妹の質問に考え込んだ。

「うーん、それが問題なんだよね。もともとここに来た目的は、神木の朝露を手に入れる為だからそれを優先するべきなんだろうけど……町に誰も居ないっていう異常事態真っ最中だからね。」

「このまま帰ります？」

「お、おいつ」

食器の片付けを雪那と共に行っていた修が慌てたように割って入る。

「いや、帰らないよ。帰ったら神木の朝露が手に入らないし」

というか、そもそも神木の朝露を手に入れるのに時間がかかりそうだと思ったから、滞在に必要な買い出しまでしたぐらいだ。

「そうですわね」

「それに……この町の状態も凄く気になるし」

誰も居ない町

ライフラインだけが生きているのに誰も居ない

まるで住人全てが神隠しにあつたように

「町のことまで気にかけるなんて」

「気にかけるも何も……このままにしておけないじゃない」

とりあえず、何があつたのか原因調査ぐらいは出来るだろう

「じゃあ、まず先にどちらを行いますか？」

「うゝん、町の調査かな？」

「どうしてですか？」

「神木の朝露はもし見つけられなくても、時間をかなりかければ代用品が作れるけれど、町の方の異変は違うじゃない？」

そもそも神木の朝露は、果豎を元に戻す為の薬品作りの材料と言うよりは、材料同士の生成反応を早める触媒として使用される。

あれば良いが、なければそれはそれで仕方なかったりする。

まあ……晶石の欠片の浄化にも時間がかかるので問題と言えば問題だが。

しかし、町の異変は違う

居なくなつた住人達の失踪原因によつては、時間を食ふことでその命が尽きてしまうかもしれない

「では、町の調査をしましょうか。どうせ、町の調査をする途中で神木の朝露のある場所にも足を運ぶでしょうから」

「だよな」

この常葉町は聖地としての言い伝えもあり、そういう場所では神木の朝露の純度もかなり高い。きつと素晴らしいものがとれるだろう。

「そつえば、果豎さん達は大丈夫かな？」

「ああ、果豎達なら隣町にいるらしいわ」

「え?! 本当?!」

「果豎が熱を出して倒れてるので、後方支援を担当してもらつ事になりました」

「そ、そうなんだ」

「物資と人手を頼みました。人手としては、朱詩が来るそうです。三日後との事ですけど」

「朱詩さんが……迷惑をかけちゃうね」

「どうせ力をもてあましているのですから、良いストレス発散になるでしょう」

にこりとあどけない笑みを浮かべる妹に、そんなものなのかなと蒼麗は心の中だけで思ったのだった。

かゝごめ かごめ

籠の中の鳥は

いついつでやる

夜明けの晩に

鶴と亀が滑った

後ろの正面

振り返ってはいけないよ？

振り返らずに逃げなさい

でないと

地獄に落ちてしまうからね

「凄いな……」

先に進む蒼麗と雪那の後ろから歩く修は、隣に立つ蒼花に声をかけた。

「これ、明らかにまず過ぎるだろう」

「声を小さくしてくれない？ お姉様に聞かれてしまうわ」

距離は取っているが、へたをすればお姉様に聞こえてしまう。ギロリと睨むが、修はそれどころではないようだった。

「これ、普通は気が狂うぞ」

「そう？」

「ただの人間である雪那ちゃんが耐えられるわけがない」

虎視眈々と生者を狙って次から次へと自分達に近づいてくるそれら

昨日に比べて、より強くなっている事には蒼花も気づいていた

「気をつけておいた方が良いわ。油断すると、引きずり込まれるから」

「引きずり込まれる？」

「そう……空間を歪ませて別の世界に。まあ、正確には人の深層心理の中にある恐怖を具現化させるものだけだね」

「恐怖だと？」

「そう。人それぞれの恐怖を読み取り、具現化するのよ。だから、人によって見えているものが違うの」

「……………」

「最初は現実世界に体を残したまま、意識だけが囚われる。現実世界と恐怖の世界の中を行き来する。そうして最後は存在全てが恐怖の世界へと取り込まれて消えてしまう」

「ここの住人達は……それが原因なのか？」

「さあね。ただ、無関係ではなさそうよ」

「詳しいな……」

「知り合いでそういう類の力を持つのがいるからね」

修が驚くのが分かった。

「確かにこの力の能力者は今では天界でも珍しい力の一つに認定されているけど、天帝陛下の宮殿には何人も居たのよ。だから対処方は一通り聞かされているわ」

「じゃあ」

「けれど、他者まではどうしようもない。言ったでしょう？それぞれの恐怖を具現化するって」

だから、それをどうにかするのも本人にしか出来ないのだ

「けど……それってかなり高度な術じゃないのか？」

「術というか能力ね。まあ 高度には高度だわ。けど、ここはもとも聖地だから小さな力でも増幅されやすい。良い力も、悪い力もね」

「呪いも……か？」

「そうね。それも増幅されるわ」

「……厄介だな」

人の深層心理に潜む恐怖を具現化する

それは、自分ですら巻き込まれる可能性がある

「嫌なら、お姉様の側からなるべく離れない事ね」

「は？」

「お姉様の側なら平気だから」

「平気って……そういえば、萩波と話していた時も言ってたよな？」

蒼麗ちゃんなら地の果てまで追いかけられるって」

「そうね……まあ、見てれば分かると思うわよ」

そう言つと、それ以上蒼花は喋らなかつた。

蒼麗ちゃんか……

修は蒼麗を見る。

天界では力無しとされ、落ちこぼれの姫君として蔑まされている。

別に自分はそんな事はどうでも良いが、何の力も発現させられて

いない蒼麗がそんな恐ろしい力の前でも平気だなんて普通は信じられない。

しかし……

「確かに……何の影響も受けてないみたいだな」

というか、全く気づいていない。

この粘り着くような邪気も、虎視眈々と狙う黒い者達も、何一つ。

「俺なら三日でギブアップするな」

「軟弱ね」

嘲笑うように言うと、蒼花は姉をみつめた。

「ねえ、スルーシ」

「なんだよ」

「面白いものを見せてあげるわ」

『天界の華』たる美姫の企む瞳に、修は嫌な予感がした。

「なんか段々霧が濃くなって来てるね」

朝よりも濃くなって来た霧。

少しずつだが、周囲が見えなくなってきた。

その様子に、小型バスでの事を思い出したのか、雪那が強く手を握りしめる。

「大丈夫ですよ、ちゃんと手を繋いでますから」

その言葉に、雪那がホッと息を吐いた時だった。

突然、何かに躓いたように体が前のめりになり地面に転がった。

「きゃっ」

「うわわっ！」

どうやら蒼麗まで巻き込んでしまったらしい。

慌てて謝ろうとした時、グイッと右足が引つ張られた。

「え、なに……ひっ……！」

地面から生えた黒いものが自分の足首を掴んでいた。

が、黒いものはすぐに形を変え、血塗れの手が雪那の足首を握りしめていく。

「いやああっ」

叫んだ途端、足を引つ張られて後ろへと引き摺られていく。

掴まるものが何もない塗装された歩道のアスファルトの上を、雪那は悲鳴をあげながら引つ張られていった。

このままでは殺される……！！

しかし、腕を払おうと足を動かしても手は外れず、それどころかもう片方の足まで掴まれる。恐怖に極限まで目を見開く。

「桷、桷、桷……！」

どうして来てくれないの？！

私のことが嫌いになったの？！

すぐに駆けつけてくれるっていったのに

「雪那さん大丈夫？！」

ガツと手首が力強く掴まれた。

蒼麗が心配に自分を見ているのが見えた。

その途端、引き摺られていた体が止った。

いや、足首を掴む手は相変わらず自分を凄まじい力で引っ張っている。

だが、先程までのように引き摺ることは出来ないようだった。

「っ！！」

掴まれた足首が痛い。手を振り払おうと暴れると余計に強く掴んでくる。

「立ち上がれますか？」

無理　　そう言おうとした。

「よいしょっ」

「きゃっ！」

蒼麗が自分の腕を握りしめたままにも関わらず、するっと　本
当に息つく暇もなく立ち上がらせてくれた。

すると、今度は足首を掴む手の方が逆に引き摺られる。

「怪我はしてないですか？」

「あ、はい。でも、足首が」

「足首？」

蒼麗が雪那の足首に触れる。

その手を振り払おうと新たな手が蒼麗の手を叩こうとする。
しかし、手は目的を果たせなかった。

「何もないですけど」

蒼麗は見えてないらしい

そして見えてない相手には、どうやら影響はないようだ

雪那は蒼麗の腕を握りしめる。

すると手が伸びて、蒼麗の手を握りしめている雪那の手を外させようとした。

もの凄い力に手が外れそうになる。

「雪那さん？ 手を離したいの？」

「ち、ちが」

後ろから口を塞がれる。

「雪那さん？」

違う違う違う！！

御願、手を離さないで！！

雪那は必死に蒼麗に願った。

「どこか具合が悪いのかな？」

蒼麗は何も言わなくなった雪那に首を傾げる。

そうして、雪那と繋いだ手を見た。まるで拒むように手を外そうとする。

しかし

（なんか嫌な予感がするな）

外したら終わり、みたいな

考えた末に蒼麗は決めた。

「手を離さないで下さいね」

とりあえず御願する。

そして、さっさと進むことにした。

ズンズンズン そんな言葉が似合うような足取りで、蒼麗は雪

那の手を繋いだまま歩き出す。

すると、手が慌てたように蒼麗と雪那の手に掴み掛かり、半ば強引に離そうとする。

しかし、しっかりと握りしめられた手はなかなか外れなかった。

とうとう手の方もしびれを切らしたのだろう。

蒼麗の足首を掴んで転ばせ、その隙に手を離させようとするが、逆に蒼麗によって踏まれていく。

「なんか変なの踏んでる気がするんだけど……」

地面を見ても真っ平らなアスファルトがあるだけ。

なんだろう？

この軟らかいものを踏みつづす感覚は。

蒼麗ちゃん……

蒼麗は手を離さないでくれる。

雪那が嬉しさに頬をぬらす。

が、突然ガクンと体が下がった。

（え？）

地面が崩れていく感覚にハッと下を見た雪那は絶叫した。

エラバレタコ

あの警察署にいた警察官が、自分の両足を掴んでぶら下がっていた。

いや、彼だけではない。他にも沢山の血まみれの人達が居る。

（いやあああああああつ！！）

まるで自分を地獄の底に引きずり込もうとしているのか、凄まじい力で引き込もうとする。

雪那は死に物狂いで蒼麗の手を握りしめた。

この手を離せば、自分は間違いなく引きずり込まれてしまう。

雪那は叫んだ

手を離さないで

離さないで

離さないで！！

そういえば、と蒼麗はある事に気づいた。

町の異変を探るとしても、まず何処に行くのか考えて居なかった気がする。

これでは、とりあえず町中を歩き回っているだけにしか過ぎない。

「そういえば、もう少し行った先に図書館があつた気がするな」

図書館であれば、この町についての詳しい情報を手に入れられるかもしれない。

その事を雪那に伝えようと蒼麗が振り向く。

「雪那さん、もう少し行った先に図書館がありますから、まずはそこに行きましょう」

雪那の異変なんて全く気づかず、それどころか強い力でその場に押留め引きずり込もうとする力にすら気づかずに、雪那の手を握り

しめたまま歩き続けたのだった。

「あははははは！！」

後ろからそれを見ていた蒼花は大爆笑。
一方、修は絶句していた。

どうやら、雪那と同じモノが自分達にも見えていたらしい。
つまり、同じような影響を受けているのだ。

しかし蒼麗だけはそれに気づかず、今も雪那を捕らえようとする
警察官達を寧ろ引き摺りあげている。

「あ、見てみてあの警察官！！ お姉様に殴りかかってる！！」

雪那の足を掴んでいたそれは、蒼麗を忌々しげに睨み付けて殴り
かかる。

しかし、蒼麗の体を全てすり抜けていく。

「あそこまで見事に無視されるなんて爆笑ものよね！！」

「爆笑っていうか……なんか不憫っていうか……」

なんであそこまでされていて気づかないのか？

いや、気づかないのは見えないし攻撃も当たらないからで……

ってかどうして見えない？

「馬鹿な奴ら。お姉様に危害を加えられる筈がないのに」

「ってか助けるよ」

「助けが必要だと思うの？あの状況で」

真顔の蒼花にそう言われた修は、しばらく蒼麗達を見た後

力なく首を横に振ったのだった。

続く

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著（後書き）

「全世界の美女と美少女、美少女の味方!」

ゴ
ス
ッ
!

機能停止中。

常葉地区の歴史が詰まっているだろう図書館は、田舎に相応しくない大きな建物だった。

「暗いですね」

ここも電気がついておらず、中は酷く暗かった。しかし、ライフラインが生きているのだから電気はつく筈だ。だが、カチカチとスイッチを押しても電気が付かない。

「ブレーカーが落ちてるのかな」

となると、配電室に向わなければ。

「蒼花、ちょっとブレーカーあげに行ってくるから待っていてくれる?」

「一人でですか?」

「うん。みんなでそろそろ行っても仕方ないし」

そう言つと、蒼麗は雪那達にも声をかけようとした。

「いやあああああつ!!」

「ちっ! 離せ!!」

悲鳴をあげ続ける雪那と何かを攻撃している修の姿に蒼麗はあっけに取られた。

「何してるの？ あの二人」

「疲れがたまっているだけですよ」

笑顔で言い切る蒼花だが、少し周波数をあわせれば図書館の内部が赤錆にまみれたオドロオドロしい内装へと変わる。

無事な本棚もあれば倒れている本棚もあり、足下には血にまみれた書物と共に、腐乱した肉片らしきものが散らばっている。

そして誰も居なかった筈の室内に、数体の紅い物体が立っていた。

肉の塊

そう表現するのが正しいのか分からない

だが、皮膚を完全にそぎ落とされて血塗れになったそれは、もとが人間だったとは到底予想しえないおぞましさを放っている。

それらが、雪那と修に襲い掛かるうとしているのだ。

二人の反応も当然である。

しかし、一度姉の周波数に……呪いも何もかも影響を受けない姉にあわせれば、たちまち誰も居ない静まりかえった以外は何の変哲もない図書館がそこにあった。

「あの二人にも周波数あわせを練習させないと」

「周波数？」

首を傾げる蒼麗に蒼花はクスクスと笑った。

本来、幽霊など有り得ないものが見えるのは、それが存在する世界、またはそれ自身との波長が合ってしまい同調してしまうからで

ある。

だから逆にその同調を解くように、霊との波長が合わないように自ら操作すれば、見えなくする事も可能なのだ。

十二王家の子供達は全員が習得している。

だから、蒼花も周波数を合わせて取り込まれかけている雪那達の居る世界に行く事も出来れば、逆に元の世界に 何の影響も受けていない姉の居る場所に帰ることも出来る。

だが、修はまだ良いとして、雪那がそれを習得出来るかどうか……。

（出来なければ、お姉様の側につけておきましょう）

たとえ雪那が引きずり込まれかけても、姉と一緒にいれば大丈夫だ。

無意識に呪いと波長をずらし続ける姉には、向こうも手出しは出来ない。

「雪那さん、修さん、なんか大変な時にすいませんが配電室に行ってくるので」

パタリと気絶した雪那。

「ひひひひひっ！ 雪那さん?!」

「恐怖の臨界点を突破したらしいですわね。でも気絶だから大丈夫ですわ」

にこやかに言い切る蒼花だった。

「くそ……酷い目にあった」

「修さん、無理しないで休んでも良かったんですよ？」

ふらふらとした足取りで自分と共に配電室に向う修に、蒼麗は芳りの言葉をかけた。

そんな蒼麗を見て、修は考える。

妹と違い、その体型は正しく幼児体型ど真ん中。

渦巻き眼鏡を外せば妹と同じ顔なのに地味な印象が強く。

左右の三つ編みの髪をほども野暮ったくのろまな印象しか抱かせない容姿。

女性としての色気も魅力など微塵もない。

お子チャマそのもので、妹とはその真逆だった。

（妹の方はマジで凄いらな、マジで）

華奢な身体つきに似合わぬ豊かな胸。

顔立ちが繊細な分、身体つきだけは妙に官能的。

清楚な顔に、妖婦のような豊満な身体は見る者全てを悩殺するといつて良いだろう。

男ならば即座に飛び込みたい

何が何でも手に入りたい

手段を問わずに自分のモノにし、妻とし

自分の子を孕み産んだならば、どれほどの快感を覚えるだろうか
だが

「蒼麗ちゃん」

「はい？」

「君ならきつと良い男と結婚出来る、頑張るんだぞ!!」

悪魔の様な性格の双子の妹とは真逆で優しい蒼麗の方が、きつと長く暮らしていく分には良いと思う。

修は女性を見る目だけは確かだった。

一方、修の苦悩？なんて全く知らない蒼麗は、ただ単純に将来を応援されただけと受け取った。

「あ、ありがとうございます」

「ああ、それと俺は大丈夫だから。それより君を一人で行かせる方が危ないな」

恐怖の世界で雪那を守っていた修は、蒼花の振るった金属バットで側頭部を強打という荒技でもってこちらの世界に戻ってこれた。
が、衝撃でふらふらしていた自分に待っていたのは、蒼花からの無慈悲な命令。

すなわち、配電室に行く蒼麗の手となり足となり、最後は盾となつて儚く散つてこいという

しかも最後の部分に特に力を入れていた事から、寧ろ散らせる事が目的のような気がしてならない。

だが、雪那が気絶してしまっている以上、連れて歩く事は出来ないという蒼麗の言うことも最もであり、こうして同行する事にした。

ただ以外だったのは、蒼花が姉と一緒にいかないことだった。

まあ、逆に雪那と同じく異世界に飲み込まれやすい自分が残るよりは、周波数をずらせる蒼花が残る方が良いのは確かではあるが。

「どうしました？」

「いや、いつも仲良しなのに、今回に限って蒼花が君と離れるなんてって思ってた」

「ああ。私が強く御願いしたからだと思います」

「そうなのか？」

「はい。別に配電室へは一人行けば事足りるし……それより、雪那ちゃんの様子がおかしいから付いている人が多い方が良いと思って」

警察署では妹を押さえきれず、かといって來をつけていたにも関わらず、恐い目にあわせてしまった。

「だから、此処に居る時はできる限り雪那さんの側に居てって頼んだんです」

勿論、妹は嫌がった。

だから、新たな人手が来るまでと条件をつけたが。

「朱詩が来るまでか」

「はい。本当は修さんにも雪那さんの側に居て欲しかったんですけど」

しかし、それは妹に阻止された。

「来も居るから大丈夫だとは思いますが」
「来って、あの神獣の事かい？」

修は以前に出会った蒼麗の神獣を思い出す。
神獣の時はふわふわ毛玉のプリーティさん。
人形になった時は、それは愛らしいロリコン達のアイドル
世の美少女。

だが、あまりのその可愛らしさにふらふらと近寄れば、全力で威嚇された。

そしてアルファレンに馬鹿にされた。

「ええ。そういえば修さん、仲が良いですね、来と」

邪気のない笑顔で微笑む蒼麗に修は遠い目をした。

触ろうとすれば威嚇され

お菓子をあげようとすれば「近づくなロリコン」という眼差しで見られ

可愛いねと褒めれば、防犯ブザーを鳴らされた過去

リアナージャとアマレッティからは生ぬるい目で見られた挙げ句

『幼くとも危険物指定物は分かるという事じゃ』
『子供って変態に対して敏感だからさ』

俺は変態じゃない！！

全世界の美女と美少女、美少女の味方！なだけだ

だが、それを宣言した瞬間、理恵からは愛の右ストレートを食らった

しかし何よりも腹立たしいのはあれだ

來が、アルファレンには懐くのだ

何故だ？！

俺の方がこんなに優しいのに

俺なんて全世界の美女達に平等に優しいのに

美女達を侍らし、平等に激しくつつこむのに！！

「修さん？やっぱりまだ体調が優れないんでは」

「くっ！こうなったら何が何でも無事に帰って俺の凄さを分かってもらわなければ！！」

來や恵美や理恵、雪那にチヒロに！

この俺のイチ物を見せつけながら！

そうして、五人を侍らせてあんな事やこんな事をして

次々と妄想を膨らませていく修

それを具合が悪いからだとか心配する蒼麗

もし、この状態を魔王軍の誰かか、凧国の誰か、それが蒼麗の幼馴染みの誰かでも見てくれていたならば、静かに蒼麗を淫行条例違反から引き離れただろう。

「あ、配電室に着きましたよ」

「よし、行こう！俺の下半身の更なる栄光のために！！」

「は？かはんしん？栄光？」

頭に疑問符を浮かべる蒼麗を他所に、修は配電室の扉を開けた。

「……修兄ちゃん……殺す」

「私も僭越ながらお手伝いしましょう」

あれは自分達の汚点だ

全力で修の排除を企てたのは、理恵とレイ・テッドの二人だった。

「ってか、この鏡！力とか通らないの？！通れば今すぐにでも修兄ちゃんを黒こげにして、蒼麗ちゃんから引き離すのに！」

「すいません、その鏡にはそこまでの力はないんです」

それどころか、この世界では力も満足に使えないのだ。

狭間の世界に飛ばされた際、レミアと離された理恵は、気づけばレイ・テッドと二人でこの何も無い空間に立っていた。それからどれほどの時間を彷徨っていただろう。

最初はレイ・テッドがパニックになる理恵を宥めながら辺りを彷徨い、此処が狭間の世界である事が分かった。

だが、それだけだった。

どれほど歩いても他の仲間達には出会えず、気配すら感じられない。

しかも、彷徨うことで体力を消耗していく理恵に、レイ・テッドは仲間捜しを一時諦めた。

このままでは理恵の身が危ない。

そうして先に狭間の世界から現実世界に戻る事を決めるも、レイ・テッドの渾身の空間移動の術は発動せず、力づくで壊そうして放つた力は全て吸収されてしまった。

そればかりか、この狭間の世界は常に辺りの景色が代わり、ある時は砂漠かと思えば、ある時は暗闇となり、ある時は自分達の住む世界によく似た光景を作り出す。

しかし、それらは全て幻であり、そこに居る住人達は自分達を取り込もうとして襲ってくる。

彼等は自分達がそうされたように、新たな犠牲者達を取り込むことだけを目的とし、逃げても逃げても追いかけてきた。

今は霧の世界

あの小型バスを取り囲んだ霧のように、視界も全て真っ白に覆い尽くす。

二人は離ればなれにならないように、それぞれの手を手錠で繋いでいた。

何故手錠？

それは、理恵が修から没収したまま出し忘れていたものだった。

それを持って自分の部屋に忍び込もうとしていた修。

何をしようとしていた？

何を目的として来た？

勿論、的確な目潰しで阻止してやったが

だが、いつもろくな事をしない修も、今回ばかりは役に立つものをくれたと褒めていた

なのに

それはほんの偶然だった。

疲れ果てた理恵に、レイ・テッドが何か食料はないかと懐を捜した際に、ポロリと出て来た掌よりも一回り以上大きな丸い鏡。

それをのぞき込んだ時、眩しい閃光が放たれ、収まった時には鏡に蒼麗達が映り込んでいた。

驚きに慌てて鏡に向って呼びかけるが、鏡の中の蒼麗は気づかない。

そこで、レイ・テッドが思い出した。

その鏡は、蒼麗がアルファレンから注文を受けて作った鏡らしく、鏡を触りながら考えた相手の姿が映るのだという。

ようは、アルファレンは授業で会えない時も常に恵美を見続ける為に、蒼麗に注文した代物だ。

そう、たとえトイレの中でも

しかし、そこは常識人の蒼麗

トイレやお風呂などでは妨害ノイズで映らないように作成したらしく、ひどくアルファレンが悔しがっていたが、それについては理恵に伝えなかった。

恵美命の理恵の事だ。

そんな事がばれたら、まず間違いなく魔王を抹殺しに行くだろう。

そう　あの時の蒼麗のようになるかもしれない。

レイ・テッドはふっと一月前の事を思い出した。

『くうう！ 私と離れている時の恵美の姿を、一分一秒と言えど見れない時があるなんて！ 蒼麗、何故なんだ！』

そうして血眼で十二才の少女に詰め寄る魔王に、リアナージャとアマレッティがソツと涙をぬぐう。

今はああだが、昔は冷酷非道の魔王と言われた時も……ああ、あったかもしれない

『いや、見えてますよ。トイレやお風呂は別なだけで。ついでに寝室とかもノイズ入れたかったのに反対したの、アルファレン様ですよね？』

『当たり前だ！ 私には恵美を見守る責任と義務がある！ そう、何時いかなる時でもどのような角度からでも恵美を見守る！ 例え火の中、水の中、そう　恵美の秘めたる部分は勿論トイレの便器の中から！！ 可愛い白桃の様なお尻は背後のトイレのドアからゴブホオオオ！！』

アルファールン様がおかしくなった

そう悟った蒼麗が反射的にアルファールンを平手で張り倒したが、その場に居た魔王軍達は皆口元を手で覆いながら泣き崩れていたらしい。

だって、それが元からなんて誰も言えなかったから

今更だろうと言い切る蒼花の言葉に誰もが否定出来なかったあの
哀愁漂いし時

救いだっただのは、危うく盗撮という犯罪の片棒を担がされた
蒼麗が無事だった事

どうしよう……魔界は変態揃いだなんて天界で噂になってしまっ
たら！！

レイ・テッドはそれ以上思い出すのを止めた 何処までも落ち
込むから。

とはいえ、何故そんな危うく犯罪に使われかけたものをレイ・テ
ッドが持っていたのかと言うと、その鏡を監視カメラの代わりに出
来ないかと考え、研究材料として一枚もらい受けたからである。

通信は出来ないけれど、他の者の無事な姿を見れた

それは、理恵の疲れた心を癒すのに十分だった

だが

「蒼麗ちゃんに……蒼麗ちゃんに……」

最初に鏡を見たとき、蒼麗が見え、その後に蒼花と修、そして雪那の姿が見えていた。

意識を失っている雪那と共に残った蒼花と來。

そして配電室に向う蒼麗が心配で、蒼麗達の姿を映して欲しいと願えば、鏡は理恵の願いを叶えてくれた。

しかし……蒼麗と修が二人で歩き出してしばらく

修の欲望入り交じる台詞が次々と聞かれたのだった。

こいつ殺す

理恵は決意した

「ふふふふ……目潰し決定ね」

「り、理恵……落ち着きなさい」

バックに黒い炎を燃やす理恵。

その怒りはレイ・テッドですら逃げたくなるほどに熱かった。

だが、それもこれも十八禁な発言を次々と放つ修のせいであって

……。

「レイさん！何が何でも元の世界に戻るわよ！」

「は、はいっ！」

その瞬間、レイ・テッドは完全に理恵の気迫に飲まれたのだった。

続
く

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著（後書き）

えーと・・・えええと・・・。

・・・なにやっ て ん ですか 閣下・・・。

使用目的に激しく抗議したい。

やっぱし、閣下、修兄ちゃんと同類なんだね。反応するのが、全女性か恵美オンリーかの違いなだけって、どんだけ馬鹿なの・・・。

蒼花サマ、修兄ちゃんと一緒に、閣下もきつく締め上げてください。

そりゃ、もう、ぎゅぎゅつとね！

微かな揺れが足を伝わったかと思えば、一気に建物が揺れた。

「きゃああああっ!」

悲鳴をあげる雪那を余所に、蒼花は溜息をついた。

「強引に異空間に繋がられたみたいね」

一気に変わりゆく光景がそれを表わしていた。

一方、それは蒼麗と修をも襲っていた。

配電室に入っただけの揺れに、二人で部屋の中を転がった。ボタンと扉が閉まるが、どうにも出来ない。

「蒼麗ちゃんこっちだ!」

腕を引っ張られて机の下に二人で隠れる。

しばらくすると、揺れが収まった。

「今の揺れ凄かったですね……蒼花達は大丈夫かしら」
「早く戻った方が良いな」

修は配電盤へと駆け寄りブレーカーをあげた。

「……………」

「どうしました？」

「電気が点かない」

ブレーカーを全てあげるが、電気が供給された際に点く洋燈はつかなかった。

「今ので何処がおかしくなっただんでしょうか？」

「分からない。とにかく、一度蒼花達の元に戻ろう」

なんだか嫌な予感がしてならない。

つてか、ここに来てからいつも嫌な予感しかしないが。

修がまず最初に外への扉に手をかける。

ギィイイときしみ音と共に扉が開いた。

視界に映ったのは、先程までなかった白いもや状のものが立ちこめる廊下だった。

「煙……霧、か？」

いや、ちよつと待て。

どうして霧が建物内に発生しているんだ。

薄いが、確かに霧に包まれた廊下に修は茫然とした。

「修さん？」

扉を開けて立ち尽くす修に後ろから声をかける。

扉の外に何か異変が起きているようだが、彼の体でよく見えない。

「修さん、どうしたんですか？」

とりあえず修の元まで行こうと足を踏み出した時、何かがつま先に当たった。

「ん？」

カランと音を立てたそれを拾い上げる。

「……石？」

それは、掌に収まる大きさほどのアメジストだった。パワーストーンの一つとして人間界で有名だが、蒼麗が拾ったものは原石に近い状態で一切加工はされていない。

「綺麗……」

しかも、このパワーストーンにはきちんと力が宿っている。先程の地震でどこから落ちたのだろうか。

「……貰って行こうかな」

雪那にあげれば、少しは気持ちが安らいでくれるかもしれない。それをポケットに入れると、蒼麗は修の元へと向った。

「修さん」

「あ、蒼麗ちゃん……」

「何かおかしくなってるんですか？」

修の体と壁の隙間から顔を出すと、蒼麗にも異変の内容が分かった。

「霧……」

「ああ。なんでこんな所に……」

「何処か窓が開いていたんでしょう」

そう言つと、スタスタと歩き出す蒼麗に修はあっけにとられた。

「え？ちよ、ちよつと！」

「蒼花……ちゃんと雪那さんの側にいるかしら」

またそこら辺をふらふらしていなければ良いが。

「まあ、蒼花は霊媒の能力はお母様が封じてくれているから大丈夫だけど……」

寧ろ、今は雪那の方がなんだか心配だ。

「來もいるけど……」

あの子も気分屋だから。

「ま、待つて蒼麗ちゃん！」

「修さん」

追いかけてきた修が蒼麗の隣を歩き出す。

「歩くの速いね」

「そうですか？あまり気にした事ないんですけど」

「いや、速いと思うよ。それに、凄く度胸がある」

「度胸……」

「普通、こついう場所だったら恐くて動けなくなるものだけど」

そつか……やっぱり普通は動けなくなるんだ……

蒼麗は、どんどん普通から離れていく自分に、心の中で嘆いた。

「雪那さん達と比べると女の子らしくないですからね」

「いや、そんなことは」

修が立ち止まる。

「修さん？」

「蒼麗ちゃんこつちに！」

修に腕を掴まれた瞬間、前方から凄まじい鳴声が聞こえた。

「ん？」

「しまった！ 気づかれた！」

それがこちらに向って走ってくる。

「あれ……」

服を着ているが、人ではない。

なぜなら、顔を形成する筈のパーツが何もなく、一つの肉の塊となっている。

その手には、鉄パイプ。

修は蒼麗を守るように立ちはだかる。

そんな彼に、それは鉄パイプを振り回した。

「っ！」

蒼麗を抱きかかえて横に避けると、その横っ腹を蹴りつける。ぐらりとバランスを崩すがそれも一瞬。体制を立て直し、追いかけてくる。

「くそっ！」

修は力を発動させる。

「あ、あれ？」

修の手の中に集まった光が急激に輝きを失っていく。

「力が……」

まるで何かに吸収されていくようだ。

「私が相手をしますね」

「え?!」

修の腕からピョンと抜け出すと、蒼麗はそれに向って走っていく。

そして

「はぁ！」

その顔面に跳び蹴りすると、相手の鉄パイプを奪って側頭部を

殴りつけた。

それがトドメとなったのか、床に倒れたまま動かなくなる。ぽいっとその上に衝撃で折れた鉄パイプを捨てた蒼麗に、修は開いた口が塞がらなかった。

「さあ行きましょうか」

「え、あの」

自分が苦戦していたのに、どうしてそうも簡単に葬っちゃえるの？

「良く見るタイプだったのね」

良く見るタイプ？！

って何時も何見て生活してるの？！

「ただ、武器の類はあった方が良いですね。蒼花達の元に戻る前に何か手に入れましょう」

そう言つと、蒼麗は再びスタスタと歩き出した。

「あ、そうだ。これ雪那さんにあげようと思ってたんですけど、修さんにあげます」

手渡されたのは、アメジストだった。ずっしりとした重み。

感じる力の気配に、修は蒼麗を見る。

「これは……」

「さっきの配電室で見つけたんです。お守りに持っていると良いと思

います」

そう言うと、蒼麗は再び歩き出した。

『どうする？』

「どうするって言ってもね……」

姉が戻ってくるまではどうしようもない。

蒼花は血と錆に覆われた世界で、気絶した雪那を寝かせた長椅子の端に座りながら頭の上の來に答えた。

『退屈』

「なら見回りでも行って来い」

『えゝ、マジめんどくさいゝ』

こいつ……

到底五歳児とは思えない発言してないか？

「とにかく少し黙ってて」

『むうゝゝ』

不満たらたらの來がプラカードをしまい込む。
が、ふとその手を止めた。

カッン……カッン……

『何か来る』

「そうね」

舌打ちすると、蒼花は懷からジュースの缶を取り出す。
飲もうと思つてもつてきた一本。
それを中身が入ったまま音のする方へと投げつけた。

ガンつと何かに当たり転がる音が聞こえる。

「帰れ」

何者も抗う事が許されない王者の威厳溢れる口調に、足音が止んだ。

二言目はない。

蒼花の意識は既に他に移り、近くにあつた新聞を手取る頃、足音が遠のいていくのが聞こえた。

『追っ払った』

「そうね」

たった一言でそれを遠ざけた恐ろしき女神。

悔しげに鳴きながら、周囲から遠ざかるそれらの気配に蒼花は何時もの口調で呟いた。

「お姉様……はやく戻ってこないかしら」

彼女に敵う者は居なかった。

歩いて歩いてもたどり着けない

何処までも続く廊下に、修は頭痛を覚えた

「修さん、大丈夫ですか？」

「蒼麗ちゃんこそ大丈夫かい？」

もうどれだけ歩いただろうか？

蒼花達の居る場所に向い始めてから、かなりの距離を歩いている。しかし、廊下の終わりは見えず、見える視界も変わらない。

「一体……何が起きてるんだ」

「もう少ししたら抜け出ますよ」

苛立つ自分に笑顔を向ける蒼麗に、修は力なく笑った。

「なんだか、蒼麗ちゃんがそう言うとな納得できるよ」

「ふふ、ありがとうございます。あ、そろそろですよ」

蒼麗が立ち止まる。

それにあわせて、修も足を止めた。

「修さん、刀か何かありますか？」

「ああ」

修の手の中に、彼の愛用の剣が出現する。

天使が剣 さしずめ、裁きの使いというところだろうか。

「じゃあ、ここをこう言う風にぐるりと切って下さい」
「え？」

「はやくはやく」

蒼麗に促され、修は剣を構える。

「力は」

「使わなくて良いです」

そう、使わなくて良い。だって目眩ましの術の源はそこにある。

「はあっ！」

かけ声と共に、修が剣を振るう。

何かがびりびりと破れる音がした。

「そのまま上から下に振り下ろして！」

「こうかつ?!」

渾身の力を込めて振り下ろせば、硝子が割れる音がした。
すると、一気に辺りが歪み出す。

「こ、これは！」

「術が壊れたんです」

ぐにやぐにやと歪んだ視界

見ているだけで吐き気がこみ上げる。

「ぐっ……」

「目を瞑って下さい」

蒼麗の言葉に、修は両手で目を覆った。

少しでも、その気持ちの悪い光景から逃れられるように。

それからどれだけ時間が経ったのか。

蒼麗の声に手を外せば、目の前に扉があった。

それは、配電室に向う為に一番最初に通った扉だ。

「……戻ってこれたのか？」

「はい。ここを開けたら、すぐに蒼花達の居る場所ですよ」

蒼麗は躊躇いなくドアノブを回した。

「……あれ？ 蒼花がいない？」

待ち合わせ場所になっていた場所に蒼花が居ない。

それどころか、雪那と來も居なかった。

しかも、ここにも薄い霧がかかっている。

「こんな状況で何処に行っちゃったんだ?!」

「外に出た感じじゃないけど……」

しかし辺りに気配は感じられない。

「何処に行ったのかしら……」

辺りをキョロキョロと見まわし、妹達の名を呼ぶ。
だが、返事はない。

「何処に行つたんだろう……」

そのまま修から一人離れて図書館の奥へと歩き出す。

「蒼麗ちゃん?!」

「あ、ちよつと奥の方を見てくださいね」

「蒼麗ちゃん何処だ?!」

「修さん?」

後ろで叫び続ける修を振り返つた蒼麗は、想像しなかつた光景に茫然とする。

「……修さん、どこ?」

声だけが、後ろから聞こえてくる。

しかしその声も次第に聞こえなくなっていく。

「修さん?!」

「蒼……ど……いる……蒼麗……」

終に聞こえなくなった修の声に、蒼麗は先程まで彼が居た場所へと走る。

姿は何処にもない。

「修さん、修さん?!」

その時蒼麗は気づいていなかった。
先程まで周囲を覆っていた霧が完全に消えていることを。

それは、彼女だけが現実世界に戻された事を意味する。
怪奇も何も干渉しない、ただの無害なゴーストタウンと化した町に、修を呼ぶ蒼麗の声が哀しく響き渡った。

突然霧に覆われて消えてしまった蒼麗に、修は慌てた。

だが、蒼麗が先程まで居た場所に駆け寄っても、既にそこには誰も居ない。

それどころか、生臭い臭いに我に返った時には、周囲の様子は一変していた。

赤錆と血に塗れたあの世界

「くっ……また取り込まれたのか？」

後ずされば、足が血だまりを踏む。

飛び散る血がスポンを紅く染め上げ、生臭さが絡みつく。

「っ……」

二度とごめんだと思った世界に、ただ一人

不思議だ

今までなにものであろうとこんな気持ちは抱かなかったというのに

恐怖と孤独が修を蝕んでいく

「俺は……」

ふと、修の脳裏にイメージが飛び込んでくる

絶叫し狂った一人の男

自分と同じようにこの世界に墮とされた男は一人ではなかった

しかし、疑心、絶望、憎悪、殺意により繰り広げられた血の惨劇

男が狂ったように笑いながら、窓硝子へと飛び込み

「やめろおおおお！」

モウオマエハココカラニゲラレナイ

オマエモオレタチとオナジニナルンダ

音もなく忍び寄った怨霊と呼ばれる者達が、座り込む修の上でクスクスと笑い続けた。

続く

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著（後書き）

はわあっ！ そ、そそ蒼麗さんっ！あなただけが頼りなのにつ！
さくら心の声。

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著

誰も居ない

妹も、雪那さんも、修さんも

町には蒼麗だけ

孤独

一人

一人きり

独りぼっち

恐怖が忍び寄る

孤独と言う名の恐怖は次第に狂気を呼び覚ま

「とりあえず、修さんが消えた時に妙な気配感じたから、それを求
「こればいいのね」

さなかった。

それどころか、とってもポジティブ。

「図書館の中にいる事は確かだね、図書館の中で消えたんだし」

誰も居ない図書館は、寧ろ静寂さが恐ろしさを誘うが、蒼麗はあつからかんとしていた。

このぐらいがなんだ。自分をもっと酷い目にあつた事がある。

「とりあえず、調べ物しながら搜してみようか」

何処までもポジティブだった。

悲鳴が聞こえる

男の絶叫。

すぐに修のものだと分かった。

ってか、天使のくせして何してるのだ。

「うっさいわねあの男！」

とりあえず黙らせに行こうと決め、長椅子から立ち上がる。
だが、そこで雪那がいる事に気づいた。

「放置したら、お姉様に絶交されてしまうわ」
『だよね』

蒼花は舌打ちすると、雪那の頬に触れる。
と、その胸ぐらを掴んだ。

「起きろおおおおっ！」

榊が居れば、即座に切れる事間違いない。

胸ぐら掴んでがくがくと揺さぶる蒼花に、一切の手加減はない。

「あ……あううう！」

揺さぶられ、三半規管を刺激され強制覚醒させられた雪那だが、今度は激しい揺れに意識が飛びそうだった。

「とつとと立って！」

「は、はいっ！」

何が何だか分らない。

だが、蒼花は雪那が状況を判断する時間をくれなかった。荒々しく手首を掴まれると、そのまま走り出される。

「うえええええ?!」

ピョンっと、來が蒼花の頭の上へのっかり、二人と一匹は疾走する。

血だまりを躊躇なく踏みつけ、飛び散る血にも頓着せず、ひたすら走った。

「ど、どこに行くんですか?!」

「絶叫野郎のところよ」

と、そのまま蒼花が目の前に迫った扉を蹴り開けた。

「居たわね」

「い、居たって……修さん？」

そこは自習部屋らしく、いくつもの机が並んでいる。

その中央に、俯いたまま佇む修の姿に雪那はホッとした。

「修さんも無事だったんですね」

「それはどうかしら？」

「え？」

「天雷」

ドオオオンと雷が雪那の真横に落ちる。

目映い閃光と衝撃に、常人ならばあつという間に吹っ飛ぶが、瞬時に蒼花が張った結界が雪那を守る。

「……修さん？」

「精神を浸食されたみたい」

「浸食？」

「ようは、イツちゃったって事よ。まあ、仮にも天使だから一時的だろうけど 軟弱なこと」

この程度で狂うなんて……

修の手の中に剣が現れる。

「あ……ああ、あ……」

ゆっくりと上げて露わになった顔に、蒼花が鋭く舌打ちする。

焦点があっていないどころか、狂気の光を宿している。

「天雷」

再び舞い降りる天の光。

それを、腕を一薙ぎさせる事でかき消せば、尋常ではない速さで

修が襲い掛かってきた。

「あの子を返せ！」

「修さん！」

「あの子って誰よ」

見当はついていたが、あえて聞いてみる。
しかし、修は何も答えない。

「返せ、返せ、返せえええええつ！」

「何を返して欲しいのかはつきり言わなきゃ無理ね。まあ言っても無理だろうけど」

不敵に微笑むと、軽く床を蹴つて修の顎を蹴り上げる。

そのまま優雅にバク転して着地すると、雪那の腕を掴んで共に後ろに下がる。

「お返ししてあげる」

蒼花は女神に相應しい笑みを浮かべた。

「これで死んだらそれまでよ 天雷」

修が放つよりも数倍の威力をもつ雷が、始原の天使を包み込んだ。

「ふむふむ、なるほどなるほど」

妹達のピンチにも気づかず、一人無人の図書館で調査していた蒼麗は先程見つけた歴史書を読みながら考えを纏めていく。

「この町って、強い霊場に建ってるんだ」

それも、ちょっとやそつものものではない。

古代は、多くの部族がこの土地を巡って争ったという。

「確かに霊場はシャーマンとか、そういう系にとっては垂涎ものだし」

その上、風水的にも力強い場所は上手く使えば他から攻められる機会を格段に減らすことが出来る。

「しかも……この町って、なんだか特殊な宗教があったみたいね」

蒼麗はぱらぱらと町の宗教について書かれたページを見た。

そこに何度も書かれている、魂の救済という文字。

それは宗教にはよくある言葉だが……。

「いくつもの宗教が発足しては、消えている……でも、行っている事は特に変わらない」

信者を集めて、なにやら儀式を行っている。

ただ、その儀式の詳しい内容や目的は書かれていない。

「ん？」

歴史書をめくっていた蒼麗は、ふと視線に気づき顔を上げた。

目

目

目

目、目、目、目、目玉

沢山の目玉が、本棚の向こうからのぞいている。
それは、一つの本棚だけでない。
周囲の全ての本棚から、数え切れないほどの目玉が蒼麗を見てい
る。

ギョロリと、憎悪に染まった目玉。

「なんだ、唯の目玉か」

蒼麗は特に気にせず、歴史書を読むのを再開した。

ア……アア……アガガガガ

しかし、目玉達の方は黙っていない。

蒼麗に向けて一気に距離を縮めてくる。

「え」と

なんだかこの宗教が気になる。

それは今までの経験から培った勘によるものだ。
と、蒼麗に目玉達が一気に襲い掛かった。

アアアアアアアアッ！！

「って、唯でさえ私頭が悪くて考えるの苦手なんですから黙って下さい！」

なにやら周囲が煩い事に、蒼麗が顔を上げた。
途端に、巨大な目玉が眼前にある。

「……………」

次の瞬間、親玉とも言うべき巨大な目玉が絶叫する。
蒼麗に歴史書で殴られたのだ。

「しまった……余計に煩くなった」

ってか、目玉しかないのに叫べるって体の中はどうなっているんだろう？

って、今は町の歴史を調べる方が先だ。余計な事は考えないようにしないと。

「凄いな、お姉ちゃん」

「いえ、余計に酷くしちゃった気が……って、え？」

後ろを振り返った蒼麗は、それほど離れていない場所に一人の少女を見つけた。

七歳ぐらいだろうか？

手に、テディベアを持っている。

「……貴女は」

「お姉ちゃん、人間？」

「え？」

「違うよね？　じゃなければ、とつくの昔に消えてるもの」

いつそ青白いと言える顔色で、その少女はクスクスと笑っている。

「……あなたは？」

「わたし？　わたしはミコト」

「ミコト……ちゃん？」

「そう、あなたは？」

「蒼麗って言います」

「そうなんだ……ねえ、ここから早く出てった方がいいよ」
「え？」

少女の言葉に、蒼麗が首を傾げる。

「この町がおかしいって気づいてるでしょう？」

「う、うん」

「なら早く出て行っただ方が良い。私が目覚めたように、向こうも既に目覚めてる」

「目覚めてる？」

「この怪奇の元凶。生け贄を求めている」

「い、生け贄？！」

「あの子が必死に抑えてるけど、夜は魔の時間。まだ日の高い今のうちに出て行きなさい」

「でも、妹や雪那さん、修さんがいないし。それに他の人達も」

「他の人達になんて構ってないで、出て行っただ方が良い」

少女が少し強い口調で言う。

「それに、雪那がああ雪那なら、もう無理よ」

「え？」

「あの子は選ばれた子。選定の儀式で、選ばれた子。一度は上手く逃げられたけど、今度は逃げられない。うっん、最初からあの子は逃げられてないの」

「どういう事？」

「あの子が逃げた事で儀式は止まった。今度は絶対に逃がさない」
「それは貴方が？」

蒼麗が疑問を口にする、少女が笑う。

「違う。奴ら、うっん、あの人。狂女は今も求めている、願っている、ただ一つの望みを。悲劇は強すぎる力、賢すぎた知識、そしてこの地に来てしまった事」

少女はふつと何処か遠くを見つめる。

「もう誰の声も届かない。誰の声も聞こえない。ただ、最後の生け贄を求めて暴れ続ける」

「その生け贄が、雪那さん？」

「あなたから、あの選ばれた子と同じ気配がする。だから、あの子が生け贄」

「生け贄って……そんな事させません」

「強いね、あなた……あなた、何者？」

「それでも神の端くれです……たいした力は持ってないけど」

「そう。なら、もしかしたら対抗出来るかも」

「え？」

「あの狂女の力は、どちらかと言えば魔の力が強い。天使や神の力はそれと相対する事が出来る。あるいは、聖女」

「聖女……」

「でも、雪那は駄目。あの子は呪いで穢されてるから……もう駄目

ね

「ミコトさん？」

蒼麗の問いかけに、自嘲するような笑みを浮かべる。

「目覚めてすぐ、あなたを見つけて来たけれど……もうこれ以上は無理。また、眠らされる」

「眠ら……される？」

「私を眠りに堕とし、奴らはこの町を支配した。今まで貴方達がこのぐらいですんでいたのは、私の眠りが浅かったから。でも……もう無理。深く、深く眠る」

少女の姿が少しずつ薄らいでいく。

「ま、待つて！」

「私が深く眠れば、それだけ奴らは自由に動く……その前に、はやくここから……」

「でも、まだ出て行けない！ 雪那さんが生け贄にされると言うのなら、それこそ出て行けないよ！」

そう、この町で何が起きているのか、そして何故雪那が生け贄にされるのか？

それらを全てなかった事にして出て行くなんて出来ない！！

「……なら、あの子を見つけて」

「あの子？」

「男の子……私と同じぐらい……彼方……あの子なら、貴方の力になってくれる」

「力について……」

「彼方だから……十年前に、雪那を儀式から、この町から逃がしたのは……」

「え？」

「……もう……力がでない……蒼麗……どうかこの町を……」

少女の姿が完全に消えた。

「修さん、修さん！」

蒼花の一撃を食らい、倒れたまま目を覚まさない修に雪那は必死に縋り付く。

心臓は動いているとはいえ、雷の直撃を受けたのだ。
このまま死んでしまう恐れだつてある。

「大丈夫よ」

「で、でも！」

ボロボロと泣きじゃくる雪那に蒼花が溜息をつく。

彼女だつて何も考えていないわけではなかった。

修に蹴りを入れた時、ちらりと懐に見えた紫の光。

あれは、アメジスト　それも、かなり強い力を持ったパワーストーンだつた。

だが、問題は邪気に侵されていた。

邪気に侵されたアメジストは、周りを破壊するほどのパワーを持っている。

それどころか、空間のエネルギーを一瞬にして邪悪な空間に変化させる事すらある。

勿論、持っている相手にも影響してしまい、それが修を狂気に塗れさせる原因となったといってもいい。

ならば、その邪気をどうにかすればいいだけだ。

もともとアメジスト自体は霊性の高い石とされ、悪い力を良い力へと変える効果がある。

また、邪悪なものから身を守るお守りとしての効果も期待できるものだから、その力だけを引き出してやればいい。

だから、邪気を焼き尽くす天雷を放ってアメジスト内にある邪気だけを払ってやった。

そうすると、残りは本来のアメジストの力だけが残る。

そうすれば、これ以上ない強力なお守りになるだろう。

「もし、修さんが死んだら……私、私……」

雪那が泣きながら、修にしがみつく。

と、蒼花は見逃さなかった。

「私……私……」

モミュモミュ

「つて、きゃっ！」

胸が激しくもまれ、雪那が慌てて離れようとした。
が、腕を引っ張られて修の胸に倒れ込む。

「なんて可愛いんだ雪那ちゃん！」

「え、ええ?!」

「ああ、君が俺の為に泣いてくれるだけでもう俺は、俺は下半身の疼きを抑えられない！　ってか、俺の方がよっぽど君を優しく縛ってあげ」

ゴス!!

蒼花の踵落としが顔面にめり込んだのは、言うまでもない。

続く

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著

彼女を表わす言葉

それは、到底一つだけでは不可能だ

詠雪之才 蛾眉曼碌 綽約多姿 天香国色 羞月閉花 傾城傾国
妖姿媚態 雪膚花貌

美人を表わす言葉は多いが、それら全てに当てはまる正に創世の
二神がこの世に生み出した究極の美

それを具現化したか如き美貌の姫は『天界の華』と呼ばれ、天界
上層部からの寵愛も深い

まるで真綿にくるむように、天宮の奥深くにて大切大切に守り育
てられた、嫋やかで麗しき深窓の姫君

な筈なのに

ゴスゴスゴス

『死ね、マジ死ね』

『ああん！ 女王様もっと、もっと俺を激しく踏んでくれ！』

「修兄ちゃん……って、にいさま?!」

アルファールンは死にたくなった。

何時の間にか用意した縄を、自分の首にひっかけ準備は万端。
側の崖から飛び降りれば万事オーケー。

自分の中のアズラエルとしての部分が、潔い死という名の逃走を薦めていた。

「ちよつ！ アルファレン兄貴、待て！」

「アルファレン！ そなたが居なくなれば誰があの変態を止められるのじゃ！」

兄弟も必死に止める。

まず恵美がアルファレンに前からしがみつき、アマレットイが後ろから羽交い締めにし、リアナージャが縄をほどく。

流石は兄弟と元妹。

悲しいまでにスムーズな連携だ。

「あんなのが片割れ……もう生きていけん」

けぶる様な睫を振るえる。

瞼を閉じずとも脳裏に浮かぶ。

自分の中のアズラエルがシクシクと泣いている。

体制はバッチリ体育座りだ。

しかし、アズラエルの美貌をもってすれば、そんな間抜けな格好すらも美しかった。

流石は天使時代に数多の天使達、そして天使長達も虜にした絶世の美男子。

ふと、アルファレンはアズラエル時代に老齡の天使長に襲われかけ、男であるにも関わらず妻にされかけた過去を思い出し、更に気が遠くなった。

歩く度に男女問わず告白され、隙を突かれては押し倒され、更には天使長達から是非とも妃にと婚姻届を持って追いかけ回されたあの頃。

一点の穢れもない清らかさはもとより、魔界の夜の一族よりも扇情的で背徳的な色香を纏い、その美貌は神々が作り上げた最高の芸術とさえ言われていた。

全てのパーツが揃い、絶妙なバランスでもって構成された美貌。片割れに比べれば、中性的で女性と見紛う容姿に、多くの天使達はあっけなく墮天していった。

そしてついたあだ名が『魔性の天使』、『罪深き天使』。

もう将来墮天する事間違いないと言わんばかりのそれに、絶対に最初につけた相手はそれを予想していたと思う。

まあ、確かにアズラエルの美貌が引き起こす騒動は凄まじかった。彼の美貌にとち狂い身を滅ぼす天使達の続出は終らず、更には全ての天使長が百年の間に十三回も代わっているのを考えれば、正しく罪深くあるだろう。

だが問いたい

私のせいなのか？

私のせいなのか？

『ワシの重い、いや、想いを受け入れてくれ！』

全裸で飛びかかってきた天使長の、あの血走った眼は今でも思い出せる。

あの後、自分は完全な引きこもりになった。
軽く数十年ぐらい引きこもってやった。

スルーシがドアをぶち破り、部屋の隅でぶつぶつと呟く自分に根
気強く心のカウンセリングをしてくれることウン十年。

そうだな……スルーシが守ってくれたっけ。

いつでも自分を守ってくれたスルーシ。

そしてついた新たなあだ名は『姫』。

二度目の引きこもりに突入したのは言うまでもない。

天使のくせして肉欲に染まり、アズラエルを情欲に塗れた眼でぎ
らぎらと見つめてきた仲間達。

お前ら本当に天使かとどれだけ問いたかっただろう。

ってか、私は男だ

妃ってなんだそれは

もしかしたら、転生の女神たる少女の件がなくても、いずれは墮
天していたかもしれない……

アルファールンは天使時代の記憶を鉄の箱に入れて蓋をした。

そしてガンガンと釘を打ち、奥底へと沈める。

もう二度と思い出すもんか

常に貞操の危機に見舞われていた天使時代はもはや悪夢と言って
良い

スルーシの事だけ覚えてればそれでいい

そう……大切な半身だったのに……

「ふっ……アズラエルの墮天など、あいつの変態化に比べれば微々たるものだ」

「否定できないところが悲しいのう」

「墮天つて、微々たるもので収まるんだ……」

「それより、修お兄ちゃんをどうしよう……蒼花ちゃんに凄い迷惑をかけるなんて……」

恵美の言葉に、アルファーン達は掌で顔を覆った。

見なきゃ良かった

なんで見てしまったんだ俺達

寧ろ、映像も出てこなければ救いがあった

蒼麗の作った鏡を使って現実世界の様子を確認出来るレイ・テッド達とは違い、アルファーンが作り出した魔鏡によって、現実世界の様子を確認していた恵美達。

といっても、この狭間の世界では常に全てが不安定で、魔鏡がきちんと現実世界の様子を映し出したのはついさっきの事だ。

運良く　　というか、アルファーンの意地と根性と努力、そして妄執愛の賜により、恵美と離れずに済んだ彼等は、共にこの狭間の世界と呼ばれる場所に落ちてきた。

しかも、更に運の良い事に、アマレッティとリアナージャの二人もそれほど離れていない場所におり、すぐに合流出来た。

アルファアーレンからすれば、恵美との二人っきりの時間を邪魔され本来なら腹立たしいが、この様な世界ではそうも言っていない。

転移の術を使おうにも、場が歪み不安定すぎて発動せず、力ずくで空間を壊す事も出来ない。

やってやれない事はないのだが、この世界の事を殆ど分らない状況で下手なことをすると、別の世界に飛ばされてしまう危険性もある。

「蒼花公主がいればな……」

蒼花の力は、子供のくせにアルファアーレンの力を軽く超えている。この空間を力ずくで壊しても、他の世界に飛ばされる事はないだろう。

「何せ、原初神だからな、あいつは」

正確には、原初神の生まれ変わりの一人だ。混沌自身であり、その混沌から次々と創造を行っていた創世の二神が作る事に疲れると、彼等の代わりに数多の世界創造を行ったと言われている。

あんな化け物級の者達なんて、絶対に敵に回したくない。

「既に怒らせてはいるがのう……」

リアナージャが疲れたように魔鏡を見る。

最初にこの鏡に映し出されたのは、修が雪那達に襲い掛かっている姿だった。

すぐに狂気に堕ちていると気づくも、ここからでは声すら届かない。

そんな修を一撃で黙らせた蒼花の力にアルファレン達は畏怖を抱きつつ、修を心配する雪那の優しさに恵美が涙した。

だが

「雪那に手を出すなどとは……」

雪那を抱きしめ、エロ親父顔負けの台詞を吐き、蒼花に踵落としくらった修。

しかし、それで何かが目覚めたらしい。

もつと踏んでくれと叫びながら、蒼花の魅惑の白き足にしがみつく姿に、アルファレンは可能ならば即座に半身の下半身を不能にしてやりたくなった。

魔界、いや、天使が馬鹿ばかりと天界に誤解されたらどうするんだ。

他のまともで努力家で、品行方正に日々仕事に励んでいる天使達や魔族まで、誤解されるではないか。

己を律し、己を厳しく戒め、溢れる欲を抑えて他者との交流をはかり、円滑なコミュニケーションにて天界とも良好関係を築き上げてきた魔族達まで、馬鹿と思われる！！

この時点でアルファレンは疲労のあまり壊れていたらしい。

魔族が品行方正でどうするんだ。

というか、魔族が欲を制御して自分を律した時点で、魔族としての何かを間違えている気がする。

しかし、そこにツツこむものは誰もいなかった。

『くたばれこのゲス!』

『もつと……もつと俺を苛めてくれ! 罵ってくれ!』

「アルファアレン兄……」

「スルーシは……誰も信じられないだろうが……あれでも、天使の中では位も上から数えた方が早い上級天使の一人で、天使長の信頼も厚く、聡明で凛々しく頼もしい者だった……文武にも優れ、強大な力を操り、多くの天使達から慕われた人格者だった」

だったを、ことのほか強調するアルファアレン。

彼も信じたくはないのだろう。

今や、昔の大切な半身はDMに変わってしまった。

「スルーシ……あれか、そうなのか? 私がお前の分まで奪ってしまつたからなのか?！」

何を?

勿論、DSについてだ。

産まれた時から一緒に、共に育ってきた二人。

共に学び、共に遊び、共に仕事をしてきた誰よりも近しかった半身。

そう……口には出さないが、大切な大切な自分の片割れだった。

力も同じぐらい、能力も同じぐらいだった。

しかし、どうやらアズラエルは墮天する時に、スルーシの部分のドSを何処かで奪い取ってきてしまったらしい。

「すまん……この私がふがいなかったばかりに！」

ドSを全て奪い取られたスルーシをあんな変態にしまった。アルファアーレンの中のアズラエルは、もはや号泣していた。

「いや、それなんかおかしいから兄貴」

「アズラエルレベル、人に言う前世レベルで混乱しておるのう」
「にいさま……なんて痛々しい」

とりあえず、三人はアルファアーレンを宥め慰めつつ、修をどうにかするべく元の世界に戻る事を誓い合ったのだった。

太股のエクササイズは色々試してきた。

周囲は太っていないと言うが、自分は知っている。

それは若さがものを言っているだけであり、年を取れば筋肉も落ちる。

成人すれば、若いままで成長が止まる神だからといって、それに甘んじてばかりではいけない。

だから、常日頃から努力していた

ボタンと倒れた修を、蒼花は蹴飛ばした。

「ふう……千回も踵落としすると良い運動になるわね」

「お、修さんが……」

『気にすんな』

心優しい雪那が修を介抱しようとするが、来によって止められる。全世界の美女、美少女、美少女の味方と称するこの男の事だ。何がどんな風になっているかは分らないが、一つ分るのは雪那みたいない美少女に優しい言葉をかけられ触れられれば、たちまち完全復活をする。

「今の時代の天使こそが怪奇現象だわ」

人間が聞けばぶっ飛ぶような感想を述べつつ、蒼花は周囲を見まわした。

相変わらず、赤錆と血に塗れた世界。

キイキイと何かが鳴く声が聞こえ、異様な雰囲気包まれている。

「しかも、前よりも強いわね」

以前よりももっと強く、もっと深く取り込まれた気がする。

自分一人だけならすぐに戻る事も出来るが、雪那と修を連れてとなると面倒だ。

「で、あんたは戻らないの？」

蒼花は来を見る。

まだ幼いが、来は父から受け継いだ、空間や世界を自由に渡る能力を持つ。

それゆえ、いますぐ元の世界に戻るのも可能なのだが……。

『蒼麗から蒼花頼まれた』

「でも、修が此処に居るといふ事は、お姉様が一人になるじゃない」

自分の護衛達は居るが、彼等もいざという時の駒になる為、蒼麗にはそうそう近づく事はしないだろう。

そう……自分達に比べればそれほどではないが、蒼麗もまた、向こうに既に知られている。

（まあ……私がここに引きずり込まれたのは雪那の事もあるし）

というか、正確には自ら雪那と共に移動しているだけだ。

何せ、今回も雪那だけが引きずり込まれ、蒼花自身が何もしなければ消えたのは雪那だけだった。

警察署の一件もあるのだろう。

蒼花の事は、取り込むよりこの場所から追い出す方が得策だと向こうはとったのだ。

（修は……あれか。半身が魔王だからかしら？）

その筋で引きずり込まれたとも考えられるが、それにしては……

（まあ、どうでも良いか）

どちらにしろ、やるべき事は決まっている。

「とつとつ、元の世界に戻るわよ」

とはいえ、ここまで深くこの世界に自分達を取り込めたのだ。

此処から脱出出来ても、完全に怪奇現象のない世界に戻れるとは限らない。

せいぜい、あの霧が立ちこめる世界に戻るぐらいだ。

と、修が目を覚ましたらしい。

「く……イタタタ……」

「頭は治った？」

「俺はいつでも正常だ」

この時、魔鏡から様子を見ていたアルファレンが目にも留まらぬ速さで自身の首に縄を巻き付け大騒ぎになっている事を、修は知らない。

どうやら、アルファレンは修とは違い、自虐傾向に陥っているようだ。

流石は狭間の世界。

「それで、どうしてお姉様と一緒に出かけた筈のあんたが、一人でここにいるのよ」

「え、えっと……」

まるで悪戯が見つかった子供のような修を、蒼花が呆れたように見る。

「あっさりと取り込まれやがって」

「ひ、ヒドイ！けどもつと罵って俺を！」

この時、アルファレンが地面を蹴って崖に身を躍らせようとしたり慌てたりアナージャ達に引き上げられるも、泣きじゃくった恵美に抱きつかれてバランスを崩し

二人揃って崖から落ちかけているが、これも修が気づく事はなか

った。

そんな告生天使ことスルーシ

本来なら生を告げる筈の彼だが、知らぬところで片割れに即死攻撃級のダメージを与える彼の方が、よほど告死天使に相応しいと気づいたのは、隠れ潜み状況を探る中で全てを知ってしまった蒼花の護衛達の感想だった。

続く

【幼児化王妃の危機 雪那編 忘れられた約束?】・・・大雪様著（後書き）

閣下・・・苦勞したんだねえ、しかも引きこもり天使。ウケタ。
いや、うけてどうする、さくら・・・。

修の変態具合は最高です。閣下のやさぐれ具合も楽しいです。

『ウサギと幼女』（前書き）

大雪です。

えっと、今回送らせて頂くのは、今書いて送らせてもらっているシリーズの番外編のお話です。

とりあえずうさぎ年なのでうさぎを書きたかった　という理由から書いてみました。

受け取って頂ければ幸いです

――もらったあああつ！　by さくら

『ウサギと幼女』

「ウサギしゃんだ」

幼児化した果豎がにこにこその毛玉を抱き上げる。

白い毛の塊にしか見えないそれは、果豎に抱き上げられると小さな耳をピクピクと動かした。

「喜んで貰えて嬉しいです」

雪那が花のように微笑めば、隣でチヒロと恵美がそれぞれお気に入りのウサギを抱えながら頷く。

雪那の家の庭でコロコロと転がる丸い幾つもの毛玉ことウサギ達。色はそれぞれ違うものの、どの子もとて愛らしかった。

そのウサギ達は、雪那が友人から里親捜しを頼まれた子ウサギ達で、現在引き取り手を待っている身であった。

「ふっ……やっぱ子供にはウサギね」

理恵が勝ち誇ったように言えば、隣に居た玉英が面白くなさそうに手に持っていた黒ウサギを理恵に向ってぶつける。

グハッと女の子らしくない悲鳴をあげる理恵だったが、投げ方が優しかったのは玉英なりの気遣いだろう。

でなければ今頃スプラッタである。

「ウサギしゃんウサギしゃん！」

「果豎さんは動物も好きだものね」

蒼麗が話しかければ、果豎がにこにこ笑いながら白ウサギを抱きしめる。

そんな果豎の首筋に小さな鼻をひくひくさせながら顔をすり寄せるウサギ。

さすがは動物。安全な相手をきちんとかぎ分けている。

「かじゅ、どうぶつだいしゅき！」

「じゃあ、凧国に住んでいた時にはペットとか飼ってたんですか？」
「いえ、ペットはいませんでしたよ」

明燐がパタパタと手を横に振る。

「え？ロイヤルファミリーだったら、ペットは必須じゃないんですか？」

どこかずれた反応をする雪那に理恵がツツこむ。

「いやいや、別に一般家庭でも飼ってる人いるし」

「どうせあの男が嫉妬して拒んだのだろう？」

ウサギを抱きしめる恵美ごと抱きしめたアルファールの言葉に、明燐が苦笑した。

「そうですね……でも、最終的には飼っても良いと許可されましてわ」

「あの男がか？」

妻命。

妻の興味が他に向こうものならば相手を抹殺しかねないほどのヤ

ンデレ。

いや、ヤンデレに失礼な幼児趣味の変態。

偉大なる大国の賢君。

容姿端麗、文武両道、歌舞御曲に優れ、身分も地位も権力も、そして財力すらも持ち合わせているというのに、妻への異常な愛情が全てを残念なものへと変えてしまっている。

そんな萩波が、ペットを飼うことを許した？

「ええ。まあ……流石に可哀想になってしまったというか……」

妻を失うことを恐れた萩波は、長年にわたって果豎を王宮に閉じ込めた。

それも全ては、果豎を王妃から引きずり下ろそうとする者達の企みのせいだ。

何かにつけてケチをつけ、時には強引に果豎を王妃の座から引きずり下ろそうとした狸達。

建国当初は特に過激で、暗殺、誘拐はざらに行われた。

そればかりか、果豎自身が王妃の座を降りようとしていたのを過敏に悟った萩波は果豎を王宮の外に出さなくなった。

果豎の世界は王宮だけになった。

広い広い王宮。

けれど、その門の外に広がる世界はそこよりも更に広い。

外に憧れ、自由を好んだにも関わらず、果豎は萩波に巧みに言いくるめられ囲われた。

「本当に最悪な男だな」

「萩波だけではございませんわ。私も兄も朱詩も茨戯も……そして上層部……大戦中に共に戦った者達皆が果豎を王宮から出しませんでしたから」

外に出たいと言っ度に、まだ世界が安定してないからと言いくるめ

王妃は王宮に居るものだと言った

建国から百年以上経っても、果豎が王宮の外に出たのは十回にも満たない

ただ自分達の為だけにあの子の自由を奪った

他の誰もいない

新しい者が果豎の目に触れるのが許し難かったのだ

「狂ってるな」

「それはアルファレン様達も同じでしょう？長きに渡ってただ一人を追い求めてきたのですから」

にこりと微笑まれば、アルファレンは何にも言えなかった。ただ、ばつが悪いように顔を背け、話題を変えるべく口を開く。

「で、何か飼ったのか？」

「いえ、飼おうとは思ったのですが……」

「何も飼わなかったんですか？」

雪那が興味深げに質問すると、明燐は疲れたよう頷いた。

それは建国してから五十年ほど経った頃のことだった。

「果豎、それでどれにするの？」

「うーんと、うーんと」

子犬に子猫、チンチラにウサギに小鳥にと可愛らしい動物の子供達に囲まれながら、果豎は悩んでいた。

「どの子も可愛くて選べない」

「気持ちばかりますわ」

「じゃあこの子なんてどう？」

そうして朱詩が持ってきたのは、子羊。

「将来はバリカンで羊毛取れるし経済的だよー！！」

その途端暴れる子羊。当然の反応だ。

というか、言語を理解している時点でかなりの知能レベルである。

「アタシはこれなんかいいけど」

そう言つと、茨戯がひっぱり出して来たのはアナコンダだった。

「まあ、素晴らしいですわ！ 鞆やベルトの原材料に最適ですわね」

その途端、アナコンダはもの凄い速さで部屋の隅に逃げた。

「私、蛇の皮むきって初めてですの。でも手早く行ってみせます事

よ」

「やめてマジで」

ガツと明燐を羽交い締めにする茨戯の頬に涙が光っていたのは、見間違いではないだろう。

「犬なんか良いのでは？」

「お兄様ってば、面白みがございませんわ」

「ペットに何を求めるんだ」

妹の言葉に宰相が苦笑すると、横にいた朱詩が子羊をおろした。

「そんなに悩むなら大根でも飼えばいいじゃん」

「は？」

「大根？」

茨戯と宰相があんぐりと口を開ける。

「果豎の一番好きなものじゃん。それにペットって飼い主の心を癒す力もあるんでしょう？ならばうちり」

「違うわ朱詩！！」

「は？」

それまで黙っていた果豎がクワツと目を見開く。

「大根はペットじゃない！！私の心の恋人よ！！」

恋人よ

恋人よ

恋人よ

エコーがかかる筈もない部屋構造なのに、何度も木霊するそれに果豎を除く全員が凍り付いた。

いや、実際には、エコーする中、一気に膨れあがり部屋を覆い尽くした冷氣と発生したブリザードに凍り付いたのだが。

誰一人として振り返れない部屋の入り口

そんな中、果豎だけが周囲の異変にキョロキョロと視線を動かし

「果豎」

「ひっ!!」

部屋の入り口に立つのは、麗しき美女　ではなく、果豎の夫

「やっぱり、ペットは居ない方がいいですね」

疑問系ではなく確定。

その後、果豎が寝室に連れて行かれたのは言うまでもない。

「と、いう事がありましたの」

誰もが思った。

果豎、一言多い

というか、間が悪い

だが、それ以上に大根が心の恋人って……

「めいりん、あのね、みてみて」

「はいはい、なんです……」

明燐は凍り付いた。

「果豎さん、それ……」

白い毛玉の子ウサギは、毛皮ではなく白い大根の着ぐるみを着ていた。

「かわいいの」

「いや、動きにくいから脱がせてあげた方がいいです」

しかし、果豎はこっちの方が可愛いと言って聞かない。

「ぼうかんたいさくもばつちり!!」

「ウサギは毛皮があるから大丈夫です」

「こっちのぼうがかわいいもんっ」

いや、寧ろ着ない方が可愛いです

と、言わずとも顔に出ていたらしい

果豎の瞳に涙がたまる。

「こっちの……ほうが……かわいいもん……ふえ、ふええんっ！」
「やばっ！泣き出しちゃった！」

どうやら精神面も退行しているらしい。
ふええんと泣きじゃくる果豎に雪那達が慌てる。

「泣かないで果豎さん！」

「ごめんね果豎さんっ！」

「大根の着ぐるみも凄く可愛いからっ」

恵美、雪那、理恵が宥めにかかり、チヒロがよしよしと果豎の小さな頭をなでる。

「果豎、ウサギはウサギのままが一番です」

「かじゅ、よけいなことしちゃの？」

余計に泣く果豎。

フォローではなくトドメをさす明燐は、何処までもドSだった。

「かじゅ、ウサギよりもワタシをカワイガッテ」

「いや！それ玉英さんが言っと妖しすぎる！！」

理恵の突っ込み通り、色気とフェロモンを振りまきながら呟く玉英は、同性ですら思わずむしゃぶりつきたくなるほどの妖艶さを放っている。

「うっん、どうしよう……あ」

どうしようかと困り果てていた蒼麗は、音もなく自分の横を通り

過ぎていく人物に目を丸くした。

「果豎」

「ふえ？」

「どうして泣いてるのですか？」

「ウサギしゃんかわいくちたの」

そうして萩波に自分が抱っこするウサギを見せる。

「かわいいよね？」

「うーん、かわいいですけど、このウサギはこのままで良いと思いますよ」

「かわいくない？」

「違いますよ。ただでさえコロコロとして可愛いのに、これ以上可愛くしたらヘンな人に攫われてしまうかもしれませんからね」

果豎のように

そう言うと、頬に口づける萩波。

アルファレンがロリコンと言う眼差しで見れば、萩波はにこやかに

『お前もな』

とアイコンタクトを送り、果豎を抱き上げる。

そうして、果豎が抱っこしていたウサギを明燐に手渡しそのまま立ち去っていった。

しばらく、その優雅な足取りと残された甘い雰囲気魅入られて

いた一同だが

「この流れで行くと、確実に手を出されるパターンだな」

「でも、今行くと不味いと思うわ」

「確実に半殺しですわね」

と言うことで

「『『『『『『蒼麗頑張れ』『』『』『』『』」

「私ですか?!」

大戦時代の仲間でさえ半殺しにする萩波が唯一逆らえない少女

永遠の別れとなる筈だった果豎を目覚めさせてくれた存在である
蒼麗にだけは、萩波は危害を加えない

それが、あの時萩波が蒼麗に誓った永久の誓い

「ゴーですわ!!」

「うわぁぁん!」

半泣きになりながらも追いかける蒼麗は、律儀だとアルファレンは思う。

と同時に、アルファレンは、萩波が永久の誓いを行ったと聞いた時の事を思い出す。

最初に聞いた時は何を馬鹿なと思った。

けれど、もし恵美と永遠に別れる事になった時

自分ではどうにも出来ない時

それを打ち砕き愛しい存在を自分の手に戻してくれる存在が居た
ならば

きっと自分も同じ事を行っだろう

『貴方に永久の忠誠を』

それは、孤高の美しき王が星姫に行った

主従の誓いである

『正しいバストアップ術は』・・・大雪様著

コテン　コテン

朝起きた時、理恵は奇異なものを発見した。

それは、昨日七宮家に、一緒にお泊まりした果豎の姿だった。

しかし……果豎は居間でコロコロとでんぐり返しをしている。

「果豎……何してるの？」

「でんぐり返し」

見れば分る。

途中上手く回れなくなると手をバタバタさせる姿が可愛い　な
んて思いつつ、理恵はふと感じた視線に顔を上げた。

ソファーに座る、修が居た。

「果豎ちゃん！！　凄いよ、最高だよ！！」

「こっしたら、胸大きくなるんだよね？」

「勿論だこはあっ！！」

理恵の右アッパーによって、修の体が天井へと叩付けられた。

経緯を聞かされたアルファレン達魔王軍と、凧国側メンバー、
そして榊、オウランは思った。

何この子、すんげえ可愛い　と

「あのね、少し胸大きくなったかな」

「計ってみます？」

蒼麗はとても現実的だった。

きちんとした数字が出ないと判断しない彼女は、将来的に数字を扱う仕事が適任だと思われる。

既にメジャーを手にし、果豎の胸囲を測っていく。

「え」と…… Aの70」

ガアアアンという効果音を、その場に居た全員が聞いた。

「変わってない……」

パタンとその場に倒れる果豎。
慌てたのが、凧国メンバーだ。

「果豎、しっかりして!!」

そう言うのは、身長／3サイズ（B／W／H）＝167／91（E）／58／92の明燐。

豊満ながらも華奢な肢体が男の情欲を激しくかき立てる。

「カジユ、むねきにしない」

そう言うのは、身長／3サイズ（B／W／H）＝158／88（D）／58／89の玉英。

豊満だが、繊細な肢体は聖女的美貌に娼婦の様な絶妙なアンバラ

ンスさに成り立っていた。

そんな二人に共通するのは、その胸の大きさ。
それも、思わず顔を埋めたくなる様な張りや瑞々しさ、そして柔らかさを持った色つや共にバッチリという、大きく豊満な胸の持ち主達。

慰めになるどころか、果豎のコンプレックスを大きくえぐった。

しかも、恵美やチヒロ、雪那、はたまたリアナージャも慰めてくれるが、寧ろリアナージャの爆乳はトドメをさしていると思えない。

ぶるんぶるんと揺れるその乳に、果豎はぺいっと頭を撫でようとする手を振り払う。

因みに、蒼花は最初から関わらない。

胸が大きい人は敵だ

なので、当然果豎が泣きつく先は

「蒼麗ちゃああんっ」

「泣かないで、果豎さん」

果豎が勝手に築く貧乳同盟の一員である蒼麗だった。

「理恵ちゃああんっ」

「なんかすんごく複雑なんだけど……」

果豎に抱きつかれるという事は、いわば貧乳と言われているようなもの。

しかし、そもそも果豎がショックを受ける原因となったのは、修兄ちゃんのせいだ。

そんな修兄ちゃんは今、片割れである魔王様にゲシゲシと踏まれていた。

「果豎ちゃん、胸の大きさをなんて微々たるものよ」

雪那が優しく言う。

「そうだよ！ 大きいと肩こるよ」

チヒロがお菓子で釣ろうとする。

「ってか、旦那様に大きくして貰えばいいと思うわ」

恵美の言葉だった。

が、言い切ったところで、愛する魔王にガシッと真顔で肩を掴まれる。

「恵美、やめなさい」

「にいさま？」

「確かにお前の言うとおりだろう。しかし、萩波と果豎は夫婦歴が長いにもかかわらず、胸の大きさが変わらないと聞く。つまりそれは、萩波が揉んでも無駄だったという事だ」

「にいさま」

ドスツと、アルファールの横の壁に突き刺さる水の刃。
果豎を慰めようとしてフラれた萩波によるものだ。

「ふっ、凶星か」

「黙りなさいこのロリコン」

「お前もだろう」

え？自分はロリコンだって認めちゃうんだ。

「ってか、果豎妃、どうして旦那とかまで拒むんだ？」

「そうじゃのう？ 宰相も茨戯も、朱詩まで拒まれたぞ」

アマレットイとリアナージャが二人して首を傾げる。
すると、蒼花が興味なさそうに呟いた。

「あの上層部の男ども、任務で女性化する事あるのよ」

「ほう？」

「で、その時の姿が、これまたとんでもない美女で、胸がでかいの」

美女のタイプはあれど、皆その体つきは男を誘う娼婦の如き艶め
かしく蠱惑的な曲線を描いているらしい。

「胸が大きい男も敵です」

果豎がぷいっと蒼麗の腕の中で顔を背ける。

ってか、それだと省略しすぎて変態にしかない

正確には、男性が女性化した際に胸が大きい男だろう

「揉んでも駄目なのでしょうか？」

「駄目じゃないよ、普通は大きくなるし」

榊の質問に答えたのは、朱詩だった。

「男娼やってた時も同僚の妓女達はみんな大きくなったもん」

朱詩が男娼をしていた事は、アルファレンや榊達も知っていた。この、自分達でさえ惑わせ狂わせる魔性の色香と、体液全てが媚薬という恐ろしい存在は、敵に回せばとんでもない厄介な存在だと認定されている。

最初に朱詩と知り合った時、手が伸びなかった者の方が少ない。それどころか、この状態でかなり色香を自制していると言われて嘘だと叫んだぐらいだ。

天性の、生まれながらの男を狂わせる存在

アルファレン達は何があっても朱詩だけは敵に回したくないと心に固く誓った。

でなければ、一生幸せな結婚を望めない体にされてしまうだろう。

だが、細胞レベルで、他人を淫らな気持ちにさせる朱詩の美貌は、汚れない清楚可憐な天使そのもので、その色香もまた、妖艶ながらも清楚な高貴さを含むという相反する二つのものを、絶妙なバランスで共存させている。

そしてそれこそが、朱詩の壮絶なまでの魅力になっていると言えるよう。

まあ、とにかくできる限り関わりたくない相手だった。

しかも、彼の後に入浴するなんてとんでもない。

体液の一種たる汗が混じり込み、強制欲情させられてしまう。

なので、朱詩は本国同様、七宮家でも別風呂に入らされていた。
しかも、商魂逞しい柵と手を組み、朱詩の入った後の風呂の水を
媚薬として売り出す始末。

そんな男でありながらあらゆる男を狂わせる朱詩は、ある意味胸
の大きさとか問題でないぐらい女の敵だろう。

しかし朱詩の凄いところは、そこで女性から嫌われない所である。
寧ろ大人気。

炎水界では、お嬢さんや恋人にしたい男のトップ10に入るとい
うから驚きだ。

だが、それも全ては、朱詩の色香と美貌によるものらしいが。

そんな朱詩の性技の知識と実技は凄まじく、だからこそ、その発
言も信頼出来るのだが……

「ならば、何故果豎の胸は大きくならないのじゃ？」

「そもそも、果豎の胸って揉めるだけの余裕ないし」

再び、果豎が頭を殴られた様なショックを受けて倒れた。

「むしろあれで揉めるなら、神だよ神」

神はお前達だ、とリアナージャは心の中でツツこむ。

「そ、それでもものう、何とかして胸を大きく出来る方法を授けてや
れんのかのう？ 不憫過ぎて見ておれん」

果豎に払われた手を見ると、なんだか心が悲しくなってくる。

「だから、揉めばいいんだよ。回数増やして、とにかく揉め、激し

く揉め」

揉める余裕がないのに揉めと言う朱詩に鬼畜要素を感じた一同だった。

「けど……胸で思い出すわね」

「何をだ？」

アルファレーンの質問に、茨戯がソツと涙をぬぐう。

「昔のこと。そう……風国が建国してから五年目の事よ」

その言葉に、玉英と果豎を除く風国メンバーがハツと顔を上げる。それは、今もあまり思い出したくない出来事だ。

「ある屋敷にね、果豎と萩波とアタシ、そしてアタシの部下と、朱詩で滞在していた事があるのよ」

一人報復に飛び出した朱詩を捕まえた後、本国に一時的に戻れなくなつて滞在していた屋敷だった。

「その時に……あいつは言つたわ」

『果豎の胸を激しく揉むことになりました』

『違います。朱詩に果豎の胸を大きく出来ないのはお前のせいだ、もっと激しく揉めと言われました』

『今までの揉み方では足りないようです。やはり、もっと回数を増やさないと駄目ですね』

『アホとは何ですか！ 夫婦の大切なコミュニケーションです！
今だって、浴室に飛び込み果豎を激しくめでたいのに我慢している

のですよ！！ 仕方ないですから、隠しカメラだけで我慢している
というのに』

凍り付いた場。

凄まじいブリザードが吹き荒れる中、茨戯はフツと疲れたように
微笑む。

「アタシ、その時確信したの。こいつはアホだ、この国王はアホだ
って」

「誰がアホですか」

お前だ

その場に居た全員の想いが一つになった瞬間だった。

「って、何僕のせいにしてるんだよ！！」

朱詩が怒るのも当然だった。

勝手に責任転換、しかも可愛い妹分へのセクハラ行為をする為の
免罪符にされるだなんて冗談ではない。

「しかもアンタはその後にも言ったわよね？」

『真っ平らだろうが、えぐれていようが、月並のクレーターだろう
が構いません。果豎が果豎であればそれで良いのです。寧ろ胸を大
きくするなどという、果豎の場合は半永久的に有り得ない、所詮は
無駄でしかない豊胸に対する挑戦などしなくてもいいです』

「貴様は鬼だ、悪魔だ、魔王だ！！」

「黙りなさい魔王！！ 私の何処が鬼ですか！！ しかも魔王は貴

方でしょうがっ」

「お前の方がよほど魔王らしいわっ!!」

「侮辱すると許しませんよ!!」

そうしてドンパチやり始める二人を無視し、他の面々は茨戯に質問していく。

「そういえば、定期報告でそれについて聞いたな……」

「明睡？」

朱詩が興味深げに聞けば、明睡は疲れたように笑った。

「茨戯からの報告内容が三つあったんだ。一大事と、そうでもないのと、まあまあまずいのと」

そして自分は一大事を最初を選択し

『果豎が胸を激しく揉まれたわ』

再び凍りついた場。

「ってか……それが一大事なのか」

「他に一大事はないのかのう」

「いいのか、凧国はそれで」

「優先順位のまず第一位が王妃様ですしね」

アマレッティ、リアナージャ、レミレア、榊がそれぞれの感想をもらす。

「あの時は、流石に俺もこの変態国王と罵ったな」

「いや、夫婦なんだから胸もんだっていいじゃん」

蒼花がツツこみを入れれば、凄まじい形相を浮かべる凧国メンバ
ーが居た。

「何を言うのです！！ 夫婦だとして許せる事と許せない事がありま
すっ」

「そうだよ！！ 果豎みたいに見える目も幼い子に胸揉み？！ それ
こそ犯罪だよっ」

「セクハラだ」

「オニイさまのロリこん」

そうして変態認定される凧国国王。

それを聞いた彼等は思った。

なんで、そんな相手に仕えているのだと

魔王軍はおろか、榊やオウラン達の世界でも、凧国の存在そのも
のが七不思議の一つとして認定されたのは、それからほどなくの事
だったとか……

終わり

『バレンタインデー戦線 女神の祝福は誰の手に?!』 (前書き)

大雪様からありがたくも、企画をいただきました。

『バレンタインデー戦線　女神の祝福は誰の手に?!』

『バレンタインデー戦線　女神の祝福は誰の手に?!』

バレンタインデーは女の子にとって意中の男性を射止めるイベントデー

しかし、既に意中の男性とラブラブな女の子にとっては、二人の仲を深める日

間違っても

「蒼麗！天界ではバレンタインデーは彼氏を毒殺する日なのか?!」

なんて言う日ではない筈だ。

蒼麗は自分に縋り付くアルファレンと、居間に広がる惨状を見た。

「はい、あゝん」

「ひいひいっ！　リア兄上助けてええええっ！」

「アマレッティ！　潔く逝くのじゃ！」

「榊、しっかりしてえええ！」

「レミレア、レミレアしっかり！」

「くくくくくく」

「オウランがおかしくなっちゃった！」

屍累々。

既に手遅れなのが、櫛に修にオウランと魔王軍の半分の方達。

現在災難に遭いかけているのが、アマレッティにレイ・テッド。

難を逃れているが、被災すること確実なのが、凧国の面々とリアナージャ。

パリポリと大根チョコレートを囓る果豎はほっておき、蒼麗は元凶を止めに向った。

「蒼花、いい加減にしなさい！」

アマレッティの口の中に異物を押し込む双子の妹の手が止った。

テーブルの上に載っているチョコレート。

しかし、それはもはやチョコレートと言っていいのか疑問である。

「これは何？」

「マグロの目玉をチョコでコーティングしたマグロチョコですわ！」

「丁寧に、ギョロリとした目玉が上に向くように並べられているそれは、周囲がチョコレートに包まれていた。」

「これは？」

「ただのチョコレートです」

嘘だ！目と鼻と口があるだろ！人面チョコか？！

『ギョギョギギギギギギョオオオオ！』

しかも鳴いている。

「煩いですわ」

その口に押し込められたのは、チョコフォンデュ用の樽。
それで止らなければ、棍棒で殴られる謎の物体 いや、もはや
生命体だ、それは。

「で、その紅いドロドロとした物体は？」

まるで火山のマグマを思わせる泡立つ液体。
チョコフォンデュ用の鍋に入っているが、まさか。

「チョコフォンデュ用のチョコレートですわ。隠し味としてハバネ
ロが投入されてます」

蒼麗は当たってしまった嫌な予感に両手で顔を覆った。

というか、ちょっと待って。

「どうして蒼花に料理をさせたんですか！」

あれだけ蒼花に料理をさせるなど厳しく御願いした筈だ。

蒼花の料理はある意味兵器だ。

それも、最終兵器である。

料理と兵器がイコールで結ばさる。

武器がなければ料理をすればいい。

「蒼花の手料理を食べてどれだけの神がICU送りになったと思ってるんですか！」

因みに、最初の犠牲者は父だった。

蒼麗の形相に恐れをなした最強の男達。
しかし彼等にも言い分はあった。

「いや、気づいたらもう料理をしてて」

「止めようとしたが、爆発が何度も起きてて近寄れず」

「恵美達に止めてもらおうと思ったが、なんて刺激的な料理なの！
！ と一緒に料理する始末で」

「とりあえず身の危険を感じて逃げた」

気持ちはよく分かった。

「蒼花もどうして料理しちゃったの！」

「したかったんだもん！」

単純明快な答えが返ってきた。

「天界では絶対料理出来ないし、しようとしたら煩い護衛達が止めにかかるし」

当たり前だ。天界が消滅する。

蒼花の料理は時に核融合すら引き起こす。

「だから、人間界なら良いかなって」

「御願いだからやめて、本気でやめて」

人間界が消し飛ぶ。

「蒼麗ちゃん！」

「雪那さん？」

「レミレア君が痙攣起こしました！」

……解毒剤力モン！！

蒼麗は慌てて解毒剤を取りに家に帰る羽目になった。

「で、どうしましょうか」

雪那の問いかけに、悩む美少女達とオマケ一人。

勿論、美少女達は恵美と理恵とチヒロで、オマケは果豎だった。

明日はバレンタインデー

改めてチヨコレートを用意しようとした途端、涙ながらに愛する人に止められた彼女達は来るべきイベントをどうしようかと悩んだ。

「今更チヨコレートは無理なものね」

蒼花によってチヨコレート恐怖症にされたアルファレン達は、今でも夢で魘されるという。

「じゃあ大根贈ろう！」

果豎の提案に、一同は思わず頷きかけたが、すぐに我に返る。

「それならお米がいいわ」

とは、雪那姫のお言葉。

「わたし、トマトがいいな」

チヒロ姫の提案。

「じゃあ卵！」

笑顔の恵美姫。

「……それ、おでんの材料じゃ……」

疲れ切った理恵が痛々しかった。

「あらら、悩んでるわね」

「……蒼花ちゃん（様）?!」「……」

声が聞こえたかと思えば、美少女の集いに舞い降りる絶世の美少女。

正に麗しき天女のように現れた蒼花は、にこやかに言った。

「いつもは甘いバレンタインデー。だけど、毎年甘いのも胸焼けするってものよ」

確かに

「恋は甘いだけじゃ駄目。時にはピリリとしたスパイスも必要であ

れば、ビターのように苦さも必要」

なるほど

「そう、恋はスリルとサスペンスとホラー！　って事で、今回はそれをテーマにするのよー！」

何か最後が余計だった気がする

ってか、もはや決定？

戸惑う雪那達を余所に、蒼花は勝手にバレンタインデーの催し物を決めた。

「で、これか？」

アルファレンは頭が痛かった。

というか、此処に集められた全ての者達が同じ心境だろう。

オウランと榊は呆れ、魔王軍は青ざめ、修すらも溜息をつく。

風国メンバーに至っては苦笑の一言。

「恋に障害はつきものよ！」

にこやかに言い放つ蒼花が計画した催し物。

それは

『開催！ 恋の障害物競走！ 愛する人の為に命を捨てましょう、寧ろ捨てる！ 勿論、ホラー要素もばっちりです』

という天幕が掲げられたそれに全てが集約されていた。

「まずは、この森からスタートでしょう」

「いやいや待て待て」

「私達に何をさせる気ですか！」

制止するアルファレン

問い詰める榊

見事な連携プレーだった

「簡単な事よ。愛する恋人への愛を競い合っの」

は？

「だから、何をさせるつもりなんだ」

「戦い」

蒼花は顔に似合わず闘争心が強かった。

「女は強くて頼もしい相手に恋するものよ」

蒼花の言葉に男達が力強く納得した。

「だから、その強さと頼もしさを判定するの」

最初は頼もしさ

「第一の試験内容は、くじ引きで決まった相手と共に最後までゴールしよう！」

「そのままだな」

「少しはひねりを聞かせた方がいいぞ」

「なんか言ったかこの小童」

オウランの胸ぐらを掴む蒼花。

見た目も実年齢も十二才だが、成長の遅い神である事から、実年齢は数百才。

ああ、だから態度もでかいのかとオウランは思った。

「それで、ゴールって、何処か走ったりするのか？」

「レミア、いい質問だね。但し、走るだけじゃないわよ。私達がこの日の為に用意した障害物ありまくりのエリア内を巡って、それぞれに設置されたスタンプを押してくるの」

「ああ、スタンプラリーみたいなものか」

「スタンプの場所は全部で七カ所ね。但し、それぞれにボスがいるから、簡単には取れないわよ」

「ふっ……この私に敵う者がいればの話だな」

「ボスの一人はお姉様だから」

空気が文字通り凍り付いた。

「き、き、ききききき貴様！ それは不公平だ！」

魔王が不公平を責める様に、何か違う気がする魔王軍の皆様

「でね」

「無視をするな！」

「そのスタンプリーを突破した人が、第二試験に進めるのよ。そう、第二試験は強さ。純粹に強さを競い合う武道会を設定してます！」

戦う相手は、スタンプリーを制覇した他の相手。

「ルールは簡単。相手を倒す事。但し、相手を殺したり、一生残る後遺症を残した場合は強制排除しますのでご注意ください」

「お前にしては優しい提案だな」

「私としては死のうが構わないんだけど、お姉様が言うんだもん」

その場に居た全員が納得した。

「で、戦ってどうするんだ」

「勿論勝ち残ってもらいます。勝者五人までに商品がありますから」

「商品だと？」

「聖女四人と大根王妃」

男達の目が鋭さを増した。

「因みに順位の上から自由に相手を選べるから。思い人と違った相手を選んでも良いし」

蒼花の言葉に男達が笑う。

違う相手を選ぶなど有り得ない。

たとえどれほどの美少女がそこに居ようとも、自分はただ一人を

「あ、これには他の魔族や神々、異世界やレイ・テッドさんの学校

の生徒など大勢の方々も強制参加させるから」

「『『『『鬼だろ!!』『』『』』」

余計な事してんじゃねえ!!と怒鳴れば、蒼花はフツと笑った。

「恋に障害はつきものよ。愛しい相手を奪われないようせいぜい頑張る事ね」

「公主……」

「ああ、最初の試験では恵美達も参加する事になってるから」
「わ、私達も良いんですか?！」

勝手に賞品にされて不安がっていた恵美達が目を輝かせる。

「ええ。但し、くじ引きだから、誰と組むか分からないけど。貴方達にあたる相手の分だけは、特別なクジにしてあるから」

頑張って引け

聖女の様な美貌が悪魔に見える

「萩波、お前からも何か言え」

「無理ですよ、アルファレン。蒼花様はあんなったらもう止りません」

「つてか、そんなに大量の参加者が居たら一日で終わらないんじゃない」

「だから一週間かけて行うつもりよ」

「はあ?!」

「スタンプリーの会場が馬鹿みたいに広いから、確実に二日はかかるでしょう? で、お姉様が休養日を中心にいろつて言うから一日いれて、その後に武道会を始めたらその位かかるわよ」

「宿泊場所はどうするんだ」

「人間界の神々に御願いして用意してもらったから大丈夫」

「……人間界で行うのか？」

「勿論よ。一番中立で良いでしょう？」

天界では魔族が、魔界では神々がその空気に拒まれ、本来の実力をふるえない。

しかし、人間界は成長途中だが、魔と神、邪と聖が共存しまじわる無限の可能性を持った世界である。どんな世界にも変貌出来る特性を持つ。

「って事だから、会場としては問題はない筈よ」

「しかし、人間達の目が」

突然魔族や神々や異世界の者達が大挙してやって来れば驚くだろう。

「そこは、人間界の霊能力一族とか力ある一族に協力してもらうから大丈夫。それに、そもそも会場自体が人里から遠く離れた場所だし」

そこにあつた町はもうない。

「まあ、実はそこが邪と聖のバランスが崩れた怪奇現象盛りだくさん、悪霊も魑魅魍魎も怨霊もたつぷりと出現する心霊場所だから、スタンプラリーのついでに除霊してもらおうなんて考えてないわよ」

いや、考えてるだろう

「因みに、審判役や、スタンプラリーの際の係は誰が行うんだ？」

「勿論、私達よ」

「私達？」

「私とお姉様、あとはお姉様のクラスの友達に、十二王家の子供達が数人」

それに加えて、お姉様の学校の教師陣。

「が、中心になってはいるけど、その他に公平を期して、今現在愛する恋人、妻、夫とラブラブで他の女性に一切目が向かない安全地帯の方達を魔界、異世界、人間界の力在る一族から抜粋して取り入れてるわ」

確かに、恵美達にいかかわしい思いを抱く相手ならば公平にはならないだろう。

その点で言えば、蒼花達も適正があると言える。

「あとは、どんな暴力にも屈指ない相手ね。こういう時って、根回しとか色々起こるからね」

「なるほど」

「ってかさ、蒼麗ちゃんがボスの一人ってひどすぎないか？」

修が不満げに言う。

これがどこぞの男であれば容赦なく攻撃出来るが、全世界の美女、美少女、美少女の味方である自分には到底出来ない。

「大丈夫ですよ、修さん。私美人じゃないんで攻撃できます」

蒼麗の言葉に、アルファールを始めたとした男達から蔑んだ眼差しで見下された。

「って違うだろ！」

「最低だわ修兄ちゃん」

「理恵酷い！」

理恵に泣きつく修だが、すぐに他の男達に引き離される。

「しかし修の言うことももっともだ。変えられないのか？」

「あら？ 恐怖の魔王様ともあるう方が、戦う前から怖じ気づくの？」

「貴様……」

「ああ、言っておくけど、お姉様は力無し。術の一切は使えない事を考慮する事。そしてここが一番重要」

蒼花を中心に、ブラックホールが出来た。

「お姉様にかすり傷一つでもつけようものなら、即失格だから」

もはや横暴以外の何ものでもない。

そうして、『天界の華』こと蒼花によって、大会は開催された。

続く

『ゲテモノ食い』・・・大雪様著（前書き）

大雪様プレゼンツ。

題名を見れば解る、あのネタです。

『ゲテモノ食い』・・・大雪様著

アルファールン達は思う。

どうして王妃と呼ばれる少女の口から蛙の足が出ているのか？

どうして王妃と呼ばれる少女の手に、串に刺さった丸焼きの蛙があるのか？

もしかもしやもしか

ぱくぱくぱく

本当にそんな食べる音が出るのか

なんて呆けていた彼らだが、ようやく我に返り叫んだ。

「果豎后っ！ それはなんだっ
蛙」

うん、わかってる

素速い回答ありがとう

でも、聞きたいのはそこじゃなくて

「なんで王妃であるそなたが蛙など食べてるっ」

そんなに風国の食生活は逼迫しているのか？！

もともと蛙を食べる文化ならまだしも、風国にはそんな文化があるなど聞いた事はない。

と、その時である。

ぴょんぴょんと果豎の目の前をバッタが飛び跳ねた 瞬間。

パシ、ムシャ、バキ、ペキ

口から、バッタの足が飛び出たのもつかの間。
あっという間に平らげた風国王妃。

「風国をナメないで下さい」

「いや、ちょ待て！ そこまで逼迫しているのか？！」

「風国は食虫文化があるのかよっ」

「及ばずながら妾達も食料援助するぞっ」

魔王三兄弟。

彼らは本気で風国の食糧事情を心配した。

が、果豎はふつと鼻で笑う。

「食料の方は大丈夫ですよ。以前より食糧自給率がアップしたんで」

果豎が風国に戻る前から、食料自給率の促進に力を注いできた風国は、今では以前の数百倍は改善されている。

「ならば、何故」

「小さい頃に食べた味って忘れられないんで」

その言葉に、アルファールンはハツとする。

天界十三世界では、暗黒大戦と呼ばれる大規模な戦争が起きていた時期がある。他の世界にまで影響を及ぼしたそれは、当然天界も焼き尽くし、食べるものも満足に手に入らなかったという。

食べられるものならば何でも食べた。

普通の食料などは全て貴族や豪商など力有るものに渡り、民達は草や土を煮込み、中には石を嚙って飢えをしのいだ者達もいた。

それからすれば、蛙などはご馳走だっただろう。

「すまない」

「いえ、いいんですよ」

決して忘れてはならない過去。

しかし何時までも引き摺りすぎていては前に進めない。

「果豎後も食事には苦勞したのじゃな」

リアナー ज्याの言葉に果豎は頷く。

「ええ。男性陣は貴族や豪商とかの愛妾として拉致監禁されていたせいで、衣食住に関しては困らなかつたらしいですけど、特に女性陣はみんな苦勞して」

愛妾ゆえの贅沢　だが、アルファールン達は、凧国上層部の男性陣にとってそれが不本意である事は容易に想像出来た。

自らの意思ならばまだしも、彼らは皆家族や住んでいた村や町を滅ぼされて強引に凌辱されたか、両親に売り飛ばされたか、自分の姉妹や大切なものの身代わりとして、身売りした者達が殆どだ。

大切な物を奪われ、自由を奪われ、その見返りとしての衣食住だが、奴隷同然の彼らにとってそれらが救いになる事はなかっただろう。

あれほど高潔な者達なのだから。

そうして、男達の劣情に晒され、凌辱の限りを尽くされる代わりに、貴族の姫君の様に贅沢な生活を強いられてきた男性陣とは裏腹に、貞操こそ守られたが、食べる物を手に入れる事すら困難な生活を強いられてきた女性陣。

どちらが幸せだったのか

それは本人達しか分からない。

アルファレン達に分かるのは、とりあえず果豎が蛙や虫を普通に食べられるようになったのが、その大戦での経験だという事だけ。

「あ 因みに、他の奴等もそうなのか？」

「はい」

涼雪も、葵花も、梅香もそうだ。

葵花と梅香は転生しているが、以前の記憶を取り戻すやいなや普通に食べている。

涼雪は言わずもがな。

明燐も笑顔で豪快に蛙を噛みちぎる。

「昔は本当に食べるのに苦労しましたからね。調味料も手に入らなくて。塩なんて、海水を蒸発させて手に入れるか、岩塩を探し出して手に入るしかなくて、でもそれもいつもじゃなかったし」

「そうか……」

「だから、調理法も自然と丸焼きかぶつ切りにして焼くっていう感じで　大抵のものは焼けば食べられますから」

蛙とか、蛇とか、虫とか、イモリとか

その時だった。

「そういえば　リアナー様も蛇」

キランと果豎の瞳が光った気がした。

「ち、違うぞっ！　妾は竜じゃっ！」

「蛇の進化形が竜ですよね？」

いや、それ何か違う。

たしかに蛟は竜の配下ではあるが　。

「この前、アナコンダ退治したんですよ」

アナコンダが風国のある村を襲ったそれ。

「涼雪が鉈片手に笑顔で突っ走って」

涼雪が？

あの春の女神のように穏やかな女性が？

明睡の無体に耐え抜き、元夫の横暴にも負けずに幸せを勝ち取った彼女が？

「で、仕留めたアナコンダは見事に皮をはがれて凧国経済に貢献し、お肉は私達のお腹に収まりました」

喰ったんかいっ！

「もっと出て来てくれないかな」アナコンダ

やめて、マジで

アナコンダの大量発生なんて恐すぎるから

そういえば、自分達ってこの後果豎達に食事のお呼ばれしてる気が

そしてその会場に向って歩いている最中だった気が

「あ、話している間に着きましたね」

そしてアルファレン達はその光景を見てしまった。

「すみません、この私、凧国をナメテました」

柵が出されたゲテモノ料理にギブアップする。

その隣では、「あゝん」と明燐が蓮璋の口元に蛇の丸焼きを運んでいる。

蓮璋は何の躊躇いもなく食べていた。

柵の中で、蓮璋に対する尊敬度が三割増しとなる。

自分は果たして出来るだろうか。

お嬢様が蛇を口元にもってきて、果たして。

「いや、好き嫌いは誰にでもあるから」

蓮璋の優しさに柵はそつと目元に溜まったものをぬぐった。

「涼雪ちゃん、材料持って来たよ」

「ありがとうございます果豎様。じゃあ、隣の机において下さい」

そう言うと、涼雪は蛇の皮をむきむき、その長い胴体をぶつ切りにしていく。

その雄々しさに、風国の男性陣が胸キュンしたのをアルファールン達はたしかに見た。

絶対にこの国を敵に回したくない

彼らは心の中で誓った。

「あら？ アルファールン様達、全然食べてないですね」

「魔界の食べ物は違うんじゃないかな？」

「たしかに、食べ慣れていないのは食べにくいですね」

涼雪は素直に頷いた。

「それに、蛇とか蛙とか苦手な人多いし」

「果豎様の言うとおりですね」

良かった

その認識はズレていないらしい

「じゃあ、もとの原型が分らないように揚げ物にしてあげるのはどうかな？」

梅香の言葉に、かたやホツとし、かたや反論があがる。

「梅香！ どうしてこいつらにそんなに優しくするのさあ！」

ぷんぷんと怒り梅香に抱きつくのは、魔性の色香を持つ天使

朱詩。

面白い事が大好きで、人をおちよくる事が趣味な厄介な男。
しかも、その存在全てが男を狂わせる生来の男狂いであり、魔性の色香と媚薬化した体液を持つというとんでもない能力を持つ。

その濃密な色香は、アルファレン達でも血迷うほどに凄まじい効果。
もし本気でこれれば、道を誤るかもしれない。

と、その視線がずっとアルファレン達に向けられる。
頬を膨らませ、拗ねたような顔をする朱詩。
性別を超越した美貌と色香に、凧国の男性陣も欲情をかき立てられる。

が、梅香は至極冷静だった。

「朱詩、離れて」

「嫌だね」

朱詩は絶対に離れない。

それどころか、梅香を抱きしめる腕に力を入れる。

「刃物持つてるんだから離れてってば！」

「そんな刃物ぐらいで僕を傷つけられるわけないだろ？ それよりアルファレン達になんでそんなに優しくするのさ」

「お客様をもてなして何が悪いの」

梅香が呆れたように言えば、朱詩のオーラが黒さを増す。

すいません、それ以上奴を刺激しないで下さい。

側で果豎を手伝っている理恵とチヒロが怯えてるんですけど。

恵美と雪那は微笑んでるけど。

「離れろおおお！」

「梅香の馬鹿！ 僕が君から離れた途端に他の男に襲われてもいいって言うの?!」

朱詩は男にもてる。

女にももてるが、それ以上に男にもてる。

人通りの多い場所で朱詩を一人にした途端にかっ攫われる。

人通りがなくても、攫われる。

たしかに朱詩の言うとおりだ　ここに攫う馬鹿はいないが。何せ、全員朱詩の本性を知っているから。

それこそ、骨まで利用されるに違いないだろう。

「別に遠くに行けって言ってないじゃないっ」

「言ってるも同然だよっ！」

喧嘩勃発。

しかし、朱詩の方は何処か楽しんでいる様子がある。

寧ろ、梅香の前世である小梅の時と全く変わらない光景に、厩国側は微笑み、それを知らない魔王側や榊達は心配そうに見つめる。

「いいのか？」

「からかってるだけですよ」

萩波が果豎にちよつかいをかけながら答える。

その隣では、涼雪が揚げ物にする為に蛇と蛙を細切りにしていた。

その豪快な料理に、オトメン達の胸がキュンとした。

何故だろう？

オトメン達の胸をキュンキュンさせていく度に、恋愛ゲームの好感度上昇の時のように音楽がどこからともなく聞こえてくるのは。

「凄いな」

「凄まじいな」

「流石じゃのう」

あの鬼畜どもが頬を桜色に染めて身悶えている。
彼らの中の女を確実に撃ち抜いている。

「理恵ちゃんは何の料理が好きなの？」

蛙？蛇？虫？サソリ？イグアナ？

笑顔で聞いてくる果堅に、理恵は涙目で激しく首を横に振った。

「すみません、ないです」

「普通のがいいです」

「普通って何？」

理恵は普通というものが一番難しいという事を失念していた。

「サソリの姿揚げも美味しいんだよ」

「へ、へえ」

「あとね、熊肉とか」

「理恵さんは熊のお肉が食べたいんですか？」

涼雪が食いついてきた。

「へ？ いや」

蛇に比べたらマシというくらいであって、好き好んで食べたいわけではない。

それなら、鹿やイノシシの方が。

「待ってて下さい！ 今狩ってきます！」

片手に鉈、片手に槍。

行く気だ。

この人 いや、この女神様マジで行く気だ。

「え、いや、ちょっと待っててばああ！」

理恵が止める間もなく、涼雪が走り出す。

「あ、私も」

梅香が同行を申し出ようとするが、朱詩が邪魔して動けない。

「朱詩の馬鹿！ 涼雪さん一人で行っちゃったじゃないっ」

「梅香はここに僕といの！」

この我が儘男が

「それに、明睡と一緒にいったんだから邪魔しちゃう駄目だよ、めっ」

ピンッと梅香の額にデコピンする朱詩がカラカラと笑う。

「熊鍋ってラーメン入れてもいいかな？」

「葵花、アンタ……少しラーメンから離れなさいよ」

太るわよ と茨戯が嗜めるが、葵花はさっさとラーメンの袋を開けていく。

「ちっ……転生前は主様主様って可愛かったのに」

「その私に手を出した鬼畜は誰ですか」

「うふふふ そゝんなに……犯りたい？」

ガシツと葵花の頭を掴んで持ち上げる薔薇の美女。

「凄いな……」

「凄いのう」

「普段は美女にしか見えないのに」

今は完全に男にしか見えない。

これが恋？

これが愛？

「大抵女性が迷惑をかけられるのですがね」

ハツと、明燐が鼻で笑う様に、アルファールン達はギクリとした自分達も 違うとは言えない。

その過ぎたる激情で愛しい相手愛する。

その恋情はもはや相手を燃やしつくしてもなお激しく燃えたぎる。

そして迷惑は大抵女性がひつかぶる。

「果豎が良い例ですわ」

「確かに……」

複数の『完末』 それも、風国の王と上層部の殆どを制御している『枷』である果豎は、たぶんアルファールン達を知る不幸者の最たるものに入る。

全てを狂わし、全てを破滅に追いやる『完末』

ただそこにいるだけであらゆる争いを生み出す彼ら

しかし、そんな彼らは妄執的な愛を捧げられ、好かれる事はあるとしても、決して嫌われる事はない

たとえ『完末』が世界を滅ぼそうとも、普通の者達にとってはそれさえも甘美なる蜜にしかない

殺されても良いから仕えたい、手に入れたい

だが、『枷』は違う

普通の者達にとって、『完末』に溺愛される『枷』は憎悪と殺意の対象

伝説がある

『枷』と『完末』の伝説

この世には、数多の種族が存在する

しかし、それらは全て三つのタイプに分かれるのだ

一つは『枷』

一つは『完末』

一つはそれ以外の者達

『枷』は『完末』の為に存在し

『完末』は『枷』無くしては自由を得られない

そしてそれ以外の者達は『完末』に妄執的な愛を乞い、『枷』に憎悪と殺意を抱く

『枷』

それは『化け物』、『完末（かんみ／かみ）』と呼ばれる完全無欠の存在を制御する存在。『調律師』とも呼ばれる。

『完末』

それは完全無欠な存在で全ての者達の羨望の的であり、全てを惑わせる存在。

「まあ 恵美さんや理恵さん、チヒロさん、そして雪那さんも、『枷』だとは思いますが」

アルファールン達が押し黙った。

「『枷』は『完末』を唯一制御出来る存在。けれどそれゆえに、『枷』は普通の者達からすれば殺したいほど憎い存在となる。世界の全てを敵に回すと言っても過言ではない」

「……………」

「嫌でしたら、『枷』として発現しない事」

でないと

「不幸になるでしょうね」

『完末』という化け物達に愛されたがゆえに、幾つもの苦難に巻き込まれた風国王妃。

彼女の不幸の大半は『枷』だったがゆえの悲劇。

「けど 果豎後は発現した」

アルファールの言葉に、明燐は笑う。

「ええ、そうですわ だって、それが『枷』なんですからね」

見捨てられない

何とかしたい

最初の調律師は言ったという

『どうして、彼らは幸せになっではいけないの？』

あらゆるものを手にしながら、そのせいで不幸になった『完末』達

彼らに変化を与え、滅びを受け入れさせ

同時に、未来を選ぶ権利を手に入れさせた

アルファアーレン達が『完末』という言葉初めて聞いたのは、何気ない会話での出来事だった。

蒼花が恵美と理恵に対して告げたのだ。

あんた達も『枷』ね

そしてアルファアーレン達は『完末』

分らない単語

思わせぶりな口調

でも、あの天界の華はそれ以上告げることはなかった。

それから数日後、アルファアーレン達に『枷』と『完末』について説明したのは、スルーシこと修だった。

「『完末』 ああ、知ってる」

「修兄？」

「『完末』と『枷』の事だろう？」

修がお茶を飲みながらつけた。

「お前も知ってるよな？」

「いや、知らないな」

「へ？ そうなのか？」

片割れたる美貌の青年に聞けば、首を横に振る。
ならばと彼の兄弟に聞いても首を傾げていた。

「そうか……知らないのか」

「何なんだ？ その『完末』って」

「だから名前のとおり、完全無欠な存在で全ての者達の羨望の的、
全てを惑わせる存在の事だよ」

「惑わせる？ ですか？」

「ああ。そもそもこの世には、数多の種族があるが、それらは全て
『完末』、『枷』、それ以外に分けられる」

修がお茶菓子に手を伸ばす。

「それ以外にはないんですか？」

雪那の質問に修が頷いた。

「ああ。で、それぞれの割合だが、『完遂』はこの世に存在する数
多の世界 全世界の全人口をあわせた数の0・01%にも満たな
いとされている。『枷』はそれよりも更に少ない」

「つまり、それ以外の者達が殆どをしめるという事ですか」

榊の言葉に修が頷く。

足を組み直し、天井をしばらく見つめた後、ゆっくりと目の前に
座る雪那へと視線を戻した。

「ああ。で、さっきの『完末』に戻るけど、『完末』は全ての面で
この世に過ぎたるほどの能力を有してる いわば何でも出来るオ
ールマイティの究極版だな。容姿は絶世レベル、その他あらゆる才
能が飛び抜け、最高のレベルに達している」

「アルファアーレン兄様のような方でしょうか？」

恵美が首を傾げる。

「だな。容姿が優れているのも、才能が飛び抜けているのもこの世界にはごまんといるが、『完末』の能力に比べれば、それらは全て敵にもなりやしないレベルだ。更に、『完末』と呼ばれる者達がそれらと決定的に違うものの一つとして、周囲から異常なまでに熱望、熱愛、崇拜、心酔、執着されている事だと言われている」

ふと、アルファアーレンは萩波達を思い出す。

「で、恐ろしいのは、何もせずただそこに居るだけで、それ以外の者達の間で『完末』を巡る『完末争奪』戦を引き起こさせ、安定を崩して破壊を起こす。そうして相手を、国を、世界を狂わして破滅へと追いやり、関わる全ての者達を不幸のどん底に叩き落とした挙げ句に大量に死なせてしまう。傾国の美姫とかいるだろ？ あれも『完末』の一種だと言われてる。本人無意識で起きてるんだと」

為政者を狂わせ、国を傾け統べてを滅ぼす 傾国の美姫

それもまた同じだと修は言う。

「かと言って、何かしても結局はその過ぎたる美貌と能力が仇となり、やっぱり相手を、国を、世界すら狂わして破滅へと追い込む」
「とんでもない存在だな」

アルファアーレンが呟けば、修が哀しげに笑った。

「ああ、しかも『完末』にも能力差があつてな。傾国の美姫とかは、

「お前が王を狂わしたんだろっ！」って討たれる場合が多いだろうけど、力の強い『完末』だと、相手に全く不満が産まれないんだ。寧ろ「お前の為に死ねて本望」って叫ぶぐらい、絶対に悪感情を抱かない」

「恐ろしいのう……狂っておるな、それは」

「そう　狂ってるさ。しかもそれすら気づかないんだ。けど、『完末』と呼ばれる側からすればたまったもんじゃない。勝手に自分の事で争われて、しかも好きな相手や大切な相手まで自分のせいで滅ぼされていくんだ。だから、奴等は完璧ゆえの不幸な存在と言われている」

修が何処か不憫そうに眉をひそめる。

「勿論、『完末』と呼ばれる奴等もその運命をどうにかしようとしたが、どれだけ努力しようとかをしようともならない。ああ、何でも創世の二神ですらその運命に抗えなかったそうだ」

創世の二神

それは、最初の全てを造った存在である。

彼らは世界であり、命であり、そしてこの世に存在する全てである。

その存在でさえ、どうにもならなかったのか。

「ただ、『枷』だけが『完末』を制御出来たという」

「『枷』？」

「ああ。『完末』の過ぎたる力を制御し、調律する。完全なものを不完全にする事で。それゆえに、この世界には『滅び』が生まれたとも言われている。そんな『枷』達は『調律師』と呼ばれているそうだ」

修が疲れたように言う。

「果豎ちゃんが『枷』だつて言つてました」

「らしいな。蒼麗ちゃんもそうだ」

「そうなんですか？」

「『完末』は大抵『枷』の周囲にいるとされているからな」

「ならば、果豎の『完末』はあの王達か？」

「そう聞ける」

リアナー ज्याの言葉に修が頷く。

「屈国の上層部と王は全員『完末』で、『枷』である果豎と契約しているらしい」

「契約？」

「そう。簡単に言えば、自分の『枷』になつてもらう。いわば専属つていう奴か？」

「『枷』が居ない者達もいるのかえ？」

「ああ、いる。けど、『枷』がないと、さっき言つたとおり『完末』は全てを滅ぼす。だから、『完末』は自分を制御してくれる『枷』を必死になつて捜す。逆に言えば、捜せなければ狂つて死ぬだけだ」

恵美達の顔から血の気が引く。

「ただ居るだけで全てを滅ぼすんだ。正気でいられるわけがないだろ？」

「……………」

「まあ、そんなわけで『完末』にとって『枷』は大事な存在なんだよ」

「ふん」

「大事に大事にし、溺愛し寵愛する。『完末』は絶対に自分の『枷』を傷つけない。でも、だからこそ……」

「修兄？」

「……だからこそ、『完末』に心酔し手に入れたいと願うそれ以外の者達からすれば、憎悪と殺意を向ける相手として認識されてしまふんだろうな……」

『枷』を溺愛する『完末』

それゆえに、『枷』はそれ以外の者達によって、あらゆる苦難に追い込まれる

そして 運が悪ければ殺されてしまうのだ

そうして歴代の『枷』達の多くが殺されていった

「で、『完末』に愛されすぎた『枷』は精神に異常をきたす前に大根に逃げるのか」

「何を言うのです！ 大根は現実逃避の道具ではありません！ 世界のアイドルなんですっ」

果豎の叫びにアルファレンは考える。

その世界のアイドルをぶつ切りにして串に刺し、更に蛙も一緒に串刺しにして焼く王妃。

たぶん色々と間違っているだろうが、もう何処とは言えなかった。

「大根、大根、愛しいマイハ〜トっ」

くると大根を抱えて回り出す果豎。

そういえば、ストレスが溜まった時はいつもより多く回っていると聞く。

うん、三十回はまわったな

「確かに、あの王の妻をやっていたればストレスも溜まるでしょう」

しかもあの野獣。

こんな幼児体型の王妃に発情し、絶対に無理なのに毎日毎日強引に関係を結んでいるらしい。

王妃からすればたまったものではないし、何よりも連日のそれで高熱を出すことも多いという。

過労です

話を聞いた時、当たり前だと思った。

というか、あの男の性欲を一人の女が受け止める事が無理だろう。

こなした数はいまや五桁に突入し、相手は老若男女問わず。

どんな変態プレイでも可能とし、今では薬も効かない体だという。その手のプロですら最後には奴隷にすると叫び、女郎や男娼はもう客を取らないと言い、身分や財力あるものはその全てをなげうってでも一夜の逢瀬を望む。

今までに抱き潰す、抱き殺してきた数も知らない鬼畜男

と、それだけ聞けば素晴らしい絶倫だが、実際の奴は好きな相手以外には全く反応しない男でもあった。

なので、任務で渋々の時は、強引に暗示をかけるという。

なのに 相手が果豎となると、もう誰も奴を止められない。

果豎が怯えて泣こうが問題ナッシング。

そんな奴は、果豎が男性に変化させられた時も止まらなかったという。

いつもと違う性別も一興 と、泣き叫ぶ果豎を強引に寝室に連れ込み、次の日果豎は酷い下腹部痛と高熱を出して倒れた。

鬼だ

悪魔だ

大魔王だ

いや、そんな言葉ではもう言い尽くせない。

奴は

ああ！この思いを表わす言葉があるのならば魔王の位を譲ってでもいい と、アルファレンは思い、榊は自分の影の総帥の地位を譲り渡しても良いとした。

しかし、今までにもあらゆる名称がついてきた奴

それを表せる言葉はもう

そんな時だ

「陛下は変態ですから」

明燐の言葉に、アルファールと神は全力で納得したのは。

奴は変態だ

そう、ドスケベなんてレベルじゃない。

ロリコンの変態。

「後宮開いた方が良くはないか？」

「そうですね　ですが、果豎さんにしか反応しなければ意味はないかと」

本来であれば数百人で順番に受け止める、または同時に受け止めるべきそれも、他の女性の時には全く現れないとすれば、後宮の意味などない。

しかしこのままでは確実に果豎は壊れる。

だが、あの男が果たして後宮を開く事を認めるかどうか

別の女を側に寄せるかどうか

いや、それ以前に果豎以外にあの男の心を鷲づかみ出来るものが

その時、ドオオオンと凄まじい音が響き渡る。

「な、なんだっ?!」

と、何かが空から降ってきた。
ドサリと目の前に落ちたそれ。

麗

「葵花ちゃん、鍋の用意」

何事もなかったように言い切る果豎に、それでいいのかと突っ込むアルファレン達。

一方、屈国側は慣れているのか何の突っ込みも出ない。

「いいのかこれで」

と、その時である。

ガサガサと茂みから飛び出してきたそれにアルファレン達は度肝を抜かれた。

それは

明睡をお姫様抱っこした涼雪

「大変です! 明睡様が足をくじかれて」

逆だろ!!

どう見ても明睡は姫で涼雪は勇者

「覇は魔王か？」

そしてここまで明睡を抱えて走ってきたのか涼雪さん？！

「凄い……」

「なんて素敵なのかしら」

「どうしましょう！ この胸の高鳴り」

「明睡様が羨ましいっ」

理恵、恵美、雪那、チヒロの四人の言葉に、彼女達の伴侶の美顔に青筋が浮かぶ。

いや、待て待て

相手は女

か弱い？女

そう 女

その時、アルファレンの中で何かが閃いた。

「涼雪！」

「はい？」

「お前のその雄々しさで萩波を誘惑しろっ！」

あいつの心を撃ち抜いてやれ

それは名案になる筈だった。

が

「ふざけんなっ！」

面白くないのが1名　明睡である。

自分の妻をあいつのものにする？

明睡の中で何かが爆発した。

「いや、別に梅香や葵花、他の女性陣でもいいが」

ガツと、リアナージャとアマレッティが魔王の口を塞いだ時には遅かった。

魔王軍& amp;影の総帥& amp;異世界の王VS風国上層部
(男性陣)

その中央で、食事の用意をする女性陣は溜息をつく。

「どうして、静かにしてられないのかしら」

「いくらお腹が減ったからと言っても、戦わなくてもいいのに」

葵花と梅香が溜息をつけば、雪那がふわりと美しい笑みを見せる。

「みんな仲好しさんですから」

「そうですね、にいさまとみなさんは仲好しですし」

恵美もうんうんと頷く。

その女神の様な美貌に優しい笑みを浮かべて。

「オウラン落ち着いてよ」

「チヒロ、無理よ」

泣きそうになるチヒロの肩に手を置き、理恵は力なく首を横に振った。

奴は止まらない。

今もニコニコと笑いながら風国上層部の一人と打ち合っている。

「果堅、どうしますの?」

明燐が首を傾げた。

「どうするって……」

「止めますか?」

それまで我関せず状態で準備を手伝っていた蛍花が聞く。
因みに彼女の夫も魔王軍の一人と戦っている。

「りゃんすー、どうする?」

果堅にひつつきながら、玉瑛が涼雪を見る。

「熊鍋は醤油味の方が美味しいんですよ」

違うし……

涼雪は全く聞いていなかった。
発端は己の夫だと言うのに。

「明睡様も醤油味が好きで」

明燐は嘘だと悟った。

味噌味の方が好きな兄が、あえて愛する妻に好みを合わせたのだ。
そんな涙ぐましい努力に、明燐は心の中でガッツポーズする。

頑張れお兄さま

負けるなお兄さま

心が通じ合ってもオトメンのまま変わらない兄だが、きっといつか遅しくなれるっ！

「あと30分ほどで出来上がりますけど」

「戦いは30分じゃ終わらないわね」

理恵は、魔の力と神の力がぶつかりあい爆発を起こす様にそう呟く。

たぶん、片方が倒れるまで絶対に止めない。

しかも実力が拮抗している分、時間はかなりかかる。

「強制的に止めましょう」

明燐がにっこりと笑った瞬間、理恵は嫌な予感がした。

その後、30分きっかりに鞭の乱舞が男性陣を襲ったという

終わり

ゲテモノ食い・愛と正義のヒーローバージョン・・・さくら書く(前書き)

大雪様の活動報告を読んで、さくら、間違った方向に燃え上がりました。

ゲテモノ食い：愛と正義のひーろーバージョン・・・さくら書く

わくわくした顔でチヒロと雪那が扉を凝視していた。

ここは、愛と正義のひーろー本部。・・・学校の理事長室だ。（提供したのか、閣下・・・）

青銀の魔王閣下は、恵美の新しい一面を見ることが出来てご満悦のようだ。・・・顔面一ミリたりと動いていないが、楽しそうだし、嬉しそうなのは間違いない。

仕事そっちのけで（・・・）じつくりと恵美特性のネルドリップコーヒーを堪能している。（ブレンダー入り）

天は高く澄んでいて、風はあおく煌いている。

時折、耳に届くは天使の声（恵美おんりー）、鼻腔を揺らすは薰り高いコーヒーの香り。

カップから顔を上げれば、やわらかく微笑む最愛の女性。

しあわせだ
天国。（閣下の生きる場所って魔界だったんじゃ・・・げふげふ）

至福の意味を正しく噛み締めながら、コーヒーを楽しむ魔王だった。

睫揺らせば、恵美がすかさずお代わりを入れてくれる。コーヒーのお供は、甘さ控えめの木苺のパイだった。

「ねーねーまだかなー、新しい先生・・・」

チヒロが、ばっプルを横目で観察しつつ、隣の雪那に声をかけた。手持ち無沙汰だ。

今日は果堅が新しい先生を連れてやってくると言っていたから、彼女たちはこうして待っているのだが・・・。目のやり場に困る。

始終チヒロと雪那そっちのけで、魔王閣下は恵美しか見てない。

「あ、理恵ちゃんの声！・・・と、果堅ちゃんの声だよー」

その恵美が顔を上げた。双子の姉の声は、離れていても耳に届くらしい。

そのぱつと輝いた笑顔を見て、青銀の魔王の眉が一ミリ動いた。
・・・少し妬いているらしい。

いつもなら、恵美をひざ上抱っこして、至福のコーヒータイム。

その後は可愛い恵美のしどけない姿を堪能し、心行くまで喘がせる筈だったが、恵美のたつての願いならば、聞かねばならぬ。・・・理事長室などいつでも解放してやるとも！（ただし恵美限定でな）

でも、こうして生き生きとした笑顔を見せてくれるのならば、この時間すら愛しいと、そう思うのだ。

「・・・恵美」

「はい。にいさま？」

「行っておいで、皆が待っている」

「はい！」

幸せにすると誓った。

お前が、こうして笑っていてくれるなら、多少のオアズケくらい、

乗り越える。

「遠いところ、ご足労いただき、ありがとうございます。さあ、どうぞ」

先導する理恵の後に女性が続く。一見、儂げな、たおやかな風情の女性だった。

「紹介するね、涼雪って言うの」
にこにこする果堅が、その女性を前に押し出した。

「恥ずかしそうに女性が笑う。」

「はじめまして、みなさま、涼雪です。今日は、講義などというには、おこがましい特技ですが、皆様に教授できれば幸いだと思つてまいりました」

微笑は柔らかく、そこにいるだけで、場を和らげることの出来る雰囲気を持った女性だった。

和む。

なんて素晴らしい癒し系！

「・・・そこからは私が、一通り説明しますわ、ひーろーの皆様」
「め、めめ明燐！」

果堅が焦って立ち上がった。

どうやら、明燐に黙って王宮を抜けてきたらしい。

「・・・あ、あの、ね、これはね」

慌てて、明燐に言い訳している姿は可憐。いじらしいその姿に、誰もがノックダウンするだろう。

ふ、と明燐が笑った。

女王様の微笑に、果堅が固まった。側にいたチヒロも恵美も理恵も同じだ。

・・・どこ吹く風なのは雪那だけだった。

「解ってますわ。果堅・・・。涼雪が心配だったのでしょうか？私も、そうですわ（これ以上いらんオトメン増やされちゃ困りますから！ お兄様のためにも！）」

・・・果堅いるところにこの人あり。

果堅妃の懐刀の呼び声高い明燐が、怪しく微笑み、胸を張り、・・・となりで玉英が縄を握りしめた（あ）

「うわあああん！」

「・・・シンパイシタ、かジュ・・・」

メヲハナシタライナインダモノ。

・・・ついでに果堅は逃げそくなって、玉英にぐるぐるにされていた。いつのまに・・・。

ぎゅつと縄を引っ張って、片足を果堅の背中に乗つけた玉英の姿は、それはまさしく、獲ったどー！のポーズ！

しかも、ぐいぐい引き寄せた果堅を、当たり前のように玉英は抱きしめ、撫でくりまわし始めた。

なでなで、もみもみ、さわさわわ。

「あ、やん。きゃあ、あふ」

・・・絶世の美女なのにー・・・。

・・・美の女神が恥じらい目を伏せる程の美貌の少女なのにー・・・。

・・・しかも、その気がなくても勝手に戦利品にしては争う男のせいで傾国の美女と名高いのにー・・・。

眼中に入るのは、果堅だけってあんた・・・。

「きゃ、あんっ！」

美の女神に言い寄られる、果堅は、見るからに平平凡凡だった。

見ているこつちがうらやましい限りだ。でも。美の女神をここまで惹きつける何かが果堅にはあるんだ。

・・・そう。理知的な勿忘草の瞳の美しさとか、魂の気高さとか、踏まれても立ち上がる不屈の精神力とか、究極の癒し系マスコミ的愛らしさ、対ロリコンの最終兵器的何かが（萩波限定）！

・・・しかし、つるんぺたんな胸をこれでもかと揉みしだかれている果堅にとって、そんな危険物は自分の中から消し去りたいだろう。

「玉、英。も、あ、だめえ・・・」

しかも玉英、すげえテクニシャンらしいよ！

あの果堅が、喘いでいる事実を目にしたら、萩波はきっと悔しがるだろう。

しかし果堅も、悔しかった。

なぜって？ 自分のまな板を見下ろして、何度思っただろう・・・！

「・・・男だったら、男だったら良かったのにいいい！」

そしたら、心置きなく、この目の前で揺れる美乳を揉みしだくの
にいいい！

ぽよんぽよんとたわわに実った美味しそうな果実。先端のピンク
も甘そうな、ふにゅつと揉みやすそうな・・・いいえ！！！！

「・・・う、うらやましくなんか・・・うらやましくなんかあつ
！」

「なんて不毛な・・・」

理恵は果堅のためにそつと涙をこぼした。
貧乳の苦しみを知らずものは、貧乳を持つものにしか解らない。

「ふええええん、あたしが、あたしが男に生まれなかったばっか
りにいつ！玉英が変態になっちゃったよおおお！」

。 イヤ、男に生まれてたらあの独占欲の塊が黙ってないだろ・・・

「ウフ。ウフふ。イケナイヒト・・・ニゲる、ユルサナイ」

「に、逃げるなんて滅相もない！ に、にーげーてーなーいー！」
プルプルプルと、果堅が首を振る。

そんな果堅に、怪しい微笑をみせて、玉英さんは言いきった！

「アサモヒるモ、ヨルモ、トイレモ、おフロモ、モチロン、ニイ
サマトのエッチノトキモ、フタリハハナレチャイケナイノ」

「プライベートは！？」

「ナイ」（きつぱり）

「んのおおおおおおつつ」

果堅の切ない悲鳴が、理事長室に響き渡った。

・・・ねえ、誰か、止めてやろうよ・・・。

「・・・で、その後は、実地もかねて実践し、午後はその獲物を囲んで、親睦会といたしましょう」

えぐえぐ泣いている果堅を尻目に、涼雪は美少女ヒーローに説明をしていた。

（無視ですか！）（玉英サマとの触れあいは、何よりも優先させております！それがたとえ、王との一夜であっても！）（それって、玉英サマが邪魔してるって言うんじゃない・・・）（姉妹愛ですわ！）

「ええ、と、質問・・・。その、退治するとき使用する獲物は？」

チヒロがおずおずと手を上げた。

その質問に涼雪は、我が意を得たりと微笑み、言いきった！

「素手です！」

・・・しばらくお待ちください・・・。

「す・・・」「」「」「素手ええつつ！？」」「」「」

素っ頓狂な声が響いた。

「そうです！ 凧国後宮に勤める女官たちは皆、素手で熊を倒せ

ます！（どどーん！）」

美少女ヒーローたちの間を、何か熱い熱風が通り過ぎて行った・・。

チヒロと恵美と雪那の涼雪を見つめる目線に「尊敬」の二文字が加わった瞬間だった。

「「す・・・すてき・・・おねえさま・・・」「」」

口々に涼雪を絶賛する少女たち。心なしか、頬が高潮し、まるで事後のような色っぱさをかもし出していた。

「・・・恵美。わたしだって、素手で熊くらい仕留められるぞ」

「にいさまもすごい！」

涼雪と張ってどうするんですか、閣下・・・。

そん で。

風光明媚な山間に、爆音が鳴り響いた。南無南無。

「・・・うりゃあああああつっ！」

向かってきた熊を、涼雪はその細い腰からは考えられないくらいの踏ん張りを見せ、見事投げ飛ばした。

すかさず、明燐が仰向けに転がった麗の腹部に、こぶしを叩き込む。

さらに、ゆらりと立ち上がった涼雪が・・・。

「・・・どっせええええいっつ！」

麗の首を脇で抱え、脳天から地面にたたき付けた。

「ナイスフォローでしたわ、明燐さま！」

「涼雪の技は、いつみても素晴らしいわね！」

良い笑顔で両手を打ち付けあい、お互いの健闘を讃えつつ、笑いあう美女たちが、額に浮かんだ汗をぬぐった。

「熊の肝はお薬として取っておきましょうね」

「熊の手のひら食べるの、久しぶりですわねー」

・・・実に良いシーンだ。

実に良いシーンなんだけど、現実から目を逸らしたくなるのは何故だろう・・・？ と、アルファレンは思った。

あのふたりを敵に回すことだけはすまいと、こっそり胸に誓った閣下だった。

「ふうちゃん！」

チヒロが風の精霊にお願いして獲物を追い込んでいく。

草原のあちこちで、野太い声が木霊する。

「風の障壁！」

恵美が黄金の魔方陣を構築し、展開する。風がみるみる壁を築きあげ、袋小路を作ってしまった。

・・・その袋小路の真ん中で、理恵が金縛りにあっていた。

「む、むむ、無理、です・・・」

でかいガマと巨大な蛇と理恵で出来上がった、三竦みの図。

理恵は迫り来る恐怖と戦いながら、やっとやっと、それだけを呟いた。

ガマが理恵を見上げる。

蛇が鎌首を持ち上げた。

「無理です！これを素手で捕まえるなんて！絶対、無理！」

・・・仕舞いに泣きが入った模様だ。

「あらあら」

雪那がさくさくと三竦みの中に入っていった。

赤い縄で輪を作り、かるーく振り回して・・・あら、不思議。

きゅつと締められた大ガマ蛙と、とぐろを巻いて応戦している蛇を捕まえた。

シャーつと開かれた蛇の顎をぎゅつと握って、につこり。

「もう、大丈夫ですよ？」

・・・助太刀は、可憐なお嬢様。

しかもなんか手馴れている、この事実。

「サスガ、ししょー」

玉英さんが、果堅を抱いたまま呟いた。

「獲物は現地調達。これは当たり前ですわ。働かざるもの食うべからず！労働の対価として美味しい食卓があるのですから！」

「そ・・・そうですね！後は獲物を如何に美味しく料理するかにかかってますよね！」

「そのとおりです！」

エー、本部ー、本部ー、涼雪さんと、雪那嬢が意気投合した様子！。ふたりして頬を染め上げながら、なにやら話し込んでおりますが・・・止めなくて良いのかーおおゆきさん本部長ー！！！！

「雪那さん、畏なんかいかがです？」

「罨！ 得意です。裏山で鹿を取ったことがあります！ 後、裏の川でなまずにどじょうに・・・」

「まああ、すごい！」

うなぎもどじょうも、美味しいのよねー。ああ、なつかしい・・・。

捕りに行きましょうか？

大なまずが、かかった日は手放しで喜びました！

白身のお魚なんで、から揚げがこれまた美味しくて・・・！

本部ー！ 少女ふたりが川に罨がついで向かったぞー！

「・・・ウシガエルって、おいしいんだね・・・」

あれだけ怖がって泣いた相手が、綺麗に裁かれて串刺し。複雑だ。

「でも、これ、おいしいねー」

恵美がにこにこ笑ってかぶりついている。

もつしゃもつしゃ食べながら、瞳は次の串焼きを選んでいる。程よく焼きあがった串を、アルファレンが恵美に差し出した。

「あ、にいさま、ありがとうー！」

きらつきらした笑顔を向けられ、孤高の魔王閣下は淡く微笑んだ。水かきが口の端から出てようと構わないのは、萩波の果堅に対する行動とおんなじだ。

「恵美、ついてる」

アルファレンは恵美の頬に唇を落とした。

「・・・蛙食べててもひるまないのか、さすが、魔王様・・・！」
理恵はしみじみと呟いた。

「熊なべが出来たわよー！」

涼雪の声が空に響く。

ふと空を見上げるアルファレンにつられて、みんなが空を見上げた。

「・・・来た、か」

果堅あるところに、この神人あり。

萩波の訪れを、狭い胸の片隅で、もしかして喜んでいるのか、わたしは？

アルファレンは口の端で、笑った。

「・・・萩波。土産はなんだ」

女神たちが身体を張って収穫した珍味ばかりだ。

相応のものをよこさん限りは、宴に混ぜんぞ。（偉そうだな、閣

下・・・）

傲岸不遜にふんぞり返ってアルファレンが、にやりと笑う。

ふふん、と笑って萩波が差し出したものは・・・。

恵美の生着替え写真（スクール水着含む）

「座れ。上座はこつちだ」

『子宝飴の余波』・・・大雪様著

『子宝飴の余波』

明燐「うゝん」

紫蘭「明燐さま？ 何してるのですか？」

明燐「まあ紫蘭！！ 実は魔王様達への捧げ物を考えていたのです」
紫蘭「ああ、アルファールン様という、我らが陛下に負けず劣らずのロリコン道を極められた素敵な殿方ですね！」

本人が聞いたら憤死する いや、むしろ「エミーへの愛に一変の曇り無し！」とか叫びそう。

明燐「そうですわ」

紫蘭「それで何を差し上げるんですか？」

明燐「子宝飴を差し上げようかと」

紫蘭「素敵です！」

それこそ相手が憤死する事間違いないが、二人を止める者は居なかった。

明燐「でもただ差し上げるのも面白くないですよ（私が）」

紫蘭「では花束のように千本ぐらい纏めてブーケ状にして送るとか」
明燐「それは素敵ね」

突っ込みの大切さを、この場に誰かが居れば深々と思い知っただらう。

紫蘭「そうですね！ 明燐さま、こういうのはどうですか？ 実は人間界のバレンタインデーでは、殿方にチヨコを渡す際に女性はおどすぎる露出の激しい服を身に纏い、よせてあげた胸の谷間にチヨコを挟んで渡すそうです」

明燐「っ！ それを子宝飴で行えば！」

紫蘭「そうです！ きつと魔王様達は喜んで下さる筈！」

そして二人の悪巧みは実行に移された。

数日後。

恵美「お兄さま」

アルファーレン「ぐおおおおっ！」

恵美の美しい白い胸の谷間から顔をのぞかせる、凶悪なブツ。皺、色、艶、張り。

浮き出る血管その他完全にリアルすぎる極悪非道のそれ。

臨戦態勢ヘイカモン！！状態の猛々しく天を向く怒張。

それが、愛しい妹の胸に挟まっている！！

アルファーレン「恵美いいいいっ」

恵美「お兄さまあああんっ」

因みにこの時、理恵やチヒロ、雪那も同じ事をして伴侶を惑わせ混乱させていたという。

*

凄まじい轟音が凧国王宮に轟いた。

敵襲か?!と緊張感が走ったのもつかの間。

血走る眼をしたアルファレン達の来訪に、王宮の者達はふっと警戒態勢を解いた。

なぜなら、その手に握られていたのは、あの子宝鈴。

しかも包み紙から出されてテカテカと光り輝いていたり、少し溶けかかっていたり。

だからあえて皆何も言わずに彼らを通した。

アルファレン「侍女長っ!」

明燐「まあ、魔王様。どうされました? 御礼なら手紙で宜しくてよ」

榊「つてか、私のお嬢様に良くもこんないかがわしいものをつ」

明燐「まあ! 雪那さんへの代物は、榊様のブツを忠実にリアル再現してみましたのに」

榊「素晴らしい代物をありがとうございます」

アルファレン「貴様! 裏切るのかっ」

明燐「魔王様、レミレア君、そしてオウラン様の場合も同じですのに」

レミレア「そ、そうなのか」

明燐「ええ。レミレア君のは、若さだけが先走る我慢しきれない早漏さを全面に」

レミレア、9999ダメージ。

明燐「オウラン様のは、優しく相手を思いやる反面、狡猾に全て奪い尽くす様な狼的要素を全面に」

オウラン、笑顔で凍り付く。

明燐「そしてアルファレン様と柙様は」

朱詩「明燐！」

明燐「まあ、朱詩」

朱詩「ってか君！　また僕達の所に子宝飴おいただろ！」

執務机の引き出しを開けた瞬間、飛び出てきた大量の子宝飴。

そればかりか、人間界の祭りで使われていただろう、リアルなそれが描かれた布。

そして　。

それを茫然と見つめる夫や婚約者、恋人達を目撃してしまった愛しい少女達からの

冷たい、視線。

明燐「それぐらいで壊れる愛なら、粉々になって下さい」

朱詩「君は悪女か！」

いや、希代の悪女だろう。

アルファレン達はうんうんと頷く。

明燐「まあ！　自分達の思い通りにならないからといってなんて酷い言い草！　それだから梅香にも怯えられるのですわっ」

朱詩「煩いわあっ！」

明睡「ってか、なんでここにアルファレン達が　」

茨戯「その手のものって……同類の被害に」

明燐「魔王様のは、魔界一の剛直かつ極悪非道さを醸し出しつつも

愛しい女性には駄目駄目のヘタレっぷりさを。知ってしまして？
魔王様のは少し振動を与えるだけでぐにやりとヘタれるように作りました」

ヘタれるようにって何？！

明燐「そして榊様のは、紳士で余裕の経験者を装いつつも、愛しい女性と合体した瞬間破裂するように」

破裂しちゃ駄目じゃん！！

朱詩「いや、その前にどうして魔王達のそれをリアル再現出来るんだよ」

明燐「測らせました」

アルファレン「はから？！」

榊「せただと？！」

明燐「奴隷は何処の世界にも居ますから」

奴隷って言った？！

明燐「おほほほほほ！」

紫蘭「あ、明燐さま」

朱詩「げっ、また厄介なのが」

紫蘭「また人間界の奴隷の皆様からの奴隷志願書が届けられましたよ」

その数およそ三万枚。

目を剥くアルファレン達を余所に、明燐は懷から取り出した扇で口元を隠して微笑む。

明燐「近頃は奴隷志願者が多くて困っているの。玉瑛様も手伝ってくれているですけど」

玉瑛「ムチでびしびしスル、楽シイ」

と、現れた玉瑛は相変わらず麗しく、それでいて右手には子宝飴を、左手には果豎を抱えていた。

アルファレン「待て、その二つを」

玉瑛「ヤボな事キクな」

果豎「うわあああんっ！ 助けてえええっ！」

玉瑛「カジユ、わたしのタベテ」

やっぱりその飴はお前のか。

果豎の口元に近付ける玉瑛の笑顔のなんと美しい事か。

と、そこにまた厄介なのが来た。

萩波「玉瑛！ 果豎が食べるのは私のものだけです！」

その悲壮極まる決意に満ち溢れた言葉に撃ち抜かれたのは果豎ではなく、アルファレン達。

そうだ！！

愛しい少女が食べるのは、自分のもの！！

こんな紛いものなんて！！

明燐「生きている限り、いつかは勢いを無くすものです」

アルファレン「貴様は悪魔かつ！ とりあえず、もう二度と送ってくるな！」

明燐「分りましたわ」

明燐は確かにそう言った。

それで全てが終わったように思えた　筈だったのに。

一月後、魔界と人間界、そしてオウランの住まう世界にて子宝飴が大ヒット商品として流通していた。

『勢いが衰え悩む方々への救済アイテム！　愛しい相手も癖になる幻の子宝飴』

そんなキャッチフレーズと共に売られたそれは、未永く各世界にて繁栄する事となる。

タダでは起きない女　明燐。

もしかしたら彼女こそが風国の真の支配者かもしれないと、アルファレン達は子宝飴に囲まれながら思ったという。

終わり

『子宝飴の余波』・・・大雪様著（後書き）

これを頂いてしまったら、閣下も本望でしょう。

子宝飴りたーんず！・・・さくら書く（前書き）

朝一で仕上がりました。ええと描写としては、R15です。だって飴だし。誰がなんと言おうと飴なんだし。お口でむふふがお嫌いな方は回れ右でお願いします。

子宝飴りたーんず！・・・さくら書く

・・・さて、ここはいつものどかな羊国。

うらうらでぽかぽかで、羊族の上位種、ノルディの采配のお陰か、余す処なく牧歌的な雰囲気漂う、おとぎの国。

この国に入ると自然ほにゃん、となるのであります。

ところがだ。

ある日夢枕に女神が御立ちになりました！

それは羊国の明日を担う、ぴちぴちの若者から、酸いも甘いも噛み分けた百戦錬磨の牡羊たち。そして、中枢で働く爺と婆にも。

さらに・・・。

「女神様です！女神様なんですよう！　もう鞭でびびしが似合
いそうな、絵に描いたような女お・・・おお・・・女神様なんです
！」

「めえちゃん、いま、女王様って言った・・・いや、あのお方は
どう見ても女王様だったけどね・・・鞭でびびしされて喜んでる
男の人が足元に転がってたもん」

・・・お年頃の娘羊たちの枕元にも立ったようです。しかもボン
デージ姿で、奴隷調教中だったようです。

メリーさんが真っ赤になりながら胡乱な眼差しで見つめてきたけ
ど、芽衣はスルーします！

最近スルースキルが身について嬉しいです！
えっと。

「話を戻しますね！」

その女神様の麗しさつたらもう！ 目ン玉潰されるかと思いました！ つやつやの長い髪にうるうるのはっちりお目目。ぷるんぷるんした唇とおっぱい！ 速攻走り込んであの胸に顔をうずめてぱっぱふしたくなりました！

「めえちゃん……。あの乳に反応するんだ……。でも、確かに爆乳だったね……。ウラヤマシイ」

「うんうん！ ミルク飲んでもあんなにならないもんね！ 女神様がね、揉んでもらえばいいのよ！ っていつてたの。あとで揉みっこしよう！」

その女神様が告げたんです。

羊族の出生率向上のために一肌脱げと！

「脱がんでいい！」

二つ返事で即答しましたとも！

「め、めえちゃん、オツケーしたの！？ なんてこと！」

……。でも手渡されたのがこれなんです。朝起きたら枕元にどどんと！

思わず見事なつくりに、拝んでしまいました。なむなむ。

「・・・こ、これ・・・みまちがいじゃなかったら、めえちゃん
が描くあの「まつたけ」？」

メリーさんはまじまじと「まつたけ」を見つめた。そう言えば夢
の中で女王様が推奨していた「子宝飴」に似ているかもしれない。

「そーなんですよー！　しかもなんかリアルまつたけらしくって、
お告げによるとですね！」

なんでも

『狼の皮を被りたがったへたれ羊の長様の、純情可憐な、でもや
っぱり野生種の雄雄しくも逞しい劣情の迸りを忠実に再現した一品』
・・・なんですって。すごいですね。ぎんぎんです。と言つか、
臨戦態勢？

「・・・じゃ、これって、ま、まさか・・・」

メリーさんたら汗だらだら。

「そーなんです。その名も！」

につぼんの奇祭『ち　こ祭り』御神体の・・・。

「子宝飴、ノルディ様ばーじょんです！（どどーん！）」

・・・どさり。

「あ？」

「あれ？」

その瞬間、少女二人の内緒話にこっそり耳を傾けていた羊の長様
は、地に倒れ伏した。

羊族の皆さんの夢枕に立った女王、もとい女神様。

もちろん、ノルデイの夢枕にも立った。

夢であつて欲しいと何度祈ったことか。

かの女王様は、厳かに、おっしゃった。

「生めよ。増やせよ。地に満てよ」・・・と。

「・・・と、言うか、へたれは出生率下げますわ。ただでさえ草食男子なのに、ほんとに草食ってるからそれ以上言えませんが、性生活はきっちり行わなければなりませんよ。愛しい娘の寝姿に、悶々としてるだけじゃ出生率は上がりません！ わかってますの！？ あなたのぎんぎんに張ったブツの中で製造されてる精子を、可愛いあの子の卵子に向けて発射しないと受精しないんですのよ！受精しなけりゃ、卵細胞がいくらがんばってもメタモルフォーゼ出来ませんの！」

おんな一人でがんばったって、子供は作れないんですのー！！！！

・・・すぱーんと横っ面を張り倒される気持ちで目覚めれば。

枕元に鎮座する、臨戦態勢準備万端、射精準備良し！ なブツが。

百本のピンクの薔薇の花束よろしく、さんさんと朝日を浴びてい

た。

「……な……」

幻覚かと思ったが、確かにそこにある。薔薇の花束のようにレースフラワーでデコレーションされ顔を出すのが、リアルに細工された臨戦態勢の……亀頭。テンション駄々下がり。

しかも……。

「実施研修用、ソフトタイプ。実施研修用、ハードタイプ。実施研修用、極悪非道タイプ……なお極悪非道につき二本挿しはお勧めできません????いや、だから、これを私にどうしろと……」

しかもこんな亀頭飴の花束、持ち歩くのもいやだ。食べることはもうすでに頭からスルーされて振り返りもしない。

処分を頼もうにも……。

「いったい、だれに……」

がつくりと肩を落としたノルディさん。面白がってくれるだろう爺と婆を探しに執務室にやってきて、件の芽衣とメリーの話聞いてしまったわけである。

そのダメージは計り知れず。

胸を押さえて「うつ」と言っただけ、地面に倒れ伏しさめざめと泣いていた。

しかも。

「・・・芽衣の枕元に、ワタシモデル・・・ワタシモデル・・・」

実物を見せる前に、まがい物を見せられて、芽衣が。私のあの子が、どんなに傷ついたか！

そんな風に純情長様。

目覚めてみれば。

「・・・ひ、ひいいいいいっ！」

絹を裂くような悲鳴が喉元について出てしまった次第。長さまったら、乙女・・・。

「あ、ごしゅじんしゃま。だいじょぶれすかー？」

もごもご。れるれる。ちゅぱちゅぱ。あーん。むぐぐ、ぐ、ん、れる、る。ちゅ、ちゅうつうつ。ちゅぱっ。

あふん。と恍惚の顔を晒し、ほう、とため息を一つつくと、髪をかき上げ、目を細め、嬉しそうにまたああん、とお口を開いた。

お札いわく。極悪非道の臨戦態勢モード、二本挿し厳禁のそれ。

「め、芽衣！　なんてものを銜えてるんですかつ！　若い娘がそんなものを、美味しそうにしゃぶってはいけませんっ！・・・い、いけませんったら・・・」

ノルディさんたら最後は弱腰外交だ。腰が砕けそうになって、節目でちらり見てしまう。悲しいかな、男だった。

「んー。らって（れる）ごしゅじんしゃま（れるれる）、正式な食べ方はこうらって（ん、ん、ちゅうつ）女王様からのお告げで（ん、む、む、）。娘羊さんたちは今頃みんな同じこととしてましゅよう（ちゅばっ）」

「む、むすめ・・・！！！」

ノルディさんは気がついた。

泣いて嫌がつて抗ったあの夢の中、鞭でびしびししながら女王様は、娘羊にも必要な子宝教育を施すと言っていた！

『大丈夫ですわ。改良に改良を重ねた、媚薬もかくやと言わしめた、最高級の大根の蜜を使用して作り上げた、天界の渾身の作品ですのよ！一度舐めたら癖になり、その蜜を味わうために一心不乱に舌を動かす娘を見れば、いかな草食男子と言えども！ぎんぎんに勃つに違いありませんわ！』

「じ・・・人体実験！！！芽衣！早く捨てなさい、そんなもの！代わりに私のしゃぶらせてあげますから！」

「あ！！！！ご、ごしゅじんしゃまの馬鹿あつ！もう少しで、あの甘くてとろりとして天にも上る気持ちになれる、大根の白い蜜が吸えたのにいいいいっ！」

「吸ったのか！？」

「はい。（あふん）甘くて蕩けて、この世のものじゃない、まさしく天上の飴！」

・・・そう言えば、花束が解かれてブツが転がっている。

「ソフトタイプは桃の味でー、ハードタイプはイチゴミルク味なんですー。それで、この先端の小さい穴のあたりを重点的に舐めてるとー・・・あ、ほらw」

とろりと零れ落ちた白い蜜。
ふわりと甘い香りが漂う。

「あん、もったいない・・・」

極太のそれに、側面から舌で丁寧に舐め上げる芽衣の舌先の赤さに、ノルディは白旗を振った。

ぎんぎんに漲った劣情を、発散させてもらわねば、仕事にならん。

「・・・いいえ。子作りは種にとって崇高な一番の仕事ですね・・・」

女王、もとい女神に煽られた感じはするが、確かにこのまま手をこまねいていたら、出生率の減少は甚だしい事だろう。

・・・ちなみにいつもは静かなお屋敷の、あちらこちらで聞こえるくぐもった声に、煽られているわけでも決して無い。

いつだって、ノルディは芽衣にだけ発情するのだから。

「芽衣。美味しい飴よりも、もっと良い物を上げますよ。おなかいっぱいになって要らないというまで・・・、ふふ、言っても離しませんけどね」

その年、生まれてくる小さきものの数が格段に増えたと言う。

それ以来羊国では、子宝祈願の秘法として、実寸代の子宝飴が、作られ続けることとなる。

子宝飴りたーんず！・・・さくら書く（後書き）

明燐最強。

明燐の暗躍する陰に果堅の影あり。渾身の大根蜜だつて、果堅が精魂込めて、大根踊りを夜な夜な披露したおかげwであります。

明燐「果堅！ 大根の魅力を伝えるには甘くて天にも上れるような天上の蜜を作らねばなりませんわ！」

果堅「わ、わかった！」

朱詩「了承すなあああ！」

明睡「・・・しかもその甘露を使用するのが、最大にして最悪のアレか・・・」

朱詩「抹殺！撲滅！焼却！」

茨戯「・・・ってか今度枕元においたら、蓮章の後ろに突っ込むわよ」

明燐「だいじょうぶですわ！蓮章ならどんな太さも硬さも長さもオツケーですわよ！だって（うふ）毎晩わたくしの男性モデルで泣いてもらってますから！」

明睡「俺のお姫様がこわれたあああああ！（滂沱）」

子宝飴りたーんず・2・おっぱいプリンの逆襲・・・さくら書く(前書き)

ねおばーど様のコメントと、大雪様の活動報告、読んでて書きたくなりまして・・・。大雪様、ねおばーどさま、ご笑納いただければ幸いです。

子宝飴りたーんず・2・おっぱいプリンの逆襲・・・さくら書く

目の前で、フルフルとゆれる珠玉の固まり。

「・・・乳だな」

「・・・ああ。乳だな」

「・・・乳ですね」

上からアルファレーン、オウラン、榊だ。

机の上でガラスの箱に盛られた双珠がゆれている。質感と言い、色合いと言い、まさしく本物。

赤い先端はとても甘そうで、噛んだら甘く蕩けて天国へ行けそう
だ。

肌色のそれは揉んだらふにゅっと形を変えて、下半身に直撃の至
福を与えてくれるだろう。

男性にとって、幸せの象徴。だが、大きさ色合い不ぞろいだ。

「・・・で、なんで理事長室に、こんなもんがあるのさ・・・」

レミレアが眉を寄せて呟いた。

だが魔王閣下は、疲れたように笑う。それはわたしの方が聞きた
い、と心の中で叫びながら。

「贈り物だそうだ。また送られてきた」

・・・恵美モデルは即行隠した。あとは貴様らのだ。早く隠せ。

「・・・恵美殿モデル・・・？」

「ああ。「また」だ」

その言葉に男たちは血相代えて、自分のパートナーのモデル品を抱え込んだ。

「よほど、天界は暇なんだな・・・いや、それだけ平和になったと言っことか・・・」

魔王閣下はしみじみと、呟いた・・・。

・・・まったく思い出しても鼻血が出そうだ。

愛しい妹の胸に挟まった、凶悪無比な猥褻物を見た日には、憤り通越して、恵美に襲いかかっ・・・いやいや、怒りで我を忘れてしまった。

だが、声を大にして叫ぼう。

「恵美（の胸の間）に挟んでいいのは私の一物だけだ！」

どこの誰のを模した物なのか考えただけで怒りで目の前が真っ赤になったが、それ以上に羞恥に身もだえする恵美が可愛かった。下半身がうずいて一度で終わらなかったのも道理だ。

・・・だからこそ、ナニカの呪いでも込められているのではないかと、疑って天界へ殴りこんだのだが・・・。

なんと「アレ」は「ワタシ」を忠実に模した一品だったそうだ。
・・・どうりであの極太うなずける。

萩波の（胡散臭い）笑顔と共に渡されたお土産は、百万本のぴんくの（子宝飴）ブーケだった。

「恵美嬢に」と言われて突っ返したが、「・・・あなたのお楽しみに一役買いたと思っただけです」とどす黒い何かを隠しめせず笑っていた。

しかも、果堅妃が。

「おいひいんですよ。この大根飴！」

・・・と。小さな口を精一杯あけてもごもごさせているのではないか。

「それは！ 元凶の子宝飴！」

アルファールンが慌てて叫んだ。・・・が、当の果堅、けろりとしたまま魔王閣下を見上げた。

「違いましゅよー、大根飴れす。形が気になりますか？ でも大根の蜜入りなんですよ！」

大根ラブの前に羞恥心は吹き飛んだらしい。

「・・・そこは気にするべきだろう・・・」

魔王閣下の背中にどつと疲れがやってきた。

さすが天界の誇る極悪非道のロリ鬼畜。上手にだますのもお手の物か。

アルファールンはじつと果堅妃の口元を凝視して、はあはあしている変態、もとい凧国王を睨んだ。

「・・・果堅妃、それはまさか、萩波モデルなのだろうか」

その太さ、その反り、かたち・・・あの涼しげな美女顔の股間にぶら下がっているモノとは思えない凶悪さだ。だが、あの一心不乱

に舐めている王妃を見つめる萩波の嬉しそうな顔を見てると・・・わかる。

間違いなく自分モデルだ。しかも臨戦態勢の一番膨張しきったところをあえてかたどっているなんて。

しかも果堅妃のように幼い者に、銜えさせるとは、なんと言う極悪非道。

「違います。大根飴です！」

そこは譲れないらしい。だが。

「・・・どう見ても子宝飴だろうが・・・」

アルファーレンは、痛い子を見る眼差しで果堅を見た。

「んんん、ちあいます、大根飴れす！中に詰まってるのが白く蕩ける魅惑の大根の蜜なんです！」

ぺろぺろ。そりゃ、確かに形状はなんか違うものを彷彿とさせますがね。

はむはむ。舐めて舌の上で蕩けた瞬間、身も心も奪われました！れるれる。さすが私の愛する大根です。りっぱに成長して、さらに魅惑の変身しましたねって慰労も込めて、製作者自ら味わってるんです。

「・・・皿国って大根の収穫量高いのに、海耀石ばかり優遇して、大根農家に冷たすぎるんですよー！」

「・・・それは・・・」

嫉妬だな。

間違いなく。誰が誰にとは言わないが。決して大きな声では言わないが！

「・・・心、狭すぎるぞ、萩波・・・」

魔王閣下は呟いた。

「そうよ！ 大根を馬鹿にしちゃいけないのよ！ 食料自給率上げなくちゃ！ ついでに、立派な大根育て上げて、天界一の魅惑の大根を作り上げるの！」

そのためには成長率をミリ単位で計測しつつ、必要な栄養をはじき出して・・・。魅惑のボディの形成に負荷がかからないように計算しつつすの！それが理想の大根農家のお嫁さんのよ！」

・・・大根農家、そこまでしない。

「・・・一週間ほど文官が大量に休みを取ったのはその所為ですね・・・」

「美淋を餌にしたら珍珠も釣れたの！ すごいよ、計算は速いし、正確だし。有能有能」

だから、珍珠の慰労のために。

子宝飴を美淋に頬張ってもらって、いらんところを元気にしてあげました。三日三晩励めるように。

「・・・アレで元気にならなかったら、ほんとに明燐の出番だったのよねー。」

「ええ。わたくし一押の「これで完璧！ 奴隷作法」「高貴な従属者 その誇り」を読み聞かせ、傳く女王様の意向に逆らわないように調教を施すつもりでしたの」

美淋は泣いて嫌がりましたがね、それが珍珠の為、ひいてはあなた方二人の未来の為と言い聞かせたら、納得してくれましたのよ！

「日々「女王様に目覚める10のステップ」を食い入るように見ておりましたもの。美淋は勉強熱心なんですの」

玲珠の足元で、子宝飴を上目使いで舐めてる美淋を見ても反応しなかったら、その時は鞭でびしびしするって明燐が言ってたんで、美淋も必死でした。

「・・・その前に、普通男が逃げるだろう。有能なのだろう？・・・かなりへたれのようだが」

至極当然のことをアルファレンが呟いた。

だが、同時に悟りもした。逃がしはしないだろう、侍女長が、それこそ鞭でしばいて縄で拘束して屈服させるに違いない、と。

果堅妃の後ろに見え隠れする女豹の姿に、魔王閣下は戦いた。あの女だけは敵に回したくない。敵に回したら最後、恵美にどんな悪影響が出るか。（悪影響しか及ぼさないことは百も承知のようです）

「大丈夫です！ 逃げないように縄で縛るから！・・・でも、玲珠がそうなる前に美淋に反応してくれたんです！」

「・・・そうか、」

「もう、嬉しくて、美淋と泣きました！」

「・・・そう、か、」

思わず会ったこともないその高官を哀れんだ魔王閣下だった。

「そこで納得するな。しかも、果堅！ あれほど子宝飴は私の前でだけ頬張りなさいと言ったのに・・・！」

・・・萩波のお怒りモードはとっ・・・っても珍しい。

「究極のロリコンの前でそんなかわいらしい姿を披露したら、魔王閣下に食われてしまうでしょう！」

「食うかーっ！！！」

わたしはロリコンじゃないと何度言ったら理解するんだ、貴様あ

あつっ！

「・・・五歳児に欲情し、あまつさえあんなことやこんなことまでした男の癖に、認めないなんて女々しい奴！」

「わたしはエミー、もとい恵美一筋だ！むしろ恵美以外に反応するかあつ！」

「・・・なら、これ以上の土産はないでしょうに」
くつ、と萩波が不敵に笑った。

精神的乙女病に陥ってた男の娘を復活させた、ご利益ばりばりの子宝飴ですよ？

神の力を余すところなく注ぎ込み、祈願成就の暁には必ずや赤子が望めると言う、靈験あらたかな一品を！

「百もそろえた私達の誠意を感じて欲しいですね」

「・・・誠意はお前からは感じないな、果堅妃からは感じるが」

むしろ、面白がっていないか、お前・・・。

だが、まあ良い。

毎晩、恵美に目の前で舐めさせてやるか。

そう思っただけで一週間。正直に言おう、堪能した！

淫靡に笑いながらそれを近づけると、恵美が真っ赤になりながらも口を開いてくれるようになったし、飴に限ってなら、飲んでくれるのだ。無論自前のも飲ませたがな。涙目が良い。

しかも舐めてすすったあとの恵美はえもいわれぬほどに美しさを増す。

今宵も飴で嬲ってやろうと意気込んでいたが……。

「……こんな、ものを……」

女豹の高笑いが聞こえてきそうだ。

まさか、女性美の象徴、しかも微細にいたるまで再現したブツが届くとは……。

ふよん、と揺れる美乳を前に、魔王閣下は固まった。

慌てて懷に隠したが、これが本人に見つかったら、恵美にどんな目で見られるか。

変態と、罵られたら、心の臓が止まるかもしれない……。

冷徹冷酷を地で行く魔王閣下、アルファレン・カルバーン。

しかし愛する女性の前では、玲珠のことを笑えないくらいに。彼はへたれだった……。

進化するおっぱいプリン・・・大雪様著（前書き）

大雪ですvv

子宝飴りたーんず・2・おっぱいプリンの逆襲！
読みました。

素晴らしいです、素敵です、もう最高です！

魔王様の不憫さがグッ！

でも、いつもかっこよくて素敵なので、こういう時ぐらいは（
鬼畜）

一番不憫なのは、明燐の間違ったアドバイスを素直に実行したのが為
に食われまくった恵美姫ですよね（笑）

いや、でも愛されてるので問題ナッシングな筈！！
そのうち腰痛湿布が送られてきそうですが（苦笑）

という事で、私も触発されて書きましたゝvv
どうぞ、ご笑納下さいませゝvv

ありがたくいただきますううううう！ うまうま。

進化するおっぱいプリン・・・大雪様著

『進化するおっぱいプリン』

子宝飴に負けず劣らずのアイテム　おっぱいプリン。
しかし、まさかそんな改良がされているなんて思わなかった。

明燐「知ってまして？　そのプリンの中になみなみと満たされている液体を」

アルファアレン「は？」

来て早々何を言うんだ、この女帝。

魔王様達の中では、もはや女王を超えた存在だった。

いや、朱詩達の間でも同じだろうが。

明睡は頭痛を堪え、茨戯は視線をそらし、朱詩は地団駄を踏んでいる。

で、珍珠と柳は部屋の隅で顔を覆って　いや、泣いているのか。
少し離れた所では、果豎達女性陣が恵美達と仲良く何かを話していた。

しかもちゃっかりと萩波が混じっている所に、鬼畜さを感じた。

榊「液体とは」

明燐「ふふ、実はそのプリンの中は空洞になっていて、そこには大根蜜がたっぷり注がれているのですわ。で、この赤い蕾には小さな穴が空いています」

あ、なんか嫌な予感がする。

明燐「これでミルクプレイも完璧ですわね」

相変わらず、際どすぎる黒のボンデージドレスを身に纏った明燐は、それはそれは美しい女帝の笑みを浮かべた。

レミレア「み、ミルクプレイ?! 何それっ」

明燐「まあ! 魔界の性の支配者たる夜の一族の貴方が、そんな基本プレイも知らないなんて」

リアナージャ「いや、夜の一族は関係ないと思うのじゃが」

明燐「理恵さんなんて一発で分つて下さったのに」

理恵「違う! わかんなかった、分りたくなかった、理解したくなかったのに明燐さんがあああっ!」

レミレアから、畏怖と尊敬の眼差しを受けた理恵が泣きながら抗議するが、明燐は総無視。

代わりに恵美達がよしよしとその頭を撫でた。

レミレア「凄い……理恵、流石は夜の一族」

理恵「それ以上言ったら食うわよ!」

レミレア「え?!」

ドキュンと撃ち抜かれたレミレアの心。

リアナージャ「いや、レミレア。理恵が食うといったのは記憶の方で」

アマレッティ「ど、どうしよう! なんか男の娘が伝染し始めたっ」

明燐「おほほほ！ 計画通りですわ」

なんの？！

優雅に胸を揺らし白い足を組む明燐に、アルファレン達が心の中で叫んだ。

リアナージャ「というか、そのオプションはいるのかえ？」

明燐「ええ、リアルさを追求すれば、自ずとそうなります。また男の単純なそれとは違い、ただ舐めているだけでは中の蜜は出て来ませんの」

榊「なんとっ！」

明燐「優しく、時には激しく舐め、翺る様に転がし、更にはじつくりと愛撫する事で、ようやくほんのりと色づいた果実は蜜をこぼし始めるのです」

なんか男の方をけなされた気がするが、きっと幻聴。

明燐「つまり、テクが必要なのです！」

リアナージャ「テク？！」

明燐「ええ。それも、ちよつとやさつとでは習得すら難しいようなですから練習を」

アルファレン「ふっ、そんなもの！ 私には必要ない」

明燐「まあ！ では魔王様は出来ますのね、今すぐ」

アルファレン「は？」

明燐「どうぞ、他の皆様の勉強の為に手本となって下さいませ」

そして差し出すのは恵美モデル。

つまり、今此処でやれと笑顔で通告しているのだ。

アルファレン「いや、その」

明燐「どうしましたの？ 簡単なんでしょう？」

アルファレン「そ、それは」

明燐「さあさあ、恥ずかしがらずに。いえ、恵美さんとのプレイの時には、あんなにも恥ずかしい言葉の数々をはかれる鋼鉄の心の持ち主に、羞恥心はありませんわね」

アルファレンの硝子の心が粉々に砕かれた。

アルファレン「は、恥ずかしい?!」

勉強したのに！

あんなにロマンス小説を読みあさって練習したのに！

明燐「さあ、どうぞ」

アルファレン「い、いやだ誰がするもの」

明燐「やれ」

明燐の手には、萩波モデルのそれがあつた。

アルファレンは、正確に笑顔の裏のメッセージを受け取った。

『これ以上ガタガタ抜かしているとこれ後ろに突き刺すぞ、ごらああああつ！』

榊「魔王……」

オウラン「なんと不憫な……」

リアナージャ「あんなアルファレンは初めて見たのう」

アマレッティ「あれ涙だよな」

レミレア「陛下が本気泣きしてる」

数分後。

明燐「ふっ！ その程度のレベルでは片腹痛いですわ」

身も心も燃え尽きたアルファレンの屍？が床に転がっていた。
恵美が泣きながら縋り付き、あの理恵ですら哀れみの眼差しを向けている。

榊とオウランは本気で心に誓った。

この女帝には死んでも逆らうものかと。

榊「旦那は大変ですね」

茨戯「いえ、もう慣れたわ」

明睡「へたに逆らえばこうなるからな」

玲珠「知ってます？ オウラン殿」

オウラン「ん？」

玲珠「明燐姫様が、以前兄君であられる明睡様に余りにしつこく言寄る男達をシバキ倒した後、下衣をひんむき露わとなった後ろに子宝飴（凶悪極悪極太ばーじょん）を突き刺し木馬に縛り付けたまま放置した事件を」

オウラン「……」

柳「ああ……あの時は本当に後始末が大変だったよね」

玲珠「ですよ〜。口が上手いからって、陛下が朱詩様に後始末を任せただけで俺達まで巻き込まれました」

柳「しかも大変だったのはその後で、そのあられもない姿を撮った写真をすっかりばつちりと週刊誌に掲載するという」

オウランは見た。

玲珠と柳の死んだ魚の様な目を。

明燐「本当に駄目な男達ですわね」

なんか一緒にされたと榊達は思った。

明燐「これでは果豎の作り上げた極上の大根蜜を吸えせんわよ」

いや、別に吸いたくは。

明燐「せっかく、それぞれの想い人から抽出したミルクをトッピングして差し上げましたのに」

ふう……と、何事もなかったように溜息をつく明燐。
しかし何事もないどころかありすぎた。

レミレア「いやちょっと待って！」

榊「抽出したミルクとはどういう事ですか！」

明燐「おほほほほ、食いつきましたわね！ 流石はミルクプレイが大好きな魔界と人間界の皆様ですわ」

いや、なんだその羞恥極まりない話は。

明燐「調査しましたところ、魔界と人間界では年々ミルクプレイを好まれる方々は増えているとの事。そう、暇さえあれば、誰彼構わず女と見ただけでチュウチュウ吸い付きたいとか」

だから開発しましたの、このプリン。

アルファアーレン「ちよつと待て！ 私が吸い付きたいのは恵美のだけだ！」

明燐「まあ！ 魔王様ったら大胆ですわね！ でも、ミルクプレイはほどほどにしておきなさいませ。榊様やオウラン様もですわよ。それは別の方の為のものですわ」

この後の事を、アルファアーレン達は死ぬまで後悔する事となる。どうして、別の方というその表現を読み間違ったのかと。

すなわち、アルファアーレン達はその別の方を別の男と間違ったのだ。

アルファアーレン「恵美のミルクは全て私のものだっ！」

榊「魔王殿の言うとおりだ！ お嬢様の滴は全て私のものっ」

オウラン「他の若造になど渡すものか」

明燐「まあ！ 一滴残らず吸い尽くすんですの？！ なんて酷い男達！ 将来のお子様の大切な食料を全て奪い取るなんてっ」

恵美「兄様っ？！ 酷いつ」

雪那「榊……そんな、そんな酷い方だとは」

チヒロ「オウランの馬鹿！」

アルファアーレン「恵美？！」

榊「お嬢様？！」

オウラン「チヒロ？！」

恵美「兄様がそんな、そんな酷い人だとは思わなかった！」

いや、人じゃ無くて魔族。

榊は人間だけ。

オウランは異世界の存在だけ。

明燐「みなさん、殿方達は今後ずっと高貴な蜜を吸い上げたいそう

ですわ。お子様に一滴も渡さないと。なんて狭小な男なのでしょう」

恵美「兄様なんて嫌い！」

アルファレン、再起不能。

雪那「榊なんて知らない！」

榊、再起不能。

チヒロ「オウランのばっかばっか！」

オウラン、再起不能。

理恵「ひ、ひどっ」

レミリア「ってか、あの三大魔王を……」

明燐「ふう……やはり魔界や人間界ではミルクプレイが流行ってますのね。これはいけませんわ。やはり、ミルクプレイ時には、このプリンにシフトチェンジして頂かないと、女性の体に負担がかかってしまいますわ　果豎」

果豎「何？」

明燐「今日から徹夜で開発しますわよっ」

果豎「え？　何を？」

もちろん、男達の願望　ミルクプレイ用のアイテムをよりよいものとする為の。

朱詩「ってかもうやめてよ明燐！」

茨戯「朱詩、諦めなさい」

明睡「お姫さまを止められる相手は、此処には居ない」

朱詩「ああもう！ 蓮璋の馬鹿！ どうしてこんな時に出張なんて行ってるんだよおお！」

唯一女王を、女帝をお姫さまに戻せる蓮璋は、現在お仕事中。

また強制的に止める事が出来る萩波は最初からその気はないし、果豎も平時では無理だ。

大根でも絡まない限りは。

玉瑛「タイヘン、でも、ワタシも女帝なる」

朱詩「なっっちゃ駄目だよ！」

茨戯「つてか何食べてるのよ玉瑛っ」

明睡「食うな！」

萩波の妹姫である玉瑛が、果豎モデルのそれを口に使っていた。

と、後ろからふつつつと殺気が突き刺さり朱詩達は凍り付いた。

萩波「玉瑛！ それは私の、私の果豎モデルをつ」

玉瑛「ハヤイもの勝ち」

果豎「つてどこに手を入れてるの玉瑛！ つてかそこ舐めるなああっ」

葵花「王妃様が襲われてる」

涼雪「いえ、戯れてるのです」

梅香「でも悲鳴が」

咲「玲珠、元気を出して」

真穂「柳、ファイト」

玲珠「咲……」
柳「真穂……」

咲「はい、甘い物でも食べて」
真穂「頑張つて作つたの」

と、二人が出したそれは。

玲珠「それ、は」
柳「まさか」

咲& a m p ; 真穂「玲珠と柳がそれぞれ女性化した時の胸モデル！」

素晴らしい笑顔だった。

それから一月後。

魔界、人間界、異世界では、それぞれの支配者達の思いとは裏腹に、おっぱいプリンが空前の大ヒットとなるのだった。

オマケ

明燐「本当は、大根蜜には朱詩の体液も混入しようと思いましたが」

朱詩の体液全てが世界最高レベルの媚薬である事は、凧国上層部にとっては周知の事実。

しかも汗すらも媚薬化している事から、一緒のお風呂に入ること

すら危険だとされていた。

また、かいた汗が蒸発すると、超高級媚薬を散布された状態になっ
てしまう。

そんなある意味危険すぎるものを。

朱詩「勝手に恐ろしい事を考えるな！」

明燐「売り上げ向上には必要ですわ」

梅香「朱詩様の体液入れたら何か変わるの？」

明燐「イヤらしい気持ちになっってしまうのですわ」

梅香「???」

梅香は理解出来ない。

なぜなら、朱詩の媚薬が全く効かない体質だから。

明燐「という事で朱詩。そこのお風呂に入って出汁汁を作ってくだ
さいませ」

朱詩「イヤだよ！」

明燐「まあ、残念。梅香、朱詩は貴方と一緒に風呂に入りたくな
いという事」

朱詩の姿が消えた。

梅香を担いだまま。

明睡「お姫さま」

茨戯「なんて鬼畜行為を」

明燐「おほほほ、茨戯には言われたくありませんわね」

萩波、茨戯、朱詩、明睡。

因みにこの中で唯一ロリコンを脱しているのは明睡だけ。

玲珠と柳は、それぞれ相手が高校生になった時点で見つけているので、完全にセーフ。

そんな風国は、美形男の娘率が高いと同時にロリコン率も高いと言われている。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8293k/>

大根礼賛劇場

2011年7月12日16時44分発行